◇

船石晋一　△滿洲醫大教授にして眼科學擔任たる船石晋一博士は、獨り大學内の重鎭たるのみならず、眼科界現代の一權威たるを失はず。博士は京大系の眼科學者として錚々たるものにして、母校より學位を獲得後、獨逸伯林大學にて研學大に得る處あり、歸朝後教壇に起ち、新知見を披瀝して學生指導の任に當り、至誠以て光輝ある滿洲醫育界の將來に俟つ所あらんとす。

△博士は大正元年十一月京都帝國大學醫科大學卒業、引續き同醫院副手囑託眼科教室勤務、同三年三月同助手被命、同年五月日本赤十字社秋田支部病院眼科醫長被命、同八年十一月南滿洲鐵道株式會社醫長被命、撫順醫院勤務、同十年十月南滿醫學堂教授、兼同附屬奉天醫院醫長被命、同十三年三月歐米視察留學に出發、同年十一月より大正十五年三月迄伯林大學生理學教室にて研究、同年五月歸朝現職被命、大正十三年十二月京都帝大にて學位授與、以て今日に至る。

△學位主論文は、『「フリクテーン」性眼炎ノ原因ニ就テノ實驗的研究』にして、原著は獨逸文より成る。參考論文としては、(1)「フリクテーン」ト「インヂガン」尿、(2)實驗的「フリクテーン」補遺、(3)「フリクテーン」ト牛乳注射療法、(4)角膜腺ニ就テ、(5)急性結膜炎ト發熱、(6)二三內分泌腺製劑ノ家兎眼壓ニ及ボス直接影響ニ就テ等あり。他に「視方向ノ中心ニ就テ」外論著夥多あり。

△岡山縣後月郡井原町の人、明治二十年生る。眞面目なる學者肌の仁にして、淸廉潔白、意志强固にして物に動せず謙遜克く自抑して衒はず、人に厚うして能く後進を愛撫す。趣味としては研究と醫育以外には何等の道樂を求めず、一意專心、唯だ其の事に勵精努力日も猶足らざるの概あり。當世博士界中逸すべからざる醫博人物として茲に推奬し微意を表す。奉天萩町一ノ一に住む。

◇

緒方淸躬　△世界の泉都、エロ、グロ、テロの別府市（北町）に緒方眼科病院あり、緒方淸躬博士の獨力經營にかゝる理想的の專門病院なり。其の內容の一般を紹介せんか、位置は別府の中央、總坪四百五十坪、洋館二階建一部三階（昭和七年四月新築落成）にして、診療室、副室、試視力室、一般暗室、光線診療室（紫外線、無赤線、其他）、研究室、膿漏室、第一、二手術室、罨法室、溫泉治療室、藥局、第一、二患者待合室、病室（洋室、日本室、ベツト約三〇）、娛樂室、屋上運動場、階下運動場（庭池）茲に別府特有の溫泉浴槽完備、地內溫泉の湧出口三ケ所、溫度六〇——七三度、一分間湧出量約五斗以上、罨法、發汗療法等。さすがに泉都療院としての使命を果たすに十二分なる設備と云ふべし。而して博士は自ら進出して全部每日の診療に從事し、刀圭甚だ多忙を極め席を溫むるの暇なし。宜なる哉、博士獨特の診療手術の好評は、多年の聲望と相俟つて益々人氣を博し、當地診療界のリーダーとして首座を占む。

△博士は東京獨逸協會にて中學を卒へ、大正六年京都府立醫專卒業後、同校外科教室に殘り、半歲の後眼科に代る、翌四年春日赤大阪支部病院眼科を振出しに、朝鮮鑛山病院長兼眼科部長、南滿醫學堂講師を經て、同九年四月再び日赤大阪支部病院に戻り、同十二年より京都帝大醫學部眼科教室の研究科に入り、市川教授指導の下に學位論文を完成せり、同十四年より昭和二年まで鹿兒島縣立病院眼科部長として就任中、會々京大系にて作り上げたる同院の二三部長の交迭に際し、何の理由あつてか何れも九大系より部長を採用せるを憤慨して、時の永野警察部長に公開狀を叩き附け、京大派の爲に大に氣焰を揚げたるは近來の痛快事として、今猶同僚の間に噂炙する所なり、斯くて昭和二年十月より大分市に於て眼科開業のところ、同七年四月別府に新病院の落成と共に移轉せり。

△學位論文は「角膜移植ノ實驗的研究」が主論文にして、外に參考論文七篇あり、猶他に論著夥多。

△專攻は眼科、特に手術と光線療法と整形とを最も得意とせるが、就中角膜の移植卽ち甲の角膜を乙の角膜に移植する手術は、殊に博士の獨得とする處にして、彼の獨逸の大家エルシュニヒ教授に向を張つて毫も引けを取らぬところに、博士の深き自信あるを窺ふに足るとせん。

△一生を學徒として過して、何か醫界に爲めになる研究を終生の仕事としたいと云ふ博士の希望は、いつか裏切られて一開業醫として立たねばならぬ立場となりし博士の將來の抱負を聽くに、『私を中心として私の一族、子供等に醫者になるものがあれば、各科を綜合した、而して大衆的の所謂民間大學病院のやうな研究の出來る病院を作りたい』云々と。又た感想としては『誰かの叫んだ强く正しく親切にが現代醫師界に呼びかける正しい聲と思ひます、强くとは自己の信ずることであれば、爲にせんとする社會不正分子の野良犬の如き聲に恐れず、正しくとは醫者としての相互感の禮節を特に守つて、辻切、暗討式の戰法を排し、親切とは徒らに口のお上手とか單なる物質問題でなく、眞に醫者としての不斷の研究を忘れず、一日も早く完全に患者を治することゝ信じます』云々と、至言と云ふべし。

△趣味としては凡ての運動競技、演劇、映畫、浪花節等、酒は大嫌いの由なるも支那料理は嗜好の一なりと聽く。可也多血質にて、若い時代の若い氣分は今猶拔けず、意氣、氣力共に旺盛なるが、而かも人間味に厚くして涙もろく、昔の俠客じみたる性癖あるは、博士の性格の反映と見るべき博士の長所とも言ふべきか。曾て京都帝大に於て研究中、恩師市川教授の勸告を斥けて大阪に於て夜間開業し、大阪より早朝出でゝ京都まで通學せり、從つて睡眠時間は僅かに每夜二時間に過ぎざりしが、三年間强ひて之を押通せりと云ふ、當時の元氣思ひやらるべし、蓋し青年時代よりスポーツにて鍛へ上げたる結果なるを想はざるを得ず、今猶努力と云ふ事に向つて敗けず嫌ひの頑張が强く、何事に對しても徹頭徹尾成し遂げずんば止まぬ氣慨のあるは、博士をして今日あらしめたる素因なるを思出さる。

△大分縣臼杵町のの出身、明治二十一年生れにして、今や年壯銳氣に富む男盛なれば、潑剌たる前途の大發展期して待つものあるべし。家庭は妻滿壽子との間に四男子あり、皆な健在にして三男まで在學中なりと聽く。病院及私宅は別府市北町にあり。

◇

中島實

△眼科界現代の權威たる金澤醫大教授中島實博士は、東京帝大出身の眼科學者にして、恩師石原忍博士に就きて造詣する所深く、愛知醫大より學位を獲得せる新進の名醫博也。近時綠內障療法として「アドレナリン」の球後及び結膜下注射が應用せらるゝも其眼壓降下の機轉に就ては充分明瞭ならざる點少からざるを以て、實驗的に之を研究せるものが卽ち博士の學位論文にして、如何に詳細に論究せるかは旣に學界に認められ、其の學問的價値に付ては定評あれば敢て贅せざる迄も、旣にして其の蘊蓄せる學殖と、經驗豊富にして臨床に堪能なる點に於ては最高學府中敢て人後に落ちず、嘖々たる評判あるは頗る囑目に値す。

△博士は長崎縣立島原中學校、五高を經て、大正八年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部副手囑託となり眼科學教室勤務、同十年十月任同大學助手、傍ら東京女子醫專に於て眼科學を講ず、同十一年十月熊本醫專講師となり、同年十二月任同校教授、同十三年五月任受知醫大助教授、同十五年二月學位受領、昭和二年十一月任金澤醫大教授、眼科學擔任、同三年二月渡歐、伯林カイザーウイルヘルム研究所、オツトワール、フルグの下にて網膜の新陳代謝を研究し、及びライプチヒ大學物理化學教室光化學教授フリツツ、ワイケルの下にて各種感光色素の色對應及び視紅素「ゼラチン」乾板（人工網膜）の光化學的性質に就て研究、同四年九月オランダ、アムステルダムにて開催の第十三回國際眼科學會に日本代表を命ぜられて出席、翌五年三月歐米歷訪の後歸朝せり。

△學位主論文『「アドレナリン」注射ニヨル眼壓變化ノ機轉ニ就テ（實驗的研究）』、參考論文、(1)搏動性眼球突出症ノ病理解剖學的知見補遺、(2)色弱ニ於ケル色神ノ變化ニ就テ、(3)青視症ニ就テ、(4)各種ノ先天界常ヲ伴ヘル網膜血管

吻合症ノ一例、(5)黄斑部ヲ通過セル網膜血管異常ニ就テ、(6)色素網膜炎ニ合併セル網膜中心動脈「エンボリー」、(7)瞼球癒着症ニ於ル結膜嚢形成手術ニ就テ、(8)絲内障管錐法ノ後發傳染ニ就テ、(9)虹彩及ビ毛様體結核ト其光線療法ニ就テ、(10)扁平紅色苔癬ニ合併セル一種ノ角膜炎ニ就テ、(11)進行性黄斑部變性症ニ就テ、其他論著夥多。

△感想に曰く「自分の取扱つて居る患者が次第に快癒して行くことは醫師として無上の愉快であり、前人未踏の自然の機構を探求して其の神秘の扉を開くことは學者の法悦であらねばならぬ。斯様な無限の樂しみを兼ね得られるのは大學のやうな研究的診療所に勤務するものゝみが享け得られる特權である。斯く考へて來ると大學に勤めて居るといふ事の幸福を泌み泌みと感ずると共に一面、種々な方法によつて聲なき自然の聲を聽き之を人に傳へ、更に患者に應用して其の健康を樂しませるやうにする責任の重さを感ずる。そして進めば進む程深く廣い銀海に棹す苦艱と戰つて少しでも學問の進歩を助け人々の幸福を増進させたいものであると思つて居る」云々。

△博士は長崎縣南高來郡島原町中島湊長男、明治二十六年生る。眞面目なる學究的溫厚の紳士にして、其の今日ある閲歴は博士の前半生史に盡きて餘蘊なく、年齒漸く不惑に入る二歳、年壯鋭氣にして研究心に燃え、教壇に起つや其の蘊蓄を披露して至誠一貫克く學生の指導に務め、懇々として說くところ熱あり力あり、其の眞劍にして誠意誠實なる態度は、同僚の間に信望せられ學生に敬慕せらる。賦性謹直、志操堅實、謙遜自抑克く人を愛し、淡々として只管己れを虚うするところ、人に親まるゝの徳を有す。金澤市小尻谷町五に住む。

◇

廣瀨季雄　△群雄競ひ起つ帝都診療界に自己專門の眼科を標榜して躍進せる、廣瀨季雄博士の診療所たる廣瀨眼科は、杉並區高圓寺六ノ七一七（午前）と東京市銀座六丁目交詢ビル二階（午後）との二ケ所に在り、博士自ら日々診療に勵しみ甚だ多忙なるが如し。博士は東北帝大專門部の出身にして、大正元年卒業後、同年十二月任朝鮮總督府醫院眼科醫員、同三年十二月任朝鮮總督府全州慈惠醫院醫員眼科擔任、同八年三月辭職直ちに任日赤奉天病院眼科醫員、同十年四月南滿醫學堂研究科入學、二年間久野教授に師事す、同十二年一月日赤奉天病院眼科醫長昇任、同年二月辭職と同時に任南滿醫學堂生理學助手、同十四年四月任滿洲醫大生理學助手、同十五年四月辭任直ちに愛知醫大眼科學教室に入り、一年間小口教授の指導を受く、昭和二年二月京都帝大より學位受領、同年四月再び日赤奉天病院眼科醫長に復任せるも、其後辭職上京して開業今日に至れり。

△學位主論文は「『アドレナリン』ノ眼内壓ニ對スル作用並ニ眼内壓ニ影響スル諸要約ノ研究』にして、參考論文は(1)盤渦靜脈内壓ニ就テ　附「アドレナリン」ノ盤渦靜脈内壓ニ及ボス影響、(2)頸動脈結紮後頸部ノ交感神經刺戟ニヨル眼壓上昇現象ニ就テ、(3)不同視眼近視（人工的）ニ於ケル視野闘爭ノ時間的關係、(4)魚類ノ色神ニ就テ第一報、明暗適應金魚ノ明度並ニ色光ノ撰擇、(5)「スペクトルム」色光ニヨル金魚ノ網膜運動現象ニ就テの五篇なり。

△博士は京都市下京區烏丸佛光寺下ルの人、明治二十一年生る。年齒今や不惑有八歳、元氣旺盛にして精力主義の人也。臨床家としての經驗多分に有し、獨特の手腕は愈々圓熟して其の特技を發揮して餘す所なく、今は最も得意時代にて一段の貫祿を有す。熱心にして懇篤なる診療振りは評判極めて良好なるを聽く。

◇

松岡喬　△東京市豐島區巣鴨一ノ八六に在る松岡眼科は、眼科界今日の大家松岡喬博士の經營せる私立醫院にして、開業拮据數年、診療手術の好評は氏が奮勵努力と相俟つて益々人氣を吸收し、繁榮歳と共に向上發展の活氣を呈しつゝあり。博士は東大系の眼科專門家にして、恩師河本重次郎博士の薫陶を受くる所厚く、又北大教授三輪誠博士に就きて藥理學の蘊奥を究め、北海道帝大より學位を獲得せる年壯の名醫博也。

△佐賀縣杵島郡西川登村高瀨の人、明治二十年生る。茨城縣立土浦中學校、一高を經て、大正三年東京帝大醫科大學

を卒へ、引續き同大學眼科教室勤務、同六年四月北海道釧路區博濟病院勤務、同七年十一月辭職、札幌にて眼科病院を經營、同十二年四月北海道帝大醫學部藥理學教室にて研究、昭和二年三月學位受領、同時に歐米各國視察の途に上り同年十二月歸朝す、爾來現住地に開業の傍ら眼鏡に就て研究、發表又發明特許を得たるものあり（特許九四四四〇號）。

△學位主論文は「眼內液體及ビ腦脊髓液ノ血管藥理學的性質」にして、參考論文は、(1)「スピロヘータ、バリーダ」ヲ證明シ得タル結膜硬性下疳及其組織所見ニ就テ、(2)涙腺ノ「トラホーム」性變化、(3)眼球ノ突出運動ニ就テ、(4)房水ノ限外顯微鏡的觀察、(5)房水、硝子體及血淸微粒子ノ帶電狀態、(6)鹽酸「ピロガルビン」ノ副腎分泌機能ニ及ボス作用の六篇なるが、其後發表せるものの內、(1)眼鏡枠に就て、(2)再び眼鏡枠に就て、等は博士會心の作とも云ふべきか。

△博士の年齡今や不惑有九歲、精力旺盛にして研究心に富み、日夜臨床に勵しみながら、殊に眼鏡の研究に多大の興味を有し論文の發表、發明に餘念なきが如し、其の態度の眞劍にして熱心なるは氏が性格の反映を物語るもの也。趣味として彫刻を愛好す。平和なる家庭は妻とく子との間に一男一女あり。

◇

岡崎　源治郎　△大阪市電氣局病院に眼科部長として岡崎源治郎博士あり。大阪醫大出身の眼科學者にして、恩師現大阪帝大教授村田宮吉及び片瀨淡兩博士に就きて病理學を專攻し、母校より學位を獲得せり。學位論文は多數の家兎（モルモット）「ラツテ」「マウス」に雪花菜偏食試驗並に眼附屬腺摘出試驗其他種々の實驗を施行したるものにして、『眼乾燥症ニ關スル實驗的研究特ニ「モルモット」及家兎ニ於ケル眼乾燥症ニ就テ』と題する主論文卽ちこれなり。參考論文は、(1)角膜實質炎患者ノ眼內壓、(3)角膜實質炎ニ就テノ實驗的研究、(4)房水ノワツセルマン氏反應ニ就テ、(5)角膜實質炎ノ豫後ニ就テ、(6)增量セル房水蛋白ノ運命ニ就テ、(7)驅黴療法ノ效果トワ氏反應ニ就テ、(8)家兎ヲ以テセル實驗的黴毒性角膜實質炎ノ研究並ニ人ノ黴毒性角膜實質炎ニ就テなるが、其他論著夥多あり。

△岡山縣淺口郡里庄村新庄の人、明治二十二年生る。大正五年大阪醫大卒業後、任同大學助手、眼科學教室勤務、同時に同大學附屬病院醫員拜命、同八年十一月大學昇格後の大阪醫大助手兼醫員を命ぜられ、同十年五月之を辭す、同十一年四月大阪醫大研究科に入學、病理學教室にて研究、同十五年十月研究科退學、昭和二年四月學位受領、同年五月大阪市電氣局病院醫長に就任今日に至る。當年不惑に入る七歲、年壯の意氣旺盛にして、學究的有爲の臨床家として、稀に見る勵精恪勤の人也。臨床に堪能にして、今は壯齡と共に手腕圓熟、最も活躍の全盛時に在り。賦性篤實、溫厚なる年壯の紳士にして、人と接するに和氣愛情に富み、謙遜にして衒はず、淡々として只管己れを虛うする態度は、人に好感を以て迎へらる。大阪市湊區九條中通一ノ一〇五に住む。

◇

中山　直秀　△陸軍軍醫監にして前第二十師團軍醫部長たりし中山直秀博士は、退職後大阪市住吉區天王寺町三二五三に於て自宅開業に從事し、小眼科醫院を經營しつゝあり。博士は東京府立一中、一高を經て、明治四十一年東京帝大醫科大學を卒へ、同四十二年六月任陸軍二等軍醫、補步兵第二十八聯隊附、次で旭川衞戍病院附、步兵第二十七聯隊附、陸軍々醫學校副官に歷補す、陸軍々醫學校在職中（五年半）公務の餘暇同校眼科學教室にて眼科學を專攻す、大正六年十二月任三等軍醫正、爾來步兵第三十四聯隊附兼靜岡衞戍病院長、東京第一衞戍病院附兼陸軍省醫務局課員、仙臺衞戍病院長に歷補す、大正十年蘭領印度に出張被命、同十二年歐洲へ出張被命、其間公務の餘暇東北帝大醫學部眼科學教室にて眼科學研究、昭和二年六月學位受領、同年七月補第二師團軍醫部長、同五年三月軍醫監に任

じ、同年五月補第二十師團軍醫部長、同六年十二月室師團の軍醫部長とし錦州に出動、同七年四月第四師團軍醫部長、同八年三月退職、大阪に住す、爾來眼科醫院開業一般の診療に從事し今日に至れり。

△學位主論文は「眼球內腫瘍ニ於ケル眼內壓ノ態度ニ關スル比較研究」にして原著獨逸文なり。參考論文は、(1)所謂反覆性蓄膿性葡萄膜炎ノ病理解剖知見補遺、(2)家兎內腫ノ角膜移植ニ就テ（以上獨文）、(3)アヂソン氏病樣皮膚着色ヲ來セル胃癌患者ニ於ケル眼球結膜色素斑ニ就テ、(4)假性實扶的里菌及葡萄狀球菌ノ混合傳染ニ因スル內因性全眼球炎(5)外科的敗血症ニ因スル轉移性眼炎ノ一例の五篇なり。

△博士は長野縣埴科郡屋代町に在籍（眞の鄉里は隣町松代町にして眞田家々臣の家なるも事情により籍を屋代町に移せり）明治十五年東京に生る。其の今日ある輝しき閱歷は陸軍出仕後二十五年目に退職せる博士の前半生史に盡きて餘蘊なし。その貢獻的多年の功績は言ふに及ばず、至誠一貫、國家の爲め奮盡努力、以て誠忠を抽んでゝ今日に至れるも、淡々として只管己れを虛うする態度は、眞に高潔の士に非ればこゝに至らず、其の人格を尊重す。

◇

草川正也

△名古屋市西區菊井町七丁目に草川眼科醫院あり、院長は斯科の新進大家として評判ある草川正也博士也。學位は愛知醫大より獲得せるが、金澤醫專の出身にして、愛知醫大教授小口忠太博士指導の下に眼病理、眼遺傳學を研究せる篤學の名醫博也。學識豐富、臨床に堪能にして獨特の手腕を有し、今は最も得意の時代なるべし。

△三重縣鈴鹿郡晝生村草川太久男の長男、明治廿五年生にして三重縣立第一中學校を經て、大正三年金澤醫專を卒へ同四年金澤病室眼科部より名古屋市前田眼科病院（院長前田珍男子博士）に招聘、同六年前田博士上京移轉と共に名古屋市に殘留一旦開業、同十一年以降愛知醫大眼科研究室に入り小口教授の指導を受く、同十五年一月以降研究室の傍ら現住所に開業今日に至れり、昭和二年七月學位を受領す。

△學位主論文は、(1)實驗的成立セル先天性白內障ト其遺傳ニ就テ、(2)實驗的成立セル白內障ノ遺傳ニ就テ鷄ノ實驗、（第一回報告）、(3)同（第二回報告）の三篇より成り、參考論文は、(1)化學的藥品ノ眼發育ニ及ボス影響ニ就テ實驗的研究、(2)眼畸形成立成因ニ就テノ實驗的研究　附小眼球無眼球胎仔ノ組織學的所見、(3)鳥類眼ニ於ケル「ペクテン」ノ構造ト其機能ニ就テ、(4)鷄網膜ニ見ル所謂遠心纖維ニ就テ、(5)角膜上皮ノ生體染色ニ就テ、(6)瞳孔遺殘膜ノ奇例、(7)「トラホーム」眼ニ合併シ臨床上看過サレ易キ調節機痙攣ニ就テの七篇なり。

△臨床家として起ちて以來、開業拮据十有餘年を閱し、刀圭甚だ多忙にして日常席を溫むるの暇なきが如し。其の今日の位地と聲望とを贏ち得たるもの、博士特獨の手腕と、不斷の勵精努力の結晶と見るべき也。讀書家にして書見を業餘の樂しみとし、謠曲、畫畫、音樂等に趣味を有し、又旅行を好む。鹿山は其の號也。

◇

藤井清信

△宇和島市廣小路に藤井眼科醫院あり、院長は眼科界新進の大家藤井清信博士也。博士は岡山醫專出身の篤學者にして、恩師藤田秀太郎及び庄司義治（現九大教授）兩博士に就き眼科學を專攻し、尙畑、田村兩教授に眼科及び病理學、林教授に神經病理學、敷波教授に胎生學の指導を受け、岡山醫大より學位を獲得せる近來の少壯醫博也。研鑽多年の間、常に學を錬り腕を磨くに余念なかりし臨床的手腕は愈々冴え、診療手術の好評は益々遠近の人氣を吸收し、年次成功の地盤を築きつゝあり。

△愛媛縣喜多郡大瀨村の人、明治三十二年生る。臺灣總督府臺北中學校を經て、大正十年岡山醫專を卒へ、直ちに任同校附屬醫院助手、眼科勤務（校長兼教授藤田秀太郎博士）、餘暇を以て田村教授に病理學の指導を受く、同十一年岡山醫大昇格と共に副手囑託、眼科學教室勤務、同十三年任同大學助手、昭和二年四月辭職、同年五月宇和島市にて眼科開業迄、眼科專攻七年間、同年七月學位を受領す。

△學位主論文は「遺傳性眼畸形ノ發生原因ニ就テ」にして、(1)畸形家兎眼ニ見タル神經組織ヨリナル硝子體內索條及ビ其ノ發生機轉ニ就テ、(2)家兎ニ見ラレタル遺傳性眼畸形ニ就テ、の二篇より成り、參考論文は、(1)炎症性角膜槍狀體ノ成立機轉、(2)角膜ノ假眠細胞ニ關スル實驗的研究、(3)結節狀角膜變性症ニ就テ、(4)眼嚢腫ヲ伴フ小眼球及ビ其ノ發生ニ就テの四篇なり、其他論著夥多。

△博士の年齒未だ三十有七歳にして、少壯の意氣に燃え多量の分別を有す。研究と醫療とは博士の最も趣味とする所にして、日頃倦むことを知らず懸命の努力精進を續けつゝあるは、春秋に富む博士の將來をヨリ大ならしむるものと見るべき也。

◇

黑澤潤三　△東京市下谷區池ノ端仲町一五に在る小川眼科病院といへば、帝都私立病院中、眼科界に卓然として頭角を顯はし、名實伴ひ歷史ある名醫院として他の追隨を許さゞるは誰しも首肯するに難しとせず。同病院は眼科界の耆宿故小川劍三郎博士の創設にかゝり、現在にては博士の愛婿黑澤潤三博士院長として其の經營に當り、既に牢乎として拔くべからざる古き地盤は、博士獨特の手腕聲望と相俟つて益々遠近の人氣を獲得し、依然として押しも押されぬ繁榮を極めつゝあるは祝福すべき也。博士は東大系の眼科學者にして、始め河本重次郎博士に次いで石原忍博士に親炙して斯學の蘊奧を究め、大學院を卒業して母校より學位を授與されたる少壯の名醫博也。一面には日本醫大教授兼附屬病院眼科部長としての學識手腕は、博士の面目の躍如たるものあるを語り、其の今日あるを想はしむ。

△博士は東京府立一中、一高を經て、大正十年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部眼科教室に入り副手、次で同十一年四月助手被任、傍ら同十一年九月より十三年三月迄東京女子醫專講師として眼科學擔任、同十二年四月東京帝大大學院入學許可、眼科學專攻、同十五年三月大學院退學、同十五年四月日本醫科大學教授、同附屬第一醫院眼科部長兼任す、昭和二年十一月學位受領、先是多年小川眼科病院に於て一般の診療に從事し今日に至る。

△學位主論文は、(1)コツホ、ウイーリス氏桿菌性結膜炎ノ研究、(2)「フリクテン」ノ組織的研究にして、參考論文として、(1)假性上網膜象皮腫ニ就テ、(2)眼內化骨變性ニ就テ、(3)再發性蓍膿腫性虹彩毛樣體炎ノ一例、(4)コツホ、ウイークス氏桿菌ノ潛伏期ニ就テ、(5)角膜「フククテン」ニ對スル「トリクロール」、酸乳酸「イオントフオレーゼ」ノ治療的効果、(6)外傷性黃斑部嚢腫形成ノ一例の六篇あり、其他の論著少からず。

△博士は東京市の人、明治廿七年生る。學究的溫厚の紳士にして、學者タイプの風貌は凜々として威嚴を存し、溫容の裡に溢るゝ愛情を包み、高邁なる品格を備ふ。其の今日あるは博士の前半生史これを語りて余蘊なく、年齒漸く不惑に入るのみにて、少壯の意氣に燃え、今は腕の冴え盛にて、平生刀圭甚だ多忙、席を溫むるの暇なしと雖も、日夜臨床に精進孜々として倦むことを知らず、其の態度の熱心忠實にして眞劍なると、患者に對するに飽くまで親切を盡す點は評判にて、博士の特徵として傳へられ篤き聲望を博す。一面又謙讓にして禮儀厚く、德操の士として人に敬慕せらるゝは尊ぶべき也。喜滿子夫人は故小川劍三郎博士の女にして、二男二女を擧げ團欒の裡に內助の譽高し。幸に健康と共に自重加餐を祈るや切也。

◇

清水春松　△福井縣鯖江町に鯖江眼科醫院あり、院長は清水春松博士にして、氏の經營に成る私立醫院なり診療所は自宅を兼ね、病舍は二棟に分割し定員四十五名を收容す、外觀の美を好まず、內容の充實を主趣とせる點は氏の性格の發露せる所にして大に其の人格を窺はる。研鑽多年の後、學位は京都帝大より獲得せる眼科界近來の名醫博として其の學識手腕を認められ、名聲既に江湖に著聞す。主なる指導教授は、東京帝大教授河本重次郎、同助教授中泉行德、京都帝大教授市川清等の三博士にして、斯間博士等の指導を受け薫陶に負ふ所頗る多し、又嘗て歐米各國

を見學して研鑽大に得る所あり、斯くして克く其の今日あらしめたる成業と篤學は學界の美談として特筆に値す。其の向學的精神氣慨は頂門の一針として學ぶべき也。

△學位は京都帝大より獲得せるが、主論文は「短波光線ニヨル網膜脉絡膜變狀ノ實驗的研究」にして、(1)有色家兎ニ於ケル實驗的研究、(2)梟眼ニ於ケル實驗的研究、(3)白色家兎ニ於ケル實驗的研究、(4)短波光線ヲ網膜脉絡膜ニ作用セシムルニ當リ酒類ハ果シテ光感物質トナリ得ルヤ否ヤの四篇より成る。外に參考論文として、(1)難波光線ニ對スル角膜ノ抵抗力ニ就テ(實踐的研究)、(2)脉絡膜ニ發生シテ急劇ノ經過ヲトリシ腫病狀結核ノ一例、(3)自家考案ノ「トラホーム」鑷子ニ就テ、(4)予ガ考案ノ虹彩切除ニ使用スル角膜切開刀ニ就テ、(5)外傷性角膜實質炎ニ就テ、(6)虹彩分離ヲ伴ヘル結膜下鞏膜破裂ノ一例、(7)顏面神經ノ麻痺ヲ兼ネタル視神經ノ介達的損傷ニ就テ、(8)「サルヴアルサン」注射後ニ發生セル球外視神炎ノ一例、(9)副腎囊畜膿症ニ續發セシ眼科「フレグモノネ」ノ一例、(10)淋毒性眼炎ノ豫後ニ就テ(統計的觀案)の十篇あり。猶發明の器械としては、(1)清水式角膜切開刀、(2)清水式「トラホーム」鑷子あり、何れも新案登錄あり。圖說としては豫防指示「トラホーム」圖說(東京米田屋發行)あり。

◇福井縣今立郡鯖江町中小路に本籍を有し、同縣同郡眞野村萱谷清水庄左衞門の弟にして、明治十六年生る。同三十五年私立日本醫學校入學、同三十七年五月充員召集、日露戰役に參加、同三十九年三月召集解除歸郷、同年四月日本醫學校再入學、同四十年同校卒業、文部省醫術開業試驗に及第、翌四十一年醫師免許証を受く、自四十年九月至四十四年三月東京帝大助教授中泉行德博士に師事し眼科學修業、斯間四十一年六月東京帝大眼科選科に入學、河本博士の指導を受く、一ヶ年修了、同四十二年九月東京帝大國家醫學科に入學、同年十二月修了、自四十二年九月至四十四年三月三井慈善病院眼科醫員勤務、同四十四年三月以降現住地にて開業、自大正十四年九月至昭和三年一月京都帝大醫學部專修科に入學、市川教授の指導を受く、同三年一月歐米眼科醫學見學の爲め渡歐の途に就く、同年三月學位受領、同年七月歸朝、爾來現在地に於て再び眼科開業今日に至る。公職としては福井縣醫師會代議員、日本「トラホーム」豫防協會評議員、日本眼科醫師會評議員等に擧げらる。

△「近時世を擧げて非常時なりと云ふ、吾人開業醫も亦非常時に直面して前途多難に際會す、これか對策としては强く正しく生きるを信條とし最善の努力なすの外なしと思考す」云々、とは氏の感想の一片なり。志想堅實にして熟慮斷行を信條とするも、やゝもすれば時に或は熟慮に失するやの嫌なしとは云へず、而かも其の今日あらしめたる不撓の精神と、斷行性に富む不斷の努力とは見逃すべからず。平生又た强く正しく生きると云ふことをモツトーとして、最善の努力を盡して臨床に臨み、患者を待つに熱誠克く誠實と親切とを以てす、其の態度の眞摯にして熱情あり溫味あるところに博士の特徵を窺はれ、溫厚篤實にして高邁なる人格を敬慕せらる。業餘の趣味としては菊栽培を愛好す、酒は好まず煙草を嗜しむ。

◇

島　權次郎

△富山市覺中町三八に眼科病院として病室二十二室を有し、宏莊なる結構と相俟つて內部の設備整ひ、當市診療界に卓然として群を拔きつゝあるは島眼科病院也、院長は島權次郎博士にして、名實伴ふ名病院長として嘖々たる名聲を博す。博士は南滿醫學堂出身の逸才にして、立志傳的篤學の士たる事實の見逃すべからざるものあり、研鑽多年、切磋琢磨の効空しからずして、京都帝大より學位を獲得せる新進の名醫博たるに耻ぢず、既に學界の美譚として其の篤學を稱讃せらる。思ふに博士が日頃倦むことを知らず、懸命の努力精進を續け、日夜精神の修養と相俟つて常に德操の堅持を心掛け、身を修め行を正すに極めて嚴なる事實あるを認めざるべからず。其の今日の成功を築き上げたるもの、蓋亦偶然ならざるを想ふ。

△更に顧みて博士の學歷より其の今日ある經歷を概述すれば、大正七年南滿醫學堂卒業後、直ちに同學附屬奉天滿鐵

病院眼科教室勤務、三年の後宇都宮市稲葉病院副院長として二年間勤務、同十一年前東京帝大教授河本重次郎博士眼科病院に勤務、院長河本博士指導の下に研究、爾來現住地にて開業今日に至れり、斯間の指導教授は主として小口忠太教授、稲葉治三郎院長、河本重次郎教授、石川千代松教授等にして、昭和三年七月京都帝大より學位を受領せり。

△主論文は「螢いかノ發光本態ニ就テ（組織學的並ニ細菌學的研究）」にして、外に參考論文として、(1)眼球刺創後硝子體膿瘍ヲ催起シタル一種ノ未知桿菌ニ就テ、(2)重複輪狀暗點及ビ單眼複視ヲ有スル「ヒステリー」症例ニ就テ、(3)外傷性近視ニ就テ、(4)表皮下週邊角膜炎ニ就テ、(5)角膜癒着性白班並ニ角膜痨ニ對スルクナツプ氏鹽化金溶液染色法ニ就テ、(6)網膜靜脈三枝分岐ニ就テの六篇あり。

△富山市南田町島豊次郎の二男、明治廿七年生る。學究的溫厚の紳士にして、其の今日ある篤學は燦として輝き氏が閲歴に更に精彩を放てり。年齒漸く不惑に入る二歳、今は最も得意時代にて獨特の手腕を發揮し、診療手術の好評遠近に傳はる。特に博士の長所と見るべきは、臨床に熱心にして眞面目なると、患者に對する態度の親切にして誠意誠實を盡す點にあり、以て其の性格の一斑を窺はれ、同時に其の高邁なる人格を敬慕せしむ。學生時代よりの讀書家にして書見を唯一の樂しみとし、學究と併せて品格陶冶の修養に余念なきが如し。春秋猶豐富にして、洋々たる前途は博士の後半生史を語るに餘裕綽々たり、幸に健康を祈り益々發奮活躍あらんことを。

◇

植村操　△慶應義塾大學醫學部助教授たる植村操博士は、慶大系の新進にして、眼科界の權威菅沼定男教授の愛弟子として知られ、多年恩師の指導を受けて造詣する所深く、母校より學位を得たる眼科界近來の名醫博として其の存在を認めらるゝ新人也。

△主論文は「網膜圓維體機能知見補遺」にして、參考論文は「腎炎性網膜炎ノ病理發生問題ニ就テ」外六篇あり。

△東京市芝區葺屋町植村碩三郎の三男、明治三十三年生れにして、大正十四年慶應義塾大學醫學部卒業後、眼科學教室に入り今日に至る。學位は昭和六年六月慶大より授與せらる。博士の年齒漸く三十有六歳、未だ少壯にして潑剌たる研究心に富み、向學の精神に燃ゆる新進の學者也。其の教壇に起つや眞面目にして熱あり力あり、其の態度の眞摯にして熱情あるは、博士の將來を大ならしむる氏の性格の一斑と見るべき也。猶春秋に富む博士の前途や洋々として益々多望也。東京府北多摩郡久留米村南澤學園町に住む。

◇

大野新吉　△岐阜市金町二ノ二に眼科專門を以て著聞する好明館あり、館長大野新吉博士の經營する私立病院にして、入院室十八を有し其他内部の設備整ふ。博士は愛知醫專出身の眼科學者にして、京都帝大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博たるに恥ぢず、殊に其の篤學を推奬せられ、今や同地方診療界を風靡するの聲望を博す、研鑽多年、該博なる學識と共に臨床にも堪能なり、特にその最も得意とする博士の稱する所謂眼底所見によりて他に、腦溢血發作の有無及結核の早期診斷に供しつゝあるは、著名にして其の玲瓏たる診療手術の好評と相俟つて益々遠近の人氣を集中し、繁榮歳と共に成功の地盤を築きつゝあるは祝福すべき也。

△更に學歴より見たる博士は、明治三十八年愛知縣立醫專を卒へ、翌三十九年四月東京帝大醫科大學教授河本博士に就き實地研究中、同博士クリニツク第一助手として勤務す、同四十一年四月岐阜縣立病院眼科醫長勤務、大正二年十一月辭職以來岐阜市にて開業今日に至る、斯間同十二年より愛知醫大病理學教室に入り林直助教授指導の下に研究、又同大學教授勝沼精藏博士に就ても研究、昭和四年七月學位を授與せらる。

△學位主論文は「眼内腫瘍ノ實驗的研究」にして、參考論文は、(1)長期「ラノリン」飼育家兎ノ眼底變化ニ就テ、(2)人工的容易ニ脱臼セシメ得シ先天性梅毒ニ因スル小兒失明眼ノ一例、(3)初期「グリオーム」ノ一例ニ就テの二篇なる

が、其他にも論著澤山あり。

△感想の一片を寄せて曰く「現代醫學界に於ては田夫野人は全く無頓着に御座候得共、醫師會に對しては吾人同業者の余りにも利己主義萬能にして從つて自然の人格低落を嘆くのみ。附　醫師法改正した當局が非か改正のやむなきに至らしめた醫師側が是か甚だ惑ふ」云々。

△博士は岐阜市元町大野嘉一郎の三男、明治十三年生る、當年知命に入る六歳、元氣にして精力甚だ旺盛也。學究的溫厚の紳士にして、其の今日ある篤學と成業とは博士の前半生史をして躍如たらしめたるものあり。今は手腕愈々老熟して一段の異彩を放ち最も重望せらるゝ時代に在り、殊に博士の最も特徴とする所は「醫は仁術也」をモットーとして患者主義を本位とし、熱心克く親切と誠實とを盡す點に在り、一面又人と接するに愛想よく、同情心に富み能く世話す、其の美德は博士の長所と見るべきか、若し强ひて其の缺點を指摘せしむれば、眞面目過ぎて打切棒なる質なれば、社交下手の所が或は博士の短所にあらざるか。研究以外の趣味としては書畫を樂しみ盆栽を愛す、嗜好としては煙草を好む。又特に傳ふべきは、博士の岳父小川三之助（妻の父）に四女あり、四女共に嫁して醫學博士の夫を有す、この四女の教養を完ふして今や老後を樂しむ老母の幸福は、博士家の爲め又祝福すべき也。博士や春秋猶豐富、切に自重加餐を祈る。

◇

茂木宣

△臺灣總督府臺北醫專教授にして眼科學を擔任しつゝある茂木宣博士は、千葉醫專出身の眼科學者にして、北海道帝大より學位を獲得せる眼科界の名醫博として其の學識技能を認められ、今や臺灣醫學界に最も囑望せらるゝ斯學の一權威たるを失はず。現職に赴任して以來、專念學生指導の爲あ勵精努力し、教壇に起つや諄々と說き、臨床に當るや誠實と親切とを以てす、其の篤き信望を博し、學内の中堅を以て重きを爲すも亦偶然ならざるを想ふ。

△博士は大正十年千葉醫專卒業、同十一年九月迄東京帝大醫學部眼科教室介補拜命、同年十月より北海道帝大醫學部眼科教室に入り、助手、講師を經て、昭和四年四月助教授に任ぜられ、同年八月學位を授與せらる、同五年四月現職に轉じ今日に至る。斯間、東大教授河本重次郎博士、同石原忍博士、北大教授越智貞見博士の指導を受け專ら眼科學を研究せり。

△學位主論文は「先天微毒性角膜實質炎ノ血液學的研究」にして、參考論文は、(1)强電流ニ因ル眼障碍トシテノ白内障、(2)睪丸潛伏症（Kryptorchisums）ヲ伴ヘル先天性白内症二例、(3)瞳孔ノ先天性異常一例、(4)角膜異物ノ位置ニ就テ、(5)眼窩上壁ヲ破壞セル網膜膠腫ノ一例ニ就テ、(6)頸部交感神經切除後ニ於ケル眼科學的所見ニ就テ、(7)血族結婚ト家族性先天性白内障等なり。

△栃木縣安蘇郡堀米町大字堀米の人、茂木辨吉の三男にして、明治三十年生る。『自身に對しては「精義入神」と心掛け居るも他に對して矢釜敷き事考へ居らず』云々とは、博士の感想の一片なるが、以て其の爲人を窺はる。年齒未だ三十有九歳にして少壯の意氣に燃え、純眞なる學者肌にして研究心に富む。今は醫育と研究とに渾心の心力を傾倒して亦他事を顧みず、臺北醫學界の爲め大に將來に俟つあらんとす。研究以外には旅行、登山、スキーを趣味す。猶洋々たる前途は頗る春秋に富む、切に自重加餐を祈る。臺北市表町一ノ五七に住む。

◇

深水重助

△宮崎縣立病院兼副院長眼科部長たる深水重助博士は、大阪醫大出身の眼科學者にして、恩師宮下左右輔教授及び中村文平教授に就て斯學の蘊奥を究め、主論文は「體外培養ニヨル水晶體上皮細胞ノ研究　附實驗的水晶體溷濁知見補遺」の外、參考論文十一篇を完成して、母校より學位を獲得せる所謂大阪醫大派の名醫博たる一

人物也。在職茲に十三年を閲し勵精恪勤一日の如く、至誠一貫以て今日に至る醫療上の功績は多大なりと云ふべし、多年の經驗と共に獨特の手腕を有し、今や其の特技を發揮して益々內外の信望を博し、大衆より多大の信頼と尊敬とを受けつゝあるは地方診療界の爲め甚だ多幸とす。

△三重縣鈴鹿郡畫生村下庄深水繁藏の五男、明治廿九年生れにして、大正十一年大阪醫大卒業後、同大學眼科教室にて研究、翌十二年五月宮崎縣立病院眼科部長拜命、昭和三年一月より五年一月迄二ケ年間大阪醫大へ留學仰付られ、同期間研究科入學、眼科學教室にて研究、同五年二月學位を授與せらる、同九年二月宮崎縣立病院副院長兼務を命ぜらる。

△感想の一片を披瀝して曰く「醫學者たらんとするは易し、名醫たらんとするは頗る難し、近時吾醫學界醫學者のみ多士濟々にして何ぞ名醫の寥々たる、醫學究極の目的が豫防及治療に存する以上吾人治療家たるもの須く醫學者たると同時に進んでは名醫にうんと努力す可きなり」云々と、以て其の抱負の一端を伺はる。年齒漸く不惑に達す、少壯氣鋭にして研究心に富む、趣味としては只斯學研究の外何物も有せず、熱誠克く臨床に勵しむと共に終始精研に餘念なきが如し。眞面目なる學究的溫厚の紳士にして、好箇の臨床家として高遠なる理想を抱き、志操堅實にして人格崇高なるは、晩近博士に對する人格の向上尊重を高調するの今日甚だ多とす。宮崎市大工町一四九に住む。

◇

中村榮　△水戸市上市裡五軒町に有名なる中村眼科病院あり、院長は中村重臣にして中村榮博士は副院長として克く院長を補翼し、共に日々診療に勵しみつゝあり。博士は茨城縣の出身、明治二十四年生れにして、大正十年愛知醫專卒業後、直ちに杏雲堂佐々木研究所に入所、研究の結果、學位論文『臟器及血液內「グリコーゲン」及葡萄糖ノ微量定量方法』を完成して、昭和五年二月慶大より學位を得たる近來の名醫博也。博く學識を備え、臨床にも堪能にして多年の經驗に富み、今や獨特の手腕を發揮して餘す所なく、玲瓏たる診療手術の好評は、院長の德望と相俟つて益々人望を博す、其の今日の盛況を見るもの博士の力亦與つて大なりと云ふべし。

△博士は茨城縣の人、明治二十四年生る、年齒漸く不惑に入る五歲にして年壯の意氣益壯也。學究的溫厚の紳士にして手腕愈々圓熟の域に入り、臨床家としては今が最も働盛にて、勵精勤勉日も尙足らず、終始「醫は仁術也」を以て本分とす。春秋猶頗豐富なれば、幸に健康と共に、益々發奮治療界の爲め盡力あらん事を祈るや切也。

◇

白玖壽雄　△香川縣觀音寺町に白玖眼科病院あり、病床二十其他內容の充實せる點に於て、同地方診療界を風靡す。院長白玖壽雄博士は、陸軍三等軍醫正（豫備）の印綬を帶び、正六位勳六等を有す。岡山醫專の出身にして大正元年卒業後、直に陸軍に入り翌二年任陸軍三等軍醫、同四年二月陸軍々醫學校入學、同年八月より一ケ年間眼科學專攻、爾來累進昭和二年三月三等軍醫正に進み、同年七月依願豫備役となる、同年三月より岡山醫大衞生學教室に入り緒方益雄教授の下にて血淸學及び衞生學の研究に從事し、同四年六月より同大學眼科教室に轉じ畑文平教授に就き眼科學を專攻し、同五年九月岡山醫大より學位を受領す、爾來同大學を辭し現住地に眼科病院を開設し今日に至る。

△學位主論文は「細菌沈降ノ分離ニ關スル研究」にして、(1)其一細菌沈降素及過敏性抗體ノ分離並ニ免疫體ノ一元論ニ就テ（獨文）、(2)其二分離細菌沈降素並ニ分離過敏性抗體ニ就テ、の二篇より成る。參考論文は、(1)細菌沈降反應並ニ凝集反應ノ比較研究、(2)酵素ニヨル抗原、抗體ノ消化並ニ「ブペトン」ノ抗原性ニ就テ、(3)周圍明暗ノ視力ニ及ボス影響、(4)眼筋麻痺ノ二稀例ニ就テ等。外に論著中の「眼科ニ於ケル血淸學的研究」は博士快心の作と見るべく、此他重要なるもの數篇あり。

△感想の一片を寄せて曰く「現代開業醫師界は餘りに營業的に墮するの感あり、這は一般地方人士の醫師に對する認

識不足に基く不當の壓迫に依る生活の脅威に原因せりと雖も、又其責任の一半は醫師自ら負はざるべからず、今にして從來の陋習を打破し眞の合理的仁術的態度に改めずんば社會に於ける醫師の地位は益々低下し生活は一層困難に向ふものと信ず」云々。香川縣多度郡與北村白玖現吾の三男にして、明治二十三年生る。年壯の意氣益壯にして精力主義の人、多年軍隊生活にて訓錬せる學究的溫厚の紳士にして、臨床家として多年の經驗を積み今は手腕圓熟の域に入る。性來眞面目にして正直過ぎる方なり、能く犬を愛す。九州帝大教授安藤一雄工博とは從兄の間柄也。

◇

栂野　二久次　△長岡市關東町に栂野眼科醫院あり、院長は博士の嚴父栂野利作氏にして開業古く、超然として當地診療界を風靡するの勢力を有し一流に在り。栂野二久次博士は、克く院長を補佐し日々診療に努力勵精して獨特の手腕を揮ひ、玲瓏たる診療手術の好評は院長多年の聲望と相俟つて益々遠近の人氣を集中し、繁榮蔵と共に拔くべからざる盛況を極めつゝあり。博士は九州帝大系の眼科學者にして、慶大教授菅沼定男博士に師事して斯學の蘊蓄を究め、慶大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。

△長岡市醫師栂野利作の嗣子にして、明治二十六年生る。二高を經て、大正十一年九州帝大醫學部を卒へ、同年より昭和五年四月迄慶大醫學部眼科教室勤務、其間大正十四年四月より十五年十月迄日赤秋田支部病院眼科醫長として就職、昭和五年五月より父業を援けて今日に至る、同年十一月慶大より學位を受領す。主論文は「網膜原發變性的家族性疾患ノ分類ニ關スル遺傳學的研究」にして、參考論文九篇あり。

△謙遜家にして名利に恬淡、但だ研究と醫療そのものに趣味を集中して熱誠克く其の事に勵しみ、以て吾が志達せりと悠々たる心境を持するの概あり。年齒今や不惑に入る三歳、手腕圓熟して最も得意時代に在り。

◇

川島　薫　△神戸市葺合區熊内橋四ノ二三に川島眼科醫院あり、現代式の洋館二階建にして、外美の結構と相俟つて内容充實し、殊に各室の明るき用意の周到なるは感じよし。院長川島薫博士は熊本醫專出身の眼科學者にして、奉天滿鐵醫院眼科に於て小口忠太博士指導の下に研究し、次で京都帝大教授市川清博士の指導を受けて斯學の蘊奥を究はめ、主論文「痘病原體ヲ以テセル實驗的家兎眼炎ノ一眼ヨリ他眼ヘノ移行ニ就テ」及び參考論文九篇を完成して、京都帝大より學位を獲得せる名醫博たる一人物也。

△岡山縣苫田郡東加茂村桑原に本籍を有す、岡崎清治の四男、明治二十五年生れにして、大正四年熊本醫專を卒へ、奉天滿鐵醫院、大阪鐵道病院等に就職、其後京都帝大醫學部眼科教室に入り、昭和三年五月研究生となり、同五年十一月學位を授與せらる、爾來現住所にて開業今日に至る。

△學究生活より實地診療界に躍進して以來、開業拮据數年、年次獨自の地盤を開拓して堅實なる發展を遂げ、今や周到なる内部の設備と相俟つて悠々たる位地を占む。博士の年齒今や不惑に入る四歳、年壯の意氣と共に手腕愈々圓熟し最も得意時代に在り。猶春秋豐富にして、不斷の勵精努力と精研に余念なき前途は洋々たり。賦性篤實溫厚、眞面目なる年壯の紳士にして、學究的有爲の臨床家として推奬し敬意を表す。

◇

佐古博愛　△米子市博愛病院眼科部長としての佐古博愛博士は、大正十年京都府立醫專の出身にして、卒業後同校附屬療病院醫員を被命、同十三年京都府立醫大助手となり、昭和三年京都府伏見病院眼科部長として赴任、同年京都府立醫大講師を囑託せらる、同四年再び伏見病院眼科部長となる、翌五年十二月京都府立醫大にて學位を授與せられ、次で現職に赴任す。學位論文は「慢性涙嚢炎ノ研究　附健康及ビ罹患涙嚢ニ於ケル組織學的所見ニ就テ」にして、他にも論著夥多あり。鴻大なる本論文の學問的批判は既に學界に定評あれば贅せずもがな、氏が努力研鑽の跡

を物語るに足る。島根縣の人、明治二十八年生れにして、當年漸く不惑有一歳也。少壯の意氣と共に學識、手腕、人格いよ〳〵圓熟の域に入り、今は最も活躍奮鬪の全盛時にて、多年の聲望と共に其の玲瓏たる手腕を認められ、篤き內外の信望を博す。春秋猶豐富、輝しき前途は洋々たるの秋、折角の奮鬪を祈るや切也。

◇

石田松雄

△八幡製鐵所病院眼科醫長石田松雄博士は、大阪醫大出身の眼科學者にして特に結核性眼疾患を最も得意とす。在學中宮下左右輔教授の下に業室研究生として眼科教室に入り、卒業後中村文平教授の指導を受け、母校より學位を獲得せる所謂大阪醫大派の名醫博たる一人物也。聞說、製鐵所病院は毎日の患者數二百名餘を五名の醫師にて施療されつゝありと、可なりの多忙さを察せられ諸氏の勞を多とせずんばあらず。博士書を寄せて曰く「餘程緊張せぬと讀書勉强の餘裕がない位である」云々と、又以て博士の勉强振りを察せらる。

△博士は大正六年大阪醫大豫科入學、同十三年大阪醫科大學卒業、次で恩賜財團濟生會大阪府病院、造幣局病院眼科に歷任し、昭和五年四月製鐵所病院眼科醫長に轉任今日に至る、同六年四月大阪醫大より學位を受領せり。

△學位主論文は「眼結核特殊療法ニ關スル實驗的研究及ビ少量「AO」ノ結核ニ對スル豫防的價値ニ就テ」にして、參考論文は(1)結核ニ對スル少量「AO」皮下注射ノ豫防的價値ニ就テ、(2)種々ナル結核特殊療法ノ統計的觀察、(3)三稜鏡直面外ニ於ケル屈光ニ關スル物理數學的考察、(4)三稜鏡ニ關スル一二ノ知見、(5)亂視ノ人ハ何故ニ眼鏡ヲ歪メテ物ヲ見ルヤ、(6)「アウトオフタルモスコーピー」ニ就テ、(7)余ノ白內障手術統計其他三篇あり。

△感想に曰く「學會は吾々若きものに取つて極めて尊い指導となつてゐることは勿論である。眼科に於ても九州では九州眼科集談會、九大眼科研究會、熊大眼科集談會、九州醫學會眼科分科會等、又九州醫專眼科抄讀會、筑後眼科集談會、北九州眼科研究會等大小の會が在るのは誠に結構である、それは研究啓發に有爲なるは勿論時折同僚の顏を見ることが又甚だ愉快である、開業して居られる諸君は殊に同僚と相會する機會が少ないだらうと思はれるが九州には眼科會が多いから此の點はなか〳〵惠まれて居ると思ふ。全日本、世界の學會に關しては吾輩の淺見を以てしては仲々未だ感想が及ぶ所でない」云々。

△博士は福岡縣浮羽郡山春村山北石田英長男、明治三十一年生る。學究的溫厚の紳士にして、人と爲り淸廉潔白、恬澹として功名榮達を意に介せず、大體が暢氣の性質にて虛心坦懷の方なるが、一度び取りかゝつた仕事に對しては性急になり飽迄貫徹せねば止まぬ癖あり、そこに又た博士の長所を見出すべきか。研究以外スポーツに多大の趣味を有す、就中野球を最も好み自ら克く競技に參加す。年齒未だ三十有八歳にして、春秋猶頗る豊富なれば、向後の活躍と相俟つて潑剌たる前途は、洋々として益々多望也、幸に健康と共に發奮倍々活躍あらん事を切望す。八幡市高見町七丁目一〇七號官舍に住む。

◇

四倉信雄

△神奈川縣鎌倉町由比ケ濱四丁目二一八にて開業せる、四倉眼科病院長四倉信雄博士は、千葉醫專出身の眼科學者にして、母校の恩師伊東彌惠治博士の親しき薫陶を受け、研究の結果、母校より學位を得たる所謂千葉醫大派の少壯名醫博也。開業日尙淺少にも拘はらず、多年經驗に富む臨床的手腕は嘖々たる好評と相俟つて、年次繁榮の進境にあるは前途の發展大に囑目せらる。

△顧みて博士の學歷及び閱歷を公開すれば、博士は大正十二年千葉醫專卒業後、直ちに母校眼科學教室に入り、翌十三年大學助手に任ぜられ醫局長の樞位に在る事七年、昭和六年四月市立横須賀病院に眼科新設せらるゝや招かれて醫長となり、翌七年末辭任せり、爾來前記の現住所にて開業今日に至る、斯間同六年九月千葉醫大より學位を受領せり。

△主論文は「結膜下ニ注射シタル鹽類溶液ノ眼內壓ニ及ボス作用並ニ之等作用ニ對スル頸部交感神經切除及ビ「アト

ロビン」點眼ノ影響ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)眼科領域ニ於ケル「ディアテルミー」ノ應用範圍ニ就テ、(2)頸部交感神經麻痺患者ノ眼症狀（檢査上ノ注意）、(3)膿漏眼ノ轉機及治療法ニ關シテ、以上三篇なり。

△博士の感想に曰く「近來動もすれば商取引的診療の傾向あるは醫術の性質上慨はしき限りにして唯物至上思想の影響とはいへ醫療の本原より患家、醫師兩々大いに反省せざる可からず、信仰的人格的診療を尊び醫療の普及を計り保健建國の實を擧ぐ可きなり」云々。博士は茨城縣那河河畔の人、明治三十三年生る、當年三十有六歳の少壯にして手腕漸く壯熟す。熱心なる信仰的臨床家にして、常に人格的診療を尊び、誠實熱情を以てす、其の態度の眞面目にして情味靄々たるは、學究的溫厚の紳士として其の人格を尊ぶ、晩近博士の人格に對する世論の紛々たるの秋、學德兼備せる博士の如きは歡迎すべき也。

◇

筒井德光　△元岡山醫學專門學校長にして學界に多大の功績を遺せる故筒井八百珠博士の嗣子たる筒井德光博士は、亡父の遺志を繼ぎ、現在にては岡山醫科大學助教授（眼科）として教壇に起ち、醫育の爲め精勵能く學生指導の任に當り、又た克く自己發展の爲め努力研鑽す。

△博士は八高を經て、大正九年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに副手として眼科教室に入り河本重次郎教授の指導を受けて眼科學一般を研究す、十一年廣島縣立病院眼科部長、十四年岡山醫大講師を歷て、昭和二年岡山醫大助教授となる、四年文部省在外研究員として二年間留學を命ぜられ、獨逸ライプチヒ大學、及び瑞西チューリッヒ大學にて研究、歐米諸國を見學して六年歸朝、同年十二月岡山醫大にて學位を得今日に至る。

△學位主論文は「エールリッヒ氏線ノ發現及ビ形成ニ就テ」にして、參考論文は、(1)血液性狀ノ前房水ニ及ボス影響ニ就テ、(2)皮膚刺戟ニヨル網膜色素移動ニ及ボス交感神經切斷ノ影響ニ就テ、(3)前胎生縫合白內障ノ二例ニ就テ、(4)水晶體偏位症ノ檢査法及ビ手術的療法ニ就テ、(5)痛風眼症ノ一稀例ニ就テなり。外に、(1)「ラヂウム」及「レントゲン」線ノ網膜色素移動ニ及ボス影響ニ就テ、(2)眼疾患ニ於ケル嘔吐ニ就テ、(3)水晶體沈降素ノ分離及ビ分離水晶沈降素ノ特異性ニ就テ、其他多數あり。又た亡父八百珠博士の遺著「臨床醫典」は引續き增補改訂し今や版を重ねること三十七版（昭和八年）に及ぶ。

△亡父八百珠博士は、舊和歌山藩士にして帝國大學醫科大學を卒へ、皮膚病學研究の爲め獨逸へ留學し、千葉醫專教授を歷て、岡山醫專校長として多年學界に貢獻せし碩學也。德光博士は卽ち其の長男として明治二十八年千葉市に於て生る。年齒漸く四十一有歲の少壯にして、研究心潑剌として多量の分別を有す、清淡寡慾、溫和にして敦厚、謙讓にして物と爭はず能く後進を愛撫す、その寬容なる態度は學者としての人格を備ふ。學生時代よりの讀書家にして、研究以外今猶書見を唯一の趣味とせるが如し。岡山市小野田町五五に住す。

◇

北方了嚴　△大阪市南區北桃谷町五七に著名なる北方眼科醫院あり、院長北方了嚴博士の經營にして、開業古く、多年の聲望と相俟つて既に牢乎たる地盤を開拓し、年次堅實なる發展を遂げ、今や好評嘖々の裡に超然たる位地を占む。博士は大阪高醫出身の眼科學者として錚々たるものにして、眼科界の泰斗大阪帝大教授中村文平博士に就て斯學を專攻し、大阪帝大より學位を獲得せる名醫博として氏が仁術に一段の異彩を放てり。

△博士は福井中學校を經て、明治四十年大阪府立高等醫學校卒業、同年醫師免許證下附、同年十一月より大正三年五月まで同校助手兼同附屬病院醫員、眼科學教室勤務、水尾源太郎博士及び宮下左右輔博士につき專ら眼科學研究、大正三年六月職を辭し現住所に開業、昭和元年より同三年まで大阪醫大專攻生となり再び眼科學研究、昭和四年四月現住所に私立病院開設、昭和七年一月學位受領、以て今日に至る。

△學位主論文は「初生兒膿漏眼豫防ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(I)「サルヴルサン」注射後ニ起レル一種ノ點狀表層角膜炎ニ就テ、(2)本邦人の健康眼壓ニ就テ、(3)結膜囊計測（I及ビII報）(4)「トラホーム」眼結膜囊計測ノ診斷的價値ニ就テ、(5)クレデ氏法ニ關スル基礎的研究、(6) Beiträge Zur Kenntnis der druckstelgerunden Wirkung des Eserins auf das Auge 等なり。

△福井縣丹生郡天津村在田の人、北方了城の長男にして、明治十八年生る。壯齡今や知命に入る一歲、元氣旺盛にして精力家たり、學究的臨床家として、その今日あるは既に氏の閱歷に輝き光彩陸離たり。殊に氏が獨立して以來開業醫として努力研鑽の結果、其の初志を貫行せる篤學は特筆に値す。今猶研學の念を捨てず業餘克く讀書して精研修養相勉め、日新醫學の研究におさ〳〵懈りなきは甚だ多とすべき也。酒、煙草を飲まず、散歩を樂しむ。性來謙遜家にして自己の成功、識學を衒はず、人に對するに誠意親切を以てし、功名榮利に恬澹として、一意專心、自己の職務に勵み、仁術を以て任ずる誠實の仁也。

◇

田上清貞

△富山市南田町に本院を、高岡市柳馬場に分院を置き、兩院相應呼して眼科界に雄姿を表はし、斯科の耆宿を以て囑望せられつゝあるは田上眼科醫院長田上清貞博士也。博士は金澤醫大の前身四高醫學部の出身にて、眼科學者として一家を成し、嘗て獨逸に留學するや、ウユルツブルヒ大學カールヘツス教授の指導を受けて眼科學を專攻し、後又金澤醫大教授杉山繁輝博士に就て病理學を、同中島實博士に就て眼科學を專攻し、金澤醫大より學位を獲得せる篤學の士にして、名醫博中の老大家としての貫祿を有す。先是開業既に古く、多年の聲望と相俟つて牢固たる地盤を築き、斯間開業の傍ら研究に志して常に學を錬り腕を磨くに餘念なかりしが、研學切磋の功空しからず、終に克く尨大なる學位論文を大成して學位を獲得せる厚志篤學は、臨床家として稀に見る所にして立志傳的範を示すに足る。而かも氏が今日の位地よりすれば、既にして富山及び高岡兩市を風靡するの成功を贏ち得て悠々たる位地を占め、光る學位は氏が仁術に一段の光彩を放ちて見ゆ。

△學歷より觀れば、明治三十二年第四高等學校醫學部卒業、同三十三年東京帝大醫科大學眼科教室にて眼科學研究、同三十四年豐橋病院眼科部長、同三十五年十一月富山市に眼科開業、同四十年東京外國語學校入學、同四十一年より滿三ケ年獨逸留學、大正三年四月富山市醫師會長、同十三年富山縣醫師會長、昭和三年一月より金澤醫大病理學專攻生として杉山教授の下に血液病理學、同六年五月より眼科專攻生として中島教授の下に攻究し、同七年一月學位を受領す、以て今日に至れり。

△學位主論文は「死體內ニ於ケル血液細胞ノ變化」にして、參考論文は、(1)非化膿性急性彌蔓性脈絡膜炎（所謂原田氏病）ノ知見補遺、特ニ網膜剝離下滲出液ニ因ル實驗的研究、外九篇あり。

△感想に曰く『曩に時の內務大臣水野錬太郎氏が地方官議の際述べて曰く「醫師會をして會員の醫術研究に努めしめん」との意圖あることを、それと前後して、大正十二年七月十日水野內相官邸に於て、我が醫界の重鎭三浦謹之助先生が熱誠を込めて曰「開業免狀を何十年も護符の如く振り廻すは……醫學補習教育を或る方法の下に强制するは國民保健大局の上に利益あるは言ふ迄もなく、醫師本人の社會的地位を確保する所以である」と。此の切實なる警告に對し流石に理智の人たる水野內相も大いに首肯され、又列席の北里博士北島博士等も亦大いに動かされたりと。以上は私の不斷の信念です、吾等を稱して醫者は役者、藝者に聯想ありと侮辱之れより大なるはない、蓋し三者の一乎、然も吾等をして眞に砥礪せしむるものは醫師ならんも自ら安んずるの底意に到らんとせば醫士ならざる可からざるを思ふ、醫師の士魂を有するは最も大切なる所以と思ひます』云々。

△現住地たる富山市千石町が本籍にして、田上道貞の長男、明治九年生れ、高齡耳順に達し、學究的溫厚の老紳士也

氏の今日ある篤學と成業とは氏の前半生史これを語りて餘蘊なく、頂門の一針として可也。殊に特筆すべきは、氏が久しき開業の幾星霜かの間、診療と研究とに趣味を集中して又他事を顧みず、一意專心、唯だ其の事に一路邁進して他に何等の道樂を求めず、終に克く其の初志を貫徹せる點に在り。其間には素より市縣醫師會などの會長として盡瘁せる功績は言はずもがな、如何に社會的聲望を博せるかを表徵せるものとして其の一班を窺知するに足る。賦性敦厚篤實、意志强固にして物に動せず、物事に熱心にして徹底的に成遂げずんば止まぬ長所を有し、人に對しては同情を以てし甚だ親切也。親戚關係には岩倉信珍醫博(博士の妻の弟)、實弟田山實醫博、子安賴義醫博(弟の妻の兄)等あり。

◇

松尾義雄　△日赤岡山支部病院に眼科醫長として松尾義雄博士あり。博士は東大系石原(忍)眼科に養成せられ、後に岡山醫大眼科畑(文平)教授の下に轉じて更に研索す、今や診療界に躍出して新手腕を揮ひ、精勵恪勤、熱心にしてその眞摯なる態度と、診療手術の評判は極めて良し、而も猶學究心滿々たるところに綽々たる餘裕あり。

△岡山縣總社町の人、松尾啓治郎氏の長男にして、明治三十三年生る。縣立岡山一中、六高を經て、大正十三年東京帝大醫學部卒業、直に附屬醫院眼科へ勤め、副手より助手に歷任す、昭和二年岡山醫大講師として迎へられ母校附屬醫院を辭す、次いて同四年同大學助教授に任ぜられ、同六年依願免官、再び講師となり、同七年二月岡山醫大にて學位を得、同九年九月現職に就任せり。

△學位主論文は「眼瀘度ノ研究」にして原著は獨逸文なり、參考論文としては、(1)屈折狀態ト瞳孔ノ大サトノ關係、(2)視神經疾患ト鼻副竇炎トノ關係ニ就テ、(3)中心性網膜炎ニ就テ、(4)檢眼「レンズ」ノ正確度ニ就テ、(5)所謂分散麻痺ニ就テ、(6)接種「マラリヤ」ノ眼合併症、其ノ一、黴毒患者接種「マラリヤ」後ニ起リタル硝子體溷濁症ノ二例其ノ二、接種「マラリヤ」後ノ網膜出血一實驗例、(7)外傷性虹彩囊性ノ一例、(8)細線角膜炎ニ就テ、(9)興味アル經過ヲ取リシ淚腺癌腫治療治驗、(10)網膜中心動脈小枝栓塞ノ一例、(11)稀有ナル臨床例、右眼、滲出液中ニ「コレステリン」結晶ヲ證明セル網膜剝離、(12)眼瞼黴及瞼結膜結核X線治驗例、(13)先天性眼瞼缺損症ノ一例、(14)眼壓抵材料トシテノ齒科用「モデリング」ノ一用途、(15)造船工場ノ電光性眼炎、(16)眼瞼結膜黑色肉腫X線放射治驗、(17)興味アル眼鐵片外傷症例ニ就テ、(18)虹彩內ニ嵌入セル異物(睫毛)摘出例等あり。

△博士曰く「治療醫學の大いに發達せる今日、更に豫防醫學の一層振興せられん事を希ふ。社會救濟事業更に歩を進めて、眼科醫治の恩惠、普く一般國民に加はり、失明を嘆く國民の數愈々僅少となるを望む」云々。亦以て博士の抱負の一端を窺はる、三思傾聽すべし。讀書家にして、今猶研究に餘念なき博士の容姿を想像する時、その前途益々多望なるを祝福せざるを得ず。岡山縣總社町五〇九に本宅あり。

◇

辻泰規　△日赤山口支部病院眼科醫長たる辻泰規博士は、九州帝大系の新進にして、卒業後母校の大學院に學び、恩師兒玉桂三及び庄司義治博士等指導の下に醫化學及び眼科學の蘊奧を究め、學位主論文「白內障ニ於ケル水晶體蛋白質ノ實驗的研究」(參考論文なし)を完成して、母校より學位を獲得せる所謂九大派の名醫博たる一人物也。今や其の精鋭なる新手腕を發揮して餘す所なく、其地方の厚き人望と併せて診斷の好評あるは多幸とす。

△博士は德山中學、一高を經て、大正十二年九州帝大醫學部を卒へ、直に眼科教室に勤め助手として大西克知教授に師事す、次で十四年横濱病院眼科部長として就任し、昭和四年之を辭して九州帝大大學院に入學す、大學院退學後は再び眼科教室に勤め、六年日赤山口支部病院眼科醫長として就任今日に至る、學位は七年二月母校より受領す。

△博士は山口縣大島郡日良居村の出身、醫師辻信吉(眼科開業)の長男にして、明治三十二年生る。年齒未だ三十有七歳、少壯有爲の資に富み、新進の英氣潑剌として前途洋々たり。讀書家にして文學趣味多く、又スポーツを好み、

時に圍碁を居常の樂しみとす。人に對しては能く約束を守り應答の禮を重んず、其の眞摯なる態度を自重して、益々加餐健鬪あらんことを切に祈る。山口市西白石二二二三ノ四に住す。

◇

佐藤勉　△帝都治療界の覇王本郷お茶の水順天堂醫院に眼科主任として佐藤勉博士あり。東北帝大系の眼科學者にして、佐藤家の三兄弟博士を以て稱せらるゝ佐藤亨博士及び佐藤要博士の弟也。學位論文は東北帝大教授加藤豐治郎博士(內科)指導の下に完成して母校より學位を獲得せり。眼科は主として東京帝大教授石原忍博士に就て專攻し、學究生活より離れて眼科診療界に躍進して以來向上發展の道程にあり。而かも年齒未だ少壯なれば、今後の活躍と相俟つて猶洋々たる前途を囑目せらる。

△博士は昭和二年三月東北帝大醫學部卒業、直ちに同學部加藤內科に入局、加藤教授指導の下に昭和七年一月學位を得、直ちに順天堂醫院に轉じ、四月迄外科手術實際を練習、同四月より東京帝大醫學部眼科に入局、眼科教室副手として勤務、次で再び順天堂醫院に歸任し今日に至る。專攻學科は眼科及び內科とす。學位主論文は『組織水分代謝ノ生病理ト陽「イオン」ノ關係ニツイテ』にして、他に論著夥多あり。

△東京市麴町區中六番町に本籍あり、明治三十五年生る、佐藤佐の三男也。年齒未だ三十有四歲の少壯にして、學究的溫厚の紳士たる品格を備ふ。性來謙遜家にして偏に恩師先輩の助力を感謝し、人に對するに自己の識學を衒はず、淡白にして快活よく人に接す、名利に恬澹として、一意專心、唯だ其の職務に勵しみ、誠意誠實を以て仁術の本分を盡さんとする熱誠の仁也。趣味としては研究と醫療そのものゝ外何等の道樂を求めざるが如し。三兄弟博士の健康と幸福とを祝し、併せて將來有爲の資に富む少壯醫博の前途を待望す。赤坂區表町二ノ一五に私邸あり。

◇

山田金吾　△德島縣板野郡撫養町齋田に本院あり、德島市本町二丁目に出張所を有する山田病院は、院長山田金吾博士の經營にして、眼科、耳科を專門とし、本院には病室十ケ、出張所には病床十三ケを有し、其他兩院相俟つて內部の設備全く成り、兩院共博士自ら日々診療に努力精進して甚だ多忙を極め、博士獨特の診療手術の好評は遠近に普く、今や當地方診療界に於て斯科獨占の觀あり。博士の如きは四國診療界に於ける重鎭にして、當世風の名醫博として名實伴ふ臨床家たる資格を備ふ。

△博士は縣立撫養中學校(特待生、優等卒業)を經て、大正七年岡山醫大の前身岡山醫專を卒へ、直ちに順天堂醫院眼科、耳科(大正十年まで)に勤め、十年より十三年まで鄕里にて開業、十三年より十五年まで岡山醫大助手、十五年再び鄕里に歸り一般診療に從事す。斯間、井上誠夫博士、佐藤敏二博士、畑、庄司、上坂、藤田各教授等に師事して研究する所あり、昭和七年一月學位受領。

△學位論文は『陳舊ナル「トラコーマ」「パンヌス」ニ對スル靑酸々化汞水ノ結膜下注射ニ就テ』が主論文にして、外參考論文十數篇あり。難治なる「トラコーマ」及「パンヌス」を根本的に根治せしめる「トラコミン」を創見三共より發賣しつゝあり。

△感想に曰く「臨床家は臨床的業績を以て學位を受くるにあらざれば面白からず、學位に對して基礎と臨床の區別をすべきなり、治療界の爲め又人生の爲めなり」云々。氏の出身地は現住地たる德島縣撫養町にして、明治二十七年山田筆吉の長男に生る。學生時代よりの秀才にして頭腦明晰を以て聞こへ、その今日ある篤學と成業とは氏が閲歷に燦として輝く。性來眞面目にして正直すぎる程なれば、患者に對するに誠意誠實を以て終始し、其の態度の眞摯懇篤なるは極めて評判良く、多大の信望を博し悠々たる位地を占む。研究以外には盆栽に越味を有し業餘を樂しむ。

◇

恒川亮彦　△日赤愛知支部病院眼科部長恒川亮彦博士のプロフイルを打診するに、博士は名古屋醫大の前身愛知醫專の出身にして、名古屋醫大派の名醫博として其の學識手腕を認めらる。博く學理を修め、又た能く臨床にも通曉して卓越せる手腕を有す、診療手術の好評と相俟つて篤き内外の信望を博す。顧みて博士の學歴を討檢すれば大正十年愛知醫專卒業後、勝沼内科教室に入り一年後愛知醫大に入學せしも病を得て退學、大正十四年小口眼科教室に入り副手、助手を經て、昭和五年長岡市長岡病院眼科醫長に赴任、同六年五月長岡病院が日本赤十字社新潟支部病院に移管せられ同時に眼科醫長として就任す、現在は歸鄉して日本赤十字社愛知支部療院眼科部長を擔任す。

△學位主論文「鐵ノ角膜ニ及ボス影響ニ就テ」（十年間鐵片ノ殘留ニ因ル角膜鐵鏽症及ビ角膜梢子樣變質症）及び參考論文四篇を堤出して、昭和七年五月名古屋醫大より學位を受領せり。

△博士は名古屋市の人、明治三十年生る。號を樵谷と云ひ、書道に堪能にして一家を成し、書家として今尙門下數百に及ぶ。恒川書院は恒川宕谷翁弘化三年紅瞰書塾を創設したるを濫觴とし　父鶯谷翁之を繼ぎ、當主樵谷は三代目にして亦遺鉢を父に承け幼時宕谷、及鶯谷翁に書法を學び、十七歳にして既に父鶯谷翁を輔佐し、傍ら新に塾を開き、間に碑帖の研究に努め善く祖業を繼承し得るに至る、曩に名古屋高等商業學校書法講師に選ばれ、次で瀧實業學校講師の囑託を受く、尙書道研究群谷會を興し中京書道會に參し、又熱田書道教習場を設け名古屋書道奬勵會を開く等、中京書道界の爲めに盡瘁するに寧日なし。曩に日本美術協會委員、日本書道作振會理事に任じ、目下泰東書道院特別會員の職を有す。又紅瞰會、凌雲會等の研究會を主宰す、其他各書道の役員を務むる事枚舉に遑なし、漢詩篆刻等の餘技あり。

△博士の年齒三十有九歳にして、手腕漸く壯熟の域に入り、臨床家として今は最も活動盛にて得意の時代に在り。日々診療に勵み其の職務に勤勉するも、家道として書道を廢するに忍びず、餘暇尙孜々として子弟の教導に努む。賦性眞面目にして篤實、謙遜自抑して人に厚く、快活にして同僚に親しみ克く部下を愛す。名古屋市中區日出町九（原籍）に住す。

◇

小松崎鴻　△茨城縣西茨城郡東那珂村に羽黑眼科醫院あり、同地方診療界に於ける王座を占む。院長小松崎鴻博士經營の私立醫院にして、内部の設備整ひ、博士自ら診療に勵しみ日々繁忙を極む。博士は東北帝大系（專門部出身）の眼科學者にして、陸軍三等軍醫正（豫備）の印綬を帶び、曾ては陸軍々醫學校教官として靑年軍醫の教養に任じ、後更に東大教授石原忍博士に就きて眼科學を、同井上通夫博士に就きて解剖學を研鑽し、東京帝大より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。多年陸軍に奉仕して軍醫界に活躍し、經驗豐富にして獨特の手腕を有す、今や斯科の大家として大衆より多大の信賴と尊敬とを受けつゝあり、地方診療界の爲め多幸とす。

△博士は明治四十五年東北帝大醫學專門部卒業後、陸軍に出仕して大正二年任陸軍三等軍醫、昭和三年陸軍三等軍醫正にて豫備役編入、爾後東京帝大醫學部眼科及び解剖學教室にて研究、昭和七年八月東京帝大より學位を受領す、先是鄉里に羽黑眼科醫院を開設今日に至る。主論文は「眼各部ノ神經特ニ其ノ終末裝置ニ就テ」にして、參考論文は、「角膜知覺ノ數量的測定」なり。特に眼神經に關するものは博士快心の作にして最も得意とせるものなり。

△博士の感想に曰く「日本に生れ常に安んじて業務に服し特に下層民に多き眼疾患の治療に從事し得たことに對しては國家に對し皇室に對し奉り肝銘しつゝあり」云々。博士の心境に對しては著者又敬意を表せざるを得ず。博士は現住地に本籍を有す、河原繁吉の五男にして現姓を冐す、明治二十三年生れなれば、當年四十有六歳也。眞面目なる臨床家として多年の經驗に富み、陸軍を去りて以來民間診療界の爲め盡瘁し、今は年壯漸く熟して手腕、人格共に玉成練達の域に達す。博士は「中道を步む」を以て信條とし、平和と圓滿とを主義とす、而して又臨床家としては眞實醫療に忠實なるを以て本分とし、診療に臨むや眞劍にして熱心克く誠實と親切とを盡す、蓋し其の篤き今日の聲望を博

せる所以も亦實に茲に存せん。研究以外の趣味としては旅行を樂しむ風あり。當世博士界中學德兼備せる醫博人物として茲に推奬し、敬意を表す。

◇

竹村慶治　△愛媛縣新居濱町佳友別子鑛山株式會社別子住友病院に眼科醫長として竹村慶治博士あり。博士の名聲は四國診療界に嘖々として喧傳するや既に年あり。博士は東大系の眼科學の權威現在東大名譽教授河本重次郎博士の愛弟子にして、多年恩師指導の下に研鑽の後、倉敷勞働科學研究所暉峻義等博士及び岡山醫大教授畑文平博士に就て研究を續け、岡山醫大より學位を獲得せる斯科界の名醫博として一家を成し、現職に赴任以來十數年一日の如く恪勤勵精し、一般患者、會社關係患者、及び鑛工場災害の患者等の診療に從事し、多年の功績尠からず、今や斯科の大家と仰がれ、四國診療界に最も嘱望せらるゝ中堅人物を爲す。

△博士は七高を經て、大正六年十二月東京帝大醫科大學を卒へ、同八年横須賀共立病院赴任、同十一年別子住友病院赴任、昭和四年研學を命ぜられ倉敷勞働科學研究所及び岡山醫大にて研究す、同六年歸院、同七年四月岡山醫大に論文提出、同年九月學位受領、以て現在に至れり。

△學位主論文は「瞳孔徑ニ關スル研究」にして、(1)瞳孔徑測定ノ生理學的條件ニ就テ、(2)瞳孔徑ノ性的年齡的相異ニ就テ、(3)瞳孔徑ノ日時的變化ニ就テの三篇より成る。參考論文は、(1)眼ノ調節時間ニ關スル研究、(2)作業場ノ照度ノ變化及ビソレヲ支配スル重要ナル因子ニ就テ（江田周三理學士ト共著）、(3)眩輝ニ關スル實驗研究、(4)X線ニテ處置セル結核性淚囊炎ノ一例、(5)高血壓蛋白尿ヲ有セル患者ニ見タル結核性ト見做シ得ベキ一種ノ網膜出血白斑ニ就テ、(6)齲蝕齒ニ原因セル眼窩蜂巢織炎、(7)崩壞性角膜角質炎ニ就テ、(8)子癇ニ前驅セル一過性黑内障ニ就テ等なり。他の論著中眼の實驗心理學的或は生物統計學的觀察並に批判は最も重要なるもの也。

△感想に曰く「現代の醫學を治療醫學の進歩と共に豫防醫學の一層なる進歩を促したい、殊に災害醫學、產業醫學の方面に至つて未だ幼稚なる過度期あるのは誠に遺憾に思はれる」云々。

△奈良縣北葛城郡百濟村百濟の人、竹村貞齊の長男にして、明治二十三年生る。兄弟六人醫にして、長兄竹村武治氏は奈良縣醫師會長、次弟宇埜俊治醫博は倉敷中央病院整形外科部長、末弟竹村齊治醫博は阪大石橋病院主任たり。三兄弟博士は近來學界の美談とす。博士の年齡不惑に入る六歲、學究的臨床家として今は手腕圓熟し、社内及び民衆より多大の信頼と尊敬とを以て景仰せらる。性來眞面目にして巧言令辭を好まず、人に對するに誠實と親切を以てするも社交は下手の方なれば、稍もすれば誤解を受けることなきにしもあらず。多趣味の人にして、讀書精研相俟つて克く修養に勉むる風あり。終りに臨み、兄弟六人の健康と併せて三博士の益々活躍あらん事を祈る。愛媛縣新居郡金子村新揚地に住む。

◇

中島塋　△横濱市立十全病院に眼科醫長として中島塋博士あり。學系よりすれば、博士は東大系の新進にして、京城帝大にて學位を得たる少壯醫博として迎へられ、久しく助教授として京城帝大醫學部にて研究せる學識と共に鍛え上げたる臨床的手腕とは、其後の經驗と相俟つて益々冴え、其の玲瓏たる診療手術の評判高く、内外の信望極めて厚し。

△博士は東京帝大醫學部出身にして、大正十一年卒業後、四年間同學部眼科教室にて研究、次で日本赤十字社鳥取支部病院に眼科醫長として就任、昭和三年迄在職、昭和三年六月より京城帝國大學助教授として赴任し、同七年九月同大學にて學位を授與せらる、退職後引續き横濱市立十全病院眼科醫長に就任と同時に東京帝大醫學部眼科教室に復歸して今日に到れり。

△學位主論文は「生體染色ニヨル人眼及家兎眼角膜神經ノ實驗的臨床的觀察」にして、參考論文なし。

△博士は島根縣の人、明治二十七年生る、當年四十有二歳也。學究的溫厚の紳士にして、熱心なる臨床家として診療界躍進の途にあり。人と爲り穩健篤實にして志操堅實、淸淡にして功名榮達を求めず、只管診療の爲め努力精進し、亦他事を顧みず、至誠以て勵精恪勤する人也。又た人に對するに應答の禮を重んじ、時務を缺ぐことなし、其の態度の紳士的にして眞摯なるは、好箇の臨床家として將來を大ならしむ所以と見るべき也。東京市大森區田園調布二ノ八四六に住む。

◇

米山高實　△福島縣若松市榮町六四に眼科一般特に眼科全身病科（眼疾患と各科の相對性疾患）を標榜して異彩を放ち、當地方診療界に卓然として頭角を拔きつゝある米山眼科醫院あり。院長は眼科の巨頭米山高實博士にして、博士經營の下に開業既に古く、牢乎たる地盤は年々歳々近鄕に發展して當地方を風靡し、今や遠近よりの外來患者日々輻輳して門前常に市なすの盛況を呈しつゝあるを見る。博士は日本醫學校の出身にて醫術開業試驗より與學奮起して、再度米國に留學し、費府ハーネマン大學、テンプル大學、ボストン大學等に學び、ドクトル、メヂチーネ（ボストン大學）のタイトルを得、一度は更に英、獨、佛の醫況をも視察せり、後ちには東京帝大解剖學教授井上通夫博士指導の下に研究、學位論文を提出して東京帝大より學位を獲得せる篤學の士也。多年蘊蓄せる學殖と共に臨床の經驗に富み、卓越せる技術的手腕は光る學位と共に格段の貫祿を加え、今や名醫博として斯科の大家を以て仰がれ、民衆より多大の信賴と尊敬とを受けつゝあるは成功と云はざるべからず。

△博士は明治四十四年日本醫學校卒業、同年五月醫師開業試驗合格、同年六月醫藉登錄、同年五月より大正三年四月迄小川劍三郎博士に就き一般眼科學の指導を受く、同四年九月迄鄕里に眼科開業、同四年十一月より五年九月迄米國費府ハーネマン醫大にて、スピークマン、及ネーゲル教授に、眼科及眼科病理學の指導を受く、同五年十月より七年六月迄同市テンプル醫大、正科に在藉、眼科はレーベル及フロレンツ教授、神經疾患と眼科相對關係はインガム教授、小兒疾患と眼科はミル教授、內科疾患と眼科はロバートソン教授、皮黴疾患と眼科はシャンベルグ教授、產婦人科疾患と眼科はアツプレゲート教授の指導を受け、課程を了、「プロフエシヨナル、デグリー」を受く、大正八年二月迄同校附屬病院に在勤研學、歸朝に際し「フエローシツプ」を受く（小兒科）、同十二年六月「フエローシツプ」を受く（產婦人科）、大正八年七月パナマ經由歸朝、原藉地に眼科及全身病眼科を專門として開業。同十年四月再度留學、ボストン大學に在藉、同校附屬病院及市立病院にて、耳鼻疾患と眼疾患をコツプ教授に、新陳代謝病及び血液病と眼疾患をバンダイ教授に、組織學をシヤトレフ氏及マツク教授指導の下に研學、同十二年五月同校より「ドクトル、メヂチーネ」のタイトルを受く、同時に同校「フエローシツプ」を受く、同十二年六月渡英、更に獨、佛の醫況を視察、同年十月歸朝、原藉地に於て眼科及全身病眼科を標榜開業、同十三年一月會津盲學校々醫囑託、昭和二年四月福島縣立會津工業學校々醫囑託、同二年三月より九月迄小川劍三郎博士の指導を受く、同二年九月より七年九月迄、東京帝大解剖學教室に於て井上通夫博士指導の下に研究、昭和七年十一月東京帝大より學位を受く、爾後鄕里に於て眼科及全身病眼科を標榜開業今日に至る。

△學位主論文は「胎生各期ノ視器及其附屬器ニ於ケル糖原質ノ發現並ニ其變移過程ノ組織學的研究」にして、參考論文として「組織內糖原質研索ニ必要ナル固定液及包埋法ニ就テ　附、余ノ創案セル固定液及包埋法」あり、其他論著夥多。

△感想の二三を吐露して曰く　(1)學界及學府への希望……一、臨床家にして經驗少きものに與ふる學位は狂者に劍を與ふるに等しく人道上大に考慮を要す可きものにして少くとも五ケ年以上臨床に實驗あるものに授與する內規に改め

たき希望、二、學問に國境なく學閥なしと云ふ事實を、より以上に實現せられたき希望、(2)研究者への希望……一、研究者が學位を目的として研究するでなく、研究事態を精神修養に置き學位は其の道程に於て得可き一枝葉である心持ちで研究せられたき希望（之れ國手たる所以の修養なり）、二、崇高なる可き學位の所有者は、學位を直ちに生活と結合せしめたり、或は學位を享樂の具とせざる樣、各人自重して日々の性行、言々に留意し事に當て私心を去る樣日々の修養をなし學位の權威を冒瀆せざる樣希望、(3)醫師會への希望……教育勅語に合致したる醫師會の設立を希望し、眞に國手の名に辱ぢざる團體たらしめたき希望。

△博士の書簡の一節に又曰く「開業醫をして正しき醫術を行はしむる樣御助力願度きものに候、頃來は注射最流行にて一も二も三も注射全盛の時代、限られたる一劑主義にては中々御承知なきものか二劑三劑夫れに注射先づ患者の負擔を考ふる時は中々容易のものに有之まじくと愚考候。正しき處には衣食住は必ず附隨すると云ふ原則があるのに、何故環に輪をかけた收入を醫師（開業醫）は欲するか、頃來の開業醫界は道義全く地を拂ふて米國の物資文明を其の儘中毒し此處迄來れば之れ以上無之かと存ぜられ候。然らぬだに有熱患者を見れば腎盂炎、其の症の何たるを問はず、腹痛患者を診れば、盲腸炎夫れ手術、眼がかすめば夫れ網膜炎曰く注射、曰く內服、曰く何々甚しきに至りては肋膜炎に水のたまらぬ注射と稱して健康體（輕度の神經衰弱者）に靜注、何處の何人が始めたる事にて候か知らずして爲すなれば修業せず、知りて爲せば之れ國家の大罪人、如何にせば此の濁流は止め得ようかと寒心の極に御座候。醫院と云ふ名義にかくれたる旅館兼下宿屋と異ならざる入院樣式、醫師も之れ迄低下したかと思ふと罪は社會か自己か、或は醫育制度の缺陷か何としても心外千萬に御座候、殊に學位の所有者に比較的多きとの事世評に上り候事は更に遺憾至極に御座候、御地は如何にて候や都鄙共に同じきにて候はずや、不平を並べても追つく話には無之候も餘り見せつけられる現代の恨事故、一筆走るがまゝを」云々。

△博士は現住地たる福島縣若松市の人、米山平次右衞門の二男、明治二十年生る、學究的年壯の紳士也。立志傳的氏の篤學は既に氏の前半生史よくこれを語りて餘蘊なし。賦性純純情潔白にして不淨の財は一厘も欲せず、權門に拘泥し解決に私情を挾む事を嫌ひ、外國文物を崇拜しすぎる事が大嫌ひなり、從つて往々誤解を招くこと少しとせず、成仁取義に精進しつゝある事が之れ國手の尊稱を辱しめざるにありとして日々修養に務むる風あり、一面又人情味たつぷりにして情に脆ろすぎる方なり、以て其の爲人を窺はれ高潔なる人格を知るに足る。趣味としては刀劍を愛し狩獵を好む。刀劍を愛するは骨董としてでなく、國の誇として愛し建國の精神を保存するにあり、又狩獵は運動とし、研究材料の蒐集とし、又山頂に立ち自然と接觸して何等かの教材を得、又一瞳之れ我が有なりの氣分に滿悅する事を得を無上の快樂となせり、畢竟健康なる精神は健康なる體を造るといふに歸するならん。博士の年齒今や知命とす、健康にして元氣益々旺盛、希望ある前途猶頗る春秋に富むの秋、切に加餐自重を祈るや切也。

◇

佐竹秀一

△京城醫專眼科學教授にして、獨り學園の最高幹部の一人たるのみならず、朝鮮醫學界の重鎭として最も囑望せられつゝある佐竹秀一博士は、石川縣石川郡松任町の人、明治十九年生にして、明治四十二年金澤醫專を卒へ、四十三年四月石川縣立金澤病院醫員に命ぜらる、四十五年一月母校眼科學副手囑託、大正二年七月任朝鮮總督府醫院醫員、五年四月兼任京城醫專助教授、九年一月兼任同校教授、同年十二月任朝鮮總督府醫院醫官、兼官如故、十一年七月より十二年二月迄、京都帝大醫學部解剖學教室にて研究、十五年十二月學位受領、昭和二年歐米へ出張を命ぜらる、目下現職に在り。

△學位主論文は「眼窠ニ就テノ研究」にして原著は獨逸文なり、參考論文なし、其他論著夥多。博士の年齡今や知命に達し、學識、手腕、人格共に圓熟の域に入り、純潔なる學者肌の仁也。猶春秋に富む、切に自重加餐を祈る。京城

府大和町二丁目六號官舍に住む。

◇

今居三郎　△福岡縣若松市立若松病院副院長としての今居三郎博士を茲に紹介す。學系は大阪醫大出身の眼科學者にして、現大阪帝大教授中村文平博士に就きて斯學の蘊奥を究め、大阪帝大より學位を獲得せる少壯醫博としての一人物也。顧みて博士の今日ある略歴を公開すれば、大正十一年大阪醫大卒業後、同十四年迄同大學眼科助手、同年大分縣立病院眼科部長として就任、昭和五年内地留學として大阪帝大大學院へ入學、眼科研究、同七年十二月大阪帝大にて學位受領、爾來大分縣立病院へ歸任、現在にては前記の現職に在り。

△學位主論文は「角膜浸潤並ニ潰瘍ノ療法ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文には、(1)「ハルチナチオン」ヲ伴フ急性酒精中毒、(2)葡萄糖酸「カルチウム」ノ靜脉内並ニ皮下注射ニ依ル房水蛋白量ノ變化ニ就テ、(3)「フリクテン」ノ統計的觀察、(4)水晶體偶發性前房内脱臼ニ依ル續發性緑内障ニ就テ、(5)「トラホーム」の注射療法等あり。他の論文中、(1)小眼球ノ組織的所見、(2)脱纖維自家血液注入ノ實驗的研究等は主要なるものなり。

△感想に曰く「未だ弱輩未完成の一學徒の分在として聊か廣言に似たれ共、現代の醫學界に對して望む所は、豫防醫學の發達にあり、醫學の進歩は滔々として止る所を知らず、日夜學術に、又治療に無數の赫々たる功績を現はし居れり。然れ共吾人の理想とする所は、尚一歩進みて總ての疾病に對する豫防防禦の方法の完成にあり、斯くなりてこそ醫學は眞に完全なる領域に到達したるものなりと言ふを得ん。切に豫防醫學の發達を希ふものなり」云々。

△博士は大阪市西區土佐堀通一ノ七今居眞吉三男にして、明治三十年生る。年齒未だ三十有九歳にして、少壯の意氣に燃え、研究心に富む、殊に負けず嫌ひの性格の持主にして、研究に對する態度の眞劍なると、徹底的に成し遂げずんば止まぬ勇氣と努力とは博士の長所と見るべし。又一面には患者をして信頼と尊敬との念を起さしむる迄親切と誠實とを以てす、自ら其の高邁なる人格を欽慕せらるゝの德を有す。研究以外の趣味としては武術を好む風あり。博士中の親戚には各科に多數あり、例へば京大教授文博鈴木虎雄、同教授農博逸見武雄等の如し、以下略。福岡縣若松市大畠一八五に住む。

◇

朝岡唯夫　△釧路市立釧路病院に眼科部長として朝岡唯夫博士あり。千葉醫大派の新進にして、眼科界の名博醫として名聲を馳せ、博士獨特の新手腕と相俟つて内外の信望を博し、民衆より多大の信頼と尊敬とを受けつゝあるを見る。而かも年齒未だ少壯にして精研に余念なく、潑剌たる前途は大に興味を以て期待せらる。

△博士は靜岡縣立靜岡中學校、二高を經て、大正十二年千葉醫大入學、昭和三年三月同大學卒業、同七年五月現職に赴任今日に至る。斯間、眼科界の權威千葉醫大教授伊東彌惠治博士に就て眼科學を專攻し、昭和七年十二月母校より學位を受領す。

△學位主論文は『「イオントフオレーゼ」ノ實驗的研究』にして、參考論文は、(1)非外傷性眼窩骨膜下出血ノ一稀例、(2)頭蓋X線寫眞ニ變狀ヲ示ス高度ノ網膜變性症等なり。本邦に於て未だ「イオントフオレーゼ」の實驗的研究の報告なし、右「イオントフオレーゼ」は將來臨床上價値ありと認められ學界に定評あり。

△感想に曰く『現今經濟界の不況により一般生活樣式に種々苦しき點多きは實に憂慮す可き事なり。殊に生等眼科方面に於ける患者は下層社會に屬する方多き故に此の苦しき生活層にある人々の病苦を除く可く、力一杯頑張る決心なり』云々。同感に堪えず、折角の盡瘁努力を望むや切也。

△靜岡縣富士郡今泉村の人、朝岡匂の二男にして、明治三十六年生る。學究的少壯の紳士にして、年齒未だ三十有三歳也。學究生活を臭立ちて日尚淺く、今は漸く分別盛にて眼科治療界へ躍進の道程に在り、將來有爲の資に富む少壯

醫博の前途や洋々たり。性來正直にして物事を苦にしすぎる嫌あり、淸廉潔白にして巧言令辭を好まず、人に對しては眞摯にして誠實を以てす、又克く謙遜自抑して誇らず、淡々として己を虛うする奥床しき態度は其の爲人を窺知するに足る。研究以外の趣味としてはスポーツ殊に漕艇を好む。釧路市宮本町九に住む。

◇

槇　淸太郎　△久留米市眼科醫の立役者槇淸太郎博士は、東京醫專濟生學舍出身の逸材なり。早くより眼科醫を以て天職と任じ、多年の經驗功を奏して今や押しも押されぬ斯科界の耆宿と仰がれ、眼科槇病院（久留米市兩替町五三）を經營して牢固たる地盤に日增繁榮を極めつゝあり。

△曾て東京帝大選科に遊び、東大名譽教授河本重次郎博士に指導を受け、又九州帝大專攻生として庄司義治博士の門に學び、眼科學一般を專攻して斯學の蘊奥を究はめ、該博なる學理と臨床術を修得し堂々一派を創成す。斯間學位主論文「網膜ノ紫外線ニ依ル變化知見補遺」及び參考論文「脊椎動物眼ノ形態學的知見補遺」を大成し、九州帝大に提出して昭和八年二月學位を獲得せり。又發表論著中「紫外線ニ依ル網膜神經上皮層ノ理化學的變化」は博士會心の論文と聞く。更に博士をして云はしむれば最も得意とする科目は『眼科特に網膜編なり』と。

△博士は、佐賀縣三養基郡中原村字綾部宮崎藤吉の次男にして、明治十三年生る。剛健質實の標本たるべき人格者にして、規則正しき生活に時間を嚴守し、忍耐力の頑强なる長點人後に落ちず、この長所を押し通し以て克く今日の榮冠を獲得したるならん。更に洒落を以て博士が横顏を評せば、眼病一掃のお念佛に勸行して博士自身の視覺は精確視神經銳敏たり、而して之を克く活用し他人の感情を喜樂に善導す、即ち溫情豊かにして社會の表裏を辨へ、他人を懷柔する德を有す。讀書家にして精研修養克く勉め、又柔道に通じ風流を樂しむ。年齒未だ知命有半、春秋猶豊富なれば自重自愛、九州眼科醫療界の爲盡瘁あらんことを切望す。

山本　脩一郎　△大阪帝大派の一新勢力たる山本脩一郎博士は、福岡縣八幡市通町十八丁目に山本眼科を經營して獨立の陣を張り、眼科專門としての內部設備を遺憾なく整へ、博士自ら診療に勵精して日々繁忙を極め、牢固たる地盤を獲得して超然たる位地を占む。博士は醫師としての人格尊重論者の一人にして、常に德操の堅持を心掛け、博士自ら品格の陶冶に務むる高潔の士也。宜なる哉、博士獨特の手腕の好評と相俟つて、民衆より多大の信賴と尊敬とを以て迎へられ、門前常に市なす盛況を見るも、亦以て博士の人格の反映する所大なりと云ふべし。

△博士は大阪醫大の出身にして、大正十五年卒業と同時に同大學副手として眼科教室勤務、昭和三年任同大學助手、同四年日赤長野支部諏訪病院眼科醫長赴任、同六年大阪帝大教授中村文平博士に就て眼科學を專攻せり。

△學位主論文は「小學校兒童ノ教育ニ必要ナル視力ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)色神ト空間神トノ關係ニ就テ、(2)視力障碍ニヨル深徑覺知力ノ變化ニ關スル實驗的研究、(3)弱視學校及之ニ入學スベキ者ノ視力ニ就テ(4)暗黑療法ガ効果ヲ奏セル脚氣弱視ニ就テ、(5)轉移性化膿性外眼筋炎ノ一例、(6)種々ナル眼疾患ニ於ケルビルケー氏反應ニ就テ、(7)膿漏眼ノ統計的觀察、(8)後頭葉出血ニ因スル同名性半盲症ノ二例、(9)二個（?）ノ鐵片ニヨル穿孔性眼外傷、(10)脊髓痨性視神經萎縮症ニスウイフト、エリス氏法施行中進行性麻痺ヲ起シタ症例、(11)眼瞼氣腫ノ一例等なり。其他論著夥多。

△感想に曰く「醫師の威信昔日の觀なし、之れ一般社會人心惡化によると雖も、醫師自らにも大いに其責めあり、さればこそ醫師たる者は醫學の蘊奥を極むる事勿論必要なれども、之と同時に人格修養に意を注ぎ世の信用を恢復すべきなり」云々、至極同感也。博士は現住地たる八幡市の人、山本謙三郎の次男にして、明治三十二年生る、學究的溫厚の紳士にして、當年未だ三十有七歳也。臨床家として獨立以來、開業日尙淺きも、「醫は仁術也」をモットーとして誠

意誠實を盡し、不斷の勵精努力と、氏が篤き德望とは、兩々相俟つて漸次堅實なる發展を遂げ、將來の大成を期待せらる。賦性穩健篤實、愼重にして誇張的の事を好まず、融和性に富みて人と爭はず、謙遜にして自己の識學を衒はず、名利に恬澹として自己の職務に熱心是れ勉め、己を虛うして人を愛し同情を以てす、好箇の臨床家として學德兼備せる人格者たるを尊ぶ。學究以外には謠曲を趣味し、釣を好む、又克く讀書して精研修養相俟つて勉むるの風あり。宮入慶之助醫博とは近親の間柄と聽く。

◇

森　十　司　△姫路市綿町四一に森眼科病院あり、院長森十司博士は岡山醫專出身の眼科學者にして、開業の傍ら研鑽多年、恩師中院孝圓博士に就きて眼科病理を研究し、論文を岡山醫大に提出して學位を獲得せる名醫博なるが、殊に高齡五十八歲を以て榮譽ある博士號を得たる篤學は學界稀有の美談として表彰に値す。その尨大なる學位論文は既に學界に定評あれば贅せずもがな、如何にその百折不撓の精神力と大努力とに依りて完成せる、精研の該博なるかを物語るに足る。開業拮据茲に三十年を閱し、蘊蓄せる學殖と共に臨床に多年の經驗を有し、今や獨特の手腕は益々其の妙技を發揮して餘す所なく、古き歷史と共に牢乎拔くべからざる地盤を有し、悠々裡に超然として診療界の王座を占む。

△更に顧みて其の學歷より博士の略歷を概括すれば、博士は縣立兵庫中學校を經て、明治三十一年岡山醫專を卒へ、直に同校教授井上通泰博士に師事し研鑽四年、更に京都府立醫大眼科教室に遊び故淺山郁次郎博士の知遇を得、居ること年餘、家庭の事情は氏をして早く開業するの餘儀なきに至らしめしも、爾來平凡なる一市井醫として終るを遺憾とし、興學心に燃ゆる氏は開業の傍ら日夜倦むことを知らず、病理學の泰斗中院孝圓博士の指導を受け、專ら眼科病理學の研究に沒頭し、遂に克く『種々ナル脊椎動物眼球ニ於ケル脂肪及ビ類脂肪殊ニ「コレステリンエステル」ノ發現ニ就テ個體發生學的竝ニ種屬發生學的研究』と題する學位論文を完成して、岡山醫大に提出せる結果、昭和九年四月學位を受領せり。

△博士は兵庫縣赤穗郡赤穗町上假屋町森纖磨の次男にして、明治十年生る。學究的溫厚の老紳士にして篤學者たり、其の今日ある閱歷は博士の前半生史に盡きて光彩陸離たるものあり、殊に幾星霜かの間、開業の傍ら研究に志して日夜倦むことを知らず、懸命の努力精研を續けて克く學位論文を完成し、終に榮譽ある學位を贏ち得たるは特筆に値し、其の興學的精神と不撓不屈の努力とは頂門の一針として學べき也。今や齡耳順に近きも、元氣甚だ旺盛にして學識、手腕、人格共に老熟の域に達して格段の貫祿を備え、大衆より多大の信賴と尊敬とを受けつゝあるは全く立志傳的典型とすべきに足る。趣味としては書道並に圍碁等なり。夫人素子との間に三男三女あり、長男義隆は東大醫學部を終へて現に靑山外科に副手たり、次男尙文は陸軍二等主計として天津に活躍し、三男尙武は幼より山本氏を冐し現に京都大學眼科教室にありて研鑽中なり。

◇

森島錄雄　△横須賀海軍病院教官兼部員（眼科長）たる海軍々醫少佐森島錄雄博士は、愛知醫專及び海軍々醫學校出身の眼科學者にして、恩師海軍々醫學校教官船川左三大佐及び同田川資造大佐に就て眼科學を專攻し、學位論文を提出して名古屋醫大より學位を獲得せる斯科界近來の少壯醫博也。未だ少壯にして研究心に燃え、至誠奉公の念に厚く、一意專心、其の職務に勵精努力すると共に、精研に餘念なき前途は、博士の將來を語るに餘裕綽々たるものあり。

△博士は大正九年愛知醫學專門學校卒業、海軍々醫學校普通科、高等科、專科終了、攝津、千歲乘組、吳病院、木曾乘組、吳病院を經て、第十二驅逐隊、第一驅逐隊軍醫長、横須賀病院部員兼副官、神通、知床、川內、長良、第十一

驅逐隊各軍醫長、摩耶艦裝員、榛名軍醫長歷任、佐世保海軍病院眼科長を經て現在に至る、斯間昭和九年七月名古屋醫大にて學位を受領す。

△學位主論文は「海上視力並ニ暗所調應ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は「義眼整形ノ一例」なり。氏は愛知縣海部郡八開村大字赤目の人、森島錠三郎の五男にして、明治三十年生る。年齒未だ三十有九歲、少壯の意氣旺盛にして、志操堅實、物事に熱心にして誠實を以てす、謙遜克く自抑して人に厚く、又能く後進を愛撫す。研究以外格別趣味を有せず、唯だ克く讀書して精研修養相勉む。將來有爲の資に富む少壯醫博、幸ひ健康にして、爲國家益々奮盡活躍あらん事を望む。

◇

籾木穗積　△東京市蒲田區御園町一四一に內外結構兼備の籾木眼科院あり。院長籾木穗積博士の經營にして昭和三年新築落成、病室設備あり。過去十年有餘の間に牢乎たる地盤を築き上げ、而も日增隆盛の土地柄から見ても更にその前途多幸に溢るゝものあり。博士の診療と治療の好評は申す迄もなく、學系を辿れば慈惠醫專の出身、斯界の重鎭村上俊泰博士の愛弟子にて、慈惠醫大より學位を獲得せる名醫博として其の手腕を稱せらる。

△博士は東京高師附屬中學を經て、大正七年三月東京慈惠會醫院醫學專門學校を卒業、先づ軍人醫界に打つて出で、同年六月任陸軍見習醫官、同年十二月任陸軍三等軍醫、補步兵第一聯隊附、同十年より二年間陸軍々醫學校に學び、同十三年依願休職、爾後蒲田を本據として一般診療に從事今日に至る。斯間陸軍々醫學校教官石原忍、草間要、石津寛、今西武夫各博士に眼科學を、東京慈惠會醫大教授木村哲二博士に病理學、村上俊泰博士に眼科學の指導を受け論文を作成、昭和九年八月學位を受領せり。

△學位主論文は、(1)脂肪物質飼養「ラツテ」ノ眼變狀ニ關スル研究（第一報告）、種々ナル脂肪物質ニテ飼養セラレタル「ラツテ」ノ眼組織學的檢査、(2)脂肪物質飼養「ラツテ」ノ眼變狀ニ關スル研究（第二報告）、脂肪食餌及ビ「ビタミン」A缺乏食餌飼養「ラツテ」ノ眼病理組織學的檢査の二篇より成る。參考論文は、(1)正常「ラツテ」眼ノ組織學的研究（第一報告）、成熟「ラツテ」眼ニ就テ、(2)正常「ラツテ」眼ノ組織學的研究（第二報告）、生後眼發育ノ階梯的檢査、等なり。其他の論著は眼科專門雜誌に多く發表あり。

△博士の本籍は東京市蒲田區御園町二三五に在り、籾木鄕太郎の長男にして、明治二十八年生れの當年四十有一歲也。漸く年壯の域に入り手腕圓熟す。人爲や寡默重厚にして社交界を意に介せず、診療の業餘默々として研究に餘念なきが如し。居常唯一の趣味を聞けば「讀書」にありと云ふ。所謂、學究的好箇の臨床家として、博士の向後の活躍は興味を以て將來のヨリ大成を期待すべき乎。

◇

片山雄　△中國の中樞廣島を中心とせる醫療界方面より見直す時、縣下三原町字東町に片山眼科病院あるを看過すべからず。院長は眼科界の老大家片山雄博士にして、開業既に古く、基礎堅實にして當地方を風靡すとの風聞あり、蓋し學究的臨床家としての成功家と見るべき乎。顧みて學歷より討檢すれば、博士は明治三十七年岡山醫專の出身なるも、學系より見れば寧ろ九大派と謂ふべき乎。卽ち大正四年より同九年迄九州帝大醫科大學眼科教室に入り專ら臨床眼科を究め、又九大眼科を代表する斯界の泰斗大西克知博士の指導に研學造詣する所あり。學位は昭和九年八月大阪帝大より獲得せる篤學の士にして、名醫博たる一人物也。

△學位主論文は「赤色光線ノ視器（特ニ網膜視神經）ニ及ボス影響ニ就キテノ實驗的研究」にして、參考論文は、(1)遮蔽光線ノ視器ニ及ボス變化ニ就テノ實驗的研究、(2)外傷ニ因スル視神經變化ノ實驗的研究、(3)「ヴイタミン」破壞食飼養ニヨル視器ノ變化ニ就テノ實驗的研究、(4)盲點ニ就テ、(5)結膜澱粉樣變性症ノ二例、(6)外傷性視神經消耗症ニ就テ

(7)輩膜破裂症ノ二例、(8)稀有ナル眼瞼瘻接症ノ一例、(9)流行性腦脊髓膜炎ニ於ケル轉移性眼炎ノ一例、(10)眼瞼上皮腫ノ三例、(11)「ヴイタミン」A缺乏症ノ視器特ニ網膜視神經ニ及ボス影響ニ就テノ實驗的研究、(12)「ヴイタミン」B缺乏症（白米病）ノ視器（特ニ視神經）ニ及ボス影響ニ就テ等なり。

△博士は岡山縣吉備郡阿曾村東阿曾片山林中の二男、明治十五年生にして、壯齡今や五十四歳也。眼科醫として起ちて以來研學の念を捨てず、開業の傍ら努力研鑽、終に克く學位を獲得せる篤學者としての閲歴は、氏の仁術に一段の異彩を放ち、氏が前半生史をして光彩陸離たらしめたり。鯉峯は其號也。醫療と研究とに趣味を集中して又他に何等の道樂を來めざるが如し。

◇

富井清

△京都市右京區西院大路四條下ルに本院、同市島原丹波口驛前通大宮西入には分院と、京都眼科醫療界に新裝せる二ケの診療所を設けて、群雄割據の間に躍進して漸次地盤を固めつゝ、遠近の衆望獲得に努めつゝあるは富井清博士也。博士は大正十四年金澤醫大出身の眼科學專攻の學究的新人物にして、目下研究續行中開業に精進し、開業日猶淺少なるも、博士の熱意と濕情の溢れる診療振は患者に多大の信望を博して、既に堂々一派を爲すの觀を呈す。

△博士は大正十四年金澤醫大專門部を卒え、直ちに大阪市新町緒方病院眼科に奉職、緒方收二郎氏に師事し、一年有余にして、師の援助を以て、大正十五年末京都府立醫大眼科教室に入り、藤原謙造教授の下に四箇年余臨床方面の指導を受け、昭和五年四月同大學眼科研究室に入り、同教授指導の下に、昭和九年十二月迄研究を續く、學位主論文、「夜盲ニ關スル二、三ノ實驗病理組織學的研究」及び參考論文、(1)眼球結膜ノ再生時ニ於ケル角膜輪部色素ノ態度ニ就テノ實驗的研究、(2)水晶體上皮細胞ノ再生ニ就テ等十篇、を完成、京都府立醫大に提出して昭和九年十二月學位を授與せらる。尤大且つ周到微細に亘る右論文は俗に云ふ「トリメ」に對する臨床學的一大論著と察せらるべく、その業績は敢えて茲に贅せずとも知る可きなり。又「夜盲ニ關スル研究（眼病理學）」は博士主要論著中の名論文として夙に定評あり。目下助手と共に自己經營の診療所に於て眼科一般の診療に從事しつゝあり。

△近時兎角の風評ある醫療界に就いて博士は曰く「近代醫學は各分科的に著しい發達を遂げたが、其一面には各自の分科に偏し過ぎてやゝもすれば綜合的醫術を閑却せんとするかの嫌があある。殊に我々の專攻する眼科には最も此感の深いものがある。眼科のみにかたよらない眼科專門醫たる樣努力すべきである事を信ずる」云々と。即ち博士感想の一片として吐露する所は患者が等しく醫者に對する「綜合的醫術を等閑視せずして而も專門的治療を」と依頼する希望を容るるの感ありて民衆の胸に好感を與ふ。

△博士は本籍地たる三重縣名賀郡瀧川村字柏原に、明治三十六年生れ、年齒未だ三十有三歳の少壯醫博なり。人爲や、實直と熱誠の權現なるが如き風格の士にして、社交場裡には敢えて出入せずも時には偏人との誤解を受く。然れども一度び博士の眞面目なる診療を受ける患者は、皆一樣にその濕情あり親切なる治療に多大の信頼の念を寄せ、博士の德に靡き浴すと聞くは景仰すべきならずや。居常地味好みな博士は、尺八の職格師範の免狀所有者にして舜山と號し、既に玄人を凌駕す、即ち暇を得て診療室を離るれば唯一の趣味、德操修養の爲め端座吹奏して風流に樂しむと謂ふ。

◇

三口龍生

△市立松本病院眼科醫長三口龍生博士は、名古屋醫大小口忠太博士の學流を汲む眼科學界少壯の名醫博也。即ち中京代表名古屋醫大の眼科學教室に、五ケ年間の精研を重ね斯學を究めて功成り、昭和九年松本市立病院に聘せられてより漸く診療界に進出し、眼科明日の名醫を待期し得る學究的溫厚の紳士として至囑す。

△博士は昭和四年愛知醫科大學卒業後、直ちに眼科教室に入り勤務の傍ら眼科學を更に專攻し、同九年五月迄恩師小

口忠太教授に指導を受け、同十年一月母校名古屋醫大より學位を受領す。學位主論文は「前房内ヨリノ吸收路ニ就テ」にして、外に參考論文、(1)睫毛ノ異常長發育ニ就テ、(2)絲内障患者ノ血液型研究の二篇あり。

△名古屋市東區手代町二ノ二二の人松本松三郎の長男にして、明治三十七年生る。年齒未だ三十有二の少壯、鋭氣潑剌として進取の氣象に燃ゆ。學理の博識は多年研學の蘊蓄の表象にして、同僚間にその一異彩を謳はる。臨床治療界には躍進以來未だ尚日淺きも、博士の熱ある精進振りは、必ず近き將來あるものを語りて余す所なからん。仄聞するに「眼科界不振」なりと。斯界に新進有爲の人物を待望するの秋、翼くば博士の自重加餐を切に祈る。現住所松本市鷹匠町一五三二。

◇

和田彦作　△濱松市元城町四八に於て眼科專門を以て頭角を顯はし、成功の位地に在る和田彦作博士は、東京慈專出身の眼科學者として錚々たる者也。明治三十七年卒業後、翌三十八年任陸軍三等軍醫、自同四十二年至四十四年京都帝大附屬醫院眼科教室見學、同四十五年宮城縣公立登米病院眼科主任、大正三年任臺灣總督府醫院醫官、臺中醫院眼科醫長、同八年任同總督府技師、廣東へ出張を被命、廣東博愛會醫院眼科醫長囑託、同十五年京都帝大にて學位受領、昭和二年依願本職を辭し歸朝す、爾來濱松市にて開業今日に至る。氏は靜岡縣濱名郡北庄内村堀江の人、明治十五年生れ、學究的年壯の紳士にして、當年知命に入る四歳也。賦性溫厚篤實、好箇の臨床家として敬意を表す。

△主論文は「涙液ノ比重並理化學的集成分」にして五篇より成る。參考論文、(1)涙液ノ濁性度ト疾病的關係、(2)廣東市「トラホーム」流行關係ニ立脚シテ其傳染徑路ヲ論シ之レガ豫防撲滅策ニ及ブ、(3)支那廣東市内ニ於ケル飲料水調査報告、(4)突出魚眼ノ組織供覽、(5)眼瞼皮膚ノ部位神並ニ病的關係、(6)珍ラシキ角膜水泡形成ノ一例、等なり。其他論著夥多。

◇

高澤豐　△福井縣三國町公立三國病院眼科醫長たる高澤豐博士は、金澤醫大（專門部出身）派の新人にして、眼科學殊に網膜の組織化學を最も得意とする專門家として新進の躍進振を示し居れり。學歴よりすれば大正十四年金澤醫大附屬醫學專門部卒業、昭和二年福井縣敦賀病院眼科醫長、同七年金澤醫大眼科學專攻生、同十年七月金澤醫大にて學位受領、爾來頭書の現職に在り。斯間指導教授は主として母校の恩師中島實教授にして、其他杉山繁輝教授、黑田三樹三教授、故山田邦彦教授等なり。氏が會心の主論文たる「網膜ノ組織化學（特ニウンナ氏酸素部位及還元部位）ニ就テ」は、氏が獨特の研究として同僚間に持て囃され、其の學問的價値は既に學界に定評あり。

△學位主論文は即ち「網膜ノ組織化學ニ就テ」にして、外に參考論文として、(1)角膜軟化症ニ就テ、(2)外眼筋ト眼内壓トノ關係ニ就テ、(3)網膜ニ於ケル杉山氏周核顆粒ニ就テ　等三篇の外數種あり。「醫療制度のよりよき合理化」と「臨床醫學の研究奬勵」とは、氏が懷抱する感想の一片なり。

△出身地は金澤市東馬場町にして、明治三十六年高澤豐作の三男に生れ、故岡島敬治博士の令弟たり。生來眞面目にして誇張的の事を好まず、謙遜にして自己の識學を衒はず、唯だ誠實と親切とを盡して仁術の最善を期せんとする熱誠の士也。動もすれば優柔不斷に見ゆる所は博士の長所でもあり、或は短所ともなる場合あらん。多趣味の人にして謠曲、碁、將棋、麻雀、テニス、映畫、尺八、油繪等を好み、忙中自ら閑日月あり。年齒未だ三十有五にして少壯の意氣に燃え、潑剌たる前途は向後の修養活躍と相俟つて、博士の將來を語るに餘裕綽々たるものあり、自重加餐を祈るや切也。福井縣三國町今新七一に住む。

◇

岸田英一　△競爭激烈なる帝都診療界に割據して、自己の專門と、誠實親切とをモットーとして、淀橋區下

落合二丁目六百四十四番地に近く開業せる岸田眼科あり、院長岸田英一博士の經營する私立眼科醫院にして、新裝せる内部の設備を整へ、博士自ら診療に精進して日夜倦むことを知らず、其の態度の熱心にして眞摯なると、經驗に富む診療手術の適確にして懇切なるとは、開業日尚淺きに拘はらず、近時著しく人氣を吸收して益々發展の道程にあり。

△更に其の學歴及び閲歴を反覆して氏の年歴を概説すれば、博士は東京府立一中、一高を經て、大正十四年三月東北帝大醫學部を卒へ、同年四月東北帝大醫學部副手、附屬醫院勤務（眼科學教室）、同年十二月依願副手解嘱と同時に青森縣八戸市八戸病院眼科部長として就職、同十五年十二月同病院を辭し東京日本大學病院眼科教室勤務、昭和二年四月同教室を辭し石卷日赤宮城支部病院眼科醫長として就職、同七年八月同病院を辭し東北帝大醫學部副手嘱託となり同學部生理學教室勤務、同十年八月同教室勤務を免じ同醫學部眼科學教室勤務を被命、同年十月副手嘱託を解き東北帝大醫學部講師を嘱託せられ眼科學教室勤務を被命、同年同月東北帝國大學に於て學位を授與せられ、同十一年一月依願講師嘱託を解かる、同年四月現住地に於て眼科醫院を開業す。

△學位主論文は「色光ニ對スル兩眼感受性ト一眼感受性トノ暗順應ニ於ケル經過ノ比較」にして、外に副論文として「露光時間一定ナル色光ニ對スル兩眼感受性ト一眼感受性トノ比較」の一篇あり。

△本籍地は東京市神田區錦町三丁目四番地にして、明治三十年生れ、岸田清兵衛の長男也。學究的溫厚の紳士にして年齒漸く不惑有一、學識、手腕、人格共に圓熟の域に入り、今は意氣益々壯んにして活動の全盛時に在り。賦性穩健着實、事に當るや眞劍にして誇張的の事を好まず、熱心に唯だ誠實を以て親切を盡すところに博士の長所が窺はる。學究以外の趣味としては音樂を愛好す。

◇

後藤　要太郎

△大分市西上市町に歴史あり有名なる後藤眼科病院あり、院長後藤要太郎博士の經營にして、診察室、手術室、應接室、藥局、入院ベット十五、其他内部の設備整ひ、博士獨特の手腕は、多年の聲望と相俟つて、好評嘖々の裡に牢乎たる地盤を獲得し、歳と共に繁榮いや增し、今は超然として一流の位地を占む。氏は醫術開業試驗出身の篤學者にして、現東京帝大名譽教授河本重次郎博士指導の下に研究の後、開業の傍ら多年臨床方面の實地經驗に勉め、次で一時廢業して學究生活に入り、熊本醫大教授鹿兒島茂博士に師事して研究の結果、熊本醫大より學位を受領せる臨床醫博として氣勢を昂げ、氏が仁術に一段の光彩を放てり。

△學歴及び閲歴を概括して見れば、明治四十五年日本醫學校卒業、大正二年六月醫師開業試驗合格、同年七月醫籍登錄、大正二年十一月より同六年一月まで東京帝大教授河本重次郎博士に就き指導を受く、大正六年二月より昭和七年三月まで大分縣佐伯町にて眼科開業、昭和七年六月熊本醫科大學選科入學、鹿兒島茂教授指導の下に眼科學專攻、同十年十二月學位受領、爾來現住所に於て再び開業今日に至る。

△學位主論文は「生體染色ニヨル角膜神經ノ溫度ニ對スル研究」一篇にして、七冊（細隙燈顯微鏡檢査）より成る。參考論文は「虹彩切除ト眼壓トノ關係ニ就テノ實驗的研究」の外十二篇あり。就中「角膜疾患ニ於ケル細隙燈顯微鏡檢査」は、氏の最も得意とせる力作にして、氏の業績中の主要論文と見るべき也。

◇氏は大分縣南海部郡直見村の出身にして、明治十七年後藤彌三郎の二男に生る。醫師として醫師開業試驗出身よりスタートせる氏が、研鑽多年、不撓の精神と努力とを以て、學位を獲得せる厚志篤學は、立志傳的醫博人物たるの範を示すに足る。眞摯なる臨床家としてのその今日ある成功は言はずもがな、學究的溫厚の紳士として、臨床家に相應しき性格を備へ、篤實圓滿にして、人格高邁也。壯齡今や知命に入る四、元氣旺盛にして多年蘊蓄せる手腕は歳と共に冴へ、今は老熟の佳境に入りて一段の貫祿を加ふ。讀書家にして今猶精研に餘念なく、品性の修養と相俟つて、醫道の本分を盡し以て自己の天職と爲す。福島病院内科部長阿南新二博士とは親戚にして、家族は子供共七人なり。

◇

高畠正夫　△岡山醫大派の新進高畠正夫博士の經營する高畠眼科は、岡山市の中樞、川崎町六三(京橋西詰)旭川畔に地を占め、紫外線、ヂアテルロー等、內部の設備完備し、病室より東山の翠巒を望み、日々輻輳する外來患者と共に病室は常に滿員の盛況を呈す。氏は、岡山一中、六高を經て、昭和五年岡山醫科大學を卒へ、卒業後直ちに母校眼科教室副手として入室、翌六年より八年迄岡山縣町立日生病院眼科勤務、同八年より十一年迄再び岡山醫大眼科教室助手勤務、同十一年六月學位を授與せられ、爾來現住地にて開業す。專門は眼科にして、特に眼壓學を最も得意とす。斯間恩師畑文平、生沼曹六兩博士の指導に負ふ所多し。今や多年の蘊蓄を傾倒して、博士獨特の手腕を發揮するに自由の獨立舞臺に在り、潑剌たる向後の活躍と相俟つて、前途の大成を期待せらる。

△學位主論文は『「ヒスタミン」ノ眼ニ及ボス影響ニ關スル實驗的研究』にして三篇より成る。參考論文は(1)試作光線「マノメーター」ニ就テ(友保共著)、(2)「コールタール」ニヨル眼障碍ニ就テ、(3)フリードライヒ氏病ノ眼症狀ニ就テ、(4)反覆性水晶體脫臼治驗例、(5)視標ノ色ト近點トノ關係ニ就テの五篇あり。高畠友保式光線「マノメーター」は最も精密なる眼壓計測裝置にして困難なる眼壓計測實驗を容易なるものとなしたり、之を用ひて線內障原因を論究せり。

△感想に曰く「爾今民間の研究所の多數設立さるゝを期待す。醫業難の聲大なるも生活と戰ひつゝ研究するに意義を感ずるものなり。眞の業績は一生かゝりてコツ〳〵やる所に生るべし」云々。本籍地は岡山市穆三七〇にして、明治三十六年高畠喜惣次の長男に生る。年齒未だ三十有五、少壯の意氣益壯にして、漸く圓熟せる學識、手腕を以て、一意專心、唯だ其の業務に勵しみ、「醫は仁術也」をモツトーとして親切丁寧を盡す。學究方面に對しても日常刀圭多忙の裡に餘念なく、精研修養相俟つて大に將來に須つあらんとするは、氏の理想にして實行を主義とす。趣味としては漕艇、寫眞、碁などを好む。平和なる家庭には妻との間に二人の子供あり。

齒科　口腔外科

小野寅之助　△齒科醫博界現代の權威たる小野寅之助博士は、大阪齒科醫專教授として關西學界に重要せられ其の名聲を聞くや既に久矣。博士は東京齒科醫學校出身の篤學者にして、研鑽多年、主として京大醫學部にて齒槽の病理方面膿漏の全般に亘りて精査研究せる結果、本邦齒科醫學界に於ける第三人目の學位受領者として、京都帝大より學位を獲得せる近來の名醫博也。其の主論文は膿漏治療の根本方針を確定せし代表的近業として有名なるは、既に識者の普く認識する所なるが、他にも論著尠からず。既にして教壇に起ちて以來、二十有餘年一日の如く至誠一貫、孜々として學生の指導に努め、今や同校の中堅として重きを爲すのみならず、浪速齒科醫學界に於ける重鎭として囑目せらるゝも亦偶然なりとせず。

△顧みて其の今日ある博士の略歷を概說すれば、明治三十四年より四十三年まで京都帝大醫學部病理學教室に勤務、主として組織標本の調製に從事す、同四十三年京都時習館にて中學課程修了、大正元年東京齒科醫學校卒業、其間同校の副手、助手を經て、同五年同校助教授となり、同九年同校を辭す、斯間明治四十五年醫術開業齒科學說試驗合格大正元年實地試驗合格、齒科醫師免許證を受く、大正元年より三年間東京獨逸語專修學校にて獨逸語を學ぶ、同三年醫術開業前期試驗に及第し、同五年後期試驗に合格し醫師免許證を受く、同七年より三年間東京國民英學館にて英語を修む、同九年より京都松風工業株式會社陶齒研究部主任となり、主として日本人齒牙の形態調査を擔當し、同十三年退社す、其間大阪齒科醫專の教授を兼ね齒科組織學、胎生學並に病理學を擔任す、同十三年大阪中山口腔衞生研究

所研究部主任となり、翌十四年大阪齒科醫專專任教授となるに及び退所し今日に至る、昭和二年學位を授與せらる。

△學位主論文は「齒槽膿漏ノ病理」にして、參考論文としては、(1)齒槽膿漏ニ對スル石灰性齒牙沈着物ノ原因的意義ニ就テ、(2)發育溝ト齲蝕トノ關係ニ就テ、(3)齒髓疾患ノ病理、(4)髓腔殊ニ根管ノ解剖學的研究法並ニ髓腔ノ內積及ビ形狀ニ變化ヲ及ボス諸原因ニ就テ、(5)齒槽膿漏ニ關スル病理學的知見補遺、(6)齒髓ノ脂肪變性ニ關スル研究補遺、(7)卵巢皮膚樣囊腫中ノ齒牙ニ就テ、(8)炎症齒髓組織中ノ「プラスマ」細胞並ニルツセル氏小體ニ就テの八篇あり。著書は、(1)齒科組織學綱要、(2)齒科病理學綱要等主なるものなり。

△京都市の人、明治二十三年生れなれば當年不惑に入る六歲也。眞面目なる學究的溫厚の紳士にして、其の今日ある篤學は燦として輝き博士の面目を語るに充分なり。而かも齒科醫師にして醫師たる博士の如きは、當世博士界中稀に見る所なるが、其の經歷より見たる博士は、終始齒科醫師として活躍し、殊に近來にては專ら教授として教壇に起ち、其の蘊蓄を傾倒して熱誠克く學生の指導に全力を盡しつゝあり。人と爲り穩健篤行にして、敢て學者として尊大振るなく、謙遜にして禮節を重んじ人に厚ふす。一度び其の謦咳に接せんか、應接慇懃、快活にして座談に富み、淡泊にして嫌味なきところ頗る好感を覺えしむ。其の眞摯にして熱情あり、靄々たる溫味ある態度は紳士的にして、自ら其の人格の高邁なるを敬慕せしむ。今は研究事項の總括と醫育に精進するの傍ら、歷代皇陵を巡拜し反復して三度目に入り、常に靑年學徒を同行誘導す、亦關西に於ける玄米主食奬勵者の先驅として有名なり。齒科醫學界の爲め、幸に健康にして、益々努力盡瘁あらん事を望むや切也。京都市伏見區深草關土口町七に住む。

◇

佐野秀道

△山口市道場門前本通りに在る佐野齒科醫院は、前の日赤山口支部病院齒科醫長たりし、佐野秀道博士の經營する所にして、周到なる內部の設備をとゝなえ、誠實、懇篤をモットーとして日々診療、療治に勵精し繁忙を極めつゝあり。日本齒科醫專出身の異才にして、齒科醫學者としての近來の名醫博也。殊に治術學、技工學は博士の最も得意とする所にして、九州帝大教授問田亮次博士、同小川政修博士に師事して造詣する所深く、學位は九州帝大より獲得して其の手腕を認めらる。研鑽多年の經驗に富み、今や玲瓏たる技倆を有す、嘖々たる評判は既に久しく當地方治療界に喧傳する所にして批判の餘地なし。

△博士は大正八年日本齒科醫專を卒へ、直ちに文部省齒科病院に入り研究、九年日本齒科醫專附屬病院助手、同年東京女子齒科醫專教授、十年朝鮮總督府道立光州慈惠醫院齒科部長、十一年日赤山口支部病院醫員、十二年山口縣產婆看護婦講習所講師、十三年日赤山口支部病院齒科醫長、十四年日本齒科學會評議員、昭和四年四月九州帝大醫學部齒科教室へ留學、六年六月歸院、七年七月學位を得て、九年四月前記の齒科醫長を辭し肩書の地に開業せり。

△主論文は「根管問題特ニ壞疽根管ノ細菌學的檢索並ニ根管消毒ノ實驗的研究」にして、外に參考論文として「水癌治癒後ノ症例及ビソノ處置」外四篇あり。

△博士曰く「健康保險に於ける齒科診療、兒童口腔衞生に於ける學校齒科の設置。是れは個人治療の齒科醫學が社會齒科醫學の領域に進步發達しつゝある現代の趨勢を物語る一現象として斯界の爲めに洵に慶賀すると同時に更に吾人は、齒科醫學の向上發展を徹底せしむるためには齒科軍醫の設置と地方齒科衞生官の必要を力說し切望する次第である」云々とは、博士の感想の一片なるが、現代の齒科界に對する大なる叫びとして氣を吐けるを多とし、傾聽に値すべきを信ず。

△博士は神戶市神戶區北長狹通四ノ三三佐野譽の長男にして、明治十五年生る、當年五十有四歲也。精力主義の人にして元氣益々旺盛、常に若い氣持にて働らき孜々として倦まざる處に、博士の長所あるを窺はる。其の專門に至りては該博なる學識は勿論、多年の經驗と共に手腕老熟の域に達し一段の重望を加ふ。天資溫厚にして眞摯なる性格は、

臨床家としての特徴を具備せる人格者として敬意を表すべき也。文藝趣味の人にしてまた料理の研究に興味を持ち其道に通ず。博士兄弟は三人共醫博なり、博士人物中の美談として世人の羨望する所也。

◇

山田越二　△東京鐵道病院齒科に新進のドクトル山田越二博士あり。日本齒科醫專の出身にして、米國留學より歸朝後、金澤醫大教授岡本規矩男博士に就て解剖學を專攻し、金澤醫大にて學位を獲得せる齒科醫學界近來の少壯醫博也。多年の蘊蓄を傾倒して、今や獨特の手腕を揮ふに自由の立場に在り、博士の得意や想ふべき也。

△大正十四年日本齒科醫專卒業後、北米合衆國に留學し、テキサス齒科大學にてドクトルの稱號を得、昭和二年末歸朝後、翌三年一月より金澤醫大解剖學教室にて研究、昭和六年十月より日本齒科醫專教授たりしが、同七年九月現職に轉じ今日に至る、斯間同七年十一月學位を受領せり。齒科學及び解剖學を專攻し特に齒科を得意とす。

△主論文は「邦人齒牙ノ人種解剖學的研究」にして、參考論文は「齒牙ノ磨滅ト年齡關係」外五篇あり。

△福井市實永上町山田卓介の次男にして、元京大講師山田卓爾博士の弟也、明治三十二年生る。少壯の英氣益々壯にして研究心に富む。讀書家にして、臨床の餘暇精研今猶卷を放たず、又運動を好み、愛犬家として知らる。春秋頗る豐富なれば、潑剌たる前途は猶洋々として遼遠なり。幸ひ健康にして、折角の努力奮鬪を望むや切也。東京市大森區山王二ノ一九一四に住む。

◇

星野行恒　△京都市中京區四條河原町角に新興のホシノフォン研究所あり、所長星野行恒博士の主宰する齒牙傳導に關する研究所也。氏は日本齒科醫專出身の篤學者にして、齒科及び耳鼻咽喉科學を以て立ち、母校の恩師中原市五郎教授、東京帝大教授石原博士に就て齒科學を、京都帝大教授星野貞次郎博士に就て耳鼻咽喉科學を、同眞下俊一博士に就て內科學を研究し、京都帝大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博として其の存在を認められ、最近齒科界に於ける先驅として、齒牙傳導の開拓に着手せる現代的活動家たるの名聲を揚げたり、向後の活躍と相俟つて前途の展開や頗る囑目せらる。

△博士は大正七年日本齒科醫專卒業後、同七年より九年迄東京帝大醫學部齒科學教室にて研究、同九年より十五年迄鄕里にて開業、昭和二年より七年迄京都帝大醫學部耳鼻咽喉科學教室にて研究、同七年六月學位受領、爾來現住所にて開業今日に至る。

△主論文は「齒牙ヨリスル音傳達ノ研究」にして、參考論文は「骨傳導ノ實驗的研究」の外九篇あり。長崎市浪ノ平町星野助太郎の長男にして、明治二十六年生る、當年不惑に入る三歲也。年壯の意氣旺盛にして、熱心なる研究家として知らる。學究生活より巢立ちて日尙淺きも、今や多年蘊蓄せる技術的手腕を以て、孜々營々として齒科治療界の爲め躍進しつゝある前途は益々多事多望也。スポーツを趣味とす。姻戚中には中村强雄醫博(姉の夫)、松井式部醫博(妻の姉の夫)、大阪帝大外科教授岩永博士等あり。爲斯界折角の努力奮鬪を祈る。

◇

沖野節三　△九州齒科醫專教授にして、附屬醫院長たる沖野節三博士は、獨り同校の重鎭たるのみならず、九州齒科醫學界に於ける新勢力たる中堅人物として重要せらる。氏は現日本大學齒科の前身たる東洋齒科醫學校の出身にて、東京高等齒科醫學校々長島峰徹博士及び同校教授長尾優博士に就て研究の後、歐洲に留學してチューリッヒ大學齒科教授ギージー博士及びヘツス博士、ウキーン大學教授エルドハイム博士及びゴツトリーブ博士に就て研鑽大に得る所あり、特に齒科補綴學の造詣深く、歸朝後大阪帝大に論文を提出して學位を獲得せる近來の少壯醫博也。

△學歷より觀れば、大正五年東洋齒科醫學校卒業、同十二年日本大學齒科教授拜命、昭和二年文部省齒科研究所々員

拜命、翌三年より六年迄歐洲留學、米國視察、同八年一月學位受領。

△主論文は「移植セル人類齒牙ノ齒根表面ト白鼠結綿織トノ關係」（獨文）、參考論文、(1)生活齒牙上ノ象牙質齲蝕透明層ノ滲透性ニ關スル實驗的研究（獨文）、(2)生活齒牙象牙質ノ鑛化試驗、(3)象牙質齲蝕透明層中ノ齒細管ノ顯微鏡所見、(4)齲窩內還元銀應用ニ關スル鏡檢的所見、(5)齒髓失活劑トシテノ「パラフオルムアルデヒイド」製劑（ジーナス合劑）ノ作用ニ關スル臨床的及ビ組織學的研究、(6)熱處理ガ齒科用白金加金線ノ機械的性質ニ及ボス影響、(7)齒科鑄造ニ關スル研究、外七篇あり。

△主論文にては齒牙の移植實驗につき病理組織學的に研究し、殊に移植によつて現はるゝ諸種の機轉を伴ふ移植床周圍組織に對する人類齒牙白亞質の生物學的態度を根底深く研究せるものにして、參考論文と幷せて其の學問的價値に就ては既に學界に定評あり。氏は東京市淀橋區下落合町に本籍を有し、沖野岩三郎の長男にして、明治三十年生る。當年漸く三十有九歲也。熱心なる研究家にして、少壯の意氣と共に精研に餘念なく、今は專念醫育指導の爲め不斷の精進を續け、至誠以て大に將來に俟つ所あらんとする學究の士也。賦性純眞にして潔白、溫恭にして能く後進を愛し、又克く學生の提撕に力む。讀書家にして自然科學に多大の興味を有し、運動方面にてはテニスと乘馬とを好み、又釣も趣味の一なりと聽く。姻戚には名古屋三菱航空機械製作所醫局外科部長山口圭造博士あり。福岡市新大工町五〇に住む。

◇

松田義美　△日本齒科醫專教授松田義美博士は、日本齒科醫專出身の齒科學者にして、生化學者たり、又解剖學者たるの造詣を有す、殊に博士の最も得意とするは齒科治療學、齒科麻醉學、齒科解剖學也。嘗て米國に留學するや、フイラデルフイア市ウヰスター解剖學及び生物學研究所生化學部長フレデリツク、エス、ハムメツト博士に就て專ら研究せり。歸朝後學位論文を提呈して、長崎醫大より學位を獲得、斯科界近來の少壯醫博として名聲を博し、現代齒科醫學界に囑目せらるゝ新進教授たるの逸物也。

△學歷より觀たる博士は、神戸市關西中學校を經て、大正十年日本齒科醫專を卒へ、一九二五年六月北米合衆國ペンシルバニア大學齒科卒業、同年ウヰスター研究所入所生化學專攻、ニューヨーク生物博物館人類學教室並にウヰスター研究所にて解剖學研究、一九二七年フオーサイス兒童齒科診療所醫員を辭し、歐洲諸國の齒科學視察の上歸朝、日本大學齒科專門部講師、濱野綜合齒科診療所治療部長を歷て現職に在り、其間昭和八年九月學位受領今日に至る。

△主論文は「下顎骨諸孔ノ研究」にして三篇より成り、參考論文は、(1)白鼠齒牙生長ノ生化學研究、其他十二篇あり著書としては、(1)齒科臨床麻醉學、(2)クロールエチール全身麻醉法、(3)齒牙解剖學、(4)和英羅臨床齒科字彙、(5)英語齒科學等あり。

△博士の感想に曰く「醫は仁で無ければならぬと常に考へてゐます。現在の醫は餘り金本位に心が奪はれてゐる樣に思はれます。仁が無くては眞の治療は出來ない事を確信します」云々。氏が治療方面に對する態度の如何に眞摯なるかを窺はる。氏は神戸市須磨區下細澤町松田卯三郎の次男にして、明治三十二年生る、年齒漸く三十有七歲也。學究的の仁人にして、少壯の意氣壯んなると共に研究心に富む、今や多年の蘊蓄を傾倒して齒科醫育の爲め奮盡努力し、希望ある青年學徒の指導に精進して以て天職と爲すの概あり。音樂趣味の人にして樂語の研究に餘念なきが如し。嗜好としては野菜を好む風あり。生來眞面目にして正直なれば、稍や短氣の方なれど、人に親切にして溫情あり同情に富む。東京市杉並區上荻窪五八六に住む。

◇

中村平藏　△東京高等齒科醫專教授にして齒科醫學界現代の一權威として囑目せらるゝ中村平藏博士は、新

潟醫大派の齒科、口腔外科學者として錚々たる年壯の學者也。博士は大正五年五月新潟醫專卒業後、直ちに同校病理學教室勤務、同六年十二月東京帝大醫科大學齒科學教室勤務、同八年六月任鐵道醫、札幌鐵道病院齒科醫長を被命、同十二年五月依就免官、直ちに新潟醫大研究科入學、同十四年五月卒業、同時に任東京帝大助手醫學部勤務、同年七月千葉醫大講師囑託、同十五年六月東京帝大にて學位受領、次で現職に就任す、斯間歐米に留學して研鑽大に得る所あり。

△學位主論文は「齒牙脂肪ノ形態學的研究」にして、參考論文として、(1)甚ダ迅速ナル發育ヲ營メル胃癌ノ一例、(2)齒髓息肉ノ成生機轉並ニ病理的所見ニ就テ、(3)現「アイヌ」土人ノ生體齒牙研究並ニ「アイヌ」土人營養品ノ調査、(4)生體染色ニ於ケル家兎齒牙ノ實驗的研究、(5)實驗的佝僂病樣變化ヲ生ゼル家兎齒牙並ニ偏食飼養齧齒類動物齒牙ノ變化ニ就テ等あり。其他論著中の主要なるものとしては、(1)生理的及病的狀態並ニ實驗的「コレステリネミー」ニ於ケル齒牙脂肪ノ態度ニ就テ、(2)齒牙生體染色ノ實驗的研究、(3)四年齡的變化ニ基調セル齒牙ノ病理等あり、其他枚擧に遑あらず。

△氏は埼玉縣北足立郡鳩ケ谷町大字鳩ケ谷の出身、明治二十七年生る、年齒漸く不惑に入る二歲、學者肌にして純眞の士也。今は齒科醫育と研究とに趣味を集中して專念學生指導の任に當り、精研修養相俟つて學界の爲め勵精努力を續け以て大に將來に期する所あらんとす、博士の春秋猶豐富なれば、洋々たる前途は更に大に待望せらる、幸に健康にして益々奮盡健闘あらん事を切に望む。埼玉縣鳩ケ谷町に住む。

◇

黑田鶴治　△大阪齒科醫學專門學校教授黑田鶴治博士は、大阪齒科醫學校出身の秀才にして、嘗て獨逸に留學するや、伯林大學にてヘフター教授、ヨハヒモグル教授に就て藥理學を專攻し、ドクトル、メヂチーネ、デンタリュの學位を得て歸朝後、京都府立醫科大學より博士號の學位を獲得せる篤學者也。研鑽多年、今や蘊蓄せる學識と手腕とを以て母校の教壇に起ち、熱心克く學生指導の大任に當り、齒科醫育界の爲大に將來に須つ所あらんとす。

△大正二年九月大阪道修藥學校卒業、同四年十一月藥劑師試驗合格、同七年四月大阪齒科醫學校卒業、同八年六月齒科醫術開業試驗合格、同九年十一月任大阪齒科醫學專門學校助教授、同十二年九月同學校留學生として渡獨、同年十一月より伯林大學藥理學教室に於て藥理學專攻、昭和二年二月に至る、同大學よりドクトルの學位を得、昭和二年十月任大阪齒科醫學專門學校教授、同年十一月醫學博士の學位を受領す。斯間伯林大學に於て藥理學はヘフター教授、ヨハヒモグル教授、ミュラー教授、齒科醫學はデイーク教授、シュレーデル教授、ウイリーゲル教授等に就て研究す。

△學位主論文は「砒素ノ膽汁內排泄ニ就テ」にして獨逸文より成る。參考論文は(1)「フェノール」類及芳香酸類ノ殺菌作用ニ及ボス水素「イオン」濃度ノ影響ニ就テ、(2)各種局所麻醉藥ノ動脈內注射時ニ於ケル毒性ニ就テ、(3)亞砒酸ノ習慣作用ハ特種ナリヤ、(4)オルト、メタ、パラクロールフェノールノ比較研究、(5)蛙法及猫法ニ於ケル「デギタリス」効力檢定法ノ比較研究、(6)オルト、メタ、パラクロールフェノール及フェノールカンフアー、クロールフェノールカンフアーノ藥理、(7)「コロイド」現象トシテ現ハレタル銀鹽類ノ表面作用、(8)齒髓ノ吸收作用ニ就テ等の八篇にして、全部獨逸文より成る。就中「砒素化合體ノ藥理學的研究」は氏の最も得意とするものなり。

△岡山縣赤磐郡周匠村大字福田五四一黑田七三郎の六男にして、明治三十年本籍地に生る。純眞なる學者肌の士にして、プロフェソアーに相應しき品性を備へ、謹直温厚にして、志操健實也。當年漸く不惑に入る一、研究心旺盛にして若き意氣と熱とを以て、終始一貫、齒科醫育の爲め一路邁進せんとする所に、氏の尊き使命あり。學究以外には油繪と音樂とに趣味を有す。家庭には妻勝子との間に二男あり。大阪府下阪急沿線螢ケ池螢十四號に住む。

◇

山村　新之助　△仙臺市東一番丁一〇に齒科綜合醫院開設と共に、日本齒牙發育研究所を創設し、開業の傍ら東北帝大醫學部講師として尙研究を續行しつゝある山村新之助博士は、東京齒科醫專の出身にして、大正九年同校卒業以來母校の副手となり、同十一年仙臺市にて齒科開業、昭和三年東北齒科醫學校々長兼齒科組織病理學教務擔任、同四年東北帝大醫學部副手となり、病理學教室にて木村男也教授指導の下に主として齒科胎生組織病理學研究、同十年十一月學位を授與せられ、同十一年九月東北帝大醫學部講師を囑託せらる。齒科醫人としては宮城縣齒科醫師會理事、評議員、事業部主事を經て、現在は副會長學術部擔當として盡力する所あり。

△學位主論文は「人間齒牙ノ琺瑯器官ノ發育ニ關スル知見補遺」にして、參考論文四篇あり(1)人類琺瑯質ノ發育ニ關スル組織學的研究、(2)先天黴毒ガ發育中ノ齒牙ニ及ボス變化ノ組織學的研究、(3)母體ノ結核ガ齒牙發育ニ及ボス影響、(4)白亞質器官ニ就テノ考察　等なり。要するに齒牙最初期發生の表徵たる氏の所謂前驅帶の發見、齒牙、口唇等の發生、琺瑯器官成立闡明及び先天黴毒の齒牙發生理由等特筆に値すべきものなる可し。

△感想に曰く「皇國にありては學者も醫者も日本人たる充分なる自覺が必要だ。內的學閥偏見を捨て世界對日本のために協力しなければならぬ、日本學界の新研究に對しては全世界に發表する充分なる機關を國家的に充實させる必要がある」云々。氏の本籍地は福島縣岩瀨郡須賀川町大字須賀川字西六丁目四九に在り、會津藩士山村武太郎の長男にして、明治二十六年福島縣白河町に生る。熱心なる研究家にして、今猶精研に餘念なき前途は、氏の將來を卜すに餘裕綽々たるものあるを想はしむ。壯齡漸く不惑有五、活氣橫溢して學識、手腕、人格共に愈々圓熟せる腕盛に在り。性來眞面目にして誇張的の事を好まず、謙遜自抑して自己の識學を衒はず、一意專心、孜々營々として自己の研究と診療に一路邁進して亦他を顧みず、其の熱心にして眞摯なる態度は人をして自ら敬慕の念を深からしむるものあり。醫院には醫員三名、技工手二名、家庭には一人の弟と、妻との間に四人の子供あり、女中其他にて賑かなり。

醫史學科

醫事法制學科

廖　溫　仁　△臺灣の名族にして醫學博士たる廖溫仁は、著述家にして東洋醫史學の權威として學界に重きを爲す少壯の學者也。博士は東北帝大醫學部出身にして、又京都帝大文學部を出で、京都帝大大學院在學中に病理學教授藤浪鑑博士指導の下に「東洋脚氣病史」を研究完成して、京都帝大より學位を獲得せる近來の名醫博として其の名既に江湖に著聞す。殊に最近博士會心の作たる「支那中世醫學史」を世に公刊發表して以來、好評嘖々、益々其の蘊蓄せる該博なる學識と共に、學究的大なる存在を認められ、內外學界に大に氣を吐けるは、獨り博士の名譽たるのみならず、亦以て日本學術界の爲に大に慶福すべき也。

△更に顧みて博士の學歷及び閱歷を公開すれば、博士は臺南州西螺公學校、臺南市私立長老教中學（一年修業）京都同志社普通學校、二高を經て、大正十年東北帝大醫學部卒業、直に同學部副手囑託となる、同年十二月依願解囑となり上海及び南京方面へ旅行し、約四ケ月間支那の古書及び古醫籍の調査に從事す、翌十一年四月支那醫學史研究の爲め京都帝大文學部東洋史學科へ入學、同十四年三月卒業、同年四月更に東洋醫學史研究の爲め京大大學院入學、昭和三年七月學位受領、同五年四月大學院退學、爾來專ら著作に從事す、同六年雜誌「我等の化學」編輯員囑託、同七年日本醫史學會評議員依囑、以て今日に至る。

△專攻は醫史學にして特に東洋醫學史及び東洋文化史を最も得意とす。その間主として京都帝大醫學部名譽教授藤浪

鑑博士、同文學部名譽教授内藤虎次郎博士の指導を受く。學位主論文は「東洋ニ於ケル脚氣病理ノ歴史的研究」にして、(1)東洋ニ於ケル脚氣病流行ノ歴史的研究、(2)東洋ニ於ケル脚氣病理ノ歴史的研究、(3)脚氣病治療法ノ歴史的研究の三篇より成る。參考論文は「支那ニ於ケル痘瘡ノ起源ニ就テ」外五篇あり。著書として「支那中世醫學史」あり、其他論著夥多。

△臺灣臺南州虎尾郡西螺街廖承丕の長男、明治二十六年生る、當年不惑に入る漸く三歳。年壯の意氣益壯んにして頗る研究心に富み、向學の精神欝勃として禁ぜざるものあり。殊に夙に支那醫學史の研究に志し、研鑽十餘年の蘊蓄を披瀝して、曩に「支那中世醫學史」を著はせり。溫厚なる學究的紳士にして、其の今日ある篤學は博士の前半生史に輝きて躍如たるを見る。而かも猶春秋に富む前途は、洋々として博士の後半生史を語るに餘裕綽々たり。研究以外、業餘の趣味としては將棋を愛好し、又野球を好む、號して香溪といふ。博士書を寄せて曰く「現代の醫學者は餘りに實驗的醫學を過大視して醫學史の研究者には殆ど同情なきことは余の最も遺憾とする所なり」云々。著者としては滿腔の敬意を表し、博士の貢獻的精神を表彰し、國家學界の爲め感謝措く能はざる也。因に上海に開業中の醫學博士廖煥章（父の弟）と博士とは叔父甥の間柄なりと。京都市左京區北白川仕伏町三に住む。

△「支那中世醫學史」を讀む。

菊版の三方金、近頃稀に見る豪華版で感じがいゝ。卷頭、先づ醫博荒木學習院長の題辭を筆頭に、市村、藤浪、富士川、宇野、辻、中瀨古、内藤の諸博士等々、何れも鏘々たる學界の權威者が、序文を寄せて本書の學問的價値が推奬されてある。内容は序論、漢代醫學の隆盛、隋唐時代の古典醫學、宗光醫學の概觀、支那中世に於ける外國醫學の輸入、極東の日本に於ける支那中世醫學の潮流、支那中世の醫事制度、支那中世の醫書目錄、支那中世醫學史各論、支那中世疾病史の十章に亘り、章は更に節に細別され、最末に參考書籍として三百餘種の和漢洋の書名が載せてある之を見ても其の内容が如何に廣汎に亘りてゐるかが窺はる。而かも引證の該博、考査の精確、叙述の科學的にして堂に入つてゐる所、醫學の識と史學の才とを兼備せる著者によりて創めて之を完成せしめ得たるを想はしむ。要するに本書の著者廖博士は、夙に東洋醫學史の編纂を志し、十餘年の研鑽を經て、其の一部として曩に本書の完成を見るに至つたのであるが、斯種の著述としては嚆矢であり、彼の著名なる富士川博士の「日本醫學史」に比すべきもので、支那醫學の歴史を研究せんとする學徒に取つては絶好の資料として奬め、著者の勞を感謝すると共に、學界の爲め欣幸とする處である。尚ほ春秋に富む著者の今後の精研努力に依つて、軈て東洋醫學史の大完成せんことを、衷心併せて待望して止まない。井關九郎識。

◇

山崎佐

△東京帝大及慶應大學講師にして、辯護士たる山崎佐博士の學位論文は、世人周知の如く「日本疫史及ビ防疫史」の一篇なるが、九州帝大醫學部へ提出の結果、衞生學教授大平得三博士及び細菌學教授小川政修博士を審査委員とする教授會を通過し、九州帝大より醫學博士の學位を授與せられたり。本問題に就ては當時文部省内の一部には「氏の論文は醫學直接關係のない歴史的研究であつて醫博を授與すべきものでない」との主張が起り、未決定のまゝ保留されること八ケ月といふレコードで、これをめぐつて新たに學位令に關する諸問題が論ぜられ、その間には却下説が傳へられ、九大醫學部教授會は重大な面目問題であるとて總辭職の決意までするに至つたと傳へられたるが、學位令によれば當然認可すべきものと決定せる結果、漸く之が解決を得たるものと云ふ。

△氏の學歴及び閲歴を紹介すれば、七高造士館を經て、大正二年東京帝大法學部獨法科を卒へ、司法官試補を經て、判事となり、東京地方裁判所に勤務し、原敬首相を刺殺したる中岡艮一を審理して令名を擧げ、續いて滿鐵事件及び東京市の第一次疑獄事件を豫審判事として裁き、知名の士共を文字通り秋霜烈日、假藉する所なく調べ上げたること

は人皆な識る所也。先是大正六年內務省囑託として同八年の所謂五大法律の改廢新制に參じ、十一年早くも降野して辯護士となれり。然るに氏が醫事法制の研究に志したる動機は、勿論環境の然らしむる所ならんが、氏の陪席判事時代、恰も醫界に於ては醫師法改正を中心とする醫師會運動の勃興時代にして、此の頃、氏は未だ法律專門の何人も手を染めざりし醫事衞生の關係法規を系統的、且つ有機的に研究を行ひ、我學界に創めて「醫事法制學」を提唱せり、蓋し氏が慧眼聰明を物語るものにして、醫事法制學の權威としてその今日あるを想はしむ。

△氏の出生地は千葉縣木更津町にて、明治二十一年生る。東京府平民亡山崎周太郎の三男に生る、亡父周太郎翁は醫師にして、長兄直醫學士その後を續ぎ、同氏の室は故筒井八百珠博士の令孃なり。次兄清博士は東大派の醫博にして小石川病院產婦人科部長として活躍し、有爲の才として前途を囑望せられつゝありしが、可惜、昭和三年の夏易簀せり。博士の年齒今や不惑に入る八歲、法制的醫事社會學の研究に沒頭して今日に至れるが、官途に在職中は嚴正無比の人としての評判高かりしが、下野して以來圓轉滑脫、現代的學者としての人格者たるを聽く。現住所東京市本鄕區曙町一一。

生理學科

笹川久吾　△京都帝大醫學部講師にして、大阪高等醫專教授として生理學を講じつゝある笹川久吾博士は、京大系の生理學者にして、斯學の泰斗石川日出鶴丸教授の愛弟子として知られ、恩師の指導を受くる所厚く、母校より學位を獲得せる所謂京大派の少壯醫博たる一人物也。筋神經生理中其興奮傳搬に關するものは、博士の研究論文中主要なる題目にして、學位主論文たる「神經興奮傳搬學說ノ批判」は卽ち其の學說の批判を試みたるものなるが、外に參考論文として「心筋緊張態ニ關スル研究」の一篇あり。

△新潟縣西蒲原郡黑崎村金卷笹川寅治の二男、明治二十七年生れにして、新潟中學校、四高を經て、大正十二年京都帝大醫學部を卒へ、引續き生理學教室にて研究、同室にて副手、助手を經て講師となり今日に及ぶ、昭和三年より講師現職の儘、大阪高等醫學專門學校教授として赴任今日に及ぶ、其間昭和四年六月學位を受領せり。

△書を寄せ二三の感想を述べて曰く「醫學は醫學方面だけの研究では方法としては行詰りと存じ、醫學と理學、醫學と生物學等、醫學と他の專門學との聯合研究が起らねばならぬと存じ切角其方に努力し駑馬に鞭ち居候。尙醫學と理學との境を行く人物の出現が向後醫學の研究及び診療に必要と存じ其方の人物を養成致居候。又本邦に於て眞に外國を凌駕する運動生理の研究の必要を感じ其方面にも多少なりとも力を致得ればと心掛居候」云々。折角の奮盡努力あらん事を望むや切也。

△年齒漸く不惑に入る二歲、少壯の意氣益壯にして研學心旺盛也。教壇に起つや熱誠克く學生の指導に務め、將來有

爲の人物養成に特に留意專念しつゝあるは甚だ多とす。多趣味の人にして研究以外には運動に興味を持ち、殊に漕艇、角力、柔道、競走等を能くす、一面には又た文藝の嗜しみ深く、能書家にして習字を能くし畵を好む、道樂としては小鳥、金魚、犬、養鷄等を愛好し、花卉、果樹、園藝に至るまで敢て人後に落ちずと云ふ。猶春秋に富む前途や洋々たり、幸に健康と共に、益々發奮、切に自重加餐を祈る。京都市上京區鷹野東町三に住む。

◇

閻　德　潤　△日滿醫學締結の最高機關たる哈爾賓醫學專門學校に校長として閻德潤博士あり。其の責任の重且つ大なるは言はずもがな、向後日滿醫學の隆興發展を期する上に、其の建立すべき醫學教育の完成と兼ねて人格陶冶の涵養上、博士の識見、努力に待つもの益々大なるを痛感す。博士は滿洲醫大系の錚々たる生理學者にして、斯學の巨擘久野寧教授の高弟たり、又た東北帝大教授佐武安太郎博士の指導を受け東北帝大より學位を獲得せる名醫博たる一人物にして、一面亦滿洲國出身者中代表的學者として大に氣を吐く一偉才とも言ふ可し。

△更に其の略歷を概括すれば、博士は民國十二年南滿醫學堂卒業(第九回)、爲該校生理學教室副手、兼任奉天同善醫科專門學校教授、及民國醫學雜誌編輯主任、同十三年任助手、同十四年任滿洲醫科大學生理學教室助手、同專門部講師、同十六年東北帝國大學醫學部生理學教室留學爲副手、同十八年八月得醫學博士(昭和四年)、同年任滿洲醫科大學助教授、兼專門部教授、同十九年兼任奉天市市政公所諮議、又滿洲醫科大學中國學務主任、後辭以上諸職、轉任哈爾賓醫學專門學校教務主任兼教授、後に兼代辨理校長事宜、次で校長として現在に及べり。

△學位主論文は「家兎ノ血壓ニ關スル研究」にして、第一篇「家兎血壓ノ波動狀動搖ニ就テ」より成る。外に參考論文として、(1)汗腺分泌機能ヲ測定スル新方法並ニ汗腺分泌ノ週期的變動ニ就テ(2)溫熱ノ平流電流刺戟ニ及ボス影響(神經幹)附感應電流刺戟ニ於ケル制止現象ノ說明、外英文三篇、獨文二篇あり他に(1)漢醫剪闢、(2)脈辨、(3)醫林改錯之錯中錯、(4)譯橋田著、生理學要綱(但尙未出版)等の著あり。以て學術方面に對する博士の努力研鑽の跡を偲ばれる。

△博士は滿洲國奉天省海城縣の人、閻恩溥の長男にして、光緒二十四年生る、當年三十有八歲也。博士曰「改良本國舊醫、提倡西醫、而光明之、以利後學」云々と、爲滿洲國醫學振興、祈益々健鬪盡力。學究的溫厚の紳士として其の人格を尊ぶ、若夫其性格より打診すれば見賢思齊、見不賢而內自省は博士の長所にして、欲寡已過、而未能焉が或は短所ともならんか。業餘の趣味としては古雅を愛す。少壯氣鋭にして春秋猶頗る豐富也、幸に健康と共に自重加餐を祈るや切也。

◇

馬淵秀夫　△大阪帝大醫學部生理學教室に新進の馬淵秀夫博士あり。助教授として勞働生理學の教鞭を執り克く教室員及學生の指導に精勵す。學系よりすれば博士は大阪帝大の前身たる大阪醫大派の少壯醫博にして、向學的精神の橫溢せる前途有爲の新人物也。近き將來に於ける博士の飛躍は大に斯學界に矚目せらる。

△博士の來歷を公開すれば、博士は大正十四年大阪醫大卒業、直に大阪府立產業能率研究所技師に任ぜられ同所生理部主任を命ぜらる、昭和二年大阪醫大副手を兼任し、母校勞働生理學教室に勤務し、同四年三月依願技師を免ぜられ講師を經て現職に至る。斯間母校恩師正井保良教授の指導を受け生理學一般及勞働生理學を專攻す。

△學位主論文は「作業ノ生理學的研究」其一、其二、其三にして、參考論文は(1)クローム「スプロメーター」トホールデン氏瓦斯分析器ニヨル酸素消費量測定殖ノ比較、(2)余ノ考案セルホールデン氏瓦斯分析器自働振盪機ニ就テ、(3)余ノ創案セル作業量計測器ニ就テなり。

△京都市の人、馬淵秀治良の長男にして、明治三十三年生れ、年齒未だ三十有六歲の少壯なり。新進の逸才にして思

考創案の素質豊富にして、貴重なる文獻及び發明器を多く出せるは學界の既に其の學究的存在を認むる所也。讀書家にして研究と發明とを唯一の趣味とす、時に又た旅行を好む風あり。博士の前途や多望、その進路は刮目に値す、幸い健康にして益々精進を翹望して止まず。京都市上京區紫野柳町七六に住す。

◇

福原　武　△新潟醫科大學生理學助教授としての福原武博士は、新潟醫大出身の新進にして、恩師横田武三博士に就きて生理學を專攻し、特に消化管の生理に關する蘊奥を究め、母校より學位を獲得せる所謂新潟醫大派の名譽を負ふ新人也。今は新智識を披瀝して母校の教壇に起ち、學生の指導と共に自己の研究に專念精進しつゝあり。博士の學位を得たるは二十有九歳、近時稀に見るところ、年齒未だ少壯にして研究心潑剌たる前途は、洋々として博士の將來を語るに餘裕綽々たるものあり。

△博士は新潟中學、新潟高校を經て、昭和三年新潟醫大卒業後、直に同大學生理學教室助手となり、同六年講師となり、同七年二月母校にて學位を受領し、同八年四月助教授に任命せられ今日に至る。

△主論文は「小腸運動」(獨文)及「小腸ノ神經支配」にして、原著は獨逸文なり、外に參考論文として「輸尿管ノ運動」一篇あり。

△新潟市寄居町福原仁四郎の長男にして、明治三十七年生れなれば年齒未だ三十有二歳也。少壯氣鋭にして研學の念欝勃として禁ぜざるものあり。熱心なる學究として其の態度の眞面目にして熱あり力ある點は、明敏なる頭腦と相俟つて敢て人後に落ちず、今や學生の提撕と幷せて、自己の研究に沒頭して餘念なき前途は、軈て期待すべきヨリ大なるものあるを待望せらる。新潟市寄居町三六三に住む。

◇

清野信昌　△住友生命保險株式會社醫務部に清野信昌博士あり。北海道帝大出身の生理學者にして、斯學界現代の權威たる恩師宮崎彪之助教授の指導を受けて斯學の蘊奥を究め、母校より學位を獲得せる斯學界近來の少壯名醫博也。新進にして新學說に富み、今や其の蘊蓄を傾倒して斯道の爲め努力盡瘁する所あり。生命保險界に於ける學究的新人として刮目せられ、猶精研に餘念なき前途は大に囑望せらる。

△顧みて其の今日ある博士の略歷を概說すれば、大正十五年北海道帝大醫學部卒業後、同大學副手及助手拜命、昭和六年八月辭職する迄生理學第一講座にて研究す、同年九月住友生命保險株式會社醫務部に入り現在に及ぶ、同七年二月學位を授與せらる。

△主論文は『皮膜ヲ通シテノ電解質擴散速度ニ及ボス「カチオン」並ニ非電解質ノ影響ニ就テ』にして、參考論文は(1)皮膜ヲ通シテノ擴散ニ及ボス攪拌溫度「オスモーゼ」及水素「イオン」濃度ノ影響、(2)皮膜ヲ通シテ行ハルル不均一系化學反應ニ就テ、(3)蛙皮ニ於ケル食鹽並ニ水分吸收機轉ニ就テ、(4)肋膜腔內葡萄糖吸收機轉ニ就テの四篇なり。

△感想に曰く「水平線上の者には痛痒なく且不必要ならんも、以下の者に對する必要上大學たると專門學校たるとを論ぜず、總ての卒業者に國家試驗を課しては如何。肩書を商品にする如き行爲に對し痛歎に堪えず」云々。東京市本郷區臺町清野專次郎の五男にして、明治三十二年生る。年齒漸く三十有七歳、少壯の意氣益壯にして研究心に富み、所謂、ものに凝り性にして徹底的に成し遂げずんば止まぬ質の人也。研究以外の趣味としては音樂を愛し、又スポーツを好む。眞面目なる學究的溫厚の紳士にして、志操堅實、清淡にして功利に執着せず、謙遜にして衒はず、寛厚にして能く人を愛し、又人に親しまるゝの德を有す。京都市上京區大將軍一條町九番地に住む。

◇

賀維彥　中華民國醫界多士濟々として亦人材に富む。河北省立醫學院生理學教授醫博賀維彥は、所謂慶大醫科續篇(生理學科)

派の名醫博として其の存在を認められ、學界に重きを爲す新進の重鎭たるを失はず。河北大學醫科出身の一異才にして、慶大教授加藤元一博士の指導を受け多年生理學を研究し造詣する所深し。一度び祖國の教壇に起ち學生指導の任に當るや、該博なる新智識を披瀝し、諄々として說く所熱心なり。當世博士界中最も異彩に富む、學究的新人物として茲に之を推奬するを慶ぶ。

△博士は中華民國河北省淸苑縣城內北街光裕里の出身、民國紀元前九年生る。民國十六年（西曆一九一七年）河北大學醫科卒業、河北大學醫科助手任用、一九二八年八月より慶應義塾大學醫學部生理學教室に入り研究、翌年九月同學部助手任用、歷充第二、三、四回夏季生理衞生講習會（慶大生理學教室）講師、一九三二年（昭和七年二月）慶應大學にて醫學博士學位受領、爾來頭書の現職に在り。

△學位主論文は「中樞神經ニ於ケル制止現象ノ研究」にして、外に參考論文として(1)麻醉藥ト共存セル「イオン」ノ神經麻痺ニ及ボス影響、第一、二報、(2)神經ノ週期的興奮間隔ニ就テ、(3)感染電流ノ神經ニ對スル侵害作用ニ就テ、(4)心筋纖維ノ悉無律ニ關スル研究、(5)蟇血液ニハ同種血球凝集現象ナシの五篇あり。

△博士曰く「私の感想は別になく、但だ學問は止境なく、又は國境なしで御座居ます。私は親しき御指導を受けた恩師加藤元一先生及び諸先生にも大變御世話になつたことを有難感謝して居ります。今後も相變らず御鞭韃して頂き御指導をお願ひ致します」云々。子弟の情調纏綿たるものあり、亦以て其爲人を窺はる。民國出身としての博士の成業篤學は、祖國學界の爲め大に氣を吐けるものにして、博士の面目の躍如たるものあるを物語りて餘蘊なし。賦性敦厚にして謹直、淸淡にして寡慾、謙和にして尊大振らず、快活にして能く人と接し人を愛す、其の寬容にして眞摯なる態度は、最高學府の人として、學究的紳士たるの人格者たるを尊ぶ。幸い健康にして、中日醫學の親善提携上、將來益々盡力あらん事を、著者は更めて博士に切望して止まざる也。中華民國河北省淸苑縣城內北街光裕里賀方住す。

◇

朴泰煥

△大邱醫學專門學校教授朴泰煥博士は、名古屋醫大派の一勢力たる新人にして、生理學者として滿鮮醫學界に重きを爲す新進教授たり。殊に朝鮮出身者にして近來醫學博士の學位を獲得するもの尠しとせざる中に、博士の如きは最も有爲の新智識として、現代博士界に代表的大に氣を吐けるものと云ふべし。

△學歷より觀れば、博士は昭和四年愛知醫大を卒業するや、直に朝鮮道立大邱醫學講習所講師を命ぜられ生理學を擔當す、同年六月道立大邱醫院醫務を囑託、同年八月より母校名古屋醫大勝沼內科教室に入りて研究し、同七年十二月名古屋醫大にて學位を得、官制改革の結果現職に就任して今日に至る。生理學を專攻せるなかにも血液學の造詣殊に深し。

△學位主論文は「血液循環時間測定ニ關スル研究」にして、參考論文としては、(1)「モルヒネ」中毒症ニ於ケル血液像、(2)人類「モルヒネ」中毒者ノ血液內殘餘窒素ニ就テ、あり。又た博士の論著多數あるなかにて「白米病」及び「血壓ニ就テ」等は博士の最も得意とせるものなり。

△博士は朝鮮慶北金泉黃金町六八ノ七の人、朴相淳の長男、明治三十四年生にして、年齒未だ三十有五歲也。溫順篤學の士にして、少壯醫博の氣焰を吐露して滿鮮醫學の生理學界に精進しつゝあるは大に吾曹の意を得たるを多とす。猶その洋々たる將來の研究活躍と相俟つて更に大に期待すべきものあるを翹望せんとす。性來眞面目過ぎて社交術は下手の方なり。文藝趣味豐かにして殊に音樂を愛し、運動を好む。朝鮮大邱府鳳山町二八ノ五に住む。

◇

侯宗濂

△國立北平大學生理學教授としての侯宗濂博士は、獨り同大學內の重鎭たるのみならず、生理學界の一權威にして滿洲國の代表的學者として世界的に認められ、京大派の名醫博として氣勢を揚げつゝあるは、日

本博士界の爲め大に人意を强からしむるに足る。

△博士は中華民國三年（大正三年）南滿醫學堂豫科入學、同五年（大正五年）豫科卒業と同時に同校本科入學、同九年（大正九年）本科卒業、同年同校副手囑託、生理學教室勤務、同十年同校助手被命、同十一年京都帝大へ留學を被命、同大學醫學部專修科入學（生理學專攻）、同十三年南滿醫學堂講師被命、生理學教室勤務、同十四年滿洲醫科大學講師、兼南滿醫學堂講師、兼專門部助教授被命、同十五年（大正十五年）京都帝大にて學位授與、同年滿洲醫科大學助教授、兼專門部助教授、兼南滿醫學堂助教授被命、昭和二年春中華民國北平へ留學、協和醫科大學生理學教室にて研究、次で歐洲へ留學、爾來中華民國國立北平大學教授として生理學擔任、今日に至る。

△學位主論文は「犬ノ腦髓ノ循環血量並ニ酸素需用量ニ就テ」にして、參考論文として(1)人體發汗機能ノ季節ニ因ル變動ニ就テ、(2)溫度ノ筋攣縮ニ及ボス影響ニ就テ、(3)フイツク氏間隙ニ及ボス溫度ノ影響ト下行性感應電氣刺戟分列ニ起ル間隙現象ニ就テ、(4)溫熱ノ平流電流刺戟ニ及ボス影響、(5)墓心臟ノ不可逆性傳導ニ及ボス「イオン」ノ影響、外英文二篇あり、其他論著夥多。

△博士は滿洲國奉天省海城縣文甲溝の人、清光緒二十五年（明治三十二年）生る。學究的少壯の紳士にして年齒未だ三十有七歲也。其の今日ある篤學は博士の前半生史に輝き、滿洲國出身者中の代表的醫博として氣を吐き、滿支醫學界に重きを爲す代表的學者たるは特筆に値す。而かも春秋猶頗る豐富にして、光る學位の前途洋々たるの秋、幸い健康にして、日滿支親善上、日滿支醫學提携の爲め益々努力盡瘁あらん事を翹望して止まざる也。中華民國北平和內南所胡同一四號に住す。

醫化學科

生化學科

戸田茂　△滿洲醫大教授にして醫化學を主宰する戸田茂博士は、岡山醫大系醫專時代の出身にして、京都帝大の長老今の名譽教授理博大幸（勇吉）教授に師事して物理化學を研究して後ち、同大學教授前田（鼎）博士の指導を受けて醫化學を造詣する所深く、久しく母校の教壇に起ちて醫化學を講じ、文部省在外研究員として三年間歐米に遊び、主として伯林カイゼルウイルヘルム研究所ワールブルグ教授のもとに於て研究せり。其學位論文は博士の該方面に於ける研究の道程を物語るものにして、玉成せる努力の結晶と見るべきなり。

△博士は岡山縣赤磐郡吉岡村の人、明治二十三年生にして、大正四年岡山醫專を卒へ、助手として醫化學教室に入り同六年講師となる、同年京都帝大へ派遣され理學部化學教室にて物理化學、醫學部醫化學教室にて醫化學を研究す、同七年任岡山醫專助教授、同十一年岡山醫大講師となり、同十三年任岡山醫大助教授、同年七月學位受領の後、歐米留學の途につき十五年歸朝す、昭和二年任滿洲醫大教授、醫化學を擔任、今日に至る。

△學位主論文は「有機鹽基化合體の生物學的研究補遺」にして、(1)人常尿中ノ有機鹽基化合體ニ就テ、(2)動植物性食物抽出物中ノ有機鹽基化合體ニ就テ（以上獨文）の二篇より成る。參考論文は、(1)酸鹽化水銀ニ就テ(2)鹽素酸「カリウム」硝酸「カリウム」及ビ水ノ系ノ二五、〇度ニ於ケル平衡の二篇にして何れも原著は英文なり。學位は京都帝大より受領せり。外に獨逸生化學雜誌其他內外にて發表せる論著多數あり。

△運動家にして特に庭球、野球、乘馬等に多大の趣味を有す。當年漸く四十有六歲、意氣潑剌として英才益々發揮す

るの時に在り、其教壇の人たるや、熱誠克く學徒を教導し、諄々として未だ曾て倦まず、衆生徒之を敬慕すといふ、以て其人と爲りを知るに足る。

◇

隈川八郎　△慶大醫學部に新設せらるべき化學部の擔任者として、重大なる責任を負ひながら現在も尙醫化學教室の一部に存在する化學研究室に於て、終始研究に沒頭しつゝある助教授隈川八郎博士は、世人周知の如く東大の耆宿、醫化學の權威者故隈川宗雄博士に見込まれて其嗣子となれる俊才なるが、舊姓高木より隈川に改姓せるは既に東大卒業後のことにして、先是恩師隈川翁の素志を繼ぎ醫化學を修めんとし、衞生學教室を中途より退き、大學院學生として東大理學部に轉じ、化學教室にて約三年間生物化學研究の後ち新興の慶大醫學部に入り、慶大より歐洲へ留學を命ぜられ、主として獨逸伯林カイゼルウイルヘルム研究所のノイベルヒ教授、並にミュンヘン大學のウイルステッテル教授に師事して研究する所あり。年壯銳氣にして猶春秋に富み、洋々たる前途は更に大に囑目せらる。

△岐阜縣養老郡日吉村高木賢治郎の三男、明治二十三年生れにして、大正九年故隈川宗雄博士の養子となる。一高を經て大正五年東京帝大醫科を卒へ、直ちに衞生學教室助手として一年間勤務の後、更に大學院學生として三年間東大理學部にて研究に從事せり、同九年五月慶應義塾留學生を命ぜられ獨、英、佛、米に留學す、同十三年五月歸朝と同時に慶大醫學部助教授に任ぜられ醫化學教室に勤務す、同十四年六月慶大より學位を授與せらる。

△主論文は『「イノシツト」及「グリセリン」ノ乳酸菌ニヨル糖類類似ノ分解ニ就テ』にして獨逸文の原著なり。參考論文は、(1)各種「アルデヒド」酵母ニヨル分解ニ就テ、(2)各種酵母ニヨル「メチレン」青ノ脫色ニ對スル鹽類ノ影響ニ就テ外四篇あり。

△學生時代より秀才の聞え高く、今以て研究を唯一の趣味とし終始研究室に籠るの外克く讀書す。學者肌にして謙讓の德あり、應答の禮意缺ぐことなし、其の眞摯なる態度を多とす。神奈川縣橘樹郡稻田村登戸に住す。

◇

赤松茂　△千葉醫大教授にして醫化學を擔任せる赤松茂博士は、最近歐洲留學より歸朝せる當世風の少壯學者にして、醫化學界に一新勢力を添えたる新智識也。顧みて其學歷より言はしむれば、一高を經て、大正八年東京帝大醫學部を卒へ、引續き同大學醫化學教室にて柿内教授指導の下に研究、同十一年二月渡歐、主として獨、英、米に留學して醫化學を研究し、同十三年三月歸朝、同年五月高等官五等を以て、千葉醫大教授に任ぜられ醫化學擔任を命ぜらる、翌十四年七月東京帝大より學位を授與せらる。

△主論文は「高溫度ニ對スル酵母酵素ノ態度」を研究せるものにして原著は獨逸文なり、要するに酵母を「トルオール」中にて百十度に加熱するに糖酸酵作用と焦性葡萄酸分解作用を失はずこれらの作用は酵母を「キシロール」中にて百四十度に加熱するもなほ殘存すれども「メシチレン」中にて百六十度に加熱する時は消失する加熱による障害は共同酵素等の除去に基くものあらずとの結論を得たり。參考論文は、(1)「ガラクトーゼ」硫酸ニ就キテ、(2)「チクヘクサン」類ニ於ケル「フイトヘミツシエ・レドウクション」、(3)「ナホトブラウ」ノ膠樣狀態ニ及ボス陰「イオン」殊ニ「OHイオン」ノ作用の三篇にして何れも獨逸文の原著なり。

△廣島市播磨屋町赤松又四郎次男、明治二十八年生なれば當年四十有一歲の少壯也。學生時代よりの讀書家にして今猶書見を樂しみとし、又た藝術趣味豐富にして殊に觀賞を好む風あり。最近歐洲より歸朝して以來、其の教壇に起つや新進の英才を發揮して諄々と說く所、熱心にして眞摯なる態度は常に好感を以て學生間に迎へらる。千葉市寒川南大堤七六八に住す。

◇

藤田秋治　△北里研究所に新人の生化學者藤田秋治博士あり。東大の出身、嘗て獨逸に留學するや、伯林カイゼルウイルヘルム研究所にて、ワールブルグ教授指導の下に惡性腫瘍新陳代謝、其他細胞生理學の領域に於ける生化學的研究を爲し、滯獨中母校より學位を得たる斯界新進の學徒也。今日まで細胞呼吸、エネルギー發生反應、眞血糖カタラーゼグルタチオン、ヴイタミンCの定量法等に關する研究多數あり、歐米の學界に反響ありしもの少しとせず△顧みて博士の今日までの學歷を一瞥すれば、一高を經て、大正十年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに北里研究所に入り細菌學、免疫學專攻、草間博士の指導を受く、四十二年一月愛知醫大醫化學教室に入りミハエリス教授指導の下に生化學殊に物理化學的方面の研究を爲す、同十四年十一月理化學研究所に入り鈴木博士の下に生化學殊に有機化學的方面の研究に從事す、同十五年七月渡歐、伯林カイゼルウイルヘルム研究所にて彼の有名なるノーベル賞保持者ワールブルグ教授の下に細胞生化學を研鑽、昭和二年四月學位受領、同年十一月歸朝、再び北里研究所に入所今日に至る。△主論文は『膜ニ於ケル電氣的現象ト「イオン」透過性ニ關スル研究』にして、參考論文は(1)液境界面ニ於ケル擴散「ポテンシアル」消殺法ニ就テ、(2)相界「ポテンシアル」ニ就テ（ミハエリス共著）の二篇なり。△大分縣杵築町藤田芳太郎の七男、明治二十八年生る。意氣益々壯にして向學の精神に燃え、日夜學術の研鑽と精神の陶冶に力め孜々として餘念なきが如し。人と爲り穩健、志操堅實、恬淡として功利名聞を求めず、謙抑己れを虛うして人に厚うす、其の眞面目にして熱情ある態度は、人に好感を以て迎へられ人に親しまる。新進有爲の士前途猶洋々たり、幸に健康にして、斯界の爲め益々精勵あらん事を望む。文博佐々木信綱、醫博高橋信とは近親の間柄なり。現住所東京市淀橋區戸塚町二丁目一四三。

◇

和田長作　△慶大醫學部に講師として新進の英才を發揮し、近代醫化學の躍進に沒頭して大に將來に待つあらんとするは、少壯學者和田長作博士也。博士は慶大醫學部第一回（大正十二年）の出身にして、醫化學界の權威照內（豐）教授の愛弟子として知らる。卒業後直に母校の助手として醫化學教室に勤め、昭和三年講師となり、翌四年七月學位を得て今日に至る、斯間母校の恩師照內教授に就き親しく指導を受け、造詣するところ深し。△主論文は『家兎體內「ヒスチヂン」ヨリ「クレアチニン」「クレアチン」及ビ尿酸ノ生成ニ就テ』にして、參考論文は、(1)尿及ビ胃液中ノ「モルヒネ」微定量法ニ就テ、(2)白米ニ含有セラルル毒物「オリザトキシン」ニ就テ、(3)急性、惡急性、慢性「モルヒネ」中毒及ビ禁斷時ニ於ケル家兎血液成分ニ就テ、(4)日本人常尿ノ還元力ニ就テ也。△「醫化學研究者を醫者は純化學研究者の樣に考へ化學者は勿論醫者だと思つてゐる。境界線にあるのであらうが醫學の基礎に立つべき化學研究者であるべきだらうと考へられる。現代の樣に理論化學や純粹化學に近い醫化學諸學者の研究は醫學上からの價値を考へさせられる」云々とは博士の感想の一片なり。△東京市の人、和田長史の長男、明治三十三年生れなれば、當年漸く三十有六歲也。新進にして潑剌たる元氣を有し研究に對する頗る熱心にして、切磋研鑽、日も尙ほ足らざるの概あるを見る。居常人に接するに寬厚にして、學者として敢て尊大の態度を示さず、應答禮意を缺ぐことなし。以て其人と爲りの一班を知ると共に、春秋猶遼遠なる前途に期待する處多し。東京市小石川區關口水道町五に住す。

◇

倉田庫司　△千葉醫大派の名醫博たる新人物より物色して、玆に品隲せんとする倉田庫司博士は、最少年なる新進の醫化學者にして、母校の恩師赤松茂博士に師事して研究の結果、千葉醫大より學位を得たる後も講師として醫化學教室に勤め、傍ら研究に勵しみつゝあり。未だ少壯にして春秋遙かに遼遠なれば、猶洋々たる前途を囑望せらるゝ有爲の學者として、その將來を待望せんとす。

△顧みて博士の學歴及び閲歴を公開すれば、博士は水戸高等學校を經て、昭和三年千葉醫大卒業後、直ちに醫化學教室に入り副手となり、同四年十二月助手に任ぜられ、同六年九月千葉醫大にて學位を授與せらる、同八年一月講師を囑託せられ、今日に至る。主論文は『「ヂフエニールビロ」燐酸ノ酵素ニヨル水解ニ就テ』にして、參考論文なし。

△感想に對しては謙遜なる態度を持して曰く「小生未だ一介の窮措大、世事に疎く經驗に乏し。敢て評するの資なきを憾む」云々と、以て博士の心境を察せらる。趣味としては野球を好み尺八を能くす。博士は千葉縣千葉市千葉寺の人、明治三十七年生れ、未だ三十有二歳の少壯也。熱心なる研究家にして、向學の精神に燃え、不撓不屈の氣慨に富む。幸ひ健康にして、爲學界折角の努力精研あらん事を望むや切也。千葉市千葉寺七に住す。

◇

李　錫　申　△京都帝大派の名醫博にして、新進の生化學者たる李錫申博士は、京城セブランス聯合醫專教授として得意の生化學を講じ、日鮮學生指導の任に當り熱心克く提撕に務む。博士は京城醫專出身の異彩にして、嘗て獨逸に留學してドクトルの學位を得、伯林大學ローナ教授の下に生化學を專攻し、歸朝後京城帝大教授佐藤剛藏博士の指導を受けて斯學の研究を續け、京都帝大より學位を得たる篤學者也。

△博士は大正十年京城醫專卒業後、同年四月より九月まで東京帝大醫學部病理學教室にて研究す、翌十一年三月より昭和二年二月まで獨逸伯林大學に在學、生化學を研究す、同十五年十月ドクトルの學位を受く、昭和二年三月より八月まで伯林市立病院 Kaiserin Auguste Victoria Haus に在職す、同三年二月より六年三月まで京城帝大醫學部醫化學教室に在職す、同六年四月現職に就任す、同七年二月學位を受領す。

△學位主論文は「朝鮮人ノ習慣食ニ就テノ研究」にして、二篇より成る。參考論文は全部獨逸文にして、(1) Ueber glykolyse (2) Blutzucker wirkung photoaktiver subs'anzen (3) Blutzucker wirkung ungesättigter Fettsäureの外三篇あり。

△博士は朝鮮平壤府眞香里の出身にして、明治三十二年生る、當年三十有七歳也。當世博士界中異彩に富む篤學者にして、既に其の閲歴は之を如實に物語りて餘蘊なし。今は唯だ醫育と研究とに專念し熱情と誠實とを以てす、其の態度の眞摯にして熱心なるは、洋々たる博士の前途を大ならしむる所以なるべし。賦性眞面目にして高潔、志操堅實なり。幸に健康と共に朝鮮醫學界の爲め益々發奮盡瘁あらん事を翹望して止まず。京城府崇三洞二七ノ二に住む。

◇

寺岡　森太郎　△岡山醫科大學講師として生化學を講じつゝある寺岡森太郎博士は、岡山醫大系の少壯醫博にして向學の精神に燃え、曩に助教授を辭して以來再び講師として學生の指導に精進しつゝ今猶研究に餘念なし、潑剌たる前途は猶洋々として博士の將來を語るに餘裕綽々たり。專攻は生化學にして、特に得意とするは榮養學なり。

△更に學歴より觀たる博士の略歴を概括すれば、大正十一年岡山醫大附屬專門部卒業後、直ちに同大學醫化學教室助手拜命、同年十二月一年志願兵として入營、翌十二年十二月退營と同時に再び醫化學教室に勤務す、昭和二年五月同大學講師を囑託され、同六年十一月助教授に任官し、同七年二月岡山醫大にて學位を授與せられ、同九年一月助教授退官と同時に再び講師を囑託せられ今日に至る。

△主論文は「炭水化物中間代謝ニ及ボス膽汁酸ノ影響」にして、參考論文は、(1)河豚ノ膽汁ニ關スル研究、(2)結核症ニ對スル日本人向ノ減鹽食餌及脾臓食餌ノ獻立例ト其調理法、(3)輕業時ニ於ケル兵食ノ蛋白質最小値ニ就テ（倉田二等軍醫正共著）なり。指導教授は岡山醫大教授清水多榮博士にして、斯間恩師の指導薫陶に負ふ所尠しとせず。

△博士は廣島縣沼隈郡千年村能登原の人、明治三十三年寺岡紋四郎の長男に生る、當年三十有六歳の少壯也。志操堅實、清廉潔白にして功名榮達に恬澹たり、平生人と接するに快活にて人を愛し、同僚に親しみ又克く學生を愛撫す、

其眞面目にして寛容なる態度は、學究的少壯の學者として高邁なる人格を尊敬すべき也。岡山市下田町三二に住む。

◇

安田守雄　△新進の生化學者として近來氣焰を昂げつゝあるは少壯醫博安田守雄なるか、現に文部省體育研究所技師にして同所生化學部長の要職にありて斯界に呼應す。東大系生化學の權威柿内三郎博士の愛弟子にして、嘗て米國ロツクフエラー財團のフエローシツプを獲て米國に遊學し、ロチエスター大學生化學教室にてブルーア博士指導の下に研究、同大學よりドクター、オブ、フイロソフイーの學位を得、英、獨、佛、伊を視察して歸朝、東京帝大より學位を得、斯學界近來の名博士として其の所存を認めらるゝ新智識也。光る學位の前途や益々多望にして向後の活躍を大に期待せらる。

△博士は大正十四年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに生化學教室に入る、同十五年七月文部省體育研究所技師に任ぜられ同研究所生化學部長となる、昭和四年四月米國留學、同六年十一月米國を發し歐洲各國を視察後同七年三月歸朝す、同六年七月母校より學位を受領せり。

△學位論文は、(1)鹽類ニヨリ澱粉ノ水解ニ就テ、(2)「セクレチン」ノ血糖ニ及ス影響ニ就テの二篇より成り、獨逸文の原著なり。博士の感想に曰く「學德一世に高き恩師柿内教授、悠揚不迫兀々として研鑽倦むことなきブルーア教授の德風に背かざらんことを之れ畏る」云々。恩師崇敬の念に篤きことは、人をして自ら德操の士たるを慕はしむ。

△博士は京都府中郡奥大野村安田岩藏長男、明治三十四年生る。年齒未だ三十有五歳の少壯にして、新鋭の意氣に燃え研學心潑剌たり。學究的少壯學者としての態度眞面目にして熱情あるは、洋々たる博士の將來を語るに餘りあり。賦性高潔にして志操堅實、人と接するに敢て城壁を設けず、恬澹として快活なり、又た能く應答禮を重んずるは甚だ多とする所にして、其性格の一端を窺はる。將來有爲の學究として敬意を表し茲に推奬す。私宅牛込區辨天町七五。

藥物學科

原三郎　△東京醫專教授にして、同校の中堅たり、藥理學界現代の一權威として囑目せらるゝドクトル、メヂチーネ原三郎博士は、東京醫專出身の異才にして、慶大より學位を獲得せる藥理學者としての名醫博也。嘗て歐洲に遊ぶや、瑞西ベルン大學にてドクトルの學位を得、同大學ビユルギ教授に次で、獨逸ウルツブルグ大學フルウリイ教授及びキール大學クロース教授等に就て藥理學の蘊奥を究め、猶佛國巴里大學ウアーズー教授に師事して內科學を專攻せり。大正十三年春米國を經て歸朝後、母校の藥理學教室の改造創設に着手し、昭和三年三月略々完成したる曉、火災に會ひ燒失したるも再び設備の完成を急ぎ、翌四年新教室成り、教授室、藥理化學實驗室、生理學的實驗室組織培養實驗室、助手室、準備室、實習室等々、醫學專門學校としては遺憾なき設備を有し、昇格後に備へ居り、助手其他幾多の研究生も研究を續行中なりと聽く。斯間博士の苦心努力は並大抵にあらざりしやを想へば、博士の功績も亦偉大なりと云ふべし。

△博士は前橋中學の出身にして、大正九年東京醫專を卒へ、次で順天堂醫院內科勤務、同十年歐洲留學の途に上り、瑞西ベルン大學藥物學教室にて研究の後、獨逸ウルツブルグ大學藥物學教室に次で、キール大學藥物學教室に轉じて研究を續け、同十二年佛國に入り巴里大學附屬ビチエ病院に於て內科學を研究す、同十三年米國に渡り各地を視察し同年四月歸朝す、同年五月松村博士の後任として東京醫專教授となり、藥物學教室主任として今日に至る、其間大正十四年七月慶大より學位を受領せり。

△學位主論文は『「セリユーム」ニ就テ稀有土金屬ノ藥學ニ關スル補遺』にして、參考論文は、(1) C「ヴイタミン」

缺乏症ニ關スル實驗的研究の外獨逸文の原著四篇あり。其他「博士錄」既載後の主要論文としては、(1)稀有金屬ノ藥理、第一報「モリブデン」及「ウオルフラム」ノ藥理學研究、(2)「チタニウム」ノ藥理學的研究、(3)副腎皮質ニ關スル藥理學的研究、(4)「ブルボカプニン」ノ藥理、(5)「ロベリア」草主要成分ノ藥理及應用、(6)金屬療法或ハ重金屬療法ニ就テ(7)植物性神經毒ト分泌作用、(8)中毒ノ處置ノ要件ニ就テ、(9)實驗的「モルヒネ」中毒ニ關スル一考案、(10)腹下垂體前葉「ホルモン」ニ關スル輓近研究ニ就テ、(11)家兎子宮組織ノ體外培養ニ就テ等あり、其他枚擧に遑あらず。著書としては、(1)簡明藥理學（第四版）、(2)藥理學實習（第二版）、其他。

△博士の希望としては「一般私學の健全なる發達、殊に醫學教育施設の發展、文部省及一般社會の私學に對する正當なる認識と援助」にあり、又感想としては「基礎醫學者として現代の自然科學の研究方面と醫學の研究とが殆んど連絡なく遊離してゐるを遺憾とする。醫學研究雜誌特に基礎醫學の各分科の雜誌の綜合發行を希望する」云々と、其の一片を吐露し居れり。

△博士は群馬縣佐波郡芝根村大字下之宮の人、明治三十年生る、年齒漸く三十有九歲、學究的少壯の紳士にして、人格崇高也。桂花、大久保茂は其號にして、和歌を能くす、短歌は祖父及び父よりその傳統を受け、十歲にして歌作を始め、嘗て短歌雜誌「嬰兒」を發行せり、現在にては日本歌人協會の同人たり、又音樂を趣味し、旅行を好む。性格は直情徑行の人にして、潔癖家なるも、熱情を以て事に當り、人に對するに親切にして溫情あり、後進を親しみ學生を能く愛す。東京市世田谷區代田二丁目九六三に住む。

◇

東　龍太郎　△新進の教授として東京帝大醫學部藥理學教室に東龍太郎博士あり。東大出身にして、嘗て英國に留學するや、倫敦大學ユニバーシテイー、カレツヂの研究生となり、ドナン教授に就て物理化學を、ヒル教授に就て生理學を專攻し、歸朝後母校より學位を獲得せる少壯醫博也。蛙縫匠筋を電氣刺戟によりて短縮せしむる時、其發生する熱は常に張力發生の初期に於ては短縮せしむれば增加し、張力發生の後期及弛緩期に於ては減少す、刺戟せられたる筋肉を伸展すれば短縮の時と反對の結果を得、卽張力發生の初期に伸展すれば熱の發生は減少し、後期又は弛緩期に於ては增加す。斯くの如く短縮及伸展に伴つて正反對の現象を示すこととよりして、以上の結果は筋肉の活動の非可逆的變化の上に熱力學的可逆變化が加はれるものなることを推論せるものが、學位論文の骨子なり。

△博士は大阪府立天王寺中學校、一高を經て、大正六年東京帝大醫學部を卒へ、大學院入學、附屬醫院小兒科副手となる、同八年八月小兒科を辭し生理學教室に入る、同十年七月英國留學、同十五年一月歸朝、同年四月學位受領、同年八月任東京帝大助教授、醫學部生理學教室勤務後藥理學教室に轉じ、昭和九年四月任東京帝大教授今日に至る。

△學位主論文は「筋ノ短縮及伸展ニ現ハル、熱力學的現象」にして、參考論文として、(1)流ル、時間ト强サトヨリ見タル電流ノ刺戟トシテノ働キ、(2)筋纖維被刺戟性ノ變化並ニヒル氏電流刺戟式評論、(3)蛙筋肉ノ熱發生ニ對シテハ「インシュリン」ハ影響ヲ及サズの三篇あり。

△博士は大阪市東區南久太郎町三丁目の出身、明治二十六年生る。學究的學者肌の人、年齡漸く不惑に入る三歲、其の專門に亘る學識は言ふまでもなく、今や其の蘊蓄を披瀝して母校の教壇に起ち、熱誠克く學生の指導に力め、又一面には自己の研究に邁進して倦むことを知らず、將來ある有爲の學究として囑望せらるゝ所あり。スポーツに趣味を有し、殊にボート及びラグビー、蹴球等を最も好む。姻戚には故男爵山川健次郎理博、山川洵農博、寺野寛二工博等あり。家庭には妻照子との間に三男二女あり。東京市本郷區千駄木町五〇に住む。

◇

吳　塲　△新進の藥物學者にして、藥物研究と製藥とに多大の興味を集中して、熱誠克く其の事に勵しみ

つゝある吳塲博士は、臺北醫專出身の篤學者にして、日本醫大の檢定を經て醫學士の稱號を得、東大教授林春雄博士朝比奈博士に師事して藥理學及び漢藥を研究せる結果、東京帝大にて學位を獲得せる少壯醫博也。殊に博士の年少二十七歳にて學位を得たるは近時稀に見る所にして、其の頭腦の明晰と幷せて篤學を推奬するに値す。而かも春秋猶頗る豐富にして向學の精神に燃え、研學切磋、潑剌たる前途は更に大に期待せらる。殊に又臺灣出身としての博士の如きは、當世醫博界中、其の代表的一偉材たるを囑望す。

△更に學歴より見たる博士は、臺中公學校、臺中々學園を經て、大正十年臺灣總督府醫專を卒へ、直ちに東京市養育院醫局に入り碓居龍太博士の下に内科學專攻、同十年五月東京帝大醫學部藥物學教室及藥學科教室に入り林春雄學長、朝比奈、田村兩教授等の指導を受く、同十三年四月日本醫大の檢定を經て同校卒業、同十四年十一月以降專ら朝比奈教授の下に漢藥を專攻す、昭和二年二月學位を授與せらる、爾來研究を續け傍ら製藥に從事しつゝあり。

△主論文は、(1)合成「ベタインドールエチールアミン」鹽ノ藥理作用並ニソノ末路ニ就テ、(2)合成「インドール」誘藥體ノ藥理的比較研究の二篇より成り、參考論文なし。「朝鮮産延胡索の成分研究」の外論著夥多あり。

△博士は臺灣臺中州大甲郡大肚庄吳寶の次男、明治三十三年生る。少壯氣鋭にして研究心に富む、其の今日ある篤學は博士の閲歴に精彩を放ちて見ゆ。眞面目なる學究的少壯の紳士にして、研學切磋、博く學識を有し、從來多くの業績を發表して學界に其の學究的存在を認められ、今猶精研甚だ勉むる所あり。學理の研究と後進の誘拔指導に多大の興味を有し、後進の世話を以て道樂とす、酒煙草何れも用ゐず。年齒漸く三十有六歳なれば、精研に餘念なき前途は洋々として益々輝かし。東京市板橋區板橋町五丁目一、〇六〇に住む。

◇

森田林次

△朝鮮醫學界に新興の大邱醫學專門學校に教授として藥理學を講じつゝある森田林次博士は、東大系の新進藥物學者にして、母校より學位を得たる少壯醫博として其の存在を認められ、今や朝鮮醫育界の爲め努力奮盡して學生指導の任に當り、將來大に期する所あらんとす、潑剌たる前途の活躍や頗る待望すべき也。

△博士の學歴及び閲歴を公開すれば、博士は昭和三年東京帝大醫學部卒業後、同年四月京城帝大醫學部助手となり、藥理學教室に入り大澤教授の指導を受く、同六年四月大邱醫學講習所講師となり、同七年四月學位を受領せり、同八年三月大邱醫學專門學校教授に任命、今日に至る。

△學位主論文「血管自働運動ノ藥理ニ就テ」及び參考論文、(1)下等脊椎動物消化管ノ比較藥理學的研究、(2)副腎「ホルモン」藥理學的研究、(3)「サントニン」ノ藥理學的研究的知見補遺、(4)龜及蟇ノ肺血管神經支配ニ就テ等。

△博士は福岡縣の人、明治三十四年生れにして、當年三十有五歳の少壯也。意氣益壯にして向學の精神に燃え、志操堅實にして、學生指導に對する態度の眞摯熱心なるは、眞面目なる學者として博士の將來を大ならしむる所以ならん。賦性清廉潔白、清淡にして功名榮達を求めず、謙遜克く自抑して人に厚く、快活にして同情に富む、以て其の性格の一端を窺知すると同時に高邁なる人格を尊ぶ。春秋猶頗る豐富なれば、幸に自重加餐を祈る。朝鮮大邱府東雲町九六に住す。

◇

邱賢添

△臺北醫專藥物學教室に新進の邱賢添博士あり。臺灣醫專出身の篤學者にして、卒業後直ちに母校藥物學教室に入り、杜聰明教授指導の下に藥物學を專攻し、京都帝大より學位を獲得せる斯科界近來の少壯醫博也。學位論文に對する學問的批判は既に學界に定評あれば言はずもがな、如何に學殖の該博なるかを語るに足る。而かも年齒未だ少壯にして潑剌たる研究心に富み、今猶同教室に止まりて、孜々として研究に沒頭しつゝある前途は大に囑目に値し、將來有爲の學究として輝しき未來を待望せらる。

△博士は昭和三年臺北醫專卒業後、同七年同校講師に任ぜられ處方學を講義し、學生及研究生の研究を指導する外、臺灣總督府中央研究所囑託を兼務し、一般藥物學殊に臺灣民間藥の研究に沒頭し、又臺灣總督府囑託として、臺北更生院に於ける阿片癮者の阿片癮矯正及同問題に關する實驗的研究に從事せり、同九年四月學位を授與せらる。

△學位主論文は「臺灣產 Crotalinae 蛇毒ノ毒物學的研究」にして、外に參考論文として、(1)鹽酸「カルバイン」酸及鹽酸「カルバイン」酸「エチールエステル」ノ藥物學的作用ニ就テ、(2)老紅酒ノ「エチールアルコホル」以外ノ副成分蒸餾殘渣ノ生物學的作用、(3)鹽酸「カルバイン」鹽酸「カルバイン」酸及鹽酸「カルバイン酸エチールエステル」ノ培養赤痢「アメーバ」ニ及ボス作用、(4)檳榔種子有效成分「アレコリン」ノ藥物學的研究並ニ二三副交感神經毒トノ比較、(5)「キニーネ」「キナ副アルカロイド」並ニ二三誘導體ノ家兎剔出子宮ニ於ケル伍用作用、(6)鹽酸「アレコリンノ」瞳孔ニ及ボス作用等あり。

△博士は臺灣新竹州舊栗郡舊栗街故邱月祿翁の次男にして、明治三十四年生る。學究的溫厚の紳士にして篤學者たり其の今日ある學歷は、博士の面目を語るに充分なり。而かも臺灣出身者の爲め氣を吐けるは大に壯とすべきに足る。年齒未だ三十有五歲にして少壯の意氣に燃え、今は專ら臺灣民間藥及阿片癮に關する實驗治療學的研究に沒頭して又他事を顧みず、希望ある獨特の領域に一路邁進しつゝあり。其の研究に對する態度の熱心にして眞劍なるは言はずもがな、意志堅實にして、一度び思ひ立ちたることは徹底的に成し遂げずば止まぬ氣象の人たるは、博士の長所として見逃すべからず。趣味としては運動及登山又は旅行等なり。臺北市大正町三ノ一六に住む。

◇

藤井 美知男　△新進なる藥物學者にして、今猶藥物の研究に專念沒頭しつゝある藤井美知男博士は、南滿醫學堂出身の篤學者にして、京大教授森島及び尾崎兩博士に就きて藥物學の蘊奧を究め、京都帝大より學位を獲得せる斯科界近來の少壯醫博也。殊に博士が年少二十八歲にて、學位を得たるは近年稀に見る所にして、如何に氏が頭腦明晰なるかを物語るに足る、而かも年齒未だ少壯にして潑剌たる研究心を有し、今猶精研に余念なき前途は、洋々として博士の將來を期待せらる。

△博士は大正十年南滿醫學堂を卒へ、直ちに同學藥物學教室に入り同十四年八月迄研究、同年九月以降京都帝大醫學部藥物學教室にて、森島、尾崎兩教授指導の下に藥物學研究、同十五年十二月學位を受領せり、爾來引續研究を續け今日に至る。

△學位主論文「胎生初期ニ於ケル鷄胎兒心臟ニ就テノ藥物學的研究」、參考論文、(1)副腎皮質「エキス」ノ作用ニ就テ、(2)副腎ノ解毒機能ニ關スル知見補遺、(3)「フラン」誘導體ノ藥物學的研究、第一、二、三報、(4)「プソイドエフエドリン」ノ藥物學作用並ニ「エフエドリン」「トノ比較ニ就テ、(5)「ヒドロストリキニーネ」ノ藥物學的作用並ニ其ノ「ストリキニーネ」ノ比較ニ就テ、(6)副腎結紮家兎ニ於ケル「ヒスタミン」血壓作用ニ就テ、(7)漢藥麻黃根ノ研究、(8)强心劑トシテノ君影草製劑ニ就テ、(9)新强心劑安息香酸「カルチウムカフエイン」ト實驗成績並ニ安息香酸「ナトリウムカフエイン」トノ比較、(10)日本醬油ノ研究、日本醬油ノ摘出心臟並ニ血管ニ及ボス作用ニ就テ、(11)日本醬油ノ食物消化ニ及ボス影響ニ就テ、(12)「デギタリス」藥ノ効力檢定法ニ就テ、(13)「デギタリス」新檢定法ト二、三製劑ノ檢定成績ニ就テ等。

△長野縣上高井郡須坂町藤井兼榮の三男にして、明治卅二年生る、年齒漸く三十有七歲、少壯の意氣に燃え、向學の精神潑剌たるものあり。眞面目なる學究的學者タイプの新人にして、研究に對する態度の眞劍なると、熱心にして徹底的に成し遂げんとする覇氣及び其努力は甚だ多とすべく、將來有爲の學究として囑望せらる所以知るべき也。因に醫博矢崎芳夫、同白鳥文雄とは姻戚の間柄なりと。京都市上京區等持院西町に住む。

◇

岡西爲人　△滿洲醫科大學講師にして藥物學を講じつゝある岡西爲人博士は、南滿醫學堂出身の秀才にして戸田銀三郎博士に就て內科學を專攻し、久保田晴光博士に就て藥物學を專攻せり。昭和七年以來は滿大東亞醫學研究室に立籠つて、專ら漢方醫學の科學的研究に沒頭しつゝある篤學の士にして、學位は滿洲醫大より獲得せる少壯醫博として其の存在を認めらる。殊に漢藥並に漢方醫書に就ては該博なる見識を有し、斯學に關する學識に至りては他の追隨を許さず、將來有爲の學者として最も囑目せらるゝ一人物として玆に推奬する所以也。

△學歷よりすれば、大正三年武庫佛敎中學在學中同校閉鎖により退學、同四年九月南滿醫學堂に聽講生として入學、同八年同校成規の學科修了、同八年より十年迄大連醫院にて內科學研究、同十一年より十三年迄上海大谷光瑞氏邸にて學生の衞生監督旁々、月刊雜誌「大乘」經營、同十三年三月南滿醫學堂副手、同十五年五月同助手、昭和四年七月滿洲醫大助手、同六年同大學專門部講師兼務、同七年五月以來同大學講師として就任今日に至る、斯間同九年九月學位を授與せらる。

△學位主論文は「胡蘆蓙ノ研究」にして、參考論文として、(1)「ヴェチーヴェル」油ノ藥物學的作用ニ就テ、(2)「バラネシン」ノ局所麻醉作用ニ就テ、(3)白檀油「ヴェチーヴェル」油及ビ松葉油ノ二三藥物學的作用ニ就テ、(4)「プリン」誘導體ニ屬スル二三ノ藥物ノ作用、(5)「プソイドエフエドリン」ノ利尿作用ニ就テ、(6)北支那ノ常用漢藥（支那文）、(7)支那ノ藥舖ニテ用フル漢藥ノ名稱ニ就テ、(8)丹方ノ來歷並ニ其種類ニ就テ（支那文）等あり。著書、(1)和漢藥標本目錄（久保田晴光共著）、(2)中國醫學書目（黑田源次共著）等。

△感想に曰く「匆急の間に纒め兼ねます。私個人としては漢方醫學が實際治療界に對して何等かの貢獻を有するか否かに拘らず、此の數千年の歷史を有つ偉大なる事實、此の漢方醫學の將來の科學的研究に對し幾分でも貢獻し得る樣自分一生の仕事として何等かの體系を作り得ればと念願してゐます」云々。此の一生面に對する研究家としての熱心と眞劍さが窺はる。氏の出身地は廣島縣安佐郡福木村字馬木にして、岡西德太郎の長男、明治三十年生る、當年漸く三十有九歲、學究的少壯の紳士にして、又熱心なる研究家としての人格者也。讀書家にして書見を唯一の趣味とす。今は雅號を用ゐずと雖も、嘗て「大乘」では光瑞氏より頂いたる「根淵竹孫」といふペンネームを用ゐたることあり性來眞面目にして忍耐力に强く、獨りでコツ〳〵やつて行き、徹底的に成遂げずば止まぬ長所あり、從つて社交的の外交は下手の方なり。奉天稻葉町二に住む。

◇

矢尾太郎　△京城齒科醫專敎授に矢尾太郎博士あり、藥理學擔任にして學生指導の爲め常に敎壇に起ち、熱誠克く諄々として說き倦むことを知らず、今や同校幹部の一人物として重要せらる。氏は大阪齒科醫專出身の篤學者にして、京城帝大敎授杉原德行博士に就て藥理學を專攻し、京都帝大より學位を獲得せる名醫博中の新人也。殊に博士の最も得意とするは、藥理學中鎭痛劑に關するものにして、此の領域に關する限り敢て人後に落ちず、該博なる學識と共に嶄新なる知見を有し、旣に學界に其學問的存在を認めらる、將來有爲の少壯學者として其の前途を囑目すべき也。

△學歷より見たる博士は、岡山中學（大正八年）を經て、同十一年大阪齒科醫專卒業、同十二年京城醫學校敎員拜命昭和四年京城齒科醫專敎授拜命、同九年九月學位受領今日に至る。

△主論文は「齒痛鎭靜ニ關スル實驗的研究」にして、(1)實驗的齒痛制止作用ヨリ觀タル阿片「アルカロイド」ノ鎭痛効力ト化學構造トノ關係ニ就テ、以下七篇より成る。參考論文としては、(1)齒牙發育ニ及ボス交感及ビ副交感神經毒ノ影響ニ就テ、以下八篇あり。就中「齒痛鎭靜ヨリ觀タル中樞性鎭痛藥ノ效力比較ニ就テ」は博士會心の作にして、

最も重要せらるゝ論文と見るべき也。

△感想に曰く「吾人は醫者又は醫師でなくして醫人となり度いと常に思つて居ります。だからもう少し進んで御互に人間的修養を積んで所謂人に成り度いと思ひます」云々。氏の出身地は岡山縣都窪郡庄村日畑にして、矢尾雄吉の長男、明治三十二年生る。年齡漸く三十有七歳、學究的少壯の紳士也。淸靑は其號にして、俳句を能くし、寫眞と考古學とを趣味す。又讀書家として知られ、克く讀み、克く書く事を唯一の樂しみとせり。賦性謹直にして、志操堅實、研究に對する態度は眞劍にして、熱あり力あるところに博士の長所が見出さる、精研に餘念なき前途は猶洋々たり、切角の努力奮勵を祈るや切也。朝鮮京畿道高揚郡漢芝面新堂里三七八に住む。

◇

小林芳人　△助教授として東京帝大醫學部藥理學教室に新進の小林芳人博士あり。東京の人、明治三十一年生、東大系の藥理學者にして、大正十三年卒業後、直ちに附屬病院に勤務、同十五年藥理學教室に轉じ、學位論文、『「デキタリス」葉有効成分の生物學的研究』を完成して、昭和六年六月母校より學位を受領し今日に至る。年齒未だ少壯、孜々として精研に余念なき前途は洋々たり、將來有爲の少壯醫博として折角の努力發奮を望む。麻布區霞町一に住む。

◇

近藤治三郎　△陸軍科學研究所に所員として、化學兵器に關する權威たる陸軍三等軍醫正近藤治三郎博士あり氏は愛知醫專出身の生理化學者にして、又藥理學者として知られ、特に氏のも最も得意とする化學兵器に至りては他人の追隨を許さず、陸軍科學界切つての重要なる學究の人たるは既に識者周知の如し。學位は京都帝大より獲得せる斯科界稀有の醫博として其の深邃なる學識を認められ、一科學者として精研修養相俟つて人事の最善を盡し、陸軍科學界將來の爲め、至誠以て報國の念に燃え、努力勵精日も尙足らざるの概あり。

△氏の學歷及び閱歷を略述すれば、明治四十五年三月愛知縣立豐橋中學校卒業、大正六年三月愛知醫學專門學校卒業、同年十二月陸軍三等軍醫に任官、爾來軍職に在り、昭和二年十一月京都帝國大學より學位を授與せらる、現在陸軍三等軍醫正、正六位勳四等にして、頭書の現職に在り。斯間京城醫學專門學校長佐藤剛藏博士、京城帝國大學醫學部教授杉原德行博士指導の下に專ら生理化學及び藥理學を研究せり。

△學位主論文は「朝鮮人蔘ノ制糖作用ニ就テノ研究」にして參考論文八篇あり、(1)大蒜ノ生化學的研究、外七篇。他に化學兵器に關する論文三十餘篇あるも、何れも軍秘に屬するを以て其題目は玆に省略す。

△感想に曰く『化學兵器の研究を始めてから將に十年にならんとして居るが研究の當初は其の正體が不詳なりしを以て恐怖心を抱いて居つた今から考へると幼稚なものであつた、醫學的研究は是から「シツカリ」やらねばなるまい』云々。

△出身地は愛知縣寶飯郡豐川町大字麻生田にして、明治二十四年山本善三郎の三男に生れ、大正三年近藤家に入る。軍人タイプの雄々しき風貌に威嚴を具へ、志操堅固にして、思想健實なる人格者たる學究的紳士也。その今日ある閱歷は既に博士の前半生史よくこれを語りて餘蘊なからしむ。壯齡漸く不惑に入る七、體軀健康、元氣益々旺盛にして潑剌たる研究心を有し、今は最も壯熟時代にて活躍の全盛時に在り。學究以外の趣味としては尺八を好み、書道を能くす、琌川は其號也。高知市立城西病院長近藤東一郎博士は義弟にして、家庭には妻との間に二男二女あり。東京市板橋區小竹町二三七九に住む。

◇

松田勝一　△新進の藥理學者にして、東大派の一勢力と見るべき松田勝一博士は、現に東京帝大醫學部助手に

して、日本醫科大學及び日本齒科醫學專門學校講師として、專ら此方面に活躍し自己の研究に努力邁進しつゝあり。年齒未だ少壯にして、潑剌たる研究心を有し、教壇に起つやその蘊蓄せる學識を披瀝して得意の辯を振ひ、若き意氣と熱と力とを以て克く學生を指導す。研究室に在りては眞摯なる態度を持して、徹底的に自己の研究を遂行せずんば己まざる氣慨を有す。將來有能の學究として囑望せらるゝ所に、氏の尊き使命ありと云ふべし。

△氏の學歷及び閱歷を概括して見れば、第一高等學校を經て、昭和三年東京帝國大學醫學部を卒へ、卒業後泉橋病院外科勤務、同四年より東京帝大醫學部藥理學教室に入り今日に至る、途中同醫學部島薗內科教室に二ケ年在勤し、同十一年六月學位を受領す。斯間主として原勇之助教授(外科)、島薗順次郎教授(內科)、林春雄教授、田村憲造教授、東龍太郎教授(以上藥理)の指導を受く。

△學位主論文は「副交感神經末梢毒ノ心臟作用ノ本態ニ就テ」にして、參考論文なし。

△感想に曰く「現代の醫學界がもつと明朗でありたいと思ひます。所謂學閥なるものが人々の意識から消へて欲しいと思ひます。研究室の間に緊要な提携研究が行はれて欲しいと思ひます」云々。

△東京市世田谷區玉川町一五九四に本籍あり、松田三郎の長男にして、明治三十七年松山市に生る。純眞なる學者肌の人にして、志操堅實、物事に熱中する性質にて、研學上と言はず私生活と言はず、考へたる事は貫徹する迄飽まで實行す。人に對しては敢て城壁を設けず、自抑淡々として衒はず、人に厚うして己を虛うする謙遜なる態度は、自ら敬慕の念を深からしめ、人に親しまるゝ德を有す。學究以外には運動を趣味とす、禁酒、禁煙にあらざるも自ら嗜まず、常に人格の修養を心掛け自ら品性の陶冶に力む。春秋猶頗る豊富にして前途洋々たるの秋、折角の自重加餐を祈るや切也。東京市世田谷區三軒茶屋町一〇六に住む。

解剖學科

比較解剖學科、組織學科、細胞學科、胎生學科

富田朋介　△大阪帝大醫學部の中堅、解剖學第三講座主任教授富田朋介博士は、大阪醫大出身の年壯學者にして、今や斯學の椎威として重きを爲す一人物也。嘗て獨逸に留學し伯林工業大學膠質化學教室にてトラウベ教授指導の下に二三業績を發表し、次でキール大學解剖學教室にてメツレンドルフ教授に就て斯學の蘊奥を究めたり。其の學位主論文は生殖腺機能の體質に及ぼす影響を闡明せるものにして、母校より學位を獲得せり。鴻大なる本論文は、如何に精研の該博なるかを語るものにして、其の學問的價値は既に學界に定評あれば敢て贅せず。多年其の蘊蓄を傾倒して一意專心學生の指導に精進し、一路邁進、唯だ至誠以て公に奉じ、醫育と學術の研究に沒頭して亦他事を顧みざるの概あり。

△學歷よりすれば、山口縣興風中學校を經て、大正五年大阪醫大を卒へ、直ちに同大學助手に任じ病理學教室に勤め同七年教授囑託となり解剖學教室に轉じ、同九年任公立大學助教授、同十二年解剖學研究の爲め歐米へ留學を命ぜられ、主として獨逸にて研究し同十四年歸朝す、同年一月學位受領、次で任大阪醫大教授、解剖學擔任、學制改革の結果、大阪帝大教授となり今日に至る。

△學位主論文は「生殖腺ト體質トノ關係ニ就テ」にして、參考論文は、(1)生及死結核菌ニヨル「モルモツト」ノ「ツベルクリン」過敏性ニ就テ、(2)生及死結核菌ニヨル家兎ノ「ツベルクリン」過敏性ニ就テ、(3)精子ノ自働的上行性ニ就テ、(4)「ツベルクリン」注射ニ因ル家兎「モルモツト」ノ「ツベルクリン」過敏性ニ就テ、(5)人結核菌ニ對スル各種動物(「モルモツト」家兎、山羊、犬「ラツテ」鷄)ノ反應的病變ノ差異、他に九篇あり。

△山口縣厚狹郡厚南村富田松太郎長男、明治二十四年生る。篤學者にして其の今日ある閲歴は、既に博士の前半生史に燦として輝き、博士の面目を語るに充分也。學究的學者タイプの好紳士にして、恰幅よく凛々しき風貌に威嚴を存し、又溫情の掬すべきものあり。年齒漸く不惑に入る五歳、年壯氣鋭にして學識、識見、人格共に益々圓熟の佳境に入る。人と爲り謹直にして篤實、謙遜にして偏に恩師先輩の助力を說き、自己の才學を衒ふ風なく、淡々として己れを虛うし、後進に對し學生を待つに懇篤能く愛撫す、學壇の人として其の態度の眞摯にして紳士的なるは、其の人格を敬慕せしむ。讀書家にして研究以外精神の修養に力め、又た能く遠足して心身の健康を保つ。兵庫縣伊丹町に自宅あり。

◇

安達島次　△臺北醫專教授安達島次博士は有名なる解剖學者にして、久しく臺灣總督府醫學專門學校に職を奉じ、教壇に起ちて終始一貫、至誠以て學生提撕の爲め諄々說いて倦まず、其眞摯にして溢るゝばかりの熱情は、常に學生間の敬慕する處にして、同校の中堅として內外の信望極めて厚し。今や斯學の權威としてその今日ある博士のプロフェションより打診すれば、新潟醫專系の基礎醫學者としての篤學は、當世博士界中に一段の光彩を放ちて見ゆ。△顧みて其の學歴及び閲歴を概括すれば、新潟縣立新發田中學を經て、大正四年新潟醫專を卒へ、同五年二月京都帝大醫科大學助手拜命、同八年四月臺灣總督府醫專教授に任ぜらる、同十三年五月歐米出張を命ぜられ、主として各教室の視察と文獻涉獵をなす、其間同十四年四月京都帝大より學位を受領し、同十五年四月歸任今日に至る。△學位主論文は「臺灣蕃人ノ顏面筋ニ就テ」研究せるものにして、蕃人の顏面筋は歐洲人及び蒙古人より原始的の狀況を示すものなりとの結論を得たり。參考論文は、(1)日本人腎臟ノ外形及位置ニ就テ、(2)日本人ノ足蹠淺在動脈、(3)顏面筋ノ皮膚ニ於ケル起終及ビ分布狀況ノ顯微鏡的研究ニ就テの三篇なり。他にも論著夥多、枚擧の遑なし。△感想に曰く「文化の發展は學者の研究に俟たざる可らざるは周知の問題なり、現在日本の學者は果して惠れ居るや余は當局者の學者優遇に今一段留意せられん事を望むと共に學者の業蹟發表に對し殆ど無料にて多くの業蹟の發表可能なる機關の設立を切望して止まず」云々。同感の士、獨り博士のみと思はれざる也。

△新潟縣北蒲原郡紫雲村の人、明治二十四年生れにして、當年四十有五歳也。年壯鋭氣、學究的好學の士にして、臺灣醫育界の爲め多年貢獻する所あり、其功績は言はずもがな、博士の勞を多謝し、猶向後の努力盡瘁に待つもの益々切なるを想ふ。而して其平生を見るに、多趣味のなかにも將碁を第一とし、又克く讀書して今猶精研に餘念なし。若し夫れその性行に至りては、學者として毫も倨傲尊大の態度見えず、人に對するに穩健にして同情に富み、應答禮を重んじて時務に缺ぐことなし、其の人格の溫雅、崇高なるを仰望せしむるの德を有す。臺北市千歳町二ノ二八に住す。

◇

小池敬事　△千葉醫科大學解剖學教授小池敬事博士は東大系にして、嘗て解剖學研究の爲め歐米へ留學し、歸朝後千葉醫大へ論文を提出して學位を獲得せり。學位論文は「ジヤワ」產蝙蝠の胎兒二十三階段につき、先づその外體形の變化形成を順を追ふて描寫して二枚の「タ―フェル」にのせ、擴大は凡て五倍又は十倍とせり、次に胎兒の外體形の形成を精細に觀察して之れを記載し、更に各胎兒の連續切片を製作して之れを鏡査しその諸器官の發生程度を表として記載せり、最後に以上小蝙蝠にて得られたる所見を豚鹿「タルジウス」等の他哺乳類のそれと比較研究して、その同異を論ぜるものにして、『「ジヤワ」產小蝙蝠「スコトフイルステンミンキー、ヘスフイルド」ノ外體形ノ形式並ニ諸器官ノ發生程度ニ就テ』と題する主論文これなり。外に參考論文「大動脈弓ヨリ起レル左椎骨動脉ノ破格三例」の一篇あり。

△埼玉縣大里郡久下村に本籍あり、明治二十二年群馬縣伊勢崎町に生る。大正三年東京帝大醫科大學卒業後、直ちに任同大學助手、同年十二月南滿醫學堂教授に任命せられ、同五年十一月辭して再び東大に入り副手囑託、同七年十二

月任新潟醫專教授、同十年七月歐米留學、同十三年三月歸朝、同時に任新潟醫大教授、同年十二月千葉醫大教授に轉任、解剖學を擔任して今日に至る、同十四年七月學位を授與せらる。

△讀書家にして書見を業餘の樂しみとし、運動に多大の興味を有す。千葉市寒川八八三に住む。

◇

望月周三郎　△慶大醫學部解剖學教授望月周三郎博士は、獨り學內に於ける重鎭たるのみならず、今や解剖學界に重要せらるゝ一權威たるは言を俟たず。博士は京大系大正八年組の一秀才として知られ、京大助教授井上硬、昭和醫專教授內村良二、京大教授木村廉、熊本醫大教授萩原義雄、慶大助教授宮崎三郎、熊本醫大教授森茂樹等々の諸博士と同期生にして、恩師足立文太郎教授に就きて解剖學を專攻し、主論文「日本人頸靜脈ノ研究」及び參考論文、「日本人心髓靜脈の研究」其他を提出して、母校より學位を獲得せる斯科界の少壯醫博也。鴻大なる學位論文は如何に精研の明確なるかを語り、其の學問的批評は既に學界に定評あれば言はずもがな、大學卒業後三年間足立教室に於て恩師指導の下に研究を積み、十二年の秋講師として迎へられて以來、慶大の教壇に起ちて胎生學、組織學に次で得意の解剖學を擔任し、今や其の蘊蓄を披瀝し諄々として說くところに博士の貫祿を加ふ、春秋に富む博士の前途や洋々として輝かし。

△更に顧みて其の學歷及び閱歷を概括すれば、二高を經て、大正八年京都帝大醫學部を卒へ、直ちに足立解剖學教室に入りて、足立教授指導の下に研究に從事し、同十二年秋迎へられて慶大醫學部講師として赴任し胎生學を分擔す、同十四年八月學位受領後、同大學教授に進み解剖學教室次席たり、以て今日に及べり。

△博士は千葉縣船橋町の出身、明治二十五年生る。大正八年元京都府立醫學專門學校長望月惇一博士の養子となり、昭和五年養父の死亡に依り家督を相續す。眞面目なる學者肌の人にして、好きな解剖學者としての特徵を有す、學者タイプの風貌の持主にして、凜々としたところに威嚴を存し、豐頰の裡に謹嚴そのものゝ性格を表し、眞乎純正なる品格を備ふ。今は分別盛にて年齒漸く不惑有四、年壯の意氣益々壯にして潑剌たる研究心を有し、學識、識見、人格共に圓熟の佳境に入る。志操堅實、卒直にして終始一貫學問に精進し、至誠以て天職に奉じ、醫育の爲め渾身の努力を捧げんとす、蓋し基礎醫學者としての態度の眞劍味あるは甚だ多とすべき也。性來謙遜にして偏に恩師先輩の助力を說き、己れを持するに自己の才學を衒はず、淡々として己れを虛うし人に厚く、克く後進の面倒を見學生を愛撫す。研究上の趣味として、ポノグラフの蒐集家として著名なるは同僚の間に知られ、秘藏の珍品は東大に於けるその道の大家緒方知三郎教授と相對して、學界の双壁を以て推さると云ふ。東京市赤坂區靑山南町二ノ三二に住む。

◇

石澤政男　△石澤政男博士の名聲は獨り九州帝大教授としてのみならず、解剖學界現代の權威たる一人物たるに耻ぢず。九大系の新進にして、解剖學特に細胞學及び組織學者として知られ、嘗て獨、佛、米國に留學して研鑽大に得る所あり、學位は母校より獲得せる少壯醫博也。學位論文は精細の研究、觀察の知見に依つて動植物細胞核染色質性構造の理を論述せるものなり。今や蘊蓄せる該博なる智識を披瀝して母校の教壇に起ち、至誠一貫、十年一日の如く孜々として學生の指導に努め、九州帝大の威權を擴大ならしむる上に負ふ所尠しとせず。

△博士は一高を經て、大正七年九州帝大醫科大學を卒へ、直に任同大學助手、解剖學教室勤務、同十一年八月任九州帝大助教授、同十二年五月文部省在外研究員として獨、佛、米國に留學を命ぜられ、二ケ年間佛國巴里大學組織學教室プルナン教授の下に細胞學及び組織學研究、約一ケ年間獨逸伯林に滯在、伯林大學其他にて研學、諸國を巡遊視察して同十五年十月歸朝、同時に任九州帝大教授、解剖學講座擔任、昭和二年三月學位受領、以て今日に至る。

△學位主論文「細胞核ノ研究」(1)細胞核ノ形態學的構造ニ關スル研究、(2)細胞核ニ於ケル染色質ト核小體質トノ關係

ニ就イテ、(3)細胞核ノ形態ニ關スル研究其一、二、三、(4)「カリオメーレン」構成ニ就テ、參考論文、(1)「ラツテ」及ビ「マウス」ノ精子ノ發生並ニ其構造ニ關スル知見補遺、(2)人ノ肥大增殖性肝細胞核內ニ現ハルヽ所謂核小體性小胞 Vacuo'es nucléolaires ニ就テ、(3)豚胎兒肝細胞ニ於ケル「コンドリオゾーム」ノ配列ニ就テ。他に論著夥多、枚擧の遑なし。

△栃木縣那須郡那珂村小川の人、明治二十七年生る。年齒漸く不惑に入る二歲、眞面目なる學者タイプの好紳士にして、少壯の意氣に燃え、殆んど唯一の趣味として學界に志し、殊に其の專門とする解剖學中特に細胞學及び組織學に多大の興味を集中して精研甚だ勉むる所あり。人と爲り謹直、清淡にして敢て衒はず、謙遜自抑して人に厚く、後進を親しみ學生を愛す。愛妻アイコとの間に二男一女あり、深町穗積醫博は義兄（妻の兄）なり。福岡市西新町汐入二〇六四に住む。

◇

高木純五郎　△廓清後の長崎醫科大學に解剖學教授として、高木純五郎博士あり。東大出身の解剖學者としての新進、嘗て獨、墺に留學するや、チューリツヒ大學腦解剖學教室及びウヰン大學神經學教室に於て研鑽せり、今や多年蘊蓄せる學識を有し、識見に富む。

△博士は岡山縣小田郡新山村の出身、明治二十九年生る。鄕里の新山村立小學校、岡山縣立矢掛中學校、六高を經て大正十一年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部副手として解剖學教室に勤め、同十二年七月文部省在外研究員として渡歐、同十四年十月歸朝す、同年十二月任長崎醫大教授、解剖學擔任を命ぜらる、昭和二年五月學位受領、以て今日に至れり。主論文は「前庭神經三角核ノ比較解剖學的研究」（獨文）にして、參考論文なし。長崎市夫婦川町六六に住む。

◇

江崎四郎　△慶大醫學部助教授にして解剖學を講じつゝある江崎四郎博士は、慶大第一回の卒業生にして、嘗て米國ロツクフエラー研究生として米國に留學し、後又慶大留學生として歐洲に留學し、斯間シカゴ大學マキシモウ教授、同大學クリー教授、コーネル大學チエムバース教授、トリノ大學レヴイ教授等に就て解剖學及び組織學の蘊奥を究め、歸朝後は主として恩師岡島敬治教授の指導を受け、母校より學位を獲得せる少壯有爲の學者として、慶大學府に其將來を最も囑望せらるゝ新進人物也。

△博士は大正十二年慶大醫學部卒業、直ちに同大學解剖學教室助手、同十三年同大學特選研究生となり、同十四年同大學助教授に任ぜらる、同十五年ロツクフエラー研究生として米國に二ケ年半間留學、昭和三年慶大留學生として歐洲に一ケ年餘留學、同五年五月學位受領、以て今日に至る。

△主論文「組織培養ニヨリ生ジタル神經原纖維ノ確實ナル染色法」（英文）、及「組織培養ニヨル神經組織ノ新研究」（英文）、參考論文「睾丸間細胞ノ組織培養」其他による研究等三篇あり、何れも獨逸文の原著なり。「組織培養」に關する研究は博士の最も得意とせるもの也。

△東京市淀橋區東大久保町に本籍を有し、明治二十九年生る、故法博谷野格の弟也。年齒漸く不惑に達し、頭腦明晰にして、熱心なる研究家たるを想へば、洋々たる前途の大成期して待つべきものあらん。同時に又米國流の薫陶を受けたる紳士的學者としては、須く胸襟の大量なるを示し、餘り小事に拘泥せざらん事を望むや切也。神奈川縣鎌倉町扇ケ谷六六六に私邸あり。

◇

鄭壹千　△京城セブランス醫專解剖學教室講師たる鄭壹千博士は、京城醫專出身の秀才にして、京城帝大醫科續篇（解剖學科）

教授津崎孝道博士に就て解剖學を專攻し、特に比較解剖學の造詣深く、學位主論文、(1)腸管ニ於ケル所謂黃色細胞ノ形態學的研究補遺、(2)腸管ニ於ケル所謂黃色細胞ノ發生學的研究補遺、外參考論文和文一篇及び獨逸文五篇を提出して、京城帝大より學位を獲得せり。年齒未だ少壯にして潑剌たる研究心を有し、精研不倦、孜々として自已の研究に精進しつゝある前途は洋々たり、將來有爲の學究として囑目せんとす。

△學歷より觀たる氏は、京城中東學校を經て、昭和三年京城醫專を卒業し、同年京城帝大醫學部解剖學教室助手拜命、同九年五月同助手辭任、同時に京城セブランス醫專解剖學教室講師を被命、同年十一月學位を授與せられ今日に至る。氏は朝鮮慶尙南道昌原郡熊東面所沙里の人、鄭仁澤の長男にして、明治三十九年生る。年齒未だ三十歲、少壯の意氣滿々として向學の精神に燃ゆ、學者肌の仁にして意志堅實也。今は醫育と研究とに一路邁進し、希望ある將來に向つて貴き使命を果すべく努力奮勵しつゝあり。研究以外の趣味はスポーツにあり。朝鮮醫學界のため、切角の精研活躍あらん事を翹望して止まず。京城府昌信羽六三三ノ七號に住す。

◇

小池上　春芳　△醫大助教授團中の最少年たる小池上春芳博士は、新潟醫大助教授として淸新の氣勢を昂げ、母校の教壇に起ちて得意の解剖學を講じつゝあり。卽ち氏は新潟醫大出身の解剖學者にして、特に神經系統の解剖に多大の興味を有し造詣する所深し。學位は母校より獲得せる新博士中の一異才にして、將來有爲の少壯學者として最も囑望せらるゝ新智識也。

△學歷より觀れば、昭和五年新潟醫大卒業後、直ちに同大學解剖學教室助手となり、同九年三月同大學助教授に任ぜられ、同十年一月學位を授與せられ今日に至る。斯間恩師平澤興教授指導の下に學位論文を完成せり。主論文は「特ニ各部間ノ相關關係ヲ顧慮セル邦人大腦外側面ノ形態學的知見補遺」にして、原著は獨逸文なり。參考論文としては(1)ふな(Carassius Carassius L.)ノ眼筋運動神經核及ビソノ神經纖維ノ腦內走行ニ就テ、(2)大腦作用ニ關スル諸說ノ歷史的考案並ニ大腦局在問題ノ現況概觀(平澤興共著)、(3)「ボレンツェフアリー」ヲ有スル興味アル一例(平澤興共著)其他獨逸文原著三篇あり。

△新潟市上大川前通八番町小池上春五郎の四男にして、明治四十年生る、年齒未だ二十有九歲の少壯也。最少年を以て其の今日あるは、如何に氏の頭腦の明晰なるかを物語るに足り、向後の努力精研と相俟つて、洋々たる前途は氏の將來を卜するに綽々たる餘裕あるを囑望せんとす。文學趣味の人にして俳句を能くし、小說、演劇類を好む。新潟市上大川前通八番町一二五八に私邸あり。

◇

小野　直治　△長崎醫大助教授にして解剖學を擔任しつゝある小野直治博士は、長崎醫大派の一新勢力と見るべき新進の解剖學者にして、特に神經解剖を最も得意とする名醫博として其の學識を認めらる。而かも年齒未だ少壯にして精研に余念なく、潑剌たる前途は猶頗る春秋に富み、將來有爲の學究として大に囑望すべき也。

△氏は昭和五年三月長崎醫科大學卒業、同年四月長崎醫科大學助手拜命、同拾年二月醫學博士の學位獲得、同拾年三月任長崎醫科大學助教授。此間、長崎醫大教授高木純五郎博士に就て解剖學を專攻せり、特に神經解剖の造詣深し。

△學位主論文は「脊髓神經根ノ形態ト其支配部位ノ關係ニ就テノ研究」にして原著は獨逸文なり。參考論文は、(1)猫脊髓神經纖維ノ數的關係ニ就テ、(2)脊髓神經根束ノ形態ニ關スル研究補遺、(3)脊髓神經起始細胞ノ體節解剖學的研究、(4)尾椎部退縮ヲ顧慮シテ觀タル脊髓ノ長サ並ニ位置ノ關係ニ就テ、等なり。氏の論著中「脊髓神經ノ研究」は博士會心の作にして最も得意とせるもの也。

△高知縣吾川郡池川町土居の人、小野直樹の五男にして、明治三十七年生る。年齒未だ三十有二歲にして、少壯の覇

氣に燃え、熱心なる研究家として知られ、純眞なる學者肌の人也。志操堅實にして物に動せず、教壇に起つや熱誠克く學生の提撕に力め、能く人を容れ能く後進を愛撫す。今は醫育と研究とに全力を注ぎ大に將來に俟つ所あらんとす。至囑々々。長崎市山里町二〇一に住む。

◇

高木耕三　△大阪帝大解剖學教授高木耕三博士は、大阪府南河內郡藤井寺村字岡、岡田喜十郎三男、明治二十五年生にして、大正七年三月京都市東洞院御池上ル高木克敬に入籍改姓す。大阪府立八尾中學校を經て、明治四十三年四月大阪府立高等醫學校豫科入學、大正五年七月府立大阪醫科大學卒業、同年九月任同大學助手、同九年五月任公立大學助教授、大阪醫科大學助教授に補せらる、同十一年一月歐米各國へ出張を命ぜられ、同十三年十月一日歸朝、同十四年二月大阪醫大より學位受領、同年七月任公立大學教授大阪醫科大學教授に補せらる、次で官制改正の結果大阪帝大教授となり今日に至る。專門は解剖學にして殊に細胞學を得意とす。

△學位主論文は「犬甲狀腺ノ細胞學的研究」にして、原著は獨逸文なり、他に參考論文として獨逸文の原著二篇あり他に論著夥多。野外運動を趣味す。解剖學界の權威たる學者也。其の今日ある輝しき閲歷は、既に博士の前半生史よくこれを語りて余蘊なく、大學卒業後、終始一貫して母校の爲め奮盡努力し、既にして教壇の人となるや、多年の蘊蓄を披瀝して熱誠克く學生を指導し大に將來に俟つあらんとす、蓋し大阪醫大派の爲め氣を吐ける代表的學者として敬意を表すべき也。高木義敬博士、藤村元張博士とは親戚也。西宮市安井三九に住す。

◇

森於菟　△解剖學の權威、特に比較解剖學及び比較發生學の大家として現代學界に重きを爲す森於菟博士は、臺北帝國大學教授にして、醫學部に解剖學第一講座を擔任しつゝあり。氏は東京帝大出身の醫學士及び理學士にして、久しく母校に於て醫學部教授大澤岳太郎博士、並に理學部教授五島清太郎博士指導の下に研究を續け、東京帝大助教授在任中、歐米に留學し、特に伯林大學教授 Graf Haller 博士に師事して比較發生學を專攻せり、歸朝後魚類の頭骨發生に關する研究論文を母校に提出して、學位を獲得せる基礎醫學者として學界に其の學識を認められ、爾來餘念なき研鑽と不斷の修養と相俟つて、益々專門的學識の深奥を究めて餘す所なく、今や多年の蘊蓄を傾倒して專心學生指導の任に當り、年壯の意氣と熱と心とを以て、至誠一貫、輝しき臺灣醫學界の爲め重大なる責任を擔ひ、將來大に期する所あらんとす。

△顧みて氏の學歷及び閲歷を概括すれば、明治三十八年九月獨逸學協會中學校卒業、同四十二年七月第一高等學校三部卒業、大正二年十二月東京帝國大學醫科大學醫學科卒業、同八年七月東京帝國大學理學部動物學科卒業、同年同月任東京帝國大學助手、同十年十二月任東京帝國大學助教授、同十一年三月より十三年九月まで歐米滯在、特に獨逸伯林大學にて學び、同十五年八月學位を授與せらる、昭和十一年一月臺北帝國大學教授に任ぜられ今日に至る。

△學位主論文は『アカンチアス、ヴルガリス』ノ頭骨發生ニ就テ』にして原著は獨逸文より成る。此論文は比較發生學に屬し、魚類の頭骨發生研究なり。其後比較發生學に關するもの數種あり。又最近は人類體質研究の一部として皮膚毛髮等に關する調査を日本人、アイヌ人、臺灣人、臺灣蕃族等にて廣くなし、既に數種の論文を發表せり(題名略)。

△感想に曰く「余豫て思ふ。基礎醫學の教授たるものは、學生を教養あるよき醫師たらしむべく最善の努力を致し、教室を統制指導する外に、一教室を基礎として自ら絶えず學術を研鑽、常に學界の進歩に寄與する覺悟なかるべからずと。余最近漸く一教室に專心するを得、其地は僻遠なりと雖も有爲なる同僚の和親と眞摯なる學生の協力とを得て異色ある新大學の設立に力を致す。其喜何者か之に若かん」。

△氏の亡父、故鷗外森林太郎博士は既に世人周知の如く、一代の大醫學者にして、明治、大正の文壇に於て最も純粹

なる創作家たり、評論家として大文豪たるの名を擅にせることは、餘りにも有名にして著者の贅言を要せざるまでも鷗外博士一生涯の業蹟を集めたる一大記念塔として、十八卷より成る「鷗外全集」の外、「鷗外拾遺」及び「鷗外遺珠と思ひ出」等遺されたるもの、今猶世人の仰ぎ望む所なるを特筆し置くの要を認む。

△即ち氏は故森林太郎博士の長男として、明治二十二年東京市に生れ、東京市駒込千駄木町二十一番地に本籍を有す。於菟博士の隨筆には「解剖臺に凭りて」及び「屍室斷想及木芙蓉」等あり、殊にその内の一部たる「時々の父鷗外」の記事は、文豪森鷗外を理解するために甚だ重要なる文書として識者に認められ、ほかに「老の話」、「屍體の感觸」などの名文あり。氏の今日ある閲歴は既に博士の前半生史にある如く、思想穩健、清新にして純眞なる學者肌の學究として起ち、既にして其の學識、識見の該博なるは言はずもがな、終始一貫、その專門たる解剖學研究達成の爲め、一路邁進せんとする一世の純學者たるを多とす。親戚としては叔父東京帝國大學名譽教授小金井良精博士を筆頭に、義兄東京市城東病院長原素行博士、義兄日本赤十字社朝鮮本部小兒科醫長原弘毅博士等を擧ぐべく、家庭には妻富貴との間に五男あり、令妹小堀杏奴女史（洋畫家小堀四郎夫人）の文名は又文壇に知らる。臺北市樺山町二十番地に住む。

◇

瀬戸八郎　△解剖學の新進教授として學界に重きを爲す瀬戸八郎博士は、滿洲醫科大學解剖學教室に在りて專心學生の指導に精進しつゝ將來に期する所あり。學系より觀たる氏は、東北帝大派の少壯醫博として其の蘊蓄せる學識と、高潔なる人格とを認められ、純眞なる基礎醫學者として學界に指を屈せらる。氏の專門は素より解剖學なるが、特に氏の最も得意とする神經系統の顯微的研究に至りては、他人の追隨を許さずとの定評あり。

△氏の學歴及び閲歴を概括すれば、小學校、中學校、高校、大學は何れも鄕里仙臺にて、大正十三年春東北帝大醫學部を卒業するや、直ちに同醫學部解剖學教室に助手として入る、同十四年八月滿洲醫科大學解剖學教室に助教授として赴任、昭和七年秋より同九年秋まで獨逸へ留學、同十年十月母校より學位を授與せられ、同年同月教授に昇格現在に至る。斯間主として東北帝大布施現之助教授、滿洲醫大工藤喬三教授、獨逸ボン大學シュテアー教授の指導を受け解剖學を專攻せり。

△學位主論文は「人間心臟神經ニ關スル顯微鏡的研究」にして、參考論文は「鳥類ニ於ケル毛樣神經節及ビ之ニ出入スル神經ニ關スル解剖學的及ビ組織學研究」なり。

△感想に曰く「最近日本の醫學は長足の進歩をした事は事實でありますが、未だ世界を風靡する迄には相當の年月を要すると思ひます、やゝもすれば醫學は日本が世界一だなどと得意がる向もありますが大につゝしむべき事でせう」云々。

△氏は宮城縣仙臺市北三番丁一〇五瀬戸新三郎の八男にして、明治三十二年生の少壯也。眞面目なる學究肌の士にして、頭腦明晰、熱心なる研究家を以て知られ、物事に熱中すること人後に落ちず、何事も徹底的に成し遂げずんば止まぬ方なり、蓋し氏の長所と云ふべきも、時に或は短所となるやも測り難し。年齒未だ三十有九の少壯なれば、意氣滿々として向學的精神に充ち、今は最も活躍奮鬪の分別盛に在り。學究以外にはスポーツに多大の趣味を有し、特にテニスを好み、又洋樂を愛す。氏は故大谷周庵醫博の愛婿、實兄、義兄には瀬戸糾醫博、大谷彬亮醫博、宮城晉五郎工博、大谷周一醫博等を擧ぐべく、家庭には二男二女あり。奉天淺間町二に住む。

◇

安澄　權八郎　△大阪帝國大學醫學部助手として、第二解剖學教室に安澄權八郎博士あり。大阪醫大派の新進たる解剖學者にして、特に細胞膠質學を最も得意とす。氏の「細胞の膠質學的研究」たる問題に對しては、學術振興會

より三千圓の補助を受け、其の學問的價値を認められ大に學界に重要せらる。本研究は氏の學位論文たる等電位點を中心として、更に酸化還元電位(rH)に就て系統並に個體發生學的に研究を續行されつゝあり。氏の學歴及び閲歴より言へば、山口縣立豐浦中學校出身にて、大正十二年四月大阪醫科大學豫科入學、昭和六年三月大阪醫科大學卒業、同年三月同大學副手囑託、解剖學教室勤務、同年五月大阪帝國大學醫學部副手囑託、解剖學教室勤務、同年五月任同大學助手、同十一年一月學位受領。斯間富田朋介教授指導の下に解剖學專攻、特に細胞膠質學に最も興味を有し深く造詣する所あり。純學者肌の學究として熱心克く研究に精進し、今猶學究生活に安んじて精研に餘念なく、潑剌たる前途は洋々として氏の將來を語るものあり。

△學位主論文は「動物組織ノ等電位點ニ就テ」にして(1)原形質ノ等電位點測定方法及ビ「フォルマリン」ニ依ル家兎赤血球ノ等電位點、(2)各種動物の赤血球ノ等電位點、(3)横紋筋ノ等電位點ニ就テ、(4)赤血球ノ染色ニ及ボス固定液ノ影響ニ就テの四篇より成り、原著は獨逸文なり。外に參考論文(1)固定液ニ就テ(第一報)、(2)同上(第二報)(獨文)、(3)同上(第三報)、(4)神經軸索中ニ表ハル、「フロンマン」線ニ就テ(獨文)、(5)固定赤血球ノ等電位點ノ移動ニ就テ(獨文)(野田昌威共著)、(6)諸種動物ノ肝臟細胞ノ等電位點ニ就テ(梶村利男、田島あや子共著)、(7)蠑螈赤血球ノ超生體染色特ニ媒體ノ水素「イオン」濃度ヲ考慮シテ(獨文)(笠松曉、田島あや子共著)、(8)組織染色ノ學說ニ就テ、(9)動物組織ノ等電位點ニ就テ(獨文)、(10)赤血球核ノ等電位點ニ就テ(松本靜雄共著)等十篇あり。個々の細胞の等電位點を我國の唯一の武器たる染色方法に依り測定し、その淺染色度測定は氏の考案の「ロビーボンド、チントーメーター」に依る。細胞は老衰と共に等電位點は上昇する(即ち鹽基性側へ移動するものなりとの原形質老衰說を立つるを得たり。尙赤血球に就ては系統發生學的に興味ある成績を得たり　鳥類>爬蟲類>兩棲類>魚類　之系統發生學的に有意義にして、膠質學的に實驗證明されしは博士を以て嚆矢とす。

△感想に曰く「近時學會及學術雜誌に發表せらるゝ業績多しと雖も、その內容を見るに、木にたとふるなれば其の幹をさぐるに非ずして、徒らに只その末葉を瞥見して事足れりとの傾向あるを遺憾に思ふ一人なり」云々。氏の出身地は山口縣豐浦郡宇賀村にして、明治三十九年安澄文平の長男に生る。生來頑張りにて短氣なれば、一度び思立ちたる事は徹底的に成遂げずば已まぬ氣慨を有す。學究以外の趣味としては將棋位のものか。家族としては母堂一人あり。大阪市南區日本橋四丁目三七池田眼科內。

◇

今井倭武

△臺北帝大醫學部助手、兼同附屬醫學專門部助教授たる今井倭武博士は、小學校代用教員より發奮蹶起して、奮鬪力行、自ら自己の運命を開拓しつゝ苦學せる、立志傳的範を示すに足る篤學者也。學系より見たる氏は、東京齒科醫專出身の秀才にして、臺北醫專に次で臺北帝大醫學部に於て、多年研鑽の後ち我が解剖學界の權威にして臺北帝大教授たる安達島次博士指導の下に學位請求論文を完成し、京都帝大醫學部教授會審査の結果、學位を獲得せる新進醫博として其の新知見を認められ、現職に就任して以來、專心學生指導の傍ら自己の研究に精進しつゝあり。純眞なる學究の新智識として、洋々たる前途を嘱望せらる。

△氏の奮鬪的學歴及び閲歴の跡を顧みるに、氏は大正十一年三月新潟縣立新發田中學校を卒業して以來、同十三年三月迄小學校代用教員、保險會社、東京帝大理學部動物學教室等轉々して働き、同十三年四月東京齒科醫專に入學せるも同年十二月父の死亡に因り退學、一時母亡き家庭に於て弟妹の世話をなし、翌十四年四月東京齒科醫專に再入學、昭和四年三月同校卒業、此間學費の一部を得るために日本學術協會、東京帝大理學部動物學教室谷津教授及び田中助教授の許に働く、昭和四年三月臺灣總督府臺北醫學專門學校囑託となり、解剖學教室勤務、同八年十二月同校講師となる、同十一年四月官制改正の結果、臺北帝大附屬醫學專門部講師となる、同年五月京都帝大醫學部に於て學位論文通

過、同年七月學位を授與せられ、同年六月現職に就任す。斯間安達島次教授に就て專ら解剖學を研究す。

△學位主論文は「臺灣蕃人下顎ノ解剖學的並ニ人種解剖學的研究」にして、參考論文九篇あり、(1)涙腺ノ形態學的及ビ局所解剖學研究、第一報臺灣蕃人ノ涙腺ニ就テ、(2)臺灣蕃人眼球ノ大サ及ビ眼球筋、(3)臺灣猿ノ眼窠及ビ其內容ノ解剖學的並ニ比較解剖學研究、第一報眼窠、第二報眼球及ビ涙腺、第三報眼筋(前篇)、第四報神經及ビ血管、第五報毛樣神經節及ビ毛樣神經、(4)臺灣蕃人ノ舌輪廓樣乳頭ニ就テ、(5)臺灣猿及ビ人間幼兒ニ於ケル余ノ所謂角膜半月並ニソノ本態ニ就テ、(6)猫ノ毛樣神經節並ニ毛樣神經ノ解剖學的研究補遺、(7)犬ノ毛樣神經節並ニ毛樣神經ノ解剖學的研究補遺、(8)猫ノ眼筋及ビ眼窠內神經ノ解剖學的研究補遺、(9)犬ノ眼筋及眼窠內神經ノ解剖學的研究　等なり。

△感想に曰く『日本醫界の官僚化、學閥の弊を痛感す。出身校、學歷如何が將來の大半を支配する現狀では學問の飛躍等望むべくもあらず。「學問に專門はあつても專門家と云ふものはないものである」と云ふことを更めて味ふ必要がある』云々。

△氏は新潟縣北蒲原郡金塚村大字金塚五四〇今井石松の長男にして、明治三十八年本籍地に生る。苦學力行の篤學者として氏の今日あるは、既に博士の閱歷に輝き、燦然として氏の面目を語るに足る。純眞なる學者肌の性格にして、淸廉潔白、一徹者也。年齒未だ三十有三の少壯にして、向學の精神に燃え、潑剌たる意氣と共に切磋研學に餘念なく、精研修養相俟つて大に將來に期する所あり。幸に健康にして、爲學界、折角の健鬪と共に、希望ある前途の大成を祈るや切也。安達島次博士とは妻が姉妹の關係にあり、家族は妻春美との間に一男ありて良家庭を爲す。臺北市錦町九二に住む。

病理學科　法醫學科

小喜多　晴雄　△東京市四谷區三光町四三に新興せる「大日本私立生命創造學會」及び「小喜多生命創造研究所」あり、創設者は病理學界（特に癌研究者として）の權威にして、我邦最初の生命創造學者たる小喜多晴雄博士也。本會は長壽法、老衰豫防、癌豫防治療、重症、難症、原因不明の惡疾、痼疾、癈疾等、及び精神、信仰、信念に關する懊惱開發等の研究會を一括して總稱せる學術的研究會にして、「長く生きる事」を學術的に研究し、その研究の結果を自ら體驗し、更に進んで其の効果を普く他に及ぼす事を圖るを以て目的と爲すもの也。創設者たる小喜多博士をして言はしむれば「世界の文化史上の重大なる時期に遭遇しつゝある吾が日本國民は擧つて各自その保健と長生とに十分心掛くべき秋であります。然るに實際は吾が國民の保健と長生との問題に關しては、吾人の希望に反するが如き傾向が現はれて居まして、その結果は、吾が國民は短命に傾きつゝあるのであります。又一面に於て、國民の健康が十分に保持せられては居らぬ事を示して居ります。此の見地に於て識者は國家百年の大計として是等の國民衞生問題を解決して、吾人が目下共有する希望に一致せしめんと努力せられて居るのでありますが未だ實績が十分には擧つて居るとは申されません。然らば如何なる方法によれば吾が國民全體は現今の壽命狀態よりも、更に「長生」を爲し得る樣になるであらうか。此の目的を達する事は、各自が各個に「長生」を圖る事に依つてのみ望み得らるゝのであります。本會はかゝる日本國民が各自各個に「長生」の目的を達し得る樣に、個々の國民を指導し援助するを以て目的として生れたる學術的の機關であります」云々。博士や此の一生面を展開すべく、正しき信仰と最高の學術とに終始一

貫して此の目的を達成する爲め努力奮闘を續け、各方面の高官諸名士の協賛助力を得て着々事業の進行を見つゝあり。

△博士は大正五年千葉醫專卒業（金牌受賞）、同年九月同校病理學教室教務補助囑託、同七年九月依願解囑、同年十二月京都帝大醫科大學教務雇、病理學教室勤務を被命、同十三年七月京都帝大にて學位受領、同年十二月京都帝大醫學部講師囑託、同十四年七月日本病理學會並に癌研究會學術集談會の席上に於て癌研究會より受賞、昭和三年六月日米醫學交通委員會に於て北米ロツクフエラー財團のフエローシツプに推薦せらる、同四年四月同上委員會に於て、英語實力試驗に合格し渡米することに決定、渡米後は紐育市ロツクフエラー醫學研究所に赴き醫學及醫術の研鑽に從事することゝなり、同五年紐育市へ赴く準備の爲中華民國北平のロツクフエラー財團の東洋に於ける中心、私立北平協和醫學院のフエローシツプを受くることになり、同年四月より同院病理學教室に於て研鑽に從事す、主として支那人米國人、その他の外國人の材料を基とする同院提出の特殊研究問題二題を研究し之を完成せり、猶同院の依頼により「日本ニ於ケル醫育並ニ現今ノ醫學」なる演題の下に講演を行ひたり、同六年五月同院病理學教室の卒業者として登錄せられ、同年六月歸朝す、次で同八年三月京大講師在職の儘陸軍々醫學校囑託となり同校防疫研究室業務に從事し、翌八年官命に依り、滿洲國哈爾賓第十師團軍醫部附として派遣せられ、任務中病氣の爲め翌九年歸還依願解囑となる、同九年九月滿洲國皇帝陛下より建國記念功勞章を下賜せられ、同十年十二月滿洲事變の功に依り叙勲六等、瑞寶章及び金貳百五拾圓を授けられ、同時に從軍記章をも授けらる。爾來頭書の「大日本私立生命創造學會」及び「小喜多生命創造研究會」創設の爲め奔走盡力中なり。右御下賜金全部は本學會並に研究所の創設基金として保管し、永久　聖旨に副ひ奉るべき決意を公表せり。

△博士の專攻せる學科は病理學及病理解剖學なるも、從來の細胞病理學說にては博士の研究せる病理學の全態系を能く實際的に說明すること困難となり、且又不可能とさへなり來れるに依り、博士自己の研究の結果が指示する處に從つて最新病理學說を初めて提唱するに至れり、博士の相對病理學說は即ちそれにして、此の最新病理學說の序說及基本學說を述べて諸學說を劃立したるものが、即ち昭和六年十二月なり、從つて相對病理學中博士の特に得意とする科目としては、從來博士の獨創的のものにして、(1)「炎症性（狀）腫瘍樣」組織變化學〔原因學、分類學、病理解剖學、生物學「一般病理機轉」等〕。(2)惡性腫瘍學〔癌腫學、肉腫學、就中、原因學、病理解剖學、生物學、診斷學、豫防學、治療學〕。(3)生命創造學〔生物學的生命創造學說〕。(4)人體生命創造學〔人間各個人ノ生物學的生命創造學、長生學、八十五歲還歷說〕等々の科目に關聯する方面に存するものと見て可也。

△學位主論文は『可移植性鼠肉腫狀新生物ニ就テノ實驗的研究、特ニ可移植性鼠肉腫ノ實驗的發生ニ就テ（附表十四個附圖三表三十圖）』にして、參考論文は、(1)家兎ノ多發性瘍瘍ノ一例、(2)家兎ノ多發性腫瘍ノ一例（承前）、(3)大鼠ノ肝臟ニ寄生セル胞蟲囊胞壁ヨリ發生セル可移植性肉腫ニ就テ、(4)鼠肉腫ノ移植增殖ニ及ボス地理的影響ニ就テノ實驗的研究（藤繩共著）、(5)可移植性鼠肉腫狀新生物ニ就テノ實驗的研究（第二報告）、(7)極メテ稀ナル心臟異常ノ一例、心臟ノ發生發育異常ニ關スル知見補遺、(8)臨床上乳糜樣腹水ヲ伴フ結核性成膜炎（?）ト診斷セラレタル一患者ニ就テノ病理的解剖學的並組織學的研究、特ニソノ際見出サレタル病的增生組織ノ意義、外英文論著一篇あり。他に自著論文として大正八年十二月より昭和七年八月三十一日までに內外學術雜誌にて發表せるもの邦文、英文、獨文等壹百〇參篇あり。其後發表せるもの亦尠からず。

△博士は將來の抱負の一端を披瀝して曰く「私の將來の希望は我が提唱に係る相對病理學を完成し、此れを世界の病理學界の共有物とし度いことである。全世界の所有階級、所有社會、即ち病理學者、醫學者、醫師、醫學生及び其他一般人士に向つて最も適切なる方法を以て此の相對病理學を捧げ度いのである。相對病理學說の提唱者にして又首唱者たることを自覺し居る自分は、又本學說の忠實なる實行者でもあるのであるが、自分の體驗からしても、自分が日

本人の平均壽命の凡二倍位は長生出來ると自信して居る。自分以外の本學說支持者も同一の體驗並信念を披瀝して居る。私の將來の抱負は從つて此の相對病理學的生命創造說を地球上の總ての人の希望に全く同化せしめ主張を實現せしむることにある筈である。それは人として長生を願はぬ者は無いからである」云々と。

△現代學界に對する感想としては「國際學界に於ても日本の學界に於ても自分の體驗せる限り、我が相對病理學の完成と謂ふことは頗る多くの難關が前途にあることを明に認めて居る。然しそこに私は自分の天命を自覺し又自分に與へられたる天職なる特權を見出して居る以上、我が肉體は假令千々に碎けても我が生命は永遠に此の命題に連り居るもので飽迄此の仕事を完成すべく努力致し度いのです。そこで私は此の一切の方に御願ひ仕度いのは此の命題の爲に御考へ下さることです、そして少くも日本現代の學界中醫學界を除く敎育界、學術界、宗敎界等に於ては此の命題に就て御考へ下さる方のあることは確かに承知して居りますが、更に醫學界に向つては一層それを御願ひせざるを得ないのです」云々。

△博士は長野縣東筑摩郡片丘村、舊諏訪藩士族、明治二十五年生にして戸主也。學者肌の人、溫厚篤實なる紳士として高邁なる人格を備ふ。熱心なる研究家にして博士が提唱せる相對病理學說を主張して、之れが完成に向つて一切を犧牲にして努力邁進せんとし、今又之れに次で生命創造學者とし世界最新の學說を以て起ち、宇宙の眞理に接觸せん事を欲し、科學と哲學と宗敎學との交叉點（學術上）、肉體と精神と信念との交叉點（人體上）、生と死と復活との交叉點（生命上）を標語として、斯道の啓發指導に畢生の心力を盡しつゝあり、その先見の明と、明晰なる頭腦と、壯んなる意氣とは大に之を稱讃するに値す、幸に健康と共に、世界學界上の爲め遠大なる此の期待の軈て大完成せん事を翹望して止まざる也。

◇

大島福造

△病理學、病理解學剖者として錚々たる大島福造博士は、名古屋醫大助敎授として學界に嘖々たる名聲を博し、病理學界に重きを爲す中樞人物たるや論を俟たず。氏の學歷より觀れば、愛知縣立第五中學校（大正六年）を經て、大正六年愛知縣立醫學專門學校卒業、直に同校病理學敎室に入り研究、同七年五月同敎室助手拜命、同十二年三月愛知醫科大學病理學敎室助手拜命、同十三年三月京都帝大にて學位受領、同十四年四月愛知醫科大學助敎授拜命、次で官制改革の結果名古屋醫科大學助敎授となる。斯間、大正六年四月愛知醫學專門學校より學力優等に付賞與として銀時計一個を受く、同七年三月愛知醫學專門學校奬學會へ論文「東洋流肝臟絞窄溝ニ就テ」を提出し賞を受く、同十一年十二月共立名古屋病院祝賀會へ懸賞論文を提出し一等賞を受く、論文「鷄腫瘍ニ就テ」。

△學位主論文は「鷄腫瘍ノ實驗的研究」にして、參考論文として、(1)東洋流肝臟絞窄溝研究補遺、(2)恙蟲病ノ研究、（四篇）、(3)鼠癌ニ關スル研究（六篇）、(4)鷄腫瘍ニ關スル研究（七篇）、計二十篇あり。大正六年度より每年新潟縣古志郡黑條村に八、九月出張し、恙蟲病研究に從事す、而して每年其の成績を日本病理學會誌其他にて發表せり。其他論著夥多。

△名古屋市中區水主町に本籍あり、大島德太郎の長男にして、明治二十七年生る。學者肌の年壯の紳士、當年不惑有二歲にして、年壯銳氣、熱心なる研究家として知らる。讀書家にして殊に遺傳に關するものを愛讀し、造詣見るべきものあり、又克く精研修養に力む。號江川、書道に堪能なり。性來謙遜家にして自己の識學を衒はず、快活にして後輩を愛し能く學生を親しみ、淡々として己を薄うする奧床しき態度は、高潔なる其爲人を敬慕せしむ。純正なる學者として敬意を表し、猶春秋に富む前途の大成を囑望して止まざる也。名古屋市中區水主町一ノ九に私邸あり。

◇

山口左仲

△醫學及び理學の兩學位を所有し寄生蟲學者として最も囑目せられつゝある山口左仲博士は、現

に京都帝大理學部講師として學生指導の傍ら研究に沒頭しつゝあり。博士は岡山醫專出身の一異才にして、嘗て獨逸に留學するや、漢堡市熱帶病研究所に於てフユルレボルン教授指導の下に寄生蟲學を研究し、東京帝大より醫學博士を京都帝大より理學博士を獲得せる篤學の士にして、博士界稀に見る學者として其の學究的存在を認められ將來を嘱望せらる。

△博士は長野縣南佐久郡小海村の人、明治二十七年生にして、大正七年岡山醫專を卒へ、直に東京帝大病理學教室に入り山極教授、長與教授及び緒方教授等の下に病理學專攻、同十三、四年外遊、主として獨乙にて研究、同十四年歸朝に先だちて、同年三月東京帝大より醫博の學位を受領し、同十五年更に京都帝大理學部動物學教室に入りて寄生蟲學の研究を續行す、同年京都帝大理學部講師を嘱託、昭和十年九月理博の學位を授與せられ、今日に至る。

△學位主論文は「口腔唾液腺ノ研究」にして、(1)脂肪問題ニ就テ、(2)「グリコゲーン」ニ就テ殊ニ糖及ビ「グリコゲーン」ノ排泄ニ就テノ二篇より成る。參考論文は、(1)惡性腫瘍殊ニ癌腫ニ於ケル脾臟及肝臟內鐵色素沈著及兩臟器ノ萎縮ニ就テ、並ニ一般中間鐵新陳代謝知見補遺、(2)先天性乳兒腸狹窄ニ就テ、(3)原發性膵臟及十二指腸癌ニ就テ、(4)十二指腸潰瘍ヲ生ジタル淋巴肉腫ノ一例、(5)稀有ナル脊髓生形異常ノ一例、なるが、他に內外文にて發表の論著澤山あり。

△感想に曰く「近來一般に實際にあり得ない樣な言はゞ、不自然な條件の下に實驗的研究を行ふ傾向が顯著となつてきたが之は學術的興味こそあれ實際問題として餘り意味がないようである。此の傾向は又一面醫學各方面の研究が行詰つてきた事を示すものと觀てよからう。かゝる現狀にあつては少くとも一部の醫學者が醫學と密接な關係を有する他の專門學を修めて之を醫學研究に應用するようになる事が望ましい。實は自分もその徑路をとつてきたつもりである」云々。

△頭腦明晰の人にして、同期生中首席を以て卒業し、卒先して學位を獲得せるは、其才學の雋秀なるを見るべく、寄生蟲學者としては其前途を最も嘱望せらるゝ一人者也。殊に博士の最も長所として擧ぐべきは、研究上に根氣の强き事なるべし、一度び思附きたる事は徹底的に完成せしめねば止まぬ意氣と努力とを有する意志堅固の人にして、決して人後に落ちず又決して他に讓らざる點にあり。若し强いて其の短所を言はしむれば、學究一方にて社交に極めて拙きことならん。京都市上京區河原町廣小路上ル梶井町に住む。

◇

本田郁也　△京都府醫大病理學助教授としての本田郁也博士の名聲を學界に聞くや既に久矣。博士は大阪醫大系の病理學者にして、東京帝大より學位を獲得せる斯科界の名醫博として其の學識を認めらる。更に氏の學歷より觀れば、京都府立第一中學校を經て、大阪府立高等醫學校に入學、大正六年六月大阪府立醫科大學卒業、同七年一月京都府立醫學專門學校病理學教室助手を命ぜられ、角田教授指導の下に一般病理學研究に從事す、同九年十二月府立大阪醫科大學々則に規定する醫學士の稱號を受く、同十三年一月京都府立醫科大學助手を命ぜらる、同十四年七月人工的慢性圓形胃潰瘍の業績により日本病理學會よりウイルヒョー氏賞を受く、同十五年二月學位受領（東京帝國大學）、同十五年五月京都府立醫科大學助教授に補せられ現在に至る。

△學位主論文は「急性慢性胃圓形潰瘍發生ニ關スル胃管變化ノ意義」にして、參考論文としては、(1)「アルコール」靜脈內注射ニ因スル腎臟病理學的變化、(2)胸腺原發性惡性腫瘍ニ就テ（田口憲一氏ト共著）、(3)腦髓脂肪腫（混合型）ニ就テ等あり。外に、(1)「アルコール」靜脈內注射ニ因スル腎臟主管上皮細胞ノ含脂肪性消耗性色素、(4)腦髓脂肪腫ニ就テ、(5)「フキラリア、インミチス」ニ燐注射ニ因スル犬腎臟病理學的變化、其他論著夥多。

△博士は京都府久世郡大久保村字廣野の人、明治二十四年生る。號其道、諸種の運動一切を趣味し、身體强健にして

意志强固なり、教壇に起つや熱誠にして懇々と說き、其の態度眞摯にして熱あり力あるは學生間の評判也。人爲り純潔にして、毀譽褒貶など意に介せず、一意專心、醫育と研究とを以て天職と爲し、終始一貫其の職務に勵精努力する至誠の士也。中本完二博士とは近親の間柄也。京都府久世郡大久保村字廣野に私邸あり。

◇

江口季雄　△大阪高等醫專教授兼京都帝大醫學部講師たる江口季雄博士は、愛知醫專出身の病理學並に寄生蟲學者にして、京都帝大病理學教室にて研究の結果、京都帝大より學位を得たる新進の名醫博たるに耻ぢず。嘗て外務省の囑託を受け京大教授藤浪博士と同行、寄生蟲病調査の爲め南米ブラジル國へ出張、日本移民の衞生狀態特に寄生蟲病の調査に從事し、斯界に寄與する所あり。今や斯科界に於ける新進の學者として囑目せらるゝ一人物として推奬す。

△學歷及び閱歷より觀れば、大正八年愛知醫專を卒へ、直ちに同校副手として病理學教室に勤め、同年十二月陸軍々醫生一年志願兵として步兵第三十三聯隊に入營、同十年三月除隊、同年六月任愛知醫專助手病理學教室勤務、同十二年四月任陸軍三等軍醫、同年八月任愛知醫大助手病理學教室勤務、同十五年六月學位受領、同年十一月京都帝大醫學部副手後、助手となり病理學教室勤務、側ら同大學理學部に於て研究、昭和二年二月南米へ出張、歸路北米各國を視察し同年九月歸朝す、爾來現職に就任今日に至る。

△學位主論文は「廣節裂頭條蟲ニ關スル研究」にして、參考論文は、(1)十二指腸蟲ニ關スル研究(第一、二報告)、(2)「リグラ」狀幼裂頭條蟲ニ關スル研究補遺、(3)野獸殊ニ猛獸寄生蟲ト人體寄生蟲トノ相互關係ニ就テ、一二ノ知見補遺、(4)大複殖門裂頭條蟲ニ就テ、(5)恙蟲病研究成績(大正十一、二年度)、(6)恙蟲病ト鳥類トノ關係(第一、二回報告)(7)恙蟲病有毒土地消毒法ニ就テ、(8)胆囊ノ「アデノカンクロイド」並ニ其ノ組織發生ニ就テ、(9)虎ノ膀胱ノ發生シタル滑平筋腫ニ就テの九篇なり、他にも論著夥多あり。

△博士は愛知縣丹羽郡布袋町江口季一郎の次男、明治三十年生れなれば、當年三十有九歲也。少壯にして新進の意氣に燃え、研學の念潑剌たるものあり。學究的篤學の士として其の閱歷は博士の前半生史に輝きて躍如たるを見る。今は其の得意とする病理學殊に寄生蟲學に關する新知識を披瀝して學生の指導に務め亦た他事を顧みざるの概あり。眞面目なる學者として其の態度の眞摯にして熱情あるは甚だ多とすべく、猶春秋に富む洋々たる前途は、博士の將來を語るに餘裕綽々たり。京都市左京區鹿ケ谷寺ノ前町六五に住む。

◇

兒玉誠　△嘗て大連事件以來、心の懊惱を只管學究に向け靜かなる生活を續けたる、滿洲チフス研究の權威者として有名なる病理學者にして細菌學者たる兒玉誠博士は、今夏(昭和十年)帝都を初め關東、關西一圓に涉つて流行したる眠り病發生を見るや、これも恙蟲病研究の權威として著名なる新潟醫大病理學教授川村鱗也博士と協力して、その病原體發見の研究に專心沒頭しつゝありしが、最近に至つて遂に動物移植に成功し、こゝに初めて學界の謎を解決する端緒を握るに至り、目下引續き治療法の研究續行中なりと聽く、傷心の兒玉博士に輝く研學の榮冠たるを祝すべき也。

△川村博士は昭和十年十月十一日次の如く研究過程を發表せり「今夏新潟に腦炎が侵入したのは八月下旬で、研究材料として遺族の篤志により得た五個の患者の全身解剖を行ひ腦髓を切り「リンゲル氏液」で薄め乳液となし多數の二十日鼠の腦に注射した、その結果五つの死體のうち死後二時間二十五分を經過した、六十歲の男子の死體からとつた乳液の注射を受けた二十日鼠が七日乃至十四日の後發病した、その二十日鼠は嗜眠形と麻痺形と兩者混合の三種の病症を示し、何れも二十四時間以內で死亡し更に死んだ鼠から腦を出し、次々に二十日鼠に注射した處常に同樣の症狀

を呈し、四五日位で死亡し毒は次第に強くなり、つひに二十日鼠の固定毒となつた、腦炎の病菌は普通の菌が通過しない濾過器（ベルテフエルド氏N液）をよく通過することが明白となり、更にウサギ、モルモット、犬、猫、猿等の腦に注射した處猿だけが發病し、注射後八日目に高熱を發し、全身に痙攣を覺え右手が完全に麻痺した、二十日鼠と猿の外病氣がうつらぬことは他の類似した病氣と流行性腦炎とを區別する重要なる點である、病毒と腦炎との關係につき中和試驗を行つたが、發病後三週間以上を經過した回復患者の血清と病毒を混ぜ、三十七度の孵卵器の中に二時間入れて取出し二十日鼠に注射した處全然反應なく完全に中和することを示し、反對に健康體の血清とは全然中和しないことが明かとなつた、これにより腦炎は傳染性を有し、且つ一度罹病したものに免疫性あることが確證されるに至つた、一昨年流行した米國セントルイスの腦炎は種々の點から我國の腦炎と類似してゐるが、米國病毒は米國の回復患者の血清と中和するが、日本の回復患者の血清とは全然中和せず、これによつて米國で發見された病原體と今回新潟醫大で發見した病原體とは全然別固のものなることが明かである、今回新潟醫大では五個の死體を使ひ、第四番目の死後二時間二十五分のものが成功、これを新潟第一系と名つけた、以上の研究の結果により腦炎の病原は濾過器性病原體なることを發見、且つ中和試驗により傳染性免疫性を有することが確證され、目下引續き治療法の研究を行つてゐる次第である」云々。

△兒玉博士は千葉醫專（大正五年）出身の病理學者として錚々たる學者也、卒業後翌六年一月北里研究所副助手任命、同九年四月慶大醫學部助手任命、同十二年二月より十五年一月獨逸國に留學し、アショフ教授（病理學）及びスピールマイヤー教授（腦病理組織學）に師事す、同十五年二月慶大醫學部講師囑託せらる、同年七月慶大より學位受領、同年十月北里研究所副部長に任命せらる、同年十一月滿鐵衞生研究所病理部長として赴任す、次で辭職後新潟醫科大學病理學教室に於て研究に從事す。

△學位主論文は「ミンコースキー及ナウニン兩氏ノ肝性黃疸發生說」にして獨逸文原著なり。參考論文は、(1)原發性口蓋扁桃腺結核ノ發生頻度少ナキ理由ヲ說明スル實驗的研究、(2)人工的貧血時ニ於ケル骨髓巨態細胞ノ增殖機轉、並ニ血小板生成機轉ニ就テ、(3)猿ニ於ケル發疹「チフス」恙蟲病及ビ天然痘ノ白血球像ノ比較研究、「オプソニン」補躰ニ關スル知見補遺、(4)野鼠間ニ流行スル鼠咬症「スピロヘータ」ニ就テ（小林六造共著）外獨逸文原著二篇、其他論著夥多あり。

△氏は長野縣小縣郡和村字東上田の人、明治二十七年生る、純情なる學者肌の人として知らる。當年不惑に入る二歲意氣旺盛にして、醫學の研究を以て自己の天職と爲し、一路邁進又他事を顧みざるが如し。折角の努力精研あらん事を望むや切也。

◇

久保久雄

△病理學界の一權威にして、滿洲醫學界の重鎭たる久保久雄博士は、既に世人周知の如く、滿洲醫科大學教授、兼學生監、兼附屬專門部教授として得意の病理學を擔任し、同大學に於ける最高幹部の一人者たり。學系は京都帝大に屬し、病理學の泰斗故藤浪教授及び故速水教授の高弟として知らる、嘗て獨逸に留學するや、伯林大學のルバルシュ教授、ロエシュレー教授、ビツケル教授、及びウエツチエン教授等に師事して病理學の蘊奧を究め爾來其の蘊蓄を傾倒して學生指導の爲め畢生の心力を注ぎ、至誠以て滿洲醫育界の爲め努力貢獻する所あり。

△博士は和歌山縣立粉河中學、五高を經て、大正十年京都帝大醫學部卒業、直ちに同大學大學院に入り藤浪及び速水兩教授の指導を受け病理學、病理解剖學研究、翌十一年八月大學院退學と同時に同大學助手に任じ、同十四年七月依賴免本官、同年九月滿洲醫大教授として赴任し同時に南滿醫學堂教授兼同大學附屬專門部教授を兼ね、翌十五年七月京都帝大にて學位受領、昭和二年十二月歐米留學の途に上り、同三年一月末より伯林大學に於て前記諸教授指導の下

に病理學一般の研究に從事すること滿二ケ年、此間歐洲諸國を歴訪す、後ち米國を視察して、同五年四月歸朝、滿洲醫大教授兼同附屬專門部教授に復職し、同五年八月同大學學生監兼務を命ぜらる。

△主論文「性質ヲ異ニスル病態增殖組織相互間ノ關係(炎性組織ト移植腫瘍)」にして「第一篇炎性組織ト可移性家鷄粘液內腫」及び「第二篇炎性組織ト可移植性家鷄軟骨腫」の二篇よりなる。參考論文は、(1)性質ヲ異ニスル病態增殖組織相互間ノ關係(腫瘍ト異種腫)、(2)猫「イラズ」服用ニ因ル急性乃至亞急性燐中毒ノ病理解剖學的所見ニ就テ、(3)急性乃至亞急性黃色萎縮肝ニ於ケル格子狀纖維ニ就テ、(4)急性乃至亞急性黃色肝萎縮症ト急性乃至亞急性燐中毒症トノ病理解剖學的組織學的鑑別診斷上ノ注意ニツイテ、(5)腸肥大及ビ擴張症ノ病理組織學的知見補遺、(6)肉腫ノ病理解剖學的統計的研究(前篇)、本邦ニ於ケル肉腫ノ統計的研究、(7)可移植性鷄腫瘍ノ一新材料ニ就テ、(8)豚「ペスト」ノ病理解剖(共著)等なり、其他論著夥多あり。

△和歌山縣伊都郡信太村大字田原の人、明治二十七年生る。學者肌の人にして、篤實敦厚なる紳士として高潔なる人格を備ふ。謙遜自抑、人に厚く能く學生を愛撫す、恬澹として功名利祿に介意せず、一意專心、唯だ其の天職なるを以て任じ、醫育界の爲め一路邁進する熱誠の士也。讀書家にして書見を唯一の樂しみとし、精研修養相俟つて克く勉む、研究以外には散歩と庭球とに趣味を有するが如し。博士の年齒今や不惑に入る二歳、意氣旺盛にして研究心潑剌たるものあり、春秋猶豐富にして、前途洋々たるの秋、幸に健康にして、爲學界益々努力盡瘁あらん事を望むや切也。滿洲國奉天萩町二五に住む。

◇

稗田憲太郎　△滿洲醫科大學教授稗田憲太郎博士は、南滿醫學堂の出身、九州帝大より學位を獲得せる病理學者にして、特に寄生蟲病理學を最も得意とせる篤學の士也。主論文は「黃疸ノ實驗的研究」なるが、母校の恩師大野章三及び九大教授中山平次郎、田原淳博士に負ふ所少からず、要するに鬱滯性黃疸の發生本態は從來エツビンゲル氏說により胆毛細管と血管周圍淋巴腔の交通により起ると云はれ居たるも、博士は詳細なる實驗的根據により該學說により說明せられざる點を指摘し、遂に肝小葉間膽管が小葉內に移行せんとする部より破碎性に或は濾出性に膽汁が逸出し之れが淋巴管により血行に入り黃疸を起すものなることを認めたるもの、卽ち本論文の骨子なりとす。

△長崎縣壹岐郡武生水町稗田又助の三男、明治三十一年生る。大正九年南滿醫學堂卒業、直ちに同校病理學教室副手同十年九州帝大醫學部專攻科學生となり病理學教室入室、同十三年同教室より南滿醫學堂に歸任、講師となる、同十五年九月學位受領、滿洲醫科大學助教授に任命さる、次で慶大醫學部寄生蟲學教室にて研究、海外留學を經て昭和七年教授に任ぜられ今日に至る。

△參考論文として、(1)黃疸出血性「スピロヘータ」病ニ於ケル肝臟變化及ビ其黃疸ノ發生論、(2)黃疸出血性「スピロヘータ」病ニ於ケル動脈管ノ變化、(3)心尉狀動脈ノ正常組織像の三篇あり。

△篤學者にして其の今日あるは既に氏の閲歴に燦として輝く。今や壯齡と共に學識、識見共に圓熟して最も得意の時代に入り、熱誠克く忠實を盡して學生指導の任に當り、一意專心、醫育と研究とに趣味を集中して勵精努力する所あり。學究的紳士として高邁なる氣品を備え、意志强固にして物に動せず、謙遜にして自己の才學を衒はず、寛厚人を容れ能く後進を愛撫す。運動好にして殊に戸外運動に興味を有す。年齒漸く三十有八歳、春秋猶豐富にして、精研に餘念なき前途は洋々たり、切に自重加餐を祈る。奉天萩町一五に住む。

◇

濱崎幸雄　△岡山醫科大學に病理學助教授として新進の濱崎幸雄博士あり。岡山醫專出身の病理學者にして恩師田村於兎教授に就きて斯學の蘊奥を究め、岡山醫大より學位を獲得せる少壯醫博也。主論文は「大網乳斑ノ組織

學的研究」にして四篇より成る。參考論文は、(1)大網乳斑ニ於ケル糖原質ニ就テ、(2)大網乳斑糖原質ノ消長ニヨリ見タル中樞性糖尿ニ於ケル「アドレナリン」血症ニ關スル疑義、(3)「サルヴアルサン」腹腔内注入ニ關スル實驗的研究の三篇なるが、其の後主として「生組織球の體腔内注射による實驗的研究」(前後十二篇より成り結論篇は Centralbl. f. allg. Path. Bd. 59. 1934) に力を致せり。最近、組織、體液並に尿中に於て「一新禾親和性物質」(病理學會々誌、昭和九年)を發見し、博士獨特の染色法に依り十年計畫を以て前人未到の域を開拓しつゝあり。

△略歴を概括すれば、德島縣立德島中學校を經て、大正十年岡山醫專を卒へ、直ちに日赤三重支部山田病院外科に勤務、同十三年四月岡山醫大專攻生として病理學研究、同年十一月同大學副手囑託、病理學教室勤務、同十五年三月同學講師囑託、同年十二月學位受領、昭和二年六月任同大學助教授、昭和五年三月文部省在外研究員として、渡歐、英米を經て同七年五月歸朝、滯獨中はフツク教授(ライプチツヒ)、アショツフ教授(フライブルグ)、ステルンベルク教授(ウイーン)の指導を受く以て今日に至る。

△感想に曰く「現今の吾醫學會に於て最も遺憾に耐へないことは、基礎醫學と臨床醫學との間に連絡の十分に取れて居ない事である。例へば病理學者は臨床醫學の知識に乏しきため病理解剖の臨床的考察を回避し、臨床家は病理學の理解に乏しきため屍體の提供を怠り、車の兩輪は思ひ〳〵に動くと云つた有樣である。次に遺憾に思はれる事は醫事雜誌刊行に全く統制を缺ぐ事である。通俗醫學雜誌及び醫事新聞は別として、現今吾國に學術雜誌と見做すべきもの百餘種に上り然も其の大部分は八百屋式である。加ふるに最近は各教室から續々として不定期物を出す有樣で、其の混話は名狀し難いものがある。今にして專門家が互に協定して各科二三種の雜誌に制限せねば終には收拾出來なくなるであらう。此れは醫人ばかりでないが、萬事、小我を捨てゝ大我に就くてふ大國民の態度を以つて邦家百年の計を樹てねばならぬ」云々。

△宇治山田市河崎町の人、明治二十九年生る。學究的學者肌の少壯紳士にして、篤學者たり、其の今日ある學歴は博士の前半生史之れを語りて餘蘊なし。年齒漸く不惑に達し新進の意氣に燃え、研究心潑剌として止まず、今は專心醫育の爲め渾心の努力精進を續け、學生を指導するに熱心克く誠意誠實を以てし、其の態度の眞劍にして熱あり力あるは、博士の長所と見るべき也。性來謙遜にして偏に恩師先輩の助力を說き、少しも自己の才學を衒はず、淡々として只管己れを虛うする奥床しさは甚だ多とすべき也。文學趣味豐かにして、瓜痕をペンネームとす、又庭球、卓球を好み音樂を愛す。春秋猶豐富にして、精研に餘念なき前途は洋々として益々輝かし、平和なる家庭は妻うめ子との間に一男一女あり。幸に自重加餐を祈る。岡山市門田文化町一一八二に住む。

◇

本田蘭　△日赤兵庫支部姫路病院病理科醫長としての本田蘭博士の名聲は既に關西に著聞するや久矣。氏は島根縣八束郡講武村の人、明治二十七年生にして、島根縣立松江中學中途退學、京都同志社普通科を經て、大正四年金澤醫專に入學し、同八年同校を卒へ、直ちに京都帝大病理學教室選科生として入學し、更に專修生となり、藤浪教授指導の下に病理學並に病理解剖學の研究に從事し、同十四年依願退學す、同年日赤兵庫支部姫路病院病理科醫長として就任し、現在に至る、昭和二年二月京都帝大より學位を受領す。現職就任以來十年一日の如く勵精恪勤し、斯科の大家と仰がれ多大の信望を博す。

△學位主論文は『諸種疾病ニ於ケル睾丸ノ病理解剖學的知見補遺』にして、參考論文は、(1)胃癌ノ統計的調査、(2)先天性黴毒ノ肝臟ニ於ケル病理學的所見ニ就テ、(3)結核毒素ニ因ル海猩副腎ノ變化、(4)家鷄腸内ニ寄生セル鞭蟲樣一新線蟲ニ就テ、(5)甲狀製劑飼養ガ可移植性動物腫瘍ノ發育ニ及ボス影響、等なり、其他論著夥多。姫路市鷹匠町二八に住む。

◇

小杉虎一　△京城帝大教授として病理學講座擔任たる小杉虎一博士は、一高（大正五年）を經て、大正九年東京帝大醫學部を卒へ、同十年慶大醫學部助手に任ぜられ、同十三年講師となり、同年京城醫學專門學校講師を囑託せられ、同年九月朝鮮總督府在外研究員として渡歐、同十五年四月任京城帝大助教授、同年十二月歸朝、昭和二年三月任京城帝大教授、同年同月慶大にて學位を授與せられ、今日に及ぶ。今や教授團中の中堅にして、我邦病理學界に逸すべからざる一權威として最高學府に重きを爲す。

△學位主論文は「腎臟機能形態學補遺」にして、參考論文としては、(1)排泄管結紮ニ因ル腎臟特ニ嶋組織ノ變化ニ就テ、(2)肉腫ノ血清學的療法ニ關スル實驗的研究、の二篇あり、其他論著夥多。

△埼玉縣川越市連雀町の人にして、明治二十四年生る、學究的年壯の紳士にして、當年不惑に入る五歳也。賦性謹直潔正、志操堅實、謙遜家にして偏に恩師先輩の助力を感謝し、敢て學者として衒はず、功名に淡々として唯だ自己の職務に勵精努力し、一意專心、醫育と研究とに趣味を集中して亦他事を顧みず、誠意誠實を盡して公に奉ずる至誠一貫主義の士也。京城府惠化洞七一に住む。

◇

竹内甲平　△東京同愛記念病院病理主任にして千葉醫大講師たる竹内甲平博士は、千葉醫專出身の病理學者にして、始め母校の恩師筒井及伊東兩博士に就きて皮膚科學を專攻せるも後轉じて東大病理學教室に入り山極勝三郎長與又郎、緒方知三郎、三博士指導の下に病理學の蘊奥を究め、東京帝大より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。夫人竹内茂代博士の勵精努力と相俟つて、夫婦博士の嘖々たる名聲を馳せ、加ふるに義弟井出欽一博士及び同夫人ひろ子博士と共に、一家より兄弟の博士夫婦を出したることは、我が博士界の嚆矢にして、學界の美談として、人口に膾炙する所也。

△博士は明治四十四年千葉醫專卒業後、母校附屬病院にて皮膚科學を專攻せる後轉じて東京帝國大學醫學部病理學教室に入りて病理學を專攻す、大正十五年同鹽田外科教室に入りて外科領域に於ける病理學を研究し、昭和二年十月學位を受領す、同四年東京同愛記念病院病理研究室主任拜命、同六年鹽田外科教室を辭し、千葉醫科大學講師（病理學）を囑託、今日に至る。主論文は「胎生毛髮色素形成ニ關スル組織學的研究並ニ胎生毛髮發育及胎生毛髮變換初期變化ニ就テノ知見補遺」にして、外に參考論文として「色素性母斑ノ本態及母斑細胞ノ發生ニ就テ」の一篇あり。

△靜岡縣氣賀町竹内與次郎の長男、明治十八年生る。學究的溫厚の紳士にして篤學者たり、其の今日ある閲歴は博士の前半生史に盡きて光彩陸離たるものあり。今は働盛にて年齒知命に入る一歳、年壯の意氣旺盛にして研究心に富み學識、識見、人格共に愈々圓熟の佳境に入る。學者タイプの風貌は凛々として威嚴を存し、溫容の裡に謹厚そのものの性格を表示して餘蘊なく、人と接するに城壁を設けず、快活にして人を愛し、後進の指導に努め、謙遜にして自ら持するに薄く、自己の學識を衒はず、恬淡たる態度の眞面目にして熱情あるは、人をして敬慕の念を深からしむるの德を有す。猶從兄の子に川村實平理博あり。東京市四谷區三光町一に住む。

◇

二階堂一種　△滿洲醫界は滿洲醫科大學を中心として濟々たる人材に富む、現に滿洲醫大教授にして、法醫學の權威として囑目せられつゝある二階堂一種博士の如きは、獨り學内の中堅たるのみならず、滿洲醫界に於ける重鎭として看過すべからず。學系は東北帝大にして、法醫學者として特に生化學的方面の造詣深く、學殖豐富、識見該博なり、年來の蘊蓄を傾倒して學生指導の任に當り、諄々と說くところ教壇に異彩を放ちて見ゆ、殊に德望篤き學者としての人格者たるを慶ぶ。

△博士は大正九年東北帝大醫學部卒業後、同學部助手として勤務の傍ら醫化學、法醫學、衞生學を研究、十二年一月より東京帝大醫學部に轉じ法醫學教室並に精神病學教室にて研究を續け、十二年八月南滿醫學堂教授、十四年現職に就任す、斯間大正十五年より外遊、昭和四年七月東北帝大より學位受領、同年十一月歸朝せり。

△專攻は法醫學にして井上嘉都治、三田定則、石川哲郎、吳秀三教授等の諸大家に就て造詣する處あり、又海外にては獨乙のストラースマン、ローナ、ヤコビー、ワールブル等の四教授に師事して研究せるが特に生化學的方面を得意とす。

△主論文は『非蛋白性血性「コロイード」並ニ其ノ生物學的知見』にして、外參考論文は『表皮機能ニ關スル研究』三篇あり、其他論著夥多。

△學界に對する感想の一片を述べて曰く『日本の醫學研究が斯くも旺んになつた事は同慶に堪えず、論文の數多き事亦誠に可なるも、主として穿索的に、深きに向つて進む事は今後吾人の目標とすべきならんか、獨逸醫學の發達せるは粘り强く堀り下げしによるべし、以て他山の石に値すべきか』云々。

△博士は宮城縣栗原郡畑岡村字上畑岡の人、明治二十五年生る。純眞なる學者肌の人にして、熱心なる研究家を以て知らる。平生何かせずには居られぬ質にて、切磋卓勵の氣象に富み、研究に對する態度の眞摯にして熱あり力あり、徹底的に成し遂げずんば已まぬ所に博士の長所を見出さる。人と爲り高潔にして溫情に富み、殊に門下生に對する思ひやり深く、懇篤能く指導し能く世話を爲す、而かも謙讓克く自抑して其の功に居らず、淡々として己を虛うする奥床しき美德は、自ら人をして敬慕の念を深からしめ、其の人格を景仰せしむ。讀書家にして精研修養相力め、研究以外には園藝と旅行とを趣味す。基礎醫學者として學德兼備せる人格者と推奬すべき也。奉天春日町六番地に住む。

◇

渡邊建　△陸軍科學研究所附兼陸軍々醫學校部員たる渡邊建博士は、縣立千葉中學を經て、大正十一年千葉醫專を卒業す、直に軍陣界に入り同年八月任陸軍三等軍醫、同十二年二月陸軍々醫學校に入學、同年七月卒業、同十四年千葉醫大專攻科に入りて病理學を專攻せり、同年八月任陸軍二等軍醫、昭和四年三月陸軍一等軍醫に陞進し、同六年一月千葉醫大より學位を受領せり。專攻は病理學及び外科學なるも、特に得意とせるは病理學にして今猶研究に沒頭しつゝあり。是迄の指導教授は母校の恩師石橋松藏博士及び故田中康昌博士なり。

△學位主論文は「胸腺ノ研究」にして、參考論文として、(1)興味アル犬ノ原發性多發性癌ノ一例、特ニ所謂睪丸大細胞性腫瘍ノ發生ヲ論ズ、(2)白鼠子宮壁「ヱオヂン」嗜好性細胞滲集知見補遺、(3)慢性腸結核ニ繼發セルB型「パラチフス」ノ興味アル剖檢例等あり。その他博士の主要なる論著に、(1)胸腺ノ型態學的所見ノ生理學的變遷、(2)睪丸癌ノ組織發生等外數篇あり。

△感想を述べて曰く『近來博士界殊に醫學博士濫造の弊ありとの言を屢々耳にせる所なるも最近は餘り聞知せざるに至る、勿論現代に於ける研究者中醫學者程多數の者が眞摯なる研究に從事せるは他に之を見ざる事にして、醫學博士の多きは一理ある事なれども、一方各大學教授會に於て論文審査の權能を有するに至りて、之を通過せるものは殆んど全く學位を授與せらるゝに至れる關係上、開業永年に亘れる醫師が單に博士なる看板に憧れて、僅少の時日間、種々の教室に出入して簡單なる論文を作製し之を以て學位を受領する者頗る多きは博士なる名稱の手前實に遺憾の極にして坊間に於ても是等の人々は「金を以て學位を買ふ」とさへ云はれ、事實自己の論文以外該科目に就て些少の造詣をも有せず甚しきは自己論文の內容すらも良く知らざる者あるに至りては論外にしてこは夫等の人々の罪も大なると共に各大學教授の人格も疑はざるを得ず寒心に堪えざる事なり。將來は宜しく各人の力量なり研究年限なりに就て充分の制限を加ふる要あらん』云々と、無きにしも非ずの論として大いに傾聽すべき乎。否々此處にも學界乃至醫師界

淨化の叫びとして一服の清涼劑たるを默視すべからず。

△博士は千葉市の人、明治三十四年生、年齒未だ三十有五歲の少壯也。讀書家にしてスポーツマンなり、又戸內遊戲にも趣味し研究の餘暇之を樂しむ風あり。學究的の人としてその性格を打診すれば、性行潔白、志操堅實、殊に正義觀念の强きこと敢て人後に落ちざるは長所と見るべく、但だ氣短にして感情もろき點は或は短所とならざるか。前途有爲なる少壯博士の健鬪、切に自重加餐を祈る。千葉市千葉一二六〇に住す。

◇

森繁春　△新進の法醫學者にして、現在滿洲醫科大學に助教授たる森繁春博士は、熊本醫專の出身にて、學位は東北帝大より獲得して其の存在を認めらるゝ篤學の士也。指導教授は滿洲醫大法醫學教授二階堂一種博士及び東北帝大病理學教授那須省三郎博士にして、又た嘗て歐洲に留學するや、獨逸プラーグ醫科大學藥物學教授スタルケンスタイン博士に師事して毒物學を研究し、歸朝以來新知識を披瀝して得意の法醫學を講じつゝあり。

△博士は縣立佐賀中學を經て、大正十年熊本醫專を卒へ、直ちに助手任命醫化學教室並に內科學教室勤務、同十二年四月滿鐵醫院（遼陽、大石橋）勤務、同年六月南滿醫學堂助手法醫學教室勤務、同十四年四月醫員兼務、精神病教室勤務、同年九月兼務を免じ、南滿醫學堂講師兼滿洲醫大專門部講師被命、昭和二年東北帝大醫學部病理學教室副手囑託、同三年十二月滿洲醫大助手任命、同四年四月滿洲醫大專門部講師兼務、同年五月滿洲醫大助教授兼專門部助教授任命、同六年四月東北帝大より學位受領、同年十一月法醫學並に毒物學研究の爲め在外研究生として一ヶ年半歐洲留學被命、同八年五月歸任現在に至る。

△學位主論文は「實驗的火傷ニ於ケル赤血球沈降現象ニ就テ」にして二篇より成る。外に參考論文として、(1)甲狀腺剔出ガ饑餓時蛋白中間代謝ニ及ボス影響、(2)採血後經過時間ニヨル補體價ノ動搖ニ就テ、(3)金屬「イオン」ニヨル血球凝集反應ニ對スル諸種「コロイド」ノ抑制作用ニ就テ、(4)在滿邦人ノ血液型ニ就テ、(5)岡山縣牛窓町師樂部落民ノ血液型ニ就テの七篇あり。

△博士は佐賀縣佐賀郡川上村東山田平野、森繁之次男、明治三十年生れにして、當年三十有九歲也。學究的好學の士として其の今日ある篤學は博士の前半生史に輝きて躍如たるを見る、而かも年齒未だ少壯にして研學の念に燃え、切磋琢勵甚だ勉むる所あるは、今後の努力精研と相俟つて、潑剌たる前途を更に大に期待せらる。賦性高潔にして志操堅實、謙遜克く自抑して人に厚く、快活にして克く學生を愛撫す、其の眞摯にして熱情あり溫味あるは、將來ある學者としての人格を尊ぶ。滿洲國奉天萩町一三に住む。

◇

中留金藏　△現代博士界中、學閥系統より觀たる京都帝大派の一勢力は嚴然として優勢を占む。此の勢力圈內より物色して玆に品隲せんとする中留金藏博士は、陸軍々醫學校教官にして病理學を講じつゝある有爲の少壯學者也。博士は卽ち京都帝大系の病理學者として錚々たるものにして、母校の恩師淸野博士に師事して研究の結果、京都帝大より學位を得たる博士中の新人物也。年齒未だ少壯にして潑剌たる前途は猶洋々たり、輝しき其の將來は更に大に期待せらる。博士曰く「個人を通し、國家を通し、民族を通し、世界を通して一貫したる平和の招來を理想とし其の目的のためには一身をなげうつて公に奉ずる東洋精神を世界に宣布するを唯一の道なりとの堅固なる信念を有する」云々。至誠奉公を念ずる博士の心境を察せらる。

△顧みて博士の學歷及び閱歷を公開すれば、博士は大正十五年京都帝大醫學部卒業後、直に陸軍に出仕、陸軍々醫學校に一ヶ年學びたる後、廣島衞戍病院に勤務する事約二ヶ年、此の間濟南事變に遭遇し還送患者の治療に從事、昭和四年春より二ヶ年京都帝大大學院に入學淸野教授の下にあつて病理學を專攻、同六年四月陸軍々醫學校教官に任ぜら

る、同年九月京都帝大より學位を受領し、同七年二月上海派遣軍編成と共に動員を命せられ第四野戰防疫部員として上海に留る事三ヶ月、軍の保健防疫業務に從事、同八年六月獨逸國駐在員を命ぜられ、獨逸國伯林にあつて戰役病理學の研究に從事、二ヶ年後歸國の豫定。

△主論文は「骨質並ニ齒牙ノ生體染色ニ關スル實驗的研究」にして、同論文は昭和五年大阪に開かれたる第八回日本醫學會、病理學會にて發表し、ウイルヒョウ賞を受く。

△博士は鹿兒島縣囎唹郡月野村の人、明治卅二年生る、當年卅有七歳也。學究的學者肌タイプの人にして、研究心鬱勃として禁ぜず、向學の精神に燃え不撓不屈の氣慨に富む、而して其の教壇に起つや、諄々として說き、學生の提撕に務め甚だ熱心なり。一度び其の謦咳に接せんか、舉措悠容として迫らず、嚴格の裡にも溫容を包み威權を藏し、恬澹として能く話し、快活にして人を愛す、其の態度の紳士的にして眞摯なるは、敬慕の念を起さしむるの德を有す。人格の尊重を高調するの今日、博士の如きは當世博士界中學德兼備せる基礎醫學者として敬意を表すべき也。

◇

波多野　輔久　△滿洲醫大助教授にして病理學を講じつゝある波多野輔久博士は、京都帝大の出身、新進なる病理學者にして、母校の恩師淸野謙次教授、藤浪鑑教授、松尾巖教授等の親しき薰陶を受け、京都帝大より學位を得たる少壯醫博として其の潑剌たる前途を囑目せらる。同僚者中の最少年者にして向學の精神に燃え、研學の念鬱勃として禁ぜざるものあり。たま〳〵感想の一片として「滿洲へ參りまして感じましたことは、それまで新聞紙上や日常の會話等で餘り不自然に思はなかつた――夏の暑さを百××度と華氏で呼び、冬の寒さを零下何度と攝氏で呼んで居た――矛盾さに氣附きました、こうした藝術的な溫度の現はし方が、多くの人々を錯覺に陷らしめ、極端に滿洲を寒く思はし、ために折角の青年の海外發展の雄志を妨げ、又、故國に殘された老人達に不必要な心配を懷かせるらしいです。然し、一面こうしたこまかい寒暖計の讀み方の使ひ別けに、日本民族特有のゆかしさがあり。又、在滿皇軍將士に對する國民の感謝が現はされてるのかも知れませんが……」云々と寄せらる。

△博士は佐賀縣立唐津中學校、六高を經て、昭和二年京都帝大醫學部卒業、直ちに松尾內科副手となり、昭和二年九月更に病理學教室に轉じ助手となる、同三年二月より十一月まで第十師團に幹部候補生として入營、豫備陸軍三等軍醫に任ぜらる、同六年四月講師囑託、同七年四月大阪女子醫專講師を兼ね、同年七月學位受領、同年九月滿洲醫大助教授に任ぜられ今日に至る。

△學位主論文は『色素ノ染色性ノ研究特ニ「モノ、アツオ」色素ノ生體染色ニ關スル研究』にして三篇より成り、參考論文は、(1)「モノ、アツオ」色素ヲ以テスル超生體核染色ノ研究、(2)「モノ、アツオ」色素ノ生體染色ノ研究、(3)「ブラストミコージス、コクチディオイデス」ニ關スル實驗的研究、(4)腫瘍ノ異性移植、家鴨肉腫トナレル家鷄肉腫、家鷄及ビ家鴨ニ共通ノ腫瘍、(5)腫瘍起源ノ排泄ニ關スル研究特ニ肉腫家鷄尿ノ可移植性ニ就テ、の五篇なるが、此內の『「モノ、アツオ」色素ノ生體染色ニ關スル研究』に對し(昭和六年)文部省より「自然科學奬勵金」を下附せらる。著書は「生體染色線說總論」(昭和八年南江堂發行)、但、共著者は〔醫博、淸野謙次、同杉山繁輝、同服部銈三〕等。

△博士は山口縣大島郡安下庄町波多野輔の長男、明治三十四年生れにして當年三十五歳也。少壯氣銳にして志操堅實、新進の意氣益壯にして精研努力甚だ勉むる所あり。而して其の教壇に立つや、諄々として說く所熱心能く學生を傾聽せしむるの德を有す。研究以外格別の趣味を有せずと雖も、讀書家にして書見を唯一の樂しみとし自ら品性の陶冶に務むるの風あり。居常人に對する態度の紳士的にして眞摯なるは、人格の尊重を高調するの今日甚だ多とす。洋々たる前途、春秋猶頗る豐富なれば幸に健康と共に、輝しき滿洲醫育界の爲め益々發奮盡力あらん事を切に祈る。奉天萩町十三に住す。

◇

段同壽　△中華民國河北省立醫學院病理學主任教授段同壽博士は、河北大學出身の病理學者にして、慶大教授川上漸博士に就きて斯學の蘊奥を究め、慶大より學位を獲得せる代表的民國の少壯醫博として氣を吐き、民國醫學界に於ける重鎭たるを失はず。研鑽多年、該博なる學識を有し、今や教壇に起ちて新智識を披瀝し諄々として說く所熱あり力あり、學生をして謹聽せしめ内外の信望を博す。祖國民國の爲め醫育上努力貢獻しつゝあるは慶幸とする所にして、又日本博士界の爲め大に人意を强からしむるものあり。

△博士は中華民國十年河北大學醫科入學、同十六年卒業、直ちに日本に留學し慶應義塾大學醫學部病理學教室に入りて研究、同二十年歸國、任河北大學醫科病理學教授、同年任河北省立醫學院（前河北大學改組）病理學主任教授、昭和七年十二月慶應義塾大學にて醫學博士の學位を授與せらる。學位主論文は「横隔神經撚除術ノ肺結核ニ及ボス影響ニ關スル實驗病理學的研究」にして二篇より成り、外に參考論文として、(1)人工氣胸術ノ肺結核ニ及ボス影響ニ關スル病理學研究（第一、二篇）、(2)乳房ニ發生シタル悪性混合腫瘍ノ一例、の二篇あり。

△博士は中華民國河北省保定の出身、前清光緒二十六年生れにして當年三十有五歳也。溫厚なる學究的少壯の紳士にして、其の今日ある輝かしき閲歴は博士の面目を語るに躍如たるものあり。未だ少壯にして潑剌たる研究心を有し、勵精恪勤、克く學生の指導に務め、一面又克く自己の研究に專念沒頭しつゝあるの概あり。人と爲り嚴肅にして穩健思想强固にして識見に富み、人格崇高也。最高學府の教授として新進有爲の適材たるを推奬し、著者は更めて玆に敬意を表する者也。春秋猶豐富にして、精研に余念なき前途を更に大に期待すると共に、幸に祖國の爲め、又幷せて中日醫學の提携上益々努力盡瘁あらん事を翹望して止まざる也。中華民國保定河北省立醫學院病理學教室氣附。

岡田藤助　△現代醫博界中、新人中の新人たる岡田藤助博士は、千葉醫大派の新勢力と觀るべき基礎醫學者にして、病理學專攻の少壯醫博也。現に母校たる千葉醫科大學講師として新進の氣を吐き、專心學生の指導に精進しつゝあり。氏の學歴及び閲歴より言へば、昭和五年三月千葉醫科大學卒業、直ちに同大學病理學教室副手拜命、同年十月同助手拜命、同十年四月同講師拜命、同年十月學位を授與せられ今日に至る。斯間主として石橋松藏教授指導の下に病理學を專攻し、今猶本職の傍ら孜々として自己專門の研究に餘念なし。年齒未だ少壯にして、潑剌たる前途を有し、將來有爲の學究として囑望せらる。

△學位主論文は『剖檢材料ニヨル「ビリルビン」並ニ肝臟機能ノ研究』にして、外に參考論文五篇あり、(1)胸管閉塞ト癌腫轉移トノ關係ニ就テ、(2)腫瘍細胞ノ成生ニ就テ（共同研究）、(3)家雞肉腫ノ研究（共同研究）、(4)肝臟ノ「ビリルビン」排泄ニ關スル研究、(5)結紮性黄疸ノ際ニ血「ビリルビン」ガ胆汁ヨリノ吸收ニ由來スルカ？（共同研究）等なり。氏の「黄疸發生ニ關スル研究」は獨特のものにして、氏の最も得意とする業績の一篇なりと云ふべし。

△感想に曰く（一）各科共餘りに專門化して居る。もつと東洋的綜合醫學とも云ふべき方向へ力を注ぐべきものと信ず。（二）治療學は自然科學的醫學のみより研究すべきものなりや否やに關し多大の疑義を有す。

△千葉縣印旛郡旭村吉岡四九岡田五郎の長男にして、明治四十年生れの少壯也。年齒未だ三十なれば、二十九歳の若年を以て學位を獲得せるは、頭腦の明晰なると、如何に勉强家なるかを物語り、氏の面目の躍如たるものあるを想はしむ。今は活氣横溢して研究心に燃え、向學的精神欝勃として禁ぜざるものあり、而して研究に對する態度の眞摯にして熱あり力あるは、氏の輝しき將來を大ならしむる素因にして、精研修養相俟つて常に自ら品性の陶冶に勉めつゝあるを多とす。性格より言へば、獨斷家にして獨自性に富み、動もすれば獨斷すぎる樣にも思はれる。日本式ローマ字の皷吹家にて常に之れが奬勵に努め、又禪門に入りて研究する所あり。家族は七名にて團欒裡に家庭賑はし。千

葉市本町三ノ一五九七に住む。

◇

正山勝　△滿鐵衛生研究所病理科に新進の病理學者として正山勝博士あり。滿洲醫大派の一勢力と見るべき新人にして、大學卒業後母校の病理學教室に次で、現職の儘久しく病理學の研究に沒頭し、斯學の權威たる大野章三教授、久保久雄教授、大成潔教授、兒玉誠博士等の指導を受け、學位請求論文を母校に提出して學位を獲得せる少壯の醫博也。今や多年の蘊蓄を傾倒して本職の爲め勵精恪勤し、終始一貫、至誠以て熱心克く自己の本分を盡し、以て滿洲醫界の爲め斯道の振興改善に資する所あらんとす。

△氏の學歷及び閲歷を概括すれば、長岡市坂上尋常小學校（大正八年三月卒業）、縣立長岡中學校（大正十二年三月卒業）を經て、昭和二年三月滿洲醫科大學豫科を卒へ、同六年三月滿洲醫科大學を卒ゆ、直ちに滿洲醫科大學病理學教室副手を拜命し、翌七年一月同教室助手となる、同八年五月同教室を辭し大連滿鐵衛生研究所病理科員を拜命し今日に至る、斯間同十一年二月學位を授與せらる。

△學位主論文は『衣虱ノ發疹熱並ニ發疹「チフス」病毒媒介機轉ニ關スル實驗的研究』にして、參考論文十篇あり。

△本籍地は新潟縣長岡市觀光院町にして、明治三十七年正山寅太の五男に生る。年齒未だ三十有四の少壯にして、熱心なる研究家を以て知られ、研鑽多年、在勤の儘職務の余暇を以て、自己の研究に一路邁進して亦他を顧みず、克己奮鬪、終に克く初志を貫徹して學位を獲得せる厚志篤學は、既に博士の前半生史に輝きて燦然たるものあるのみならず、頂門の一針として特筆すべきに値す。生來純學者肌の性格にして邪氣なく、純情にして正直なれば短氣なり、而かも人と接するに自抑淡々、己を虛うして人に厚く、克く後進の面倒を見て指導に親切なるは、自ら人に敬慕せらる趣味としては野球、水泳、將棋などを好む。家庭には妻との間に一男一女あり。大連市聖德街一ノ一四七に住む。

衞生學科、細菌學科

微生物學科、免疫學科、血淸學科、熱帶病學科

渡邊義政　△眞面目なる學究の人として玆に推奬し度きは渡邊義政博士なり。博士は神奈川縣山中藩（小田原藩主の分家）の人、明治十五年生にして、同三十五年東京濟生學舍に其の業を卒へ、同年醫師開業免狀を受く、翌三十六年東京帝大醫科に入り選科生として研究に從事す、同三十七年海軍々醫候補生となり、間もなく任海軍少軍醫日露戰役に從事す、同三十九年任中軍醫、日露戰役の功に依り叙勳六等、同四十二年任大軍醫、同四十五年叙勳五等大正三年海軍々醫學校高等科卒業、同年歐洲大戰に參加、翌四年任軍醫少佐、叙正五位、戰役の功に依り叙勳四等、同五年秋豫備役に編入、大正五年春北里研究所に入所今日に至る、其間大正十二年四月慶大より學位を授與せらる。

△學位主論文「結核菌ニ對スル天然免疫ノ機轉」參考論文、(1)結核免疫ニ關スル一二ノ實驗的研究、(2)結核菌部分的成分ノ免疫關係、(3)「チフス」菌「パラチフス」A及B型菌三種混合「ワクシン」ノ實驗的研究、(4)二三ノ菌ニ對スル天然免疫上細胞ノ意義、(5)健常並ニ免疫「モルモツト」體內ニ於ケル「コレラ」菌ノ運命、(6)一九二〇年日本ニテ流行シタル「コレラ」菌株ノ實驗並ニ「エルトール」菌株ヲ論ス、(7)大正十年初夏神奈川縣及東京府ニ發生セシ「コレラ」患者ヨリ分離シタル菌株ニ就テ、(8)「インフルエンザ」毒素抗毒素ニ就テ、(9)煮沸免疫元ノ價値、(10)流行性感冒ノ原因ニ就テ、(11)「インフルエンザ」免疫血淸ノ實驗的研究、他に論著夥多。

△顧みるに博士は、弱冠二十二歲にして早くも醫師試驗に合格したる元濟生學舍出身の篤學者なるが、未だ選科生として東大病理學教室に在學中の頃、時しも、日露の風雲急を告げて軍醫の補充に苦慮しつゝあるを見たる博士は、奉

公の決心を固め驟然として起ち、入つて海軍の人となり少軍醫として戰に參加して以來、昇進して軍醫少佐となるに及び、天資學究に餘念なき博士は長官との諒解を得て軍部を退き、直ちに新興の北里研究所に入る、爾來北研に在つては專ら結核菌の研究に精進し、副部長として結核を擔當し、眞摯なる學究生活を續く、又外に對しては結核の天然免疫に關する研究など特に尊重せられ、斯學に重要なる一學究として其の大なる存在を認めらる。殊に又此の一二年は癩の研究に沒頭し、社會救濟の爲め自力を盡して以て天職と爲し、自己の本分と爲す。從つて毀譽褒貶の如きは毫も意に介せず、學究以外、何等の趣味をも持たざるが如し。東京市日黑區上目黑八ノ二九二に住む。

◇

寺田正中　△東京慈惠會醫科大學教授寺田正中博士は、慈惠醫專出身の篤學者にして、北里派の老大家照內博士並に傳研の橫手、竹內兩博士指導の下に細菌學を研究し、又嘗て獨逸に留學するやベルリン大學ミハイリス及びローナ兩教授の下に膠質化學を、ライプチヒ理科大學理化學研究所オストワルト教授の下に同じく膠質化學を、ライプチヒ醫科大學トーマス教授の下に生物化學を專攻し、慶大より學位を獲得せり。主論文は『「インフルエンザ」菌發育ニ必要ナル血液成分ノ研究』にして、參考論文なし。

△茨城縣北相馬郡井野村字山堀の人、明治二十五年生る。大正四年東京慈惠會醫專を卒へ、引續き同校細菌學教室助手として同九年迄勤務、其間北里研究所及傳染病研究所にて研究、同十年東京慈惠會醫大助教授任命、同十一年淺川賞を受く、同十一年五月同大學より歐米留學を命ぜられ、主として獨逸にて研究す、尙滯歐中佛、瑞、墺、ハンガリー、伊、英の各醫大を視察し、歸途米國各醫大を巡視し同十三年十二月歸朝、其間同十二年七月學位受領、同十四年一月東京慈惠醫大教授、及東京齒科醫專教授任命現在に及ぶ。東京市世田谷區代田二丁目六八一ノ四に住む。

◇

椎葉芳彌　△京城府立順化病院長椎葉芳彌博士は、前の京城帝大教授にして微生物學の造詣深く、有名なる細菌學者として朝鮮醫界に重要視せらるゝ一人物也。博士は長崎醫專出身の篤學者にして、多年北研にて細菌學を研究し、後ち獨逸に留學して、伯林大學にてはローナ教授指導の下に物理化學を、ウキルヒョウ病院にてはウオールゲムート教授に就き酵素學を、フライブルグ大學にてはウーレンフート教授に師事して微生物學を研究せり。今や其の最も得意とする傳染病方面に獨特の手腕を發揮し貢獻する所多し。

△宮崎縣西臼杵郡椎葉村の人、八次郎の次男にして、椎葉明治二十四年生る。縣立宮崎中學校を經て、大正四年長崎醫專を卒へ、直ちに東京日本橋區菊池耳鼻咽喉科院に勤め、同四年辭して北研に入所し、臨床部にて患者の診療に從事し傍ら細菌學を研究す、同九年鐘淵紡績株式會社細菌室主任、兼同兵庫病院傳染病科長となる、同十年任朝鮮總督府技師、兼同府醫院技師、同十一年任京城醫專教授、兼同府醫院技師、同十三年微生物學研究の爲め獨、英、米國に留學を命ぜらる、主として獨逸にて研究し、滯歐中獨、瑞、佛、チェツコ、伊、墺、白、和、丁、英の諸國等を遍歷して各地の大學、病院、研究所を見學し、同十五年歸朝復職す、其間大正十三年六月慶大にて學位を受領し、歸朝後京城帝大助教授に任せらる、昭和六年同大學教授に陞進して辭職、現職に就任今日に至る。

△學位主論文は「喰菌現象ニ及ボス枸櫞酸曹達ノ影響並ニ枸櫞酸曹達加血液喰菌作用ノ原理ニ就テ」にして、參考論文は、(1)血漿ノ喰菌促進作用ニ關スル實驗的研究、(2)血漿喰菌促進作用（免疫反應）ヲ應用セル「チブス」ノ早期診斷第一、二回報告、外歐文原著五篇あり。其他に和歐兩文の論著多數あり。

△學者肌の人、凛々しき風貌の裡に溫威を藏し、その福德圓滿の表れは自ら其の性格を窺ふに足る。眞摯にして高潔殊に其居常能く應答の禮を重んじ、人に對する誠實と情味の掬すべきものあるは、尊ぶべき人格の表現なり。京城府新橋洞八番地に居をトす。

◇

黑田昌惠　△九大系の病理學者にして、特に傳染病を最も得意とし其の存在を認めらるゝは、黑田昌惠博士也。博士は茨城縣結城郡山川村黑田貞三郎次男、明治十三年生にして、獨逸協會中學、一高を經て、同四十一年京都帝大福岡醫科を卒へ、助手として病理學教室に勤め中山、田原兩教授に師事す、同四十二年末東京帝大病理學教室に轉じ山極、長與兩教授の指導を受く、同四十三年文部省醫員となり永樂病院に勤め、故宮本叔博士の下に內科並に病理解剖を研究す、大正三年醫術開業試驗委員被仰付、同六年永樂病院を辭し東京市駒込病院助手となり、傳染病の診療並に病理解剖を擔當す、同八年二月東京市醫員に任じ、爾來約十ケ年間駒込病院に勤續す、其間屢々市立廣尾、大久保、本所病院等に出張、院長代理として「チフス」赤痢「コレラ」等の診療隔離勤務に從事す、同十三年七月東京帝大より學位受領、同十四年任東京市技師、同十五年橫濱市立萬治病院長に就任、其後職を辭して歸鄉閑地に悠々たり。

△學位主論文は『「コレラ」腎及蟲樣突起ニ於ケル病理解剖學的新知見ニ就テ』にして、參考論文は、(1)副腎惡性腫瘍ニ就テ、(2)副腎ニ於ケル硝子樣小體ニ就テ、(3)原發性惡性肋膜腫瘍ニ就テ、(4)大正九年一月乃至三月大久保並ニ本所病院ニ於ケル流行性感冒報告、(5)腸「チフス」菌ニ因スル腎臟膿瘍ニ就テ、(6)所謂「ネフロチフス」ニ就テ等なるが、其他論文多數、著書としては「臨床必携新選處方」あり。

△綾城又は華笑は其の號にして、文學的趣味豐富なり、殊に美術を賞玩し、又野球を好む。賦性謹直にして毫も衒はず、虛榮虛名を避け、敢て巧言令辭を用ひずと雖も、社交圓滿、人と接するに溫情の掬すべきものあるは多とす。茨城縣結城郡山川村大字山王に住む。

◇

小島三郎　△東京帝大助教授にして傳研所員兼防疫官たり、又日本醫科大學教授として衞生學講義を擔任しつゝある小島三郎博士は、岐阜縣羽島郡中屋村の人、明治二十一年生る。大正六年東京帝大醫學部を卒へ、同十三年十月母校より學位を獲得せる細菌衞生學者也。同十五年文部省在外研究員として瑞西及獨逸に派遣せられ、二ケ年間滯歐中、主にスエーデンの生化學者オイラー先生に師事して研鑽大に得る所あり、これよりさきに母校助教授たると同時に傳研所員に補せられ、今日に至る。

△學位主論文は、『糖含有培養器中ノ細菌ト水素「イオン」濃度トノ關係ニ就キテノ知見補遺』にして、參考論文は、『「コレラ」菌「チフス」菌、赤痢菌ノ發育ニ最適ノ培養基ノ水素「イオン」濃度ニ就テ』なり。

△白帆又は別天幸兵衞はペンネームにて、藝術愛好家として知らる、又た運動に趣味を有す。家庭には妻時子との間に二男二女あり。東京市大森區田園調布三丁目一一一ノ一に住む。

備考　同姓同名の異人として熊本縣八代郡八代町に小島內科醫院長小島三郎博士あり。

◇

大坪五也　△警視廳技師にして細菌檢査所長たる大坪五也博士は、千葉醫專系の一異才にして、北研の寵兒として世人に囑目せられ、長老北島多一博士に直屬して十餘年間、その指導の下に研究生活を續け來れる年壯の學者なるが、曩に此研究室より街頭に出でて獨特の手腕を發揮し、一旗擧げんとする意氣や壯とすべく、向後の活躍と相待つて、輝しき前途の成業を待望せらる。

△博士は佐賀縣小城町大坪敎忠五男にして、明治二十三年を以て生る。縣立小城中學校を經て、大正五年千葉醫專を卒へ、直に助手として同校細菌學教室に勤め、同六年北里研究所助手となり、同八年滿洲に於ける「コレラ」防疫の爲め、關東廳より內務省へ依囑せる招聘に應じ關東廳檢疫醫を被命、支那側防疫顧問として奉天に三ケ月滯在、同九年朝鮮總督府より內務省へ「コレラ」防疫の爲め、依囑せるに應じ朝鮮總督府檢疫醫を被命京城に四ケ月滯在、同九年

北研正助手を被命、同十二年北研より細菌學研究の爲め歐米へ留學を被命、ウイン大學に於て細菌學並に血清學研究同十四年歸朝す、同年三月慶大より學位受領、同時に北研副部長を被命、昭和三年頭書の現職に就き今日に至る。

△學位主論文は『細菌ノ「カタラーゼ」ニ就テ』にして、參考論文は、(1)細菌ノ對抗作用「アンチビオゼ」ト其蛋白質分解酵素、(2)沃度ノ「コレラ」培養ニ對スル一新現象ニ就テ、(3)沃度ノ「コレラ」培養ニ對スル新現象知見補遺、(4)細菌培養中ニ現ハル、「スピロヘータ」様螺旋體ニ就テ、(5)細菌培養濾液並ニ罹患動物血清の免疫血清ニ對スル反抗作用ヲ論ジ襲撃素説の批判ニ及ブ等なり。他にも獨文原著の論文多し。

△感想に曰く「醫學に關する研究が驚くべく盛に成つた事は慶賀に耐へぬ。が然し只管微に入り、細を穿つのみが必ずしも研究の眞の意義ではない。第一義的の研究が最も尊い。第五や第六義的の研究が澤山でも夫れが果して如何なものか。徒らに研究室裡の研究に終つたり、文獻を增す丈の研究であつたりするのは考へものだ。眞劍に自然そのものを鋭く觀察することが大切だ。頭腦で揑上げた理屈を基礎とした研究は往々眞理を沒却する」云々。

△北研に入りて以來十餘年一日の如く、終始研究に沒頭して既に故參に入り、副部長として老大家たる幹部を援けて「北研」の牙城に中堅として囑目せられたる博士が、一生を研究生活に捧げたる環境より轉化して、役人生活に入れる向後の活躍は那邊に展開し來るかは衆目の注視する處なるべし。博士生來頭腦明晰を以て聞ゆ、人と爲り謹嚴にして寡言、世の毀譽褒貶を意に介せず、膽嚢あり思慮に富む、而して平生應答禮を重んじ、其人に接すれば謙讓にして敢て學者たる尊大の態度を現はさず、克く自抑して禮意あるは甚だ多とするに足る。居常の趣味としては繪畫の嗜深く風流を好む風あり。澁谷區代々木四六六に住す。

◇

矢崎芳夫

△東京慈惠醫大教授矢崎芳夫博士は、慈惠醫專出身の細菌學、衞生學者にして、横手千代之助及び綿引朝光兩博士の指導を受け、嘗て獨逸に留學するや、フライブルグ大學衞生學教室にてハーン教授に就き細菌學及び衞生學を專攻し、次でハーン教授に從ひて伯林大學衞生學教室に轉じ、傍ら藥物學教室にてローゼンムンド教授指導の下に膠質化學を造詣する所あり、歸朝後慈惠醫大より學位を獲得せる篤學の名醫博也。主論文は所謂「バクテリオフアージュ」による溶菌現象が、眞にデレル氏の主張するが如き「超顯微鏡的濾過性微生物」によりて起るものなりや、將た又ボルデー氏等の唱ふる細菌自己の自家融解現象 Autolyse なりやを闡明せんとして研究せるものにして獨逸文を以て著はせり。

△大正六年東京慈惠會醫院醫專を卒へ、直ちに同校助手として細菌學教室に勤め、學制改革の結果、同十年更に東京慈惠會醫大助手となる、同年十一月渡歐、主として獨逸にて學び、同十三年十月より英、佛、米を見學して同十四年一月歸朝、同時に任東京慈惠醫大助教授、同年八月學位受領後、同年十月同大學教授に任ぜらる、昭和二年文部省より自然科學奬勵補助費を下附せらる。

△參考論文は、(1)「サルバルサン」ノ血清ニ及ボス作用ニ就テ、(2)海猪血管ニ注入セラレタル「カオリン」ノ作用、(3)「アンチゲン」稀釋溷濁度ノツ氏反應ニ及ボス影響、(4)結核菌及ビ癩菌ノ還元染色法、外五篇あり。其他論著夥多特に近來發光生物學並に衞生氣象學に多大の興味を有し、最近に「發光バクテリアニ就テ」の發表あり、引續き此の方面の研究を進めつゝあるは頗る刮目に値す。

△我が國の氣象を醫學的に研究し、國民の保健衞生並に疾病治療の資料に供せんが爲め之が研究に着手せるものなるが、昭和九年四月の衞生學會にて既に之れに關する二三の報告（教室の仕事として）を爲し、中央氣象臺長岡田博士を始め藤原、關口兩博士の後援を得て益々此方面の研究を進めつゝあり。又同年五月東京慈惠會總會に行啓ありたる時畏れ多くも皇后陛下に「東京市の日光と紫外線」について御説明申上るの光榮を得、尙秩父宮妃殿下を始め奉り在

京九宮妃殿下も御臺臨の光榮に浴せり。又た生物の發光の如き衞生的無熱燈の研究に從事して以來既に十年有餘を閲し、曩に研究十年の記念に「發光バクテリアニ就テ」の小冊子を刊行して識者に頒布せり。

△博士の出身地は長野縣諏訪郡永明村にして、明治二十七年生る。矢崎正方（東京齒科醫專教授）醫博は兄にして、白鳥文雄醫博、藤井美智男醫博は何れも義弟に當る。眞面目なる學究的の人にして、徹底的に成し遂げずば止まぬ氣慨を有し、研究に對する態度は眞摯にして甚だ熱心なり。年齒漸く不惑に入る二歳、新進にして少壯の意氣に燃え、研究心潑剌として前途洋々たるものあり。東京市澁谷區代々木富ケ谷一四五三に住む。

◇

細谷省吾　△東京帝大助教授にして、傳研所員たる新進の細谷省吾博士は、東大系の細菌學者にして、母校より學位を得たる少壯醫博として其の潑剌たる前途を囑望せられ、將來有爲の學究たる一人物也。

△東京市の人、明治二十七年生る。東京府立一中、一高を經て、大正八年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに傳染病研究所に入り細菌學を專攻し、同十五年四月學位を受領す、斯間陸軍一年志願兵及甲種勤務演習を了へ、豫備役陸軍三等軍醫に任ぜらる、學位受領後引續き研究を續け、傳研囑託を受く、昭和三年東京帝大助教授に任ぜられ、兼ねて傳研所員として今日に及ぶ。

△主論文は『嫌氣性細菌ノ生活要約ニ關スル研究（「チステイン」ヲ應用セル嫌氣性細菌新培養法）』にして、參考論文なし。外に、(1)細菌ノ營養特ニ水溶性「ヴイタミン」ト細菌ノ發育トノ關係ニ就テ、(2)大腸菌ニヨル水溶性「ヴイタミン」合成ニ就テ、(3)「インフルエンザ」菌株相互ノ免疫學的關係ニ就テ、其他論著夥多あり。

△博士の年齒不惑に入る一歳、少壯の意氣益壯にして研學の念に燃え、切磋卓勵甚だ勉むる所あり。學究的眞面目なる學者にして、志操堅實、毀譽褒貶毫も意に介せず、只管研究に專念し又た他事を顧みるなし、其の教壇に起つや熱誠克く學生の提撕に務む、平生人と接するに敢て城壁を設けず、快活にして能く座談し能く人を愛す。研究以外、趣味としては運動を好み、殊に野球及び水泳を能くす。東京市本郷區元町一ノ九に住む。

◇

平野林　△陸軍々醫學校教官にして防疫學教室及び防疫部主幹たる平野林博士は、陸軍二等軍醫正、從六位勳三等。岡山醫專出身の篤學者にして、東京帝大より學位を獲得せる稀有の軍陣防疫學者也。多年陸軍に奉仕して醫育、醫務及び臨床に歷任し、至誠一貫、盡忠を抽んで亦他事を顧みるの暇なし。今は教壇の人として專念其の事に精進し、熱誠克く其の蘊蓄を傾倒して學生の指導に務め、以て自己の本分として一意專心國家の爲め盡す所あり、甚だ多とすべき也。

△顧みて博士の今日ある經歷を概說すれば、明治四十四年岡山醫專卒業後、同四十五年六月任陸軍三等軍醫、補步兵第十四聯隊附、大正二年八月陸軍々醫學校入學、同三年六月補小倉衞戍病院附、同四年六月任二等軍醫、同年七月陸軍々醫學校退校、同五年四月補第十二師團軍醫部員、同七年十二月任一等軍醫、同八年九月傳染病研究所入學、同十年九月迄研究、同年同月補陸軍士官學校附兼同校教官、同十三年四月任三等軍醫正、同十四年八月補野砲兵第一聯隊附、同十五年六月學位受領、同年八月補平壤衞戍病院附、昭和四年八月任二等軍醫正、補東京第一衞戍病院附兼陸軍々醫學校教官、同五年四月熱帶病研究の爲め、米領比律賓群島に出張、マニラ市科學局にてショーブル博士指導の下に熱帶病を研究し、ワイル氏病鼠咬症等に關し論文を發表す、同七年四月歸朝、同年九月牛込恩賜財團濟生會病院細菌科長囑託、同年十二月日本大學醫學科講師囑託、同九年三月補陸軍々醫學校教官、同年同月叙勳三等賜瑞寶章以て今日に至れり。

△主論文は「肺炎双球菌就中粘液性肺炎球菌ニ就テ」にして、參考論文は、(1)「コレラ」赤反應ヲ呈スル赤痢菌株ニ

就テ、(2)一種ノ沈降現象ニ就テ、(3)人血球凝集反應ニ就テ、(4)ワイル、カフカ氏溶血素反應ニ就テ、(5)一種ノ病原性「モンリア」ニ就テ、(6)自家考案腸管性傳染菌一新分離培地ニ就テの六篇なるが、此他英文にて發表せる論著も尠からず。著書「細菌學講義錄」（田邊博士共著）以て博士の研究方面の一端を窺はる。

△感想としては「軍籍に在る吾々は研究せる事項が直に實際に役に立つと云ふ方針で研究し教育もしつゝあります」云々との一片を吐露せり。福岡縣嘉穗郡庄内村平野保太郎の長男、明治二十年生る。眞面目なる學究的學者肌の人にして、賦性篤實穩健、志操堅實、清淡にして功利に恬澹たり、人と接するに快活にして寛厚能く人を容れ、部下に親切にして克く學生を愛撫す、學者として其の態度の眞摯にして紳士的なるは、其の崇高なる人格を敬慕すべき也。讀書家にして書見を業餘の樂しみとし、研究に趣味を集中して猶精研に餘念なし。春秋猶豐富、幸に健康と共に、國家の爲め益々奮盡活躍あらん事を切望す。東京市小石川區久堅町七四ノ四〇に住む。

◇

二宮敬治

△岩手醫專教授にして、其の最も得意とする内科學を講じつゝある二宮敬治博士は、九州帝大系の新進なる内科學及び細菌學者にして、恩師小野寺教授の指導を受くる所厚く、母校より學位を得たる少壯醫博也。該博なる學識を有し、臨床にも堪能にして多年の經驗に富む。今や新知見を披瀝して學生の提撕に力め、只管醫育に專念して亦た他事を顧みざるの概あり。

△博士は盛岡中學校、二高を經て、大正九年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに副手として衞生學教室に勤め、同十年六月任助手、同十二年十月任長崎醫大助教授、兼同附屬專門部教授、同年十一月長崎高商講師囑託、同時に長崎醫大附屬藥學專門部講師囑託、同十四年七月辭して九州帝大醫學部小野寺内科に勤務、同十五年六月宮城縣石卷町私立牡鹿病院長として就任、同年七月學位受領、昭和四年三月現職に就任、昭和六年岩手サナトリウム院長を兼職す。昭和九年日本内科學會評議員に推薦さる。

△主論文「細菌性血球凝集反應ニ關スル研究」にして、參考論文は、(1)「パラチフス」A菌ニ因ル急性胃腸炎、(2)腸窒扶斯菌ノ異型ト其ノ病原性、(3)綠膿桿菌ノ產生色素ニ關スル知見の三篇なり、他にも論著夥多あり。

△感想に曰く「醫術、醫業は、申すまでもなく私達に與へられた尊い天職であります。而してこの尊い天職も、その地位、その環境の如何で、少しづゝは異つた方途をとつて遂行される事も又止むを得ない事でありませう。既に大學を離れたものには、學問とか研究と云ふ方面から患者を看る乃至取扱ふと云ふ事は、殆んど出來ない事であります。又容易に許さない事であります。そこで私達の念願は、時に研究方面に不滿足を感じ乍らも、觀察と思考だけは充分重ねて、そこから起つて來る疑義疑問をなるべく系統的に整理しておきたいものだと云ふ事です。そう云ふ意味で現在この隆盛な醫學會にもう少し臨床的なものが加味される傾向をも助長したいものだと思ひます」云々。

△岩手縣盛岡市の人、明治二十六年生る、當年不惑に入る三歲にして少壯の意氣益旺也。學究的學者タイプの好紳士にして、文學趣味の人として知らる。教壇に起つや熱誠克く學生の指導に盡し能く愛撫す、其の態度の眞摯にして熱情あるは、眞面目なる學者として其の人格を敬慕すべき也。盛岡市内加賀野小路二九に住む。

◇

北野政次

△陸軍々醫學校教官兼陸軍省醫務局課員たる北野政次博士は、東京帝大系の細菌血清學者也。氏は兵庫縣印南郡米田村神爪の出身、又藏の四男、明治二十七年生にして、大正九年東京帝大醫學部卒業、同年近衞步兵第二聯隊へ見習醫官として入隊、同十年三月任二等軍醫、補近衞步兵第四聯隊附、同十一年八月臨時教賀檢疫所々員被仰付、十二年四月傳研入學、同十二年十一月任陸軍一等軍醫、同十四年四月補近衞輜重兵大隊附、同年七月東京第二衞戍病院兼勤、同十五年三月東京第一衞戍病院附兼補陸軍省醫務局課員、同年十一月東京帝大より學位を得、其

後海外を視察せり、現に頭書の要職に在り。專攻は細菌血淸學にして西澤、高木、二木博士等に師事して造詣する所深し。新進にして該博なる學識を有し識見に富む、將來有爲の學究として軍醫界に最も囑目せらるゝ名醫博也。

△主論文『「チフス」及「パラチフス」菌屬ノ血淸耐性ニ關スル實驗的研究』（和文及歐文）參考論文は『難凝集性「チフス」菌ノ研究』外二篇、其他論著多し。讀書家にして舟月を號とす、乘馬其他の運動、圍碁を趣味す。志操堅實にして名利にに淡なり、人と接するに親切にして、人格高潔也。東京市世田谷區代田一丁目六五二ノ五に住む。

◇

田澤芳三郎　△岩手醫學專門學校に新進の教授として細菌學及び衞生學を講じつゝある田澤芳三郎博士は、東北帝大出身の細菌學者にして、恩師世界的細菌學界の權威なる青木薫教授の嚴格にして且つ厚き指導を受け、特に細菌の免疫學に關する造詣深く、母校より學位を獲得せる少壯の名醫博として其の存在を認めらる。蓋し東北帝大青木教授門下よりは、先に衞生學教授となれる近藤博士あり、又現東京市衞生課長酒井博士は次の助教授たりき、其の後を受け專ら細菌學方面に入りしは氏を以つて最初となす。今や其の蘊蓄を傾倒して學生指導の任に當り、熱誠克く其の任を果たすに眞面目にして忠實なるは、適所に適材を得たりと云ふも敢て過言にあらず、醫專教育界の中堅として推奬するに吝ならずとせん乎。

△主論文は『腸「チフス」菌ノ人體感染機轉ニ就テ』にして原著は獨逸文より成れり、外に、參考論文としては、(1)「パラチフス」A菌株ノ一種ノ細菌ニ就テ、(2)眞ノ「パラチフス」B菌ニヨル食中毒例ニ就テ、(3)「パラチフス」B型菌ノ一種ノ新シキ變異ニ就テ、(4)「パラチフス」B菌感染ニヨル患者血淸ノ凝集反應ニ由ル分析、(5)「パラチフス」B菌ノ新シキ變異型ニ就テ、(6)野兎ヨリ人間ニ感染セルト思ハシムル一種ノ新シキ疾患ノ病原體ニ就テの六篇あり。其後の研究著述の內主なるものを擧ぐれば、(1)「オツエナ」患者ノ細菌學的研究、(2)非定型的「パラチフス」A菌ニ就テ（財團法人齋藤報恩會補助ニヨル）(3)大原菌ノ牛乳凝固ニ關スル機轉、(4)東北地方ニ於ケル赤痢、疫痢樣疾患統計ノ細菌學的研究、(5)食中毒ノ研究、(6)細菌ノ免疫學的變異ニ關スルノ研究、(7)結核菌ニ關スル研究、其他多數。

△東京市日本橋區小傳馬町田澤守政の三男にして、明治三十年生る、二高を經て、大正十二年東北帝大醫學部を卒へ直ちに同大學細菌學教室助手に任官、昭和二年任同大學助教授、同四年四月東北帝大より學位受領、同時に岩手醫專教授に任ぜられ今日に至る。兄弟五人ありて何れも帝大出身なり、三男に生れたる氏は、今年齒漸く三十有九歳にして、少壯の意氣に燃え研學心潑剌たるものあり。學究的眞面目なる紳士にして、其の態度の眞摯にして熱情あり、且又志操堅實にして禮意あるは甚だ多とす。趣味としては水泳を好み、水府流の指南にして又た能く讀書す。春秋猶頗る豐富なれば、輝かしき前途は洋々たり。盛岡市仁王小路一一〇に住む。

◇

荻野純三　△稅關醫官として門司稅關港務部に荻野純三博士あり。學統は府立大阪高醫系に屬し、學位は府立大阪醫大より獲得せる細菌、血淸學及び衞生學（特に社會衞生）者として錚々たるものにして、所謂大阪醫大派の名醫博たるに耻ぢざる一人物也。嘗て大阪府衞生課に初代の大阪府保健調査主事として任ぜらるゝや、都市農村保健調査に從事すると共に、我國に於ける乳兒死亡低減運動の先驅者として、大阪の乳兒死亡率低減策の考究に沒頭し、其成績は全國に冠たる資料となり、現在大阪市に於ける二十數ケ所の小兒保健所の基礎を作り、學界の稱讃を博せるは世人周知の如し。また大阪府細菌檢査主任時代には、御大典に際し　大阪行幸の御警衞豫防を始め、累年の「コレラ」「ペスト」流行に奮鬪活躍を續け、大阪府市民よりは忘れる事の出來ない恩人として仰がれ、永遠に記憶さるゝ學究の人たるを、推奬玆に特筆す。

△博士は兵庫縣柏原中學を經て、明治四十三年大阪府立高醫を卒へ、直ちに衞生細菌學教室助手となり、大正二年任

同校助教授、四年大阪醫大教授囑託、六年大阪府衛生課に轉じ任大阪府保健調査主事、七年任大阪府技師、八年防疫官兼任、爾來「コレラ」「ペスト」の流行時には、主として船舶檢疫事務に携はり防疫に全力を盡す、十一年都市計畫大阪地方委員會事務取扱を囑託せられ、衛生方面に關する事務に當る、昭和三年十月下旬大阪府細菌檢査主任を命ぜられ、以來御大典、同四年　大阪行幸の御警衛豫防の任に當る、同年十一月學位受領、七年門司稅關醫官に轉任し現在に及べり。斯間の指導教授は母校の恩師佐多愛彦博士、故福原義柄博士、谷口腆二博士等にして細菌、血清學及び衛生學を專攻せり。

△主論文は「沈澱素血清ノ檢定方法並ニ蛋白沈澱反應ニ關スル知見補遺」にして外に、參考論文としては、(1)「ツベルクリン」ノ補體結合力ニ就テ、(2)大阪市ニ於ケル主要ナル乳兒死因ト其看護ニ就テ、(3)「ヘテロゲネーチツシエアンチケルペル」ニ就テ、他に獨逸文原著四篇あり。主論文は法醫學上と微菌診斷上に於ける血清に關する研究にして博士の最も得意とする會心の作なり。

△「大正七年大阪府で乳兒死亡遞減策研究に沒頭して居る頃時偶々米騷動に遭遇したので私の昵懇な友人達は此の米高に食糧問題も考へないで乳兒死亡の遞減でもあるまい、虛弱な乳兒の夭折は自然淘汰の現象だと冷評されたことも一再ではなかつた。年立ち月日は流るゝ内に乳幼兒の保護運動は年一年と隆盛になり當時乳兒の夭折者は生産千中百八十九名もあつたが累年遞減して昭和六年には百三十二名までに減じ人口の增加歩合も近年益々增加の傾向を示して居る。然るに一面本邦人の主食品たる米は昨今過剩の生産となり米價の調節や減反法など其處分方法がやかましく論議せらるゝ世の中となり曾ては友人達が考へた樣に食糧の不足を告げる樣なことも今の分では當分なさそうだ、其當時を回顧すれば何だか皮肉の樣な感もする」云々、とは博士の感想の一片なり。

△兵庫縣氷上郡柏原町の人、安藤廣太郎の實弟、明治十七年生れにして、同郡和田村和田の叔父の家を繼ぎ現姓を冒す。其の今日ある篤學は既に博士の前半生史に盡して餘蘊なく、立志傳的奮鬪の成業は頂門の一針として銘すべき也。若し夫れ其性格より打診すれば、生來几帳面の方にて、凡て物事をキチンとして置く事、熱心にして遣る事を徹底的に一貫成就する事、溫厚にして無駄口をきかぬ事等々は長所と見るべきか、强ゐて其の短所を指摘すれば、或は短氣の癖なきか。喫煙家にて、園藝と寫眞とを趣味とす。長兄農博安藤廣太郎（農林省西ケ原農事試驗場長）、次兄安藤正次郎（兵庫縣柏原町會議員）、弟安藤泰治（安田銀行岡山支店副支配人、法學士）あり。門司市丸山町三丁目稅關官舍に住す。

◇

桐林茂　△臺灣醫療界は多士濟々として近來博士人物に富む、玆に推奬し聊か品隲を試みんとする臺北州港務部檢疫課長たる桐林茂博士の如きは、新進なる細菌學、寄生蟲學者として重きを爲す新人物たるを至囑す。博士は金澤醫專出身の篤學者にして、桂田富士郎及び横川定兩博士の指導を受け、寄生蟲の研究に從事し居たるも、職を防疫の第一線たる臺北州檢疫課長の要職を奉ずるに至り、專ら細菌學の研究に沒頭し、丸山博士の指導を受け細菌學の蘊奧を極め、實地上に則したる論文を完成し、是を金澤醫大に提出して學位を獲得せる斯科界の名醫博也。此間歐米及び印度を漫遊見學し研鑽大に得る所あり。今や其の蘊蓄を傾倒して、斯道の爲め奮盡活躍しつゝあるは刮目に値し、博士の面目の躍如たるものあるを斯間に窺はる。

△博士は大正五年金澤醫專卒業後、直ちに船員病並に熱帶病研究所々員を命ぜられ、所長桂田博士の指導を受け寄生蟲學の研究に從事す、同十二年五月任臺灣總督府衛生技師、臺北州細菌檢査所主任技師を命ぜらる、同十四年二月任臺灣總督府臺北州港務醫官、港務部檢疫課長を命ぜらる、昭和二年十二月印度カルカツタ市開催第七回極東熱帶醫學大會、並に印度デリー市開催第三回國際聯盟亞細亞東局諮問委員會へ臺灣代表委員として出席を命ぜらる、同六年五

月臺北醫學專門學校細菌教室ニ入リ、丸山芳登博士の指導を受け細菌學を專攻す、同七年五月兼任臺灣總督府地方技師、警務部衞生課勤務を命ぜらる、同八年十一月金澤醫大にて學位を授與せられ、今日に至る。

△主論文は『「コレラ」菌ノ早期診斷並ニ生物學的性狀ニ關スル研究補遺』にして、五編より成る。參考論文として(1)裂頭條蟲屬殊ニ廣節裂頭條蟲ノ發育ニ關スル研究、(2)一八九五年以來臺灣ニ流行セル「コレラ」流行史ニ就テ、(3)「ヤトレン」一〇五號ノ「コレラ」菌携帶者ニ於ケル內服治驗例、(4)昭和七年臺灣ニ侵入セル「コレラ」ノ菌型ニ就テ、(5)昭和六年神戸門司兩港ニ侵入シタル上海系コレラ菌株ヲ吟味シ、本菌々型分類ノ私見ヲ述ブ、(6)矮小條蟲ノ發育ニ關スル研究殊ニ其種別ニ就テ、等あり。要するに「コレラ」の確實なる診斷を下す上に於て時間を短縮し得た事と類似弧菌との鑑別を生物學的性狀により判別し得たる事は特筆に値す。

△感想に曰く「我が國の衞生機關に就て一言せんに我が國の醫學は著しく發展を來し其衞生機構に至りては決して他國と遜色無き狀態に達したりと雖も其運用は未だ舊殼を脫せざる傾がある。例へて見れば研究は學者の領域にして第一線に立つ者の爲すべき領域に非ずと考ふる者がある。之は非常な誤である、斯る考は過去の問題に屬し日進月歩の今日では第一線に立つ者も時々遭遇せる問題を材料として研究し實地に之を活用する事が第一線に立つ者の考慮せなければならない問題と思ふ。併し現下の衞生機構は中央集權主義を執り、大學や研究所に於ては相當の設備や研究費を用意せらるゝが第一線にある衞生機關に對しては形骸を止むるに過ぎずして施設や研究費に至りては、殆んど考慮を拂れてない有樣で誠に重大な問題と思ふ。此點は他の諸外國に於ては充分に考慮され、第一線にある衞生機關の施設や研究費の充實を計り、それに携る者をして充分活躍せしめ居るを以て斯る中より幾多の有爲なる人物を輩出し、有益なる業績を發表し居る事實に徵し明かなり。從つて我が國に於ても大學や研究所にありて働く者も象牙の塔を出で實地に携り指導もなし共に研究せなければならない。又一方第一線に立ちて活動する者は進んで大學や研究所と相提携して實地に遭遇せる問題を好材料として研究し且つ實地に之を活用する心掛が緊要と思ふ。然らざれば我が衞生機關の發達は望れないと思ふ。近時甚だ喜しき現象は第一線に活躍しつゝある者より盛んに有益なる業績の發表せられつゝあるを觀て邦家の爲慶賀に堪へ無い。現下の非常時局に際し一層第一線にある者も奮勵努力を要望すると共に、又當局としても斯かる第一線にある衞生機關の施設の完璧と研究費の充實を計る事が衞生機關の發達を促す所以と思ふ」云々。

△福井縣大野郡大野町清水三三桐林又吉の長男にして、明治二十四年生る。學究的溫厚の紳士にして篤學者たり、其の今日ある閱歷は博士の前半生史に盡きて餘蘊なく、今は分別盛にて年齒漸く不惑に入る五歲、年壯の意氣益々壯にして研究心に燃え、多少熱血なる性質にして物事を着實に行ひ、至誠一貫、本職の爲め勵精恪勤亦他を顧みざる人也。「現代醫學界は醫學の進步發展に伴ひ非常なる躍進振を示し、學術研究業績も枚擧に遑なき狀態にして誠に慶賀に堪へぬ。然し乍ら今日の醫學は少し脫線の氣味が無いかと考へらる、何となれば醫學の研究が微細に渡る關係上か知らぬが醫學の領域を沒却して理學、動物學、農學、化學等の橫道に走り實際醫學を離れた感を與ふるものも少しとせず。斯くては眞の醫學の發達は望れぬ、故に醫學に志す者は實際醫學に則して問題を研究し習得すべきと思ふ」云々とは博士の持論也。賦性謹直、寬厚克く人を容れ、又た能く後輩を愛撫す。人格者にして其の高邁なる德を慕はるゝ所あり。趣味は運動としては擊劍、テニス、娛樂としては碁、將棋、麻雀等なり。中野秀孝博士（福井縣坂井郡高椋村醫術開業）は義弟に當る。基隆市義重町五ノ一八に住む。

◇

木村律郎　△九州醫學專門學校教授木村律郎博士は、豫備海軍々醫少將にして九大系の衞生學者也。東大大學院在學中、斯學の泰斗橫手千代之助博士（現在上海自然科學研究所長）に親しく師事して衞生學を專攻、又嘗て歐

醫科續篇（衞生學科、細菌學科）

洲に留學するや瑞西國ツユウリツヒ醫大ジルベルシユミツト教授、及び獨逸國ベルリン醫大コルフベーテルゼン教授に就きて斯學の蘊奥を究め、東京帝大に論文を提出して學位を獲得せり。久しく海軍々醫界に活躍して貢獻せる所多く、今は專心醫育の爲め渾心の努力精進を續けつゝあり、多とすべき也。

△博士は神奈川縣立第一中學、一高を經て、明治四十一年京都帝大福岡醫科大學を卒へ、任海軍中軍醫、大正五年東京帝大大學院入學、横手教授の指導を受く、同九年瑞、獨駐在被命、同十一年歸朝、同十三年九月學位受領、爾來海軍技術研究所醫務課長兼海軍々醫學校教官、海軍大學教官、吳海軍工廠附等に歴任し、累進海軍々醫少將となり、昭和七年豫備役に編入せらる、爾來九州醫專教授として衞生學を擔任し今日に至る。

△學位主論文は「肉體的勞働ニ依ル疲勞ノ研究」にして、參考論文なし。著書に「海軍衞生學」あり。主論文はブローニー氏韞の原理に基く處のツンツ氏『エルゴメーター」により各種の定量的肉體勞働を健康なる壯者二十四名に行はしめ之等の勞働が握力、指の仕事量、眼調節力、血壓、脈搏數、血液の分布、單一反應時複雜反應時等に及ぼす變化を追試し、勞働量との關係を闡明し、更に進んで氣溫、氣濕、炭酸瓦斯等を高めたる各種の場合をも實驗して其の影響を探究せるものなり。

△博士は神奈川縣の人、明治十六年生る、篤學純眞なる學者肌の仁にして、凛々としたる風貌は謹嚴そのものの性格を表示し、軍人氣質の威嚴を存し高潔なる品格を備ふ。年齒今や知命に入る三歳、精力旺盛にして益々元氣也。國家有事の際、幸ひ健康にして益々自重加餐を祈るや切也。久留米市螢川町三ノ五九に住む。

◇

原田四郎

△京都市技師、京都衞生試驗所長たる原田四郎博士は、金澤醫專の出身、加藤（寛）博士の高弟にして、恩師に就て多年醫化學を專攻し、又京大教授戸田（正三）博士の指導を受けて衞生學の蘊奥を究め、京都帝大より學位を受領せり。博士の現職に就任して以來十年一日の如く、斯界の爲努力貢獻せる功績は偉大にして、今や斯界に其人ありと謳歌せらるゝも亦偶然ならざるべし。昭和六年京都衞生試驗所創立滿十週年を迎ふるに當り、菊版二百頁餘に亘る創立滿十週年記念報告なる冊子を出版して、諸官省を始め直接關係ある諸名士及び各方面へ全國的に配布せられたり。該報告に依れば都市衞生に關する事項、衞生思想の普及啓發其他に關する事項、應請試驗事業成績其他詳細に亘りて記錄せられたり、博士の調査報告の如きも「水の鹽素消毒法」以下十二篇に亘り其他各擔當技師の調査報告と併せて特別調査報告の内に發表せられたり。要するに本邦は素より列國諸都市の此種事業の參考資料たり、都市衞生上將又公衆衞生上裨益する所甚大なるものあり、斯問博士の與つて力あるや又贅言を要せず。

△博士は大正二年金澤醫專を卒へ、直に研究生として醫化學教室に入り加藤教授の下に研究、同三年任大阪市立衞生試驗所技手、同四年傳研にて傳染病の講習を受く、同五年大阪市立消毒隔離所醫員兼務、同六年大阪市立衞生試驗所衞生事務講習會講師、同十一年任大阪市技師、兼大阪市立衞生試驗所技師、同十三年同上講習會講師、同年辭職京都帝大醫學部衞生學教室に入り研究を續け、同年十二月學位を受領す、同年任京都市衞生試驗所長、兼京都市技師今日に至る、同十四年京都府結核豫防協會理事に擧げらる。

△學位主論文は「緩速砂唇濾過池ノ使用期間並ニ濾過効力ニ關スル研究」にして、參考論文は、(1)鹽素消毒ニ關スル研究、(2)上水ノ鹽素消毒法、(3)大阪市大上水源水質ニ關スル調査、(4)濾過水ノ細菌數ト季節的關係ニ就テ（其一、二）(5)水道濾過池創取後ニ於ケル細菌數ノ消長ニ就テ、其他十篇あり、他に論文多數、著書「水ノ鹽素消毒法」あり。

△博士は愛知縣海老町の人、原田新三郎の四男にして、明治二十二年生る、當年不惑に入る七歳、學究的溫厚の紳士として、立派なる人格者也。人と爲り穩健篤實、禮儀節文を重んずる人にして、其筆態を見れば氣格雄渾、情趣掬す

べきものあり、又人に對し後進を待つに寛厚にして親切なるは甚だ多とすべき也。居常能く讀書清遊、今猶孜々として精研に餘念なく、時に又た圍碁に親しむの風致あり。京都市上京區大將軍坂田町一に住す。

◇

春日健造　△陸軍々醫界に於ける、微生物學及び免疫學者として逸すべからざるは、陸軍々醫監春日健造博士也。現在にては昭和醫學專門學校教授として專ら醫育の爲め努力精進しつゝあり。博士は九大系福岡醫科大學第一回卒業生にして、爾來陸軍々醫界に活躍し、九州帝大より學位を獲得せる軍醫界の名醫博なるが、曩に歐米を視察して新知見を博め、昭和五年四月より二ケ年間外務省文化事業部上海自然科學研究所の業務に從事し專ら醫學部の創設に盡瘁したり。

△顧みて博士の今日ある略歷を一瞥するに、三高を經て、明治四十年京都帝大福岡醫科大學を卒へ、同四十一年六月任陸軍二等軍醫、同四十三年六月任一等軍醫、同年十二月傳研入學、志賀博士の下に微生物學及び免疫學研究、大正五年一月任三等軍醫正、同七年九月西伯利派遣第二野戰防疫部長、次で臨時野戰防疫部長に補せられ、同八年一月西伯利哈府慈惠醫院長兼務となる、同九年八月より十二年八月まで陸軍々醫學校教官の職に在り、同十年二月任二等軍醫正、同時に衞生材料調査委員を被命、同十二年七月新嘉坡に開催の第五回極東熱帶醫學會に陸軍派遣員として出張を被命、同年八月補名古屋衞戍病院長、同十三年二月任一等軍醫正、同十四年三月學位受領、同年八月補陸軍々醫學校部員、昭和二年冬歐米へ派遣せられ、同四年八月任陸軍々醫監、尋で豫備役編入、同五年四月より二ケ年間上海自然科學研究所勤務の後、現職に就任今日に至れり。

△學位主論文は『水素「イオン」濃度ニ據ル「ヂフテリー」菌及同類似菌ノ分類ニ就テ』にして、參考論文は、(1)細菌ノ糖類分解ニ因ル培地ノ水素「イオン」濃度ニ就テ、(2)「レイシユマニア、ドノワニー」ノ培養ニ就テ、(3)赤痢菌ヲモ培養シ得ル遠藤「フクシン」寒天培地ニ就テ、(4)「チフス」菌ノ試驗管內殺菌現象ニ就テ、(5)志賀型赤痢菌毒素ノ研究並ニ他ノ細菌毒素トノ比較ニ就テ、(6)「アメーバ、リマツクス」ノ補體結合試驗ニ就テなるが、他にも論著夥多あり。

△明治十三年岡山市天瀨に生る、故士族春日育造の養子となる。雄々しき風貌は軍人氣質の威嚴を存し、慧眼にして聰明と鋭敏とを表示す。賦性謹直、謙遜にして自己の才學を衒はず、恬淡として只管己れを虛うし、寛厚にして能く人を容れ、部下を愛し後進を親しむ。思ふに其の今日あるは夙に學を修め、行を正すに極めて嚴なる事實の見逃すべからざるものあり。讀書家にして研究以外、常に精神の修養に餘念なきが如し。東京市淀橋區西大久保二ノ二三四に住む。

◇

及川周　△新潟醫科大學教授及川周博士は衞生學を擔任す。東大出身の衞生學者にして、東北帝大教授井上嘉都治博士指導の下に久しく營養殊に蛋白質に關する研究を爲し、東北帝大より學位を獲得せる斯科界の名醫博也學位主論文は「アミノ」酪酸に就て研究せるものにして、鯨の漿膜及び鼈の如水分解によりて一種特異の「アミノ」酸を發見し、其性質を吟味し、このものが從來自然界には未だ的確に其存在を證明し能はざりし「アミノ」酪酸なることを認めたり、其の學問的價値は既に學界に定評あれば敢て贅せずもがな、今や其の蘊蓄を披瀝して教壇に起ち、諄々として說くところ、學界の一權威たるを失はず、新進教授として最も囑望せらるゝ一人物なりと推奬すべき也。

△博士は仙臺一中、二高を經て、大正七年東京帝大醫科大學を卒へ、同八年二月任東北帝大醫學部助手、醫化學教室勤務、同十年任同大學助教授、同十三年十一月新潟醫科大學に轉じ衞生學を擔任す、同十四年三月學位受領、昭和二年二月より四年四月迄文部省在外研究員、同四年五月任新潟醫科大學教授、同九年一月兼任新潟醫科大學々生主事、

尙新潟縣學校給食委員會委員、新潟市衞生調査委員會顧問を兼ね以て今日に至れり。

△參考論文、(1)鮫類ノ膽汁ニ關スル研究、(2)蛇類ノ脫皮ニ就テ、(3)鯨類ノ皮膚組織ニ關スル研究（以上獨文）他に論著夥多。著書「小衞生學」（宮路重嗣博士共著）あり。

△博士は仙臺市立町通八番地の人、明治二十六年生る。溫厚なる學者肌の紳士にして、年齒漸く不惑に入る三歲、年壯の意氣益々壯にして研究心に燃え、學識、識見、人格共に愈々圓熟の域に入る。一面又博士はヘブライ詩文の研究家として知られ、殊に兒童に關するものに至りては獨特の文才を有し、二三の小創作、數篇の童話等の發表あり、醫文士としての名を擅にす。學者タイプの風貌は凜々として謹嚴そのものの性格を表はす。而かも人と接するに親切、寬厚能く人を容れ學生を愛撫す、其の態度の眞面目にして熱情あるは人に親しまるゝの德を有す。春秋猶豐富にして精研に餘念なき前途は益々輝かし。因に醫博士肥章司、同遠山郁三とは姻戚の間柄なりと聞く。新潟市寄居町三四二に住む。

◇

渡邊邊　△先年歐洲留學より歸朝して新鋭の才學を發揮し、其の專門とする微生物學講座の爲め氣焰を昂げつゝありし、前京都帝大助教授渡邊博士は、現在にては神奈川縣第二衞生試驗場長として活躍し、獨特の手腕と不斷の努力とを傾倒して斯道振興の爲め貢獻しつゝあり。熊本醫專出身の一異彩にして、北里派の耆宿志賀、秦兩博士に師事して細菌學を、又た京大派の中堅淸野教授指導の下に微生物學を研究する所あり、學位は京大より獲得せるが、歐洲留學中は主として獨逸國立衞生省（Reichsgesundheitsamt）細菌、血淸學研究部にあり、所長 Prof Haendel 及び Prof Gildemeister に師事して著するもの十篇に及ぶ。

△大分縣立竹田中學校を經て、大正五年熊本醫專を卒へ、直ちに同校病理學教室に入り研究す、次で助手を拜命して川上教授に師事す、同六年依願免職、同時に日赤奉天病院病理部主任として赴任、同七年依願免職、同九年北里研究所副助手として志賀、秦部長の指導を受く、同十年依願免職直ちに京都帝大助手拜命、微生物學教室に勤め淸野教授に師事す、同十四年五月學位受領、同十五年京都帝大助教授に任ぜらる、昭和三年二月歐洲留學を命ぜられ、昭和六年九月歸朝後現職に轉任今日に至る。

△主論文は「溶菌現象ニ於ケル細菌ノ容量變化ニ就テ」にして、(1)「コレラ」弧菌ヲ以テセル場合、(2)各種ノ「コレラ」弧菌ヲ以テセル場合、附、菌株ノ新舊並ニコレガ毒性ニ因ル容量變化ノ觀察、(3)「コレラ」弧菌診斷ニ關スル知見補遺、(4)桿菌ヲ以テセル場合の三篇より成る。參考論文は、(1)胃壁ニ於ケル最小ナル副膵ノ一例、附、腫瘍發生ニ關スル知見補遺、(2)脈搏數ノ統計的觀察、附、生理的緩除脈ヲ有スルモノノ「アトロピン」反應並ニ家族的緩除脈ニ就テ、(3)大正九年流行ノ「コレラ」菌株ノ實驗並「エルトール」菌株ヲ論ズの外他に十四篇あり、他にも發表の論著夥多あり。

△感想に曰く「獨國主府伯林に滯在する事三ケ年有餘、日本を國外から觀ると眞の日本が了解せらるゝ、日本は結構の國である、國民性亦結構である、日本の醫學は源を獨國に發し、近年に至りて長足の進歩をなしたり、然れども之を產みの國たる獨逸に比するに尙相當以上の懸隔を有す、日本の醫學を世界の醫學の王者たらしめんには吾人一考尙ほ再考を要す、卽ち、一層の熱心と努力とを要す、それも朝野人士の研究てふ事に對し今少し理解と援助とを切望し併せて研究者の優遇方法を考慮すべきである、現在の如き有樣に於ては悲哉、日本の醫學は世界の王者たり得る事尙ほ前途遠しの感あり」云々。大に傾聽すべき事にして識者の覺醒努力を望むや切也。

△大分縣大野郡上緒方村の人、明治二十三年生にして當年四十有六歲也。熱心なる學究の士にして、其今日ある篤學は、博士の前半生史に精彩を放ちて見ゆ、猶今後の研鑽努力と相俟つて、洋々たる前途は更に期待せらる。業餘の趣

味としては書道を能くす、裕堂は其號なり。而して其平生の性行は、謙讓にして克く己を持し、後進を待つに篤く人に對しては應答の禮意缺ぐことなし、其眞摯なる態度は紳士的にして自ら其の高邁なる人格を敬慕せしむ。横濱市中村町に住む。

◇

松村　棗　△衞生學界現代の一權威として推奬し、玆に品隲せんとする松村棗博士は、醫專時代より千葉醫大の教壇に起ち、十數年來一日の如く孜々として衞生學を擔任し、今や教授中の中堅を以て囑望せらるゝ學者也。その學系より見たる博士は、當然東大系横手學派中に頭角を顯はせる一學究として大なる存在を認めらる。先年聯合微生物學會に於て、宿題擔當の同門東大教授竹内博士を向ふに廻はして一論戰を試みたるは有名にして、その態度のプロフエショナリズムとして一歩も讓らず、自ら信ずることに厚くして慮せざりしは、博士の面目の躍如たるものあるを物語りて餘す所なし。

△更に顧みて博士の學歴及び閲歴を概括すれば、一高を經て、大正五年東京帝大醫科を卒へ、直ちに同大學衞生學教室研究生となり、間もなく副手を經て助手に任ぜらる、同八年千葉醫專講師より教授に任ぜられ、同九年衞生學研究の爲め滿二ケ年間獨、英、米、佛へ留學を命ぜらる、同十二年任千葉醫大教授、同年歸朝後學生監に補せらる、同十四年五月學位受領、昭和三年支那、シヤム、海峽殖民地及び瓜哇へ出張を命ぜられ、昭和四年北米合衆國及南米ブラジル、アルゼンチン、チリー諸國へ出張を命ぜらる。

△主論文は「脂酸及ビ脂酸鹽ノ蛋白質ニ對スル反應ニ就テ」にして獨逸文の原著なり。本業績は既に松村氏反應として知られたるものにして、生化學及免疫學上資すること大なる一新研究として學界に其の價値を認めらる。外に、參考論文として、(1)中性鹽ノ酸蛋白ニ及ボス影響ニ就テ、(2)銅鹽ニ因ル血清蛋白質沈降作用ニ就テの二篇あり、何れも獨逸文の原著なり。他に論著夥多。學位は千葉醫大より獲得せり。

△岡山縣笠岡町に本籍を有し、愛媛縣今治に於て明治十九年生る、當年丁度五十歳也。年壯鋭氣にして思慮あり識見に富む。性來學者肌にして志操堅固、自信に强く、雄辯家を以て聞こゆ、又た豪傑肌のところありて人情味滿々たり而して平生人に對するに應答の禮意缺ぐことなく、尺牘懇篤、筆墨優雅にして快感を覺えしむ、その紳士的眞摯なる態度は敬慕すべき也。趣味嗜好としては格別聞かざれども、居常酒を嗜しみ醉へば益々愉快になる質の好酒家なりと切に自重加餐を祈る。市葉千寒川長洲九九一に住す。

◇

井上康治　△大阪藥專教授にして、衞生學及び微生物學を擔任しつゝある井上康治博士は、長崎醫專藥學科の出身にして、後ち京都帝大にて衞生學及び微生物學を研究する事多年、又た嘗て英、獨、佛、に留學して斯學の深邃を究はめたり。學位は京都帝大より獲得せる微生物學及び衞生學者として、殊に都市衞生學上水衞生學及びクロール殺菌は吾國最初の研究者として、博士の存在は關西醫學界に重きを爲す一學究として重要視され、當世博士界中に異彩を放つ一人物と爲す。

△博士は東京成城學校中等科を經て、明治三十九年長崎醫專藥學科を卒へ、同四十二年更に東京帝大醫學部藥學科選科修了、同四十三年京都帝大醫科大學衞生學研究科に入學、松下禎二博士の指導を受く、同四十四年同衞生學教室勤務を命ぜられ、爾來六ケ年勤續、大正六年同大學微生物學教室勤務を命ぜらる、同八年大阪藥專教授に就任、同十一年四月英、獨、佛、に留學、同十二年六月歸朝復職す、同十四年七月學位受領、現に大阪府藥劑師會學術顧問たり。

△感想に曰く『輓近吾邦醫學の發達は、泰西の學術的羈絆を脱するを得、洵に慶賀に堪へざるものあり。然るに醫術猶之に伴はざる觀あり。凡そ藥學の發達なき所に醫術其目的を達し難き一事あり。蓋し實驗化學療法の將來を想へば

なり。顧て顧るに、吾最高學府たる唯一無二の帝國大學藥學科は、僅に醫科の一隅に寄生し、孤立し、無刺戟の間に成長し、藥學伸展の狀況洵に遲々たり。其研究の如き、千變一律に墮し、觀るべきもの尠なし。未だ舊獨逸藥學時代の模倣にあらずんば、追從の域を脫せず。抑も醫學と藥學とは唇齒輔車の關係に在るは何人も首肯する所。予の「醫學を離れて藥學莫し」と主張する豈當然なりとせずや。予は「藥學を離れて治療莫し」の理想に到達せんことを望むや切なるものあり。否らざれば學界に藥學の存在を意識し難ければなり。又藥育に從事せるものは、須く予の藥學分野の論に傾聽せらるゝの雅量を示され度し』云々。豈獨り藥育に志すもののみにあらんやと云ひ度し。

△主論文は「飲料水ノ藥物清淨及ビ急速濾過清淨ニ關スル細菌學的並ニ化學的研究」にして、參考論文、(1)琵琶湖ノ理化學的並ニ生物學的研究、(2)同（其二）(3)鑛泉水分析試驗成績報告、(4)京都市上水道ニ就キテ、(5)飲料水ノ清淨法ニ次亞鹽素酸ノ應用ニ就キテ他七篇あり。著書としては、(1)最新微生物學、(2)實習細菌及免疫學、(3)微生物學實習、(4)實驗衞生學等あり。

△博士は大阪市北區老松町一丁目井上喜平治長男、明治十五年生なれば當年五十有四歲也。多趣味の人にして文才あり、號して春景、無蓋子といふ、綜合リズム敎育（音樂と舞踊）の研究者たり、又哲學を好み、寫眞に堪能なり、游泳は日本游泳同志會六段たり、嘗て大阪每日新聞社の水上運動部を主宰し、門下生一萬を算す、其主なる者に淺田一博士、村上謙次郎博士、高田義一郎博士、望月成人博士、前田和三郎博士、井上康平博士、伊藤幸憲博士等あり俱に醫博也。元と藥學科出身より奮起して、日本最初の醫學博士たる氏や、錚々たる基礎醫學者として成業せる篤學は特に其の精彩を放ちて見ゆ。現に大阪市北區伊勢町三八、四四ノ一の私邸に私財を投じ財團法人井上女子奬學院を設立し、基本財產は私財の一部を寄附し、經常費は學術上の收入全部を寄附して維持し、女性文化の發達を策する上に貢獻する所あり、奇特といふべし。猶春秋に富む、前途の活躍は更に大に期待せらる。自重加餐を祈るや切也。因に竹內季三博士とは近親の間柄なりと。

◇

芥川信

△司法省衞生官として多年社會衞生並に行刑衞生方面に活躍して斯道の開發に盡力し、斯界に斯人ありと謳はれ、適所に適材を得たりとの評あるは芥川信博士なるべし。博士は金澤醫專出身の衞生學者として異彩を放ち、殊に社會衞生學及び行刑衞生學は博士の最も得意とする所にして學界稀に見る所也。

△東京市の人、明治二十四年生る、大正二年金澤醫專を卒へ、引續き同校研究生として同三年八月迄加藤敎授に師事し醫化學專攻、同三年九月より五年一月迄、同校敎授福士博士に師事し病理學專攻、同五年二月より七年六月迄、司法省委託學生として東京帝大醫學部緒方、横手兩敎授に師事し細菌學及衞生學を專攻、同七年七月司法省より行刑衞生事務を囑託せらる、同十年任司法省衞生官、同十五年一月學位受領、同年六月瑞西ベルスに開催の國際刑務委員會へ帝國代表委員として出張を命ぜらる、尙歐米各國へ社會衞生調査の爲め出張を命ぜられ、同年十二月歸朝す。

△主論文は「拘禁生活ノ衞生學的觀察」にして、參考論文なく、學位は東京帝大より獲得せり。著書としては「行刑衞生學」あり、猶他に發表せる論著尠からず。

△學究的年壯學者として其の前途を囑望せらるゝ所多く、其閱歷は既に燦として語るに餘蘊なし。大正十四年行刑衞生學會を創立し、爾來之れが會長として每月斯界に於ける世界唯一の專門雜誌「行刑衞生會雜誌」を發刊して斯界の發達に盡瘁せり。又學生時代よりの讀書家にして今猶卷を放たず、殊に社會問題に多大の興味を有し研鑽する所あり、旅行を好み時に暇を得れば之を樂しむ。平生能く人と交はり敢て學者たる態度を表はさず、又た人に對するに應答の禮意に厚く、其情緖纏綿として人情味あるは頗る好感を覺えしむ。東京市世田谷區上馬町一の五八六に住む。

◇

丸山芳登　△臺灣醫學界の中堅にして、殊に微生物學並に傳染病學者として大なる存在を認められ、同島醫育界の爲め多年盡瘁しつゝあるは丸山芳登博士にして、現在にては臺北醫專教授、兼中央研究所技師として活躍する所あり。博士のプロフィルを打診するに當りて特筆すべきは、博士は醫術開業試驗出身より身を起して、獨立奮鬪克く今日の成業を爲せる點に在り、其の立志傳的篤學の精神と、不撓不屈の努力とは大に敬服に値し、頂門の一針として後學の採つて學ぶべき也。

△博士は明治四十一年文部省醫術開業試驗合格、四十二年臺灣總督府研究所囑託、四十三年任臺灣總督府研究所技手大正四年日赤臺灣支部醫院醫務囑託、五年臺灣總督府醫學校講師囑託、七年日赤救護醫員を依囑せられ、同年前校助教授本務となり總督府研究所技手を兼ぬ、八年任臺灣總督府醫學專門學校奏任助教授、九年兼任總督府中央研究所技師、十二年任前揭醫專教授、十五年三月東京帝大より學位受領、昭和四年四月歐洲に赴き佛、獨、英、墺の諸國を遍歷見學して同五年五月歸朝今日に至れり。

△主論文は『「ペスト」菌ノ有毒性並ビニ抗體原性ニ關スル實驗的研究』にして、參考論文は、(1)臺北ニ於ケル細菌性赤痢ニ就テ、(2)白血球殺菌物質ニ關スル研究補遺、(3)「ヂラチン」ノ抗體原的意義ニ就テ、(4)鼠疫診斷法トシテノ免疫反應ニ就テ、(5)「ペスト」菌ニ對スル蛙ノ感受性ニ就テ、(6)免疫血清通過ニヨル非粘液性「ペスト」菌ニ就テの六篇なるが、他にペスト菌、コレラ菌、チフス菌、パラチフス菌、流行性腦脊髓膜炎球菌等に關する論著三十餘篇に昇り、此數年來は臺灣蕃族の血液型を實地踏査によつて精細に調査研究に從事し、傍ら教室員に蛇毒、結核菌、チフス菌、其他血清學的方面の各事項を分擔せしめて研究の指導に當りつゝあり。著書としては「黴毒血清診斷學」あり。

△米澤市下矢來町の人、明治十八年生れなれば、當年五十有一歲也。其の閱歷は燦として既に其の前半生史に輝きあり、今は加齡と共に學識、手腕、人格愈よ圓熟の佳境に達し一段の貫祿を備ふ、而かも精力旺盛にして猶春秋豐かなる前途は、博士の後半生史をヨリ大ならしむるものあるを囑望せんとす。賦性謹直、志操堅實にして思慮あり、識見に富む、平生能く學生の提撕に努め、人に對するに同情と理解とを以て親切を盡す、其の紳士的態度は其の人の人格を敬慕せしむ。臺北市表町一ノ五七に住す。

◇

木村眞之助　△北海道廳技師、衞生課長としての木村眞之助博士の名聲は既に江湖に喧傳す。氏は茨城縣稻敷郡長戸村木村惣吉長男にして、明治十八年生る。茨城縣立龍ケ崎中學、四高を經て、大正元年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに醫術開業試驗附屬病院助手被命、三年四月同院醫員被命、四年四月北海道廳警察醫として赴任し、九年十月任同廳技師、十二年七月歐米各國出張を命ぜらる、チェツコスロバキア國プラーグ醫大にてバイル教授指導の下に細菌に關する研究、大正十四年五月休職、同年十二月歸朝、十五年二月復職を命ぜられ引續き現職に在り、同年七月北海道帝大より學位を受領す。現職に在るや、十數年一日の如く勵精克く其の職務に忠勤を盡し、終始一貫、斯道啓發の爲め努力貢獻しつゝあるを多とす。

△學位主論文『「バクテリオフアーゲン」ノ細菌結合ニ關スル實驗的研究』(獨文)、參考論文、(1)「バクテリオフアーゲン」ノ影響ニ因ル細菌ノ粘液產成ニ就テ(獨文)、(2)動物體內ニ於ケル「リソチーム」ノ作用ニ就テ(獨文)。札幌市北一條西五丁目に住む。

◇

田邊操　△京城帝大助教授として、醫學部微生物學教室に新進の田邊操博士あり。岡山醫專出身の秀才にして、嘗てロツクフエラー財團のフエローとして米國に留學し、ジョンス、ホプキンス大學及びハーバート大學にて微生物學を專攻大に得る所あり、歸朝後慶大より學位を獲得せる斯科界近來の少壯醫博也。主論文は非特異性抗原及

抗體に關する研究にして、二編より成れり、其の學識の該博なるは言はずもがな、今や其の蘊蓄せる新知見を披瀝して教壇に起ち、熱誠克く學生の指導に努め、又一面には自己の專門とする寄生原蟲類研究に精進して亦他事を顧みざるの概あり。新進有爲の學者として更に大に其の將來の發展を期待せらる。

△顧みて博士の學歷及び閲歷を概述すれば、大正七年岡山醫專卒業後、同校細菌學教室助手拜命、同八年十一月辭職と同時に北里研究所へ研究生として入所、同九年七月同所副助手となり、同十二年十一月米國ロツクフエラー財團のフエローとして北里研究所より派遣され、二ケ年間ジョンス、ホプキンス大學及びハーバート大學にて研究、同十五年一月より四ケ月間英、獨、佛、墺、瑞各國を視察し歸朝す、同年十二月北里研究所助手拜命、昭和二年三月慶大より學位受領、同年四月京城帝大助教授に任命せられ今日に至る。

△參考論文は、(1)「トリパノゾーマ」ニ關スル小實驗二三、(2)實驗的原蟲病ノ血清學的研究、(3)寄生原蟲ノ染色法ニ就テ、(4)泥鰌ノ血液寄生鞭毛蟲ノ研究、(5)「ライシュマニア、ドノヴアニイ」ノ培養基發育條件ニ就テ、(6)日本猿ニ見ル二種ノ「アメーバ」ニ就テ、(7)「トリコモナス」ノ形態學的研究、(8)「モルモツト」ノ「トリコモナス」ノ研究、(9)人、鼠、梟ノ「トリコモナス」ノ培養、(10)蠑螈、蛙ニ寄生スル鞭毛蟲「ポリマスチツクス、ブホーニス」、(11)「キロマスチツクス、ガルクナルーム」ノ形態學、分裂及培養の十一篇なり、其後發表せるもの又た尠からず。近くは昭和八年四月第五回日本寄生蟲學會の席上「赤痢アメーバ及腸内アメーバの人工培養」に關して、船員病及熱帶病學奬勵會より受賞せり。

△岡山縣淺口郡長尾町の人、明治二十八年生れにして當年漸く不惑有一。眞面目なる學究的少壯の紳士にして、清新の意氣と共に潑剌たる研究心を有し、今は學生の指導と併せて學術の研究に趣味を集中して、研學切磋甚だ勉むる所あり。趣味としては文學を好み、テニスを能くす。志操堅實、清廉潔白にして名利に恬淡たり、謙遜克く己を持して人に厚く、後進に親切にして能く學生を愛撫す、其の態度の眞摯にして熱情あり、寛容にして紳士的なるは人に好感を與へ、人に親しまるゝの德を有す。春秋猶豐富、前途洋々たるの秋、幸に健康と共に、益々發奮精研あらん事を祈る。京城府光熙町一ノ一八五。

◇

吉田章信　△體育研究所技師、兼文部省學校衞生官として吉田章信博士の嘖々たる名聲は既に天下に喧し。博士は九大系の衞生學者にして、豫備役陸軍一等軍醫なり。陸軍々醫學校在學當時稻葉、小泉兩教官に就きて衞生學を專攻し、東京帝大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。

△主論文は「本邦人ノ體育ニ關スル研究」にして、(1)邦人ノ種々ナル姿勢及ビ運動時ニ於ケル勢力代謝ニ就テ、(2)體育ニ關スル統計的研究、(3)日本壯丁ノ體格ニ關スル統計的研究の三篇より成り、參考論文は「日本人ノ身長、體重及ビ頭圍ノ發育ニ就テなるが、體育に關する研究の學位論文の嚆矢たり。猶著書としては、(1)運動生理學、(2)運動衞生學、(3)提要運動生理衞生學、(4)體育衞生統計類纂、(5)事業衞生學、(6)體操科の理論、(7)體力測定、(8)體力測定計算表、(9)體育全書、(10)歐米體育の新研究等あり。體育科に關し、我邦最初の研究を企てたる斯る鴻大なる論著は、如何に博士の學識の深淵なるかを語るに足る。其の蘊蓄を傾倒して十年一日の如く、至誠一貫、斯道振興の爲め奮盡努力しつゝあるは、大に人意を强からしむると共に、今後の活躍と相俟つて更に大に將來に期待せらる。

△博士は岡山縣津山中學校、六高を經て、京都帝大醫科大學在學中、同大學福岡醫科大學へ轉學して、明治四十四年九州帝大醫科大學を卒へ、同四十五年任陸軍二等軍醫、補步兵第四十一聯隊附、大正元年陸軍戸山學校教官、同年任一等軍醫、同五年步兵第三聯隊附、同六年より二ケ年間陸軍々醫學校入學、衞生學專攻、同九年豫備役、同年八月任東京市技師（學校衞生主任）、同十年十二月任文部省學校衞生官、同十三年十一月任體育研究所技師兼文部省學校衞

生官、昭和二年三月學位受領、昭和四年六月衞生學研究の爲、英、佛、獨、米の四國に在留、昭和五年度より二ケ年間、文部大臣より自然科學奬勵金を受け、同七年「日本人の體質改善特に身體的作業能力の研究」なる一大論文を發表、爾來、益々研究を進めつゝ以て今日に至る。

△岡山縣苫田郡田邑村田口龍治郎の三男、明治十七年生る。眞面目なる學究的溫厚の紳士にして、終始體育の研究に沒頭して今日に至る閲歷は、既に博士の前半生史に盡きて躍如たるものあるを見る。今は其の學識、手腕、人格共に愈々圓熟の域に入りて格段の貫祿を加え、斯界の重鎭として重きを爲す。猶前途洋々として隆興發展の餘地ある體育界は、將來博士の努力精研に期待するもの益々大なるを思ふ。人と爲り穩健にして篤實、軍人氣質の人には珍しきほど腰が低く、學者として敢て衒はず、眞摯にして叮重なる態度は、人に好感を與へ、自ら其の高邁なる人格を敬慕せしむ。林山は其號にして美術を愛好す。東京市杉並區下高井戸一の二五一に住む。

◇

岡田道一　△久しく東京市學校衞生技師として東京市教育局に勤務し、多年東京市の學校衞生界の爲め活躍奮盡する所ありし岡田道一博士は、曩に官海を勇退して以來、小兒科專門を以て自宅開業せり、開業經營日尙淺きに拘はらず、多年扶植せる篤き聲望と、博士獨特の打診の好評とは兩々相俟つて大衆より多大の信望を享け、近來著しき發展振りを示しつゝあり。博士は京大系の小兒科學者にして又た錚々たる我國での學校衞生學者たり。殊に博士が公職十年間一日の如く、專ら麴町區技師として貢獻せる功績は偉大にして、市民より多大の尊敬を受け嘖々たる聲望を博せり。斯間博士は又た公務の傍ら多年有力なる新聞雜誌及放送局等の依囑を受け、筆を寄せて學校衞生に關する論壇を賑はし、或はマイクロホーンを通して諄々と說き、以て公衆衞生の普及指導に務めしは著名にして多く世人の周知する處なり。

△東京市の人にして、明治二十二年生る。一高を經て、大正六年京都帝大醫科大學を卒へ、直ちに日本橋區濱町病院に、次で內田小兒科醫院等に勤務し、傍ら父君の開業を手傳ひしが、大正八年四月より學校衞生に趣味を感じ麴町區市立小學校專任校醫となり、次で麴町區衞生技師に任ぜらる。斯間東京市に一つもなき夏季林間學校を大正九年以來每年區內に開校せるは當時世に稱讃されたるところなり。昭和三年十月學位を受領し、同九年一月東京市學校衞生技師に任ぜられ教育局に勤務す、次で辭職後開業一般小兒科の診療に從事し今日に至る。

△學位論文は「學校衞生ニ關スル知見補遺」が主論文にして、參考論文としては、(1)「フエリエンコロニー」ニ關スル研究、(2)學童口腔衞生ノ研究の二篇あり。學位は慶大より受領せり。著書としては、「學校家庭兒童の衞生」等十數冊あり。

△當年不惑に入る七歲にして年壯の意氣益旺也。もとゝ名にも金にも無慾派なる學者肌の人にして、早く診療界を離れて、專念教育界の爲め精進して又た他事を顧みず、熱心なる學校衞生學者として自他共に任じ、爲斯界多年努力貢獻する所ありしが、多年の經驗を基礎として再び小兒科醫を以て立てる博士の將來を至囑して止まず。趣味としては和歌を能くし、音曲として義太夫を愛し、蝶花の號を以て素義界に公表す。大正八年以來住み馴れし麴町區を後に未だ草深き郊外に移り、今は豊島區長崎仲町一ノ二九八〇に住む。

◇

飯村保三　△內務省衞生局に防疫官として十數年一日の如く勵精し、一意專心、唯だ至誠以て公に奉ずるの信念を以て終始し今日ある飯村保三博士は、東京府の人、明治十六年生にして、同三十六年醫術開業試驗合格、其後若干開業醫としての經驗も經たるが、餘り成績も香ばしからざりしと見え、轉向して所謂「役人」道に精進して以來靜岡、靑森の諸縣に技師となり課長を歷て、大正九年四月內務省衞生局に入り以て現在に至れり。斯間南米各地に於

ける衞生狀態視察の爲め出張を命ぜられ、序を以て歐洲へ出張を被仰付、親しく海外の衞生事情を視察調査して研鑽大に得る所あり。

△學位は昭和四年十一月慶大より受領せるが、學位論文としては『日本ニ於ケル「ベスト」ノ疫學ニ關スル綜合的研究』が主論文なり。氏が開業試驗出身の才學を以て奮興して以來、春風秋雨の努力研鑽を續け、克く初志を貫徹して終に本論文を完成せる堅志篤學に至りては、立志傳的典型たるの人物として敬服に値す。著者は眞摯なる學究の士として多大の敬意を表するに吝ならずと雖も、現代一般世人が要望する博士に就て認識を得んとするに對し、博士は博士の紹介を忌避するところ餘りに狹量にして時代を解せざる嫌なき乎、獨り博士のみと言はずよく學者を氣取りてか、或は自己の人物を過信してか、往々にして吾不關焉の態度を持し、得々たるの士今猶其跡を絶たざるの傾向あり、學位と共に人格尊重の叫び益々酣ならんとするの今日、甚だ遺憾也。玆に特筆して一部學者の反覆自省を促すと共に、識者の批判を仰がんとす。現住所東京市淀橋區西大久保三ノ五一。

◇

代田稔　△京都帝大助教授として醫學部微生物學教室に新人代田稔博士あり。「一國の文化は科學の發達に因つて進む、極く僅かの帝大の研究費をまで節約すべき物の中へ數へるのは間違つて居るかと思ふ。科學者殊に純科學者の生活に對する不安だけを去つたらと思ふ。フランスで切手にナポレオンを入れずにパストールを入れたことを日本の政府の人々にも考へてもらひ度く思ふ」云々と、現代學界に對する感想の一片を吐露して大に氣を吐けり。博士は京大系の微生物學者にして、恩師清野謙次教授の指導を受けて斯學の蘊奥を究め、母校より學位を獲得せる後も引續き研究に沒頭しつゝありしが、講師を歷て助教授となり、久しく母校の教壇に起ちて其の蘊蓄を傾け、專念學生の指導に努力精進する傍ら、碎心孜々として自己の研究に一路邁進しつゝある前途や更に大に期待せらる。

△博士は鄕里の長野縣立飯田中學校より、二高を經て、大正十四年京都帝大醫科大學を卒へ、爾來其の專門とせる微生物學研究の爲め母校に止まり、講師を經て助教授に任官今日に至る、斯間昭和五年二月學位を受領せり。主論文は「比色計ニヨル補體結合反應ノ特異度ノ研究」にして、參考論文として「急劇ナル小兒腸炎ノ病原體ニ就テ」の外十一篇あり。其他論著中「腸內細菌（病原並ニ非病原）」は博士會心の作にして、氏が最も得意とせる論文として見逃すべからず。氏の出身地は長野縣下伊那郡龍丘村にして、代田半七の三男、明治三十二年生る、年齒漸く三十有七歲也。直情徑行の人にして、阿諛迎合を好まず、長上に對して愛想よく出來ざる迄も、後進を愛し學生を指導するに篤く、人に對して親切あり溫情に富む。文學趣味豐かにして文才あり、洋樂を樂しみ、又スポーツを好む。前途猶洋々たるの秋、折角の努力奮鬪を望むや切也。京都市上京區出雲路松ノ下町一六に住む。

◇

石川光昭　△新進なる公衆衞生學及び細菌學者として、現在東京慈惠醫科大學に於て社會醫學講座を擔當しつゝある教授石川光昭博士は、慈惠醫大出身の秀才にして嘗て米國に留學し、ケンダル教授等の指導を受くる所厚く慈惠醫大より學位を得たる斯科界近來の名醫博也。未だ少壯にして潑剌たる前途は更に囑目せらるゝ所多し。

△博士は東京府立第二中學を經て、大正十二年慈惠醫專を卒へ、直ちに同校細菌學教室に勤務、同十四年二月渡米しセントルイス市ワシントン大學細菌學及び公衆衞生學教室に於て、初めフェロー、後にリサーチ、アツシスタントとして研究、昭和二年マスター、オヴ、サイエンスの稱號を受く、翌三年シカゴ市ノースウエスタン大學醫學部インストラクターに任ぜらる、同四年末歸朝、同五年四月學位受領、同年同月以來慈惠醫大に於て社會醫學講座を擔當今日に至る。

△學位論文は全部英文の原著にして、主論文 Bacterial Decomposition of Urea, with Special Reference to the

Influence of Carbohydrates　參考論文 (1) Effect of Insulin on Cultures of B.bulgaricus and F.acidophilus, (with A. I. Kendall) (2) Effect of Insulin on Cultures of B.alcaligenes and H/61 (with Kendall) (3) Gas Production by Bacterial Symbiosis, with Special Reference to the Influence of Nitrogenous Substances (4) Chemical and Bacterial Inhibition of Gas Formation in Bacterial Cultures (5) Influence of Iodide on Bacterial Decomposition of Nitrogenous Substances　外英文十篇あり、他に論文夥多。著書としては(1)醫學の史的展望、(2)バクテリアと人生、(3)社會醫學の諸問題等あり。

△東京府西多摩郡熊川村石川三津造の長男、明治三十年生る。年齒三十有九歲、意氣益壯にして、學究的熱心なる少壯學者也。「醫人は社會の情勢を認識するの要あり」との意見の持主にして、該博なる學識を有し、思慮あり識見に富む。其の教壇に起つや、熱誠克く新知識を披瀝して諄々と說き、學生をして能く熱心に傾聽せしむるの辯舌と人格とを有す。讀書家にして書見を業餘の趣味とし、又釣魚を好み時に太公望を極め込むことあり。春秋猶頗る豐富、學界における前途は洋々として益々多望也、切に自重加餐を祈る。東京市淀橋區下落合三ノ一五〇一に住む。

◇

上村行彰

△衞生學者にして豫防醫學を最も得意とする從四位勳四等上村行彰博士は、五高醫學部出身の篤學者にして、京都帝大より學位を獲得せる斯科界の名醫博なるが、研鑽多年、斯間主として指導を受けたるは故北里柴三郎博士及び佐多愛彥博士にして、此他專ら克己獨學の結果、老來五十有八歲の高齡を以て學位を獲得せるは、醫博界近來稀に見る所にして、立志傳的異彩に富む博士人物として推奬に値す。而かも其の學究的不撓の精神氣慨は頂門の一針として學ぶべき也。

△博士は明治二十四年第五高等中學校醫學部卒業後、鹿兒島市立病院醫長を經て、內務技手に任じ內務省及び東京衞生試驗所に勤務し、官立痘苗製造所技手に轉じて大阪に在勤、次で千葉縣技師に任じ衞生課長の職を勤め、更に大阪府技師に轉じて府立難波病院長たること十八年に及び、此間防疫官に任ぜられ大阪府衞生課長として府下衞生の進步發達に貢獻し、大正十三年內務技師（勅任）に任ぜられ職を辭す、爾來閑地に就き昭和五年六月學位を授與せらる。

△主論文は「虎列刺豫防消毒方法ノ史的觀察」にして、外に參考論文十篇を添ゆ。幾多論著中「軟性下疳菌ニ關スル研究」の諸篇は博士快心の論文にして學界に重要せらる。著書としては「細菌研究法新論」の他に公娼の科學的研究の濫觴たる「賣られ行く女」並に「日本遊里史」あり。

△博士は鹿兒島市冷水町士族上村行雄の長男にして、上村雄醫博（西宮市にて開業）の兄たり、明治六年生れにして當年六十有三歲也。學究的眞面目なる老紳士にして、老來矍鑠として猶壯者を凌ぐの意氣を有し精力甚だ旺盛也。其の今日ある篤學と其の成業は博士の前半生史に輝きて躍如たるを見る。若し夫れ氏の感想を聞かんか「永い間實社會を見て來たので腹ふくるゝほど感想あるも一々茲に揭げつくされず」云々と。多年の實驗に富み識見の豐富なる以て知るべき也。人と爲り淸廉潔白にして、毀譽褒貶を意に介せず、謙遜自抑して克く人を愛し同情に富む。研究以外の趣味としては俳句を能くし、大阪同人社の幹部に列す、雪明は其の號なり。幸に自重加餐を祈るや切也。堺市綠町四五に住む。

高木乙熊

△福岡縣衞生課長たる高木乙熊博士は、醫術開業試驗出身より奮起して、獨立貫行、研鑽多年の結果、終に克く慶大より學位を獲得せる立志傳的篤學の士也。茨城縣を振出しに現在に至る迄、既に二十數年間一日の如く衞生技術官として一貫勵精し、至誠以て地方衞生界の指導振興に務め、斯間努力貢獻せる多年の功績は蓋し尠少ならざるべし。

△博士は明治四十一年醫術開業試驗合格、翌四十二年傳染病研究所入所、同四十三年茨城縣廳奉職、爾來北海道廳、靜岡縣、群馬縣、埼玉縣福岡縣等の衞生技術官として今日に至る。此の間北島、志賀、宮島、秦、諸博士共他に就て研究し、昭和六年二月學位を受領す。

△主論文は「花柳病ノ豫防ニ關スル研究」にして、參考論文は、(1)群馬縣下ニ於ケル賣笑婦ノ實狀ト公娼問題ノ批判(2)農村ニ於ケル青年團員男女ノ花柳病、(3)感作「ゴノワクチン」ノ臨床的實驗、(4)茨城縣北相馬郡高野村地方ニ於ケル日本住血吸蟲病ニ就テ、(5)利根川沿岸ニ於ケル日本住血吸蟲病ノ調査、(6)同（第三）、附「アンキロストーマ」ト「ネカトール」、(7)國體的驅蟲ニ用ヒタル「パラジトール」ノ效果ニ就テ、(8)腸「チフス」菌ニ因ル肋骨々髓炎患者ヲ傳染源トセル腸「チフス」ノ蔓延、(9)昨年ノ「コレラ」ノ經驗カラ、(10)旭川區近文部落舊土人衞生狀態調査の十篇なり

△博士の感想に曰く「醫者は患者の醫者たると同時に社會の醫者たりたい、それが現在の醫界に對する私の希望であり警告であります」云々。博士は山口縣阿武郡佐々並村高木利祐の三男、明治十四年生る、當年知命に入る五歲、精力旺盛にして元氣益壯也。其の今日ある閱歷は博士の面目を語りて餘蘊なし。眞面目なる學究的溫厚の紳士にして、意志堅實、直情徑行なる性格の持主也。研究に對する熱心と興味とは今も猶變らず、孜々として精研に不斷の精進を續けつゝあり、其の研究的態度の眞摯にして不變實行主義を以て終始しつゝあるは甚だ多とすべし。趣味としては山河の自然を愛す。春秋猶豐富、幸に健康と共に益々奮鬪盡力あらん事を翹望して止まず。福岡市西新町百道に住む。

◇

木村正一

△北海道帝大助教授にして衞生學を講じつゝある木村正一博士は、北海道帝大出身の衞生學者にして、母校の恩師毛利高一教授、井上善十郎教授指導の下に斯學の蘊奧を究はめ、母校より學位を獲得せる新進の名醫博として其の存在を認められ、今や母校の教壇に起ちて學生の指導に專念し、他面又自己の研究に沒頭して亦他事を顧みざるの概あり。年齒未だ少壯にして研究心に富み、潑剌たる前途は洋々として大に囑目せらる。

△博士は弘前中學校、北海道帝大豫科を經て、大正十五年北海道帝大醫學部を卒へ、直ちに同學衞生學教室助手に任命せられ、昭和五年任北海道帝大助教授、同六年四月母校より學位を授與せられ以て今日に及ぶ。

△主論文は『「コレラ」菌ノ培養ニヨル「メヂウム」ノ反應變化ノ機轉ニ關スル研究』にして、參考論文は、(1)下水處理問題ニ關スル研究（三篇）(2)飲料水ノ汚染ニ關スル研究、(3)「ワクチン」製法ニ關スル研究、(4)免疫血淸ノ理化學的研究、(5)紫外線ノ反射ニ關スル研究等なり。他の論著中、(1)空氣「イオン」ノ衞生學的研究並ニ余ノ考案セル測定裝置、(2)「ワクチン」製造用標準溷濁液ノ製法は博士會心の作にして最も主要なるもの也。

△博士は靑森縣三戸郡戸來村木村洋一の長男、明治三十二年生る、年齒漸く三十有七歲也。少壯の覇氣に燃え、向學の精神欝勃として禁ぜず、而かも博士の心願とする齋戒、瞑想、祈禱による研究は禁煙、禁酒、女と酒の出る會には出席せざる主義なり、其の態度の嚴肅にして眞摯なるは稀に見る所也。研究以外の趣味としては兒童の宗教々育に多大の興味を有す。春秋猶頗る豐富にして、精研に餘念なき前途は綽々として餘裕あり、幸に自重加餐を祈ると共に益々發奮研鑽あらん事を望む。札幌市北六條西十三丁目に住む。

◇

秋元稔

△大阪市立衞生試驗所技師秋元稔博士は、大正十二年長崎醫專の出身にて、京都帝大教授戸田正三博士の指導を受け、以下學位論文を完成して、昭和六年八月京都帝大より學位を獲得せる篤學の少壯醫博也。博士は近來特に米穀問題、農村問題に興味を有し、專念此の方面の研究に沒頭して新生面を拓きつゝある前途は頗る刮目に値す。

△主論文は「脚氣ト氣象ノ關係、特ニ產米期ノ雨量ト米穀ノ乾燥ニ就テ」にして、第一編「本邦各地ノ氣候就中降水

量及ビ降水日數ノ相違ト脚氣死亡率ノ年別變化ニ就テ」、第二編「農產物產額ノ氣象別變化ガ脚氣死亡率ニ及ボス影響」、第三編「地方別玄米ノ「ヴィタミン」B含有量ト脚氣死亡率ニ就テ」、第四編「乾燥米ト濕潤米トノ保存ニヨル「ヴィタミン」B含有量ノ變化ニ就テ（其ノ一）」、續編「同前（其ノ二）四年間密封貯藏セル玄米ニ就テノ實驗」、續編「同前（其ノ三）濕度別貯藏」より成る。外に參考論文としては「ヴィタミン」B缺乏症ノ發現ニ及ボス溫濕度ノ影響」二編、外四編あり。其他の論文中、(1)國民保健ノ見地ヨリ米穀問題ヲ論ズ、(2)脚氣ハ何故夏秋ニ多イカ、(3)米食ト氣象ニ關スル今昔觀等は最も重要なるものにして、博士會心の作と見るべきもの也。

△博士は宮城縣仙臺市秋元源次郎の長男にして、明治卅二年生る、當年三十有六歳也。少壯にして研學の念猶欝勃として禁ぜず、快活、人に厚く又能く後進を愛す。現住所大阪市住吉區平野本町五ノ一〇。

◇

水島治夫　△京城帝大の醫學部は創立以來、多士濟々にして躍進又躍進、玆に聊か品隲せんとする新進の水島治夫博士は、京城帝大助教授として衞生學の教壇に起ち、新智識を披瀝して諄々と說く處の熱心家なり。學系は東京帝大派にして、母校より學位を獲得せる少壯の衞生學者也。嘗て米國に遊學するや、ジョンス、ホプキンス大學にて教授リード博士の教を受けて衞生學の蘊奧を究むる所あり。今や斯學の新人物として、學究的大なる存在を認められ、潑剌たる前途を囑目せらるゝ所あり。

△顧みて博士の學歷を觀れば、大正十二年東京帝大醫學部卒業、朝鮮總督府醫院及京城醫專に勤務、昭和二年京城帝大助教授に任ぜられ今日に至る。斯間昭和三年米國ロックフェラー財團フエローシップとして渡米し、ジョンス、ホプキンス大學に遊ぶこと二ケ年、歸朝後同七年一月母校にて學位を得たり。學位論文は「本邦人口問題ノ生物統計的研究」なり。

△博士は岡山縣の人、水島賴助の長男にして、明治二十九年生る、當年不惑に達せる壯少也。學究肌の人、功名榮達に恬淡たり、終始學術の研究に沒頭して倦むことなく、其の熱心にして向學精神の潑剌たるものあるは、基礎醫學者としての將來ある所以にして、春秋猶豐富なる前途の大成を期待せらる。京城府崇一洞に住む。

◇

岡田良一　△醫術開業試驗出身より奮起して獨學力行克く今日の位地と聲望とを贏得たる岡田良一醫博は、立志傳的異彩に富む篤學者として推奬するに吝ならず。現在にては內務省囑託、拓務省囑託、恩賜財團濟生會囑託の肩書を有し、醫事衞生方面に活動盡瘁しつゝあり。氏は新潟縣三島郡與板町の人、岡田稻尾の長男、明治十一年生にして、同三十四年醫術開業試驗合格、爾來秋田、新潟、埼玉、兵庫の各縣に衞生課長として奉職、又國立移民收容所長たり、昭和五年南北兩米、歐洲各國の醫事衞生視察、翌六年十一月官を辭し同時に頭書の囑託となり內務省に勤務す昭和七年三月東京帝大にて學位を授與せらる。專攻は寄生蟲學及び細菌學にして東京帝大教授宮川米次博士に師事して造詣する所あり、殊に寄生蟲科を最も得意とす。

△主論文は「十二指腸蟲ノ經口的並ニ經膚的感染ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は「寄生感染ト年齡、寄生蟲卵ノ體內ニ於ケル運命」及び「屎尿處理ノ實驗的並ニ野外ノ研究」の外數篇あり。性來謙遜家にして、阿諛迎合を好まず、純情なる至誠一貫の士也、而かも天眞爛熳たる態度を以て人に接し、敢て學者として衒はず、淡々己を虛うして人に厚うし、諄々として眞實を以て語るところ人に親しまるゝの德を有す。東京市世田谷區松原町一ノ一一五に住む。

◇

川上六馬　△新進の產業衞生學者にして、現業衞生主任醫として、滿鐵本社衞生課在勤中の川上六馬博士は慶大の出身にて、母校の恩師小林六造教授、京都帝大教授戸田正三博士、倉敷勞働科研究所長暉峻義等博士等に就き

て特に產業衞生學の蘊奧を究め、母校より學位を獲得せる少壯醫博也。研鑽多年、殊に日進月歩の嶄新なる方面の新研究者として其の存在を認められ、今や其の蘊蓄を傾倒して、斯道啓發振興の爲め努力盡瘁しつゝあるは頗る刮目に値す。而かも年齒未だ少壯にして潑剌たる前途は、更に大に囑望せらるゝ所あり。

△博士は大正十五年慶大醫學部卒業後、直ちに同學部細菌學教室助手を命ぜられ同年九月迄勤務、同年十月京大醫學部衞生學教室專修生となり、昭和二年八月迄勤務す、同年九月倉敷勞働科學研究所に入所、同三年六月迄勤務、同年同月產業衞生主任として鐘ケ淵紡績株式會社神戸支店に入社す、同七年九月慶大より學位を受領す、同九年六月現職に就任して今日に至る。

△主論文は「日本婦人ノ基礎新陳代謝ノ年齡的變化ニ就テ」にして、參考論文は、(1)自然立位及步行時ニ於ケル新陳代謝ニ就テ、(2)紡績工場ノ換氣ニ就テ、(3)活動寫眞館ノ衞生學的批判、(4)紡績工場ニ於ケル腸內寄生蟲檢査成績ニ就テ、等なり。

△「工場及鑛山醫は唯々診療にのみ終始するを止め宜しく產業衞生方面に活動せられたし」云々とは、博士の感想の一片なり。岡山縣川上郡吹屋町川上佐源太の三男にして、明治三十五年生る、年齒未だ三十有四歲也。研究心旺盛にして、少壯の意氣と共に研學切磋猶甚だ勉むる所あり、事に當るや熱誠克く自己の本分を盡し、眞劍にして誠實、部內の信望厚く、一面又能く部下を愛撫し、後進の指導に努め、人に對するに同情と理解とを以てし溫情に富む。研究以外の趣味としては俳句を能くし、又圍碁を好む。春秋猶頗る豊富にして洋々たる前途を有す、幸に健康にして、斯道の爲め益々發奮努力あらん事を望む。

◇

延川靖

△長野縣學校衞生技師にして、文部省學校衞生調査會委員として斯道の爲め努力盡瘁しつゝある延川靖博士は、金澤醫專出身の篤學者にして、豫防醫學の專門家として知られ、慶大教授大串菊太郎、同草間良男兩博士に就きて斯學の蘊奧を究め、所謂慶大派の名醫博として其の存在を認めらるゝ一人物也。學校衞生技師として二十年一日の如く勵精勤續し、斯道啓發振興の爲め多年貢獻する所あり。斯問研學切磋得る所尠からず、今や其の蘊蓄を傾倒して益々指導に努め以て其の範を示す、蓋し地方稀に見る學究的技術者として囑目に値す。

△博士は長野縣師範學校卒業後、二ケ年小學校教員奉職、明治四十四年金澤醫專卒業、大正三年四月任奈良縣技師、學校衞生主事、同八年四月長野縣技師、學校衞生技師に轉任す、昭和七年十一月學位を授與せられ以て現在に至る。

△主論文は「本邦最高山岳地帶ニ於ケル兒童身體發育ノ特徵(海拔一千米突以上ノ高地ニ就テ)にして、參考論文は、(1)兒童ノ扁桃腺肥大ニ關スル研究、(2)高原地ニ於ケル傳染性疾患ニ就テ(麻疹、百日咳、流行性感冒)、(3)發育不良兒ノ原因別調査、等三篇なり。著書としては、(1)學校應急手當看護法(神田右文館發行)、(2)學校衞生教程等あり。

△感想の二三を提示して曰く「現代は尙豫防醫學方面の研究を必要とす、而して我日本の人々は疾病に罹ると非常に恐れ騷ぐも、平素此疾病豫防の甚だ無關心なること甚だし、益々此思想普及を必要とす。我國民の健康增進、兒童生活の體力增進は急務なり。其他尙人類學方面の研究を志さんとす」云々。明日の精研に猶綽々として餘裕あるを語る。

△博士は長野縣上諏訪町の出身、明治十七年生れにして當年知命に入る二歲也。小學教員より奮起して其の今日をなせる篤學は、博士の前半生史に輝きて燦然たり。眞面目なる學究的溫厚の紳士、思想高潔にして識見に富み、高邁なる品格を備ふ。豫防醫學の研究と、學校衞生に關する事業とは、畢生の天職として博士の全力を傾注せる所なるが、近來にては人類學方面の研究に多大の興味を有するが如し。趣味としては運動殊に登山、スキー、スケート等を好む風あり。長野市岡田一七五に住む。

醫科續篇(衞生學科、細菌學科)

◇

鈴木秀夫　△深山衞戍病院附、陸軍一等軍醫鈴木秀夫博士は、京大系の衞生學者にして、斯學界の泰斗戸田正三博士の門弟として知られ、久しく恩師の指導と薫化とを受け、母校より學位を獲得せる斯科界近來の少壯學者也近年暫く健康を害する處ありしも、遂次快方に向ひ、今や捲土重來の意氣を以て、一意專心、奉公の誠を盡すべく努力奮鬪、不斷の精進を續けつゝあるは欣幸とする處なり。

△博士は京都の二中より三高を經て、昭和二年京都帝大醫學部を卒へ、同年六月直ちに陸軍二等軍醫に任ぜられ、同五年四月京大大學院入學被仰付、同六年三月任一等軍醫、同八年四月學位受領、同十年八月叙勳五等、同年同月大阪工廠附より現職に轉補せられ今日に至る。學位主論文は「衣服氣候ノ研究」にして、參考論文は(1)衣服雰圍氣ノ濕度測定法、(2)本邦氣候ト過熱工場内採光方法研究、なり。

△感想に曰く「學界人が意識的か無意識的かは知らず、新聞雜誌に餘りに宣傳的に業績を書き立てられて、忽ちにして忘れられて行く狀態を見ては、もう少し考へなければならないのでしようか、まして自己宣傳に學問を惡用するに就ては言語同斷」云々。

△博士の出身地は名古屋市南區熱田神戸町にして、故陸軍三等軍醫正鈴木協平の長男、明治三十五年生る、少壯未だ三十有四歳也。愼重潔白の人にして、志操堅實なり、强ひて言へば決斷に乏しき缺點なきか。春秋頗る豐富にして、輝しき前途は猶洋々たるの秋、幸に健康にして益々精研活躍あらん事を望む。和歌山縣海草郡加太町深山に住む。

◇

家原毅男　△京都帝大醫學部衞生學教室に講師として、また大阪市教育部に學校體育衞生の權威ある指導者として家原毅男博士あり。氏は實に篤學の衞生學者にして、三十年を一貫して衞生學に精進し、前半は陸軍に在り軍醫學校にて衞生學を專攻し、續いてその教官を勤續し、又士官學校の軍隊衞生學教官、教育總監部に陸軍諸學校學校衞生管掌等の職務に在り。後半は更らに京都帝大にありて衞生學の研鑽に沒頭し、講師として特に營養學、學校體育衞生、工場衞生等の講座に當り、更らに獨逸に留學し特に社會衞生學に關する調査研究を爲し、又歐洲各國を巡歷して歸朝、爾來大阪市に入り二百五十の小學校、その兒童數三十五萬、教員七千名その他幼稚園七十校、中等學校七十校、青年學校百三十校を對象として、その學校體育衞生を指導し、熱烈なる意氣を以て獻身努力、著聞の功績擧げて數ふべからざるものあり。

△氏の經歷を概述せば、明治三十六年現在の京都府立醫科大學、當時の京都府立醫學專門學校を優秀卒業、時恰も日露の風雲急なり、直ちに陸軍を志願して同年十二月陸軍三等軍醫任官、大津歩兵第九聯隊に屬して日露戰役從軍、金州南山の攻擊より得利寺、蓋平、大石橋、牛莊、鞍山站、遼陽、沙河、奉天の會戰を經て法庫門附近に達するまで常に火戰の間に馳驅して功績を擧げ、戰後金鵄章を賜はり不朽の名譽を辱ふするを得たり、平和克復直ちに志願して陸軍々醫學校に入學し、優秀の成績を擧げて衞生學專攻學生を命ぜられ、更らに專攻を重ねて此間牧山(建吉)教官に衞生化學を、宇山(道碩)教官に軍隊丼に一般衞生學を、稻葉(良太郎)教官に營養並に代謝學醫化學を、牧田(太)教官に蛋白化學の指導を受け、續いて軍醫學校教官に在職し、陸軍技術審査部御用掛を兼ね、坑道戰に對する爆藥の爆發瓦斯の中毒除害に關する研究に任し又軍衣、軍隊食糧其他諸種の研究あり、前後約十年衞生學を專攻して日獨戰に至り、廣島衞戍病院附三等軍醫正として戰役勤務に從ひ、了りて再び陸軍士官學校の軍隊衞生學教官となり、同校の教程を編述して多數の陸軍將校の軍事的衞生智識の教養に盡瘁し、又陸軍教育總監部に兼務して陸軍幼年學校其他諸學校の學校衞生を指導し、次いで西比刺亞事變に出征し、又大阪衞戍病院に病院附として、姫路衞戍病院に病院長として臨床醫學にも亦携わる所あり、大正十一年に至り官を退きて京都帝國大學衞生學教室にて再び衞生學の專攻に沒

頭し、大正十三年講師となり、昭和二年五月京都帝大より學位を亨け、文部省在外研究員となり獨國留學、次いて大阪市に視學として學校體育衞生の指導を擔任今日に至る。

△學位主論文は『環境ノ持久的中等度高溫ガ山羊ノ乳腺機能ト蛋白代謝ニ及ボス影響並熱疲憊ニ就テ』にして三篇より成る。參考論文は(1)酸化炭素ノ中毒限界量ニ就テ、(2)酸化炭素ノ毒性ニ就テ、(3)氣中ノ酸化炭素殊ニ其微量ノ精密測定ト概測法トニ就テ、(4)水ノ地中竄入ト土地ノ乾燥トニ就テ、外三篇あり。著書に「軍隊衞生學」あり。

△感想を叩くに氏の熱烈なる論點の主なるものは、國民の體力總動員論にあり、如何にも非常時日本にふさわしき大議論にして、氏が大阪市の學生々徒兒童の體力增進に熱中し、更らに進むで全市民の體力增進の爲めに、現在の日本の學校體育を市民體育に轉進し、眞の國民體育たらしめむが爲めに信念的努力を盡しつゝある誠意確然として判明せり、如何にも軍人らしき學究的至誠の士たるの感を深からしめたり。

△博士は明治十五年琵琶湖畔の產、從五位勳三等功五級、豫備陸軍二等軍醫正の印綬を帶ぶ。性格は卒直純眞、熱烈なる正義の氣魄に滿ち、談論熱發と謂ふべきなり。極めて精神家にして特に國家を思ふの至情實にその深きに感ぜざるを得ず。頭腦明晰にして緻密、體格は五尺八寸、二十一貫の赭顏大軀、元氣旺盛の人なり。京都東山白川畔に住し、日々大阪に出務殆ど席を溫むるの暇なし。趣味は天然風光、殊に樹木愛好、刀劍等。

◇

吉植精逸

△陸軍々醫學校教官吉植精逸博士は、京都帝大系の衞生學者にして、特に兵業體育を最も得意とし、嘗て獨逸伯林醫科大學に學ぶや、ビツケル教授に就て生物病理學を、ローナ教授に就て物理化學を專攻し、其他歐洲各國を視察して大に新知見を博めたり。今や此方面に於ける殊に體育界の一權威として最も囑目せらる學者たるを至囑す。博士は五高（明治四十三年）を經て、大正三年十一月京都帝國大學醫科大學卒業、同三年十二月仙臺步兵第四聯隊に陸軍見習醫官として入隊、同四年六月任陸軍二等軍醫、補若松步兵第六十五聯隊附、同五年三月若松聯隊區徵兵副醫官を被命、同五年八月陸軍々醫學校に專科學生として入校、故醫學博士稱葉一等軍醫正並に醫學博士小泉一等軍醫正の指導を受け榮養學專攻、同六年八月仙臺陸軍地方幼年學校附兼教官に轉補、同七年九月陸軍戶山學校附兼教官に轉補、同十年十一月歐洲に留學、特に獨逸國伯林醫科大學病理學研究所に於て生物病理學をビツケル教授に、物理化學を、ローナ教授に就き研究、其他諸教授の實習を受け、又休暇及歸朝に際して佛國、瑞西、墺國、チエツクスローバキヤ、和蘭、丁抹、英國、瑞典等各國醫科大學各教室及各國體育學校中小學校、尙一般靑少年體育を視察、大正十三年八月歸朝、同月任陸軍三等軍醫正、陸軍戶山學校附兼教官に轉補、同十四年三月京都帝大にて學位を授與せられ、大正十四年五月陸軍戶山學校研究部員兼陸軍々醫學校教官に補せられ、現職に在り。

△學位主論文は『「アヴイタミノーゼ」ノ窒素代謝ニ及ボス影響ニ就テ』にして原著は獨逸文なり。參考論文は(1)運動ノ「アヴイタミノーゼ」ニ及ボス影響ニ就テ、發育動物ニ於ケル鐵同化作用ニ對スル各種「ヴイタミン」ノ意義及「ヴイタミン」缺乏食及「ヴイタミン」含有食ヲ以テ飼養セル動物灰分ノ素成ニ就テ、にして何れも獨逸文より成る。其他論著夥多。著書として(1)解剖生理ト運動、(2)運動生理學初步等あり。

△博士は千葉縣の人にして、明治十八年生る。純潔なる學者肌の仁にして人格者也。學術の研究を最も趣味とする外繪畫、和歌を能くし、魚釣りを好む、又少年の指導を樂しむ風あり。白鳥庫吉文博とは親戚の間柄なり。東京市中野區沼袋南町二ノ二五に住む。

◇

門馬健次

△大阪帝大派の新人にして、寄生蟲病學者として起ち、特に寄生蠕蟲學を最も得意とせる門馬健

次博士は、現に大阪帝大醫學部講師として第二病理學教室に勤め、又附屬醫院醫員として第一內科に勤め、兼ねて同大學微生物病研究所寄生蟲病學部研究囑託として努力精進し、希望ある將來に向つて自己の進むべき針路を開拓するに餘念なし、潑剌たる前途の展開や頗る囑望すべき也。

△博士は大正十三年大阪醫大卒業後、直ちに同大學病理學教室勤務、昭和八年七月大阪帝大にて學位受領、同九年十月大阪帝大醫學部講師囑託、同時に頭書の現職に就任今日に至れり。斯間大阪帝大教授吉田貞雄博士、同村田宮吉博士、同谷口腆二博士等に就て研鑽せり。主論文は「蛔蟲精管內顆粒ノ血淸ニ依ル凝集現象並ニ本現象ニ基ク各種蛔蟲輸精管內顆粒ノ異動ニ就テ」及び Agglutinative action of normal blood serum on granules in vas deferens of ascarids の二篇にして、外に參考論文十二篇あり。

△感想に曰く「我國帝國大學醫學部及び官立醫科大學に於て未だ寄生蟲病學講座の設けられざるは甚だ遺憾とする所なり」云々。博士の出身地は橫濱市鶴見區生麥町にして、明治三十年生る、當年漸く三十有九歲也。熱心なる研究家にして、學者肌の人、年齒未だ少壯にして、將來有爲の資に富む。研究以外には郊外散策を趣味す。兵庫縣川邊郡小濱村米谷字藏座西六に住む。

◇

玉木緝熙

△群馬縣衞生課長として、多年地方衞生、保健上の啓發普及に努力貢獻しつゝある玉木緝熙博士は、日本醫專出身の篤學者にして、公衆衞生學を專攻し、特に細菌學の造詣深く、斯學は氏の最も得意とする處なり學位は慶大より獲得せるが、學位論文を完成する迄には北研肥田博士、慶大草間良男教授及び佐伯榮養研究所長等の指導を受けたり。今や多年蘊蓄せる學識と共に、該博なる識見を有し思慮に富む。會々感想の一片を寄せて曰く「開業醫家がモツト豫防醫學に關心を持つことが必要ではあるまいかと思ふ」云々。

△博士は大正二年三月日本醫專卒業、同八年十月群馬縣警察醫拜命、同十年十二月任衞生技師、同十四年二月任地方技師、群馬縣衞生課長を命ぜられ今日に至る、斯間昭和八年十月學位を受領せり。

△主論文は『「シツクテスト」及「アナトキシン」ノ研究』にして、參考論文としては、(1)村落榮養改善實施成績報告、(2)シツク氏皮內反應及「アナトキシン」ノ豫防接種ニ就テ、(3) On the Schicks Testand the Preventive Injection of Anatoxin (4)團體的驅蟲ニ用ヒタル「パラジトール」ノ効果ニ就テ等あり。

△長野市平林の人、明治二十三年生る、當年漸く不惑有六、學究的年壯の紳士也。元氣旺盛にして研究心に富み、殊に物事に熱中する長所を有す、事を處するや周到にして几帳面なり。性行は謹直方正、正を愛し邪を惡む、人に對しては親切にして能く後進を愛撫す。多趣味の人にして嫌ひのもの無しと云ふ、就中スキーは最も好む方なり。春秋猶豐富にして、拮据黽勉、精研に餘念なき前途は益々有爲多望なるの秋、切に自重加餐を祈ると共に、爲地方衞生界益々奮鬪盡瘁あらん事を。和田正系醫博は從弟に當る。前橋市萩町二七に住む。

◇

新畑愼

△滋賀縣學校衞生技師新畑愼博士は、京都府立醫大派の少壯醫博として共の存在を認めらるゝ新人物也。小兒科學は母校の恩師齋藤二郎教授に、衞生學は京大教授戸田正三博士に就て研究せる結果、母校たる京都府立醫大より學位を獲得せり。主論文は「揮發性果物類ノ揮發力ト中毒乃至消毒ノ關係ニ就テ」にして、外に參考論文としては、(1)「アルコホール」類ノ毒力比較研究、(2)「エーテル」及「ケトン」類ノ毒力比較研究、(3)「アルデイード」類ノ毒力比較研究、(4)炭化水素置換體ノ毒力比較研究、(5)「ベンゼン」類ノ毒力比較研究、(6)「チフス」菌毒素ノ腦內注入ト體溫上昇ノ關係ニ就テ(國重共著)、(7)食鹽水ノ腦內注入ト體溫上昇ノ關係ニ就テ(國重共著)、(8)幼稚園兒ノ食物調査、(9)幼稚園兒ノ夏季林間保育ノ醫學的研究、(10)京都市內學童ノ難聽調査(竹內共著)、(11)京都地方乳兒頭蓋癆ノ

統計的觀察(國重共著)、(12)離乳期ガ乳兒ノ成長、罹患及ビ死亡ニ及ボス影響ニ就テ等あり。

△博士は昭和三年京都府立醫大を卒へ、兵役の任務を了へて陸軍三等軍醫に任ぜらる、次で母校の小兒科教室にて研究の後、昭和五年六月京大醫學部大學院入學、同八年四月滋賀縣學校衞生技師に任ぜられ、同九年三月母校より學位を授與せられ今日に至る。京都市の人、明治三十五年生れなれば、年齒漸く三十有四歲、新進の意氣と共に活動の盛期に入る。研究方面は既に發表せる其の論著を見るも其の一班を窺はれ、猶精研に餘念なき前途は大に囑望せらる。古美術鑑賞家にして古書蒐集を樂しみ、又時に山野巡行を趣味す。京都市上京區大宮通上立賣下ル大宮町に住む。

◇

西野陸夫　△內務省社會局社會部に社會局技師として北大派の新人西野陸夫博士あり。氏は新進の社會衞生學者にして、氏が社會部へ入りてより幾多の業績を擧げたるが就中、(1)軍事救護法の改正、救護法、少年救護法、兒童虐待防止法の制定に從事せる事、(2)全國社會事業の指導監督に當れる事、(3)不良住宅地區改良に關する事務擔當、特に少年救護院、少年鑑別所、乳幼兒保護事業の指導等は最も重要なるものとして既に斯界に認めらる。又住宅衞生に關する研究の爲め財團法人同潤會の委囑を受け實驗室一ケ所を設立し、猶住宅衞生の根本研究をなすため社會局大西博士と共同にてイオン研究所を設けたるなど、氏が社會的貢獻せる事業は擧げて數ふべからざるものあり。現に日本精神衞生協會理事、民族衞生學會評議員として斯道啓發の爲め盡力する所あり。

△博士は東京開成中學校より北海道帝大豫科を經て、昭和四年三月北海道帝大醫學部を卒へ、同年六月社會局保險部囑託として就任、同五年一月社會部に轉じ、社會局技師に被任、同九年十二月母校にて學位を授與せられ今日に至る。斯間衞生學的指導は北大井上教授、東大橫手教授に受け、尙北大の恩師今、大野、永井三教授の指導をも受く、勞働衞生學の指導は北大講師大西博士及び勞働科學研究所暉峻博士より受け、社會婦人科學的指導は東大岩田博士より受けたり。專攻は社會衞生學とす。

△主論文は「各種職業ノ生體ニ及ボス影響ニ關スル社會生物學研究」にして、三篇より成れり、參考論文としては、(1)職業婦人ニ關スル社會婦人科學的研究、(2)鐵筋「コンクリート」ノ衞生學的研究、(3)全國特殊兒童收容施設ニ於ケル榮養ニ關スル調査報告、(4)老齡者ノ體格並ニ體力ニ關スル研究等あり。其他社會事業方面に對する雜誌に度々寄稿特に「イリュツペル」救護法制定及び精神薄弱者救護に關する方法問題を中心に數年來論述せるもの尠からず。

△感想に曰く「醫育の改善を要望す（今後の醫政、醫業の進展は社會情勢に順應すべきものなるに醫政、醫業に携はる者を教育する根本の醫育の形態內容は、全く社會的企てのものに沒交涉なるが故に、社會醫學に關する講座の設立を急務とし、次で醫育の全般に亘る改善を要す）、社會事業は今後醫師がその主腦として斯界をリードすべきものなり。尙疾病のみを對象として患者を取扱ひたる在來の醫業は妥當ならず、疾病を有する患者自體をも診斷治療すべきである。豫防醫の完璧を期するため余は保護醫學の確立を期し一生を之に捧ぐる所存である」云々、近時此の一生面を啓發すべき最も新らしき叫びとして謹聽に値すべき也。

△東京市瀧野川區瀧野川町に本籍を有し、西野藤一郎の三男、明治三十四年生る、年齒未だ三十有五歲の少壯也。熱心なる研究家にして精研に餘念なきを見る、潑剌たる前途は更に大に待望せらる。性來他人と爭ふ事は嫌ひの方にて圓滿にして他愛主義を標榜す、從つて人に賴まれ事を無碍に斷りかぬる方なり、時に或はそれが氏の短所ともならん乎又强ひて言へば或は氣長の癖なきか。正午山人は其號にして、日本音樂を趣味す。姻戚中には田中館愛橘理博、葛西萬司工博、那珂通世文博、野邊地慶三醫博、栃內吉彥農博、葛西勝彌農博等あり。豐島區西巢鴨三ノ七〇三に住す。

◇

並河汪　△臺南州衞生技師にして、兼ねて臺南市立濟生病院長たる並河汪博士は、臺灣に於てマラリヤ治

療方面に多年活躍し貢獻する所あり。氏は臺北醫專出身の篤學者にして、原蟲學及びマラリヤ病學者として其の該博なる學識を認められ、岡山醫大より學位を得たる斯科界近來の名醫博也。殊に氏が二十八歳の年少を以て博士號を獲得したるは、學界近來のレコードとして氏が厚志篤學と、頭腦の明晰とを稱讃せらる。年齒未だ少壯にして潑剌たる研究心を有し、孜々として精研に餘念なき前途は頗る春秋に富む、將來有爲の學究として向後の活躍は更に大に矚目せらる。

△氏は大正十四年臺北醫專卒業後、臺灣總督府中央研究所衞生部醫動物及びマラリヤ研究室に入り、後マラリヤ治療治驗所を兼務し、引續き昭和六年四月迄、同所に在りて原蟲學及びマラリヤ治療に就て研究す、同六年四月よりは臺北醫院第二內科に轉じ、同七年五月臺南州衞生技師に任ぜられ今日に至る、同年十一月學位を受領す。

△學位主論文は「原蟲性疾患ニ於ケル各種化學的治療藥品ノ作用方法ニ關スル研究」にして二篇より成る。外に參考論文として、(1)「マラリヤ」治療ニ關スル研究外十五篇あり。以て此の方面に關する研究に對し如何に廣汎なる智識を有するかを察せらる。

△氏は大分縣南海部郡下堅田村並河清水の二男にして、明治三十七年生る。年齒未だ三十有二歳、少壯の才氣潑剌として、向學の精神欝勃として禁ぜざるものあり。性格より打診すれば、稍や短氣なる嫌なしと雖も、一面には又何事にも積極的に遣りたいといふ勇氣と、其の不撓の精力とは氏が長所と見て可也。兎も角、熱心なる研究家としての眞摯なる態度と、成し遂げずんば止まぬ熱心振りは敢て人後に落ちず、其の力あり熱ある特徴の有るは敬服に値す。趣味としては研究以外に庭球、ラヂオ、ゴルフ等を好む風あり。幸に健康と共に、爲斯學界益々精研活躍あらん事を翹望して止まず。當世博士界中異彩に富む醫博人物として玆に推奬し敬意を表す。臺南市昭和町五二ノ八に住む。

◇

石橋　衞

△宮崎縣衞生課長の首班に列し、多年當縣下の衞生、保健、豫防醫學上の指導啓發に力め、至誠以て公に奉ずるの信念を以て努力貢獻しつゝあるは石橋衞博士也。氏は大正八年千葉醫專出身の衞生學者にして、爾來此方面の研究に一路邁進し、九州帝大醫學部へ提出して、昭和八年八月同大學より學位を獲得、斯科界近來の名醫博として其の存在究」を完成、九州帝大醫學部衞生學教室にて研究の結果、學位主論文「高齡者ニ關スル衞生學的研を認められ、今や九州醫學界に於ける新進人物として其の將來を最も矚目せらるゝ所あり。

△氏は千葉縣の出身にして、明治二十七年生る。年齒漸く不惑に入る二歳、年壯の意氣に燃え、研究心に富む、學究的の紳士也。幾多の研究業績を發表し、今猶精研に餘念なく斯道の爲め努力盡瘁する所あり。著書「長壽法新論」は好評を以て迎へられ、識者の間に愛讀せらる。文學趣味の人にして文才あり、時に暇を得れば太公望を極め込みて釣を味ふ道樂あり。賦性謹直、勵精恪勤の人にして、事に當るや熱誠忠實を以てし、徹底的に成し遂げずんば止まぬ所に氏の長所あり。猶洋々たる前途は頗る春秋に富む、幸に健康にして、爲斯界益々精研盡力あらん事を望むや切也。宮崎市花殿町官舍に住む。

◇

中本覺二

△哈爾賓衞戍病院附中本覺二博士は、金澤醫專出身の篤學者にして、軍陣衞生學を專門とし、特に化學兵器方面に關する研究に興味を有し造詣する所深し、慶大教授小泉親彥博士及び同末吉雄治博士指導の下に學位主論文「運動ノ臟器生化學的研究」を完成して、昭和十年二月慶大より學位を獲得せる斯科界近來の少壯醫博として其の學識を認められ、此の方面に新手腕を展ばさんとする將來有爲の新人物也。

△氏は石川縣石川郡二塚村字中野の出身、明治二十五年生にして、金澤醫專卒業後、陸軍に入り軍隊附及び軍醫學校科學研究所員を經て、現に衞戍病院附として哈爾賓に在り。年齒當に不惑に入る四歳、覇氣滿々として剛健の氣象に

富み、研究心潑剌たるものあり、至誠奉公の念に篤く、其の職務に勵精努力し、孜々として精研に餘念なし、猶洋々たる前途や頗る春秋に富む。爲國家切に自重加餐を祈る。滿洲國哈爾賓市大直街六八に住む。

◇

三浦運一

△滿洲醫科大學教授にして、衞生學界現代の一權威として最高學府に囑目せられつゝある三浦運一博士は、京都帝大派の名醫博中に逸色せる衞生學者にして、斯學の泰斗戸田正三教授の愛弟子として知られ、嘗て米國に留學するや、ジョンス、ホプキンス衞生學校に學びD・S・Hのタイトルを得、研鑽大に得る所あり。該博なる學識を有し、年來の蘊蓄を傾倒して教壇に起ち、滿洲醫育の爲め誠意誠實を盡して努力盡瘁する所あり。

△博士は兵庫縣立姫路中學、第三高等學校を經て、大正六年京都帝國大學醫學部入學、同十年七月卒業、直ちに同大學衞生學教室に入り戸田教授につきて衞生學專攻、同十二年二月同大學助手被命、同十三年四月同志社女學校專門部講師囑託、同十四年四月任京都帝國大學助教授、醫學部衞生學教室勤務、同年九月依願免官、直ちに南滿洲鐵道會社へ入社、南滿醫學堂教授兼滿洲醫科大學及同專門部教授被命、同十五年五月滿洲醫科大學教授兼同專門部南滿醫學堂教授、衞生學教室主任被命、昭和二年三月京都帝大にて學位授與、其後米國に留學せり。

△學位主論文は「防暑防寒的効果ヨリ見タル本邦各種造構家屋ノ比較研究」にして、(1)防暑効果ノ比較研究、(2)煖房上ノ得失ヨリ見タル本邦各種造構家屋ノ比較研究、(3)防暑防寒上ニ於ケル室壁鋪裝ノ効果ニ就テ、の三篇より成る。參考論文としては(1)滿洲日本人死亡統計ノ衞生學的考察、(2)本邦建築材料ノ比熱（熱容量）測定、(3)亞鉛ばらつく建築ノ室溫ノ變化ニ就テ、(4)腺ペすと流行ト鼠屬發育トノ氣候的關係（成澤、富井共著）。等あり。

△博士は明治廿九年神戸市に生る、本籍は兵庫縣明石市西魚町に在り。文藝趣味の人にして、又運動を好む。賦性謹直、高潔なる學者肌の紳士として敬意を表す。奉天稻葉一七に住む。

◇

谷友次

△金澤醫科大學教授にして、細菌學の權威として學界に重きを爲す谷友次博士は、東大系の細菌學者にして、特に「スピロヘータ」類の研究家として知られ、東大教授竹内松次郎博士指導の下に黴菌學を專攻し、後に英、米、獨に留學するや、主として伯林 F.Neufeld 教授に就て細菌學を專攻し、歸朝後母校に論文を提出して學位を獲得せる名醫博也。教授として學壇に起ちて以來、十年一日の如く專心學生指導の重任に當り、今や多年蘊蓄せる新智識を傾倒して、至誠以て醫學教育の本分を盡すに餘念なく、精研修養相俟つて大に將來に須つあらんとす。純眞なる基礎醫學者としての大なる存在を囑望す。

△氏の學歷及び閲歷を概括すれば、大正五年七月第四高等學校卒業、同九年十二月東京帝大醫學部卒業、同十年一月同學部黴菌學教室副手被命、自大正十一年十二月至同十四年二月、文部省在外研究員として英、米、獨に於て細菌學研究、歸朝後同十四年三月金澤醫科大學教授に被任、細菌學擔任、同年八月學位を授與せらる、現在高等官二等たり。

△學位主論文は『「アンチゲン」ノ拮抗作用』にして衞生學傳染病學雜誌十八卷二號に發表あり。外に參考論文として「既往性血清反應ニ就テ（同上十八卷五、六號）」の一篇あり。他の論文中「中樞神經系黴毒ニ關スル實驗的研究」は最も重要なるもの也。

△氏の本籍は富山縣下新川郡横山村古黒部に在り、富山縣川瀨八郎の四男にして、明治二十七年生れ、谷家の養子となる。基礎醫學者としてその今日ある生立は、既に博士の前半生史に燦然として輝き、純學者肌の學者として、威嚴を備へ、人格高潔也。當年漸く不惑有四にして、年壯の意氣に滿ち、研究心潑剌として禁ぜず、今は丁度脂の乘りたる男盛にて、常に教壇に起つや熱と力とを以て、誠意、誠心學生の指導に全力を捧げて亦他事を顧みるの暇なし。而して其の態度の眞摯なるは、深く學生の間に敬慕せられ學内に人望を博す。但だ性格より觀て、強ひて其の缺點を言

はしむれば、或は性急なる質にあらざるか。趣味より言へば、柔道三段にて常に剛健の氣を養ひ、時に又圍碁を樂しむ。家庭には妻澄子との間に三人の男子あり。金澤市上鷹匠町六に住む。

◇

赤澤笹雄　△朝鮮總督府獸疫血清製造所に痘苗部長として活躍しつゝあるは赤澤笹雄博士なり。當所は獸疫の「ワクチン」血清及び痘苗の製造をなす、從つて微生物の研究に對する設備は整つて居り、特に人獸の痘瘡の研究には地理的に將亦材料に惠まれ、博士は目下痘苗の製造を擔當し、人獸の痘瘡並に原蟲病の研究に從事し、熱誠克く忠勤を勵みつゝあり。氏は北大出身の微生物學者にして、特に原蟲に關する研究を最も得意とす、學位は京都帝大より獲得せる基礎醫博として其の學識、手腕を認められ、今や半島醫學界に逸すべからざる一學究として囑目せらる。

△氏の學歷及び閲歷より言へば、大正十二年北海道帝國大學農學部成規の學士試驗に合格す、自大正十一年至昭和三年葛西勝彌教授指導の下に血液原蟲學を專攻す、昭和四年任朝鮮總督府獸疫血清製造所技師、自昭和六年至同七年濾過性病毒研究の爲め獨逸國留學、主として Prof. H. A. Gins の下に痘毒を、Prof. O. Waldmann の下に口蹄疫を、Prof. W. Nöller の下に原蟲學を研究す、昭和十年十月京都帝大より學位を授與せられ今日に至る。

△學位主論文は "Studien über Arznei-Festigkeit bei Rattenbiss-Fieber-Spirochaeten, Spirochaeta morsus muris." I "Wismuth-Festigkeit." II. "Arsenik-Festigkeit" にして、原著獨逸文より成る。外に參考論文六篇あり、(1)慶尙南道ニ流行セル豚痘ニ就テ、(2)とりぱのぞーま接種牛馬ニ於ケル血液性狀ノ變化ニ就テ、(3)動物殊ニ帝牛ノ實驗的とりぱのぞーま病ニ於ケル Wassermann 氏並ニ Sachs-Georgi 氏反應ノ消長、(4)臺灣ノ水牛とりぱのぞーまニ對スル "Bayer 205" ノ豫防試驗、(5)Germanin（人體用 "Bayer 205"）ト Naganol（獸醫用 "Bayer 205"）トノ効力比較、附各種とりぱのぞーまノ "Bayer 205" ニ對スル態度、(6)Spirochaeta laverani ニ關スル研究補遺等なり。其後發表の論文(1)Ueber Zucker-Glyzerin-Kalblymphe（Z-G-Lymphe）、(2)羊痘毒ヲ以テセル動物實驗、特ニソノ牛痘化ニ就テ、(3)人並獸痘毒ノ各種動物ノ角膜ニ對スル反應ニ就テ等あり。要之(一)鼠咬症すぴろへーての蒼鉛並砒素耐性種の成立を證明せり。(二)豚痘毒の研究より人痘に對する種痘(牛痘)の豫防力は意外に弱きことが推定されたり。(三)人並獸痘毒の家兎順化(牛痘化)は意外に早きを知れり。

△感想に曰く「醫博濫造の誹はあるが一長一短である、舞臺の大いほど活動に便にして、努力家の多いほど業績は多くなる、此の意味で我醫學界は他の學界より惠まれてゐる、博士數に於ても斷然醫王國の感がある、誠に吾醫學界の研究は細に入り微を穿ち竭きぬことであらう」云々。

△氏は長野縣南安曇郡梓村大字上野赤澤市江の次男にして、明治二十五年生る。純眞なる學究肌の士にして、研究を以て本分となし、忍耐力强く、努力主義を標榜する人也。其の態度の眞摯にして熱あり力あるは、博士の長所としてその特徴を認むべき也、而かも眞面目なれば、ともすれば社交に下手なるは短所と言ふべきか。研究は氏の最も趣味とする所にして、學究以外何等の道樂を求めず、常に精研修養相俟つて自ら品性の陶冶に勉む。以て氏の性格を窺はれ、高邁なる人格を敬慕す。釜山府松島官舍に住む。

◇

安原節太郎　△和歌山縣衞生技師に安原節太郎博士あり。氏は岡山醫專出身の衞生學及び免疫學者にして、大正元年同校卒業後、直ちに岡山市技師に任ぜられ、傍ら岡山醫專の細菌學教授加藤誠治博士に就て、細菌學及び免疫學を習得し、次で鹿兒島縣防疫醫を經て、和歌山縣衞生技師に任ぜらる、斯間昭和四年末岡山醫大衞生學專攻生となり、衞生學教授緒方益雄博士の指導を受け、同十年十一月學位を受領せり。顧みれば學園を出でゝ以來、二十數年一日の如く、終始一貫、主として地方衞生行政に携はり、斯道の振興、啓發、改善の爲め努力貢獻する所あり、斯間多

年の功績は言はずもがな、今猶、勵精恪勤、至誠以て氏の理想とする衞生行政の統一を期して指導と研究とに邁進し以て自己の天職なるを樂しむ概あり、盡忠熱誠の士にあらずんば此所に到らず、而かも斯間、切磋研學の結果多年の宿志たる學位を獲得せる厚志篤學は、輝しき氏の閲歴に一段の精彩を放ち、燦然として光輝あらしめたり。

△學位主論文は「抗體ノ吸着並に分離ニ關スル實驗的研究」にして三篇より成る。參考論文は「蛋白性沈降素血清効價ノ一測定法ニ就テ」の外四篇あり。

△「衞生行政の統一と衞生省の設置」とは、氏が懷抱せる感想の一片なり。氏は斯道に關する熱心なる研究家として知られ、多年蘊蓄せる學識、手腕に至りては他人の追隨を許さゞる所にして、その今日ある聲望と位地とは、既に博士の前半生史よくこれを語りて餘蘊なからしむ。當年漸く不惑有五にして、年壯の意氣と共に奮鬪活躍の全盛時にあれば向後の努力研鑽と相俟つて、將來氏の力に須つもの益々大ならんかを期待せらる。意志鞏固にして忍耐力に富み、謹直勵精、事に當るや熱心克く成遂げ得る人にして責任感に强く、殊に綿密なる仕事に適す。性格眞面目なれば冒險的の事業を惡み、又誇張的の事を好まず、飽迄正業主義也。讀書家にして精研修養相俟つて、常に自己の品性の陶冶に力め、書道に堪能にして栗堂を號とす、又暇を獲れば圍碁と將棋を樂しむ。氏の本籍地は兵庫縣多紀郡城南村小枕一八一六にして、明治二十六年生なれば、春秋猶豊富、折角の自重加餐を祈るや切也。家庭には祖母、母共に健在、妻との間に三男あり、一家團欒の樂みあり。和歌山市北汀丁四に住む。

◇

吉岡博人

△東京帝國大學醫學部助手、兼東京女子醫學專門學校講師たる吉岡博人博士は、東大派の一勢力たる新人にして、衞生學者として起ち、特に氏の最も得意とする衞生統計に至りては一生面を啓き、斯學界に於ける新進醫博として其の學識を認められ、猶孜々として精研に餘念なき前途は洋々たるものあり、將來有能の學究の士として囑望すべき也。

△氏の學歴及び閲歴より言へば、東京高等師範學校附屬中學校、第一高等學校理科乙類（大正十四年卒業）を經て、昭和四年東京帝國大學醫學部卒業後、直ちに同學部衞生學教室に入りて副手となり、其後助手に任ぜられ、兼ねて東京女子醫學專門學校講師を囑託せらる、昭和十一年九月母校より學位を授與せられ、以て今日に至る。斯間主として横手千代之助教授及び田宮猛雄教授の指導を受け、衞生學を專攻し今猶研究中に在り。

△學位主論文は「本邦急性傳染病罹患率ニ及ボス諸要約ノ衞生統計的考察」にして三篇より成る。參考論文は「開業醫家（主トシテ女醫）ニ依レル疾病統計ノ研究」（三篇）の外三篇あり。氏の論著中「衞生統計」及び「體溫」は氏の最も得意とするものなり。

△感想に曰く「日本の醫學界が、治療醫學から、豫防醫學にと、その進路を見出す日の一日も早からんことを祈つて居る」云々。氏の本籍地は佐賀縣東松浦郡入野村に在り、吉岡荒太の長男にして、明治三十五年東京に生る、東京女子醫學專門學校長吉岡彌生は母にして、同校教授吉岡正明博士は叔父也。純學者肌の少壯紳士にして、熱心なる研究家として知られ、今猶學究生活を持續して切磋研學に餘念なく、講壇に起ちては得意の衞生學を說き、女子醫育界の爲め熱誠こめて學生指導の任を果しつゝあり。讀書家にして精研修養相俟つて、常に人格の陶冶に力むる所あり、又映畫に趣味を有す。未だ少壯にして春秋猶頗豐富なれば、切に自重加餐を祈る。家庭には妻道子との間に一男一女あり。東京市牛込區市ヶ谷河田町九に住む。

「批判研究・博士人物・醫科續篇」增補版奥附

定價金八圓

昭和拾壹年壹月參拾壹日印刷
昭和拾壹年貳月七日發行
昭和拾貳年五月拾日印刷
昭和拾貳年五月拾五日再版

著者　井關九郎

東京市世田谷區羽根木町一六八〇
合資會社發展社出版部
發行者　代表社員　井關九郎

東京市牛込區新小川町一ノ二
印刷者　野見山恭行

東京市牛込區新小川町一ノ二
印刷所　一葉社印刷所

著作權及版權所有

不許複製及轉載

發行所

東京市世田谷區羽根木町一六八〇
合資會社　發展社出版部
振替口座東京三九九〇三番